

お姉ちゃんは何でもで  
きる【完結】

難民180301

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

鶴乃ちゃんの姉に転生したハイスペックオリ主がほのぼのする話。

旧題：マギレコ転生女オリ主モノ

# 目次

前編

第1話  
第2話  
第3話  
第4話  
第5話  
第6話  
第7話  
第8話  
第9話  
第10話  
第11話

1  
16  
28  
44  
56  
77  
94  
119  
143  
175  
187

後編

第12話  
第13話  
第14話  
第15話  
第16話  
第17話  
第18話  
第19話  
第20話  
第21話  
第22話  
第23話

221  
236  
266  
290  
315  
333  
353  
381  
400  
416  
440  
458

かすかなるよすが	エピソード	第26話	第25話	第24話
553		519	502	482

# 前編

## 第1話

日本某所、とある家屋の居室。饅えた肉と鉄の匂いが充満し、電灯が砕かれ文目も分かない。すぐ外の道路をトラックが通り抜け、ヘッドライトがきらりと室内を照らし出した。

「うへへ、転生モノは最高だあ」

暗闇に浮かび上がったのは、携帯電話の液晶画面とにらめっこしながら気持ち悪い笑みを浮かべる少女だった。

彼女の名は六野<sup>むの</sup>かすか。人一倍要領が悪く、何をしても失敗ばかりで友達一人いないという、お先真つ暗で救いようのない女の子だ。

しかし彼女の目には希望の光が輝いている。その源は携帯電話で閲覧中の小説だ。いわゆる転生モノ。主人公が神様の手違いやら単純な不幸やらで死んだ後転生し、劇的で痛快な第二の人生を送る。ネット上ではありふれたテンプレジャンルである。

そのジャンルの中でもかすかは不遇な主人公のものを好んでいた。自分と同じかもっとダメダメな主人公が死に、どこかへ転生していい思いをしながら生きる。徹底的

に投影して読むことでかすかは希望を捨てないでいられるのだ。

「やあ、六野かすか」

「うへへ」

突如声をかけられたものの、一心不乱に文字を追っているため聞こえない。

「やあ、六野かすか」

一段落したところでもう一度声がかかると、ようやく顔をあげる。頬はこけ、目の下にクマができたかすかの表情には死相が浮かんでいた。

声のした方向には、奇妙な白い獣がお座りの姿勢で佇んでいる。見たこともない動物を前に、かすかはきよとんと首をかしげる。

「特定外来種?」

「ある意味そうかもしれないけれど、違うよ。僕はキュウベえ」

「へー」

「僕と契約して魔法少女になってよ!」

「時間間違えてるよ。今は火曜九時。ニチアサへお帰り」

「訳が分からないよ」

かすかには訳が分かった。もう三日間飲まず食わずで小説を読みふけているため、頭がおかしくなつてしゃべる獣の幻覚を見ているのだろう。幻覚にはおしやれな

デザインだなあとおぼろげに考えながら、「で？」と話を促す。

キュウベえによると、世の中には人を害する魔女とそれに抗する魔法少女がいる。かすかには魔法少女の素質があるため、魔法少女となつて戦つてほしい。その代わりなんでも一つ願いを叶えてあげられる、と。

「じゃ、転生で」

「転生？ どういうことだい？」

「今まで何かうまくいった試しなんて一つもない。何をしても、何を言つても空回り。周りに迷惑かけてばかりでしまいにはこの始末……」

この始末、と言いながら暗い室内に目をやる。真つ暗な部屋には餓えた匂い以外何も知覚できない。

「そんな私でも、転生したら全部うまくいくんだ。やることなすこと成功して、ご都合主義で大団円。だから転生させて」

「通常の輪廻ではなく、君という自我を保つたままの転生を願うつもりかい？ 君自身が変わらないなら、転生しても今と変わらないと思うな」

「幻覚に正論を言われた……もうダメ……」

「……」

しくしく泣き出すかすかを無機質な瞳で観察するキュウベえ。

しばらくかすかの泣き声をバツクに黙り込んでから、続ける。

「魂の輪廻については僕にも未解明の部分が多い。どんな代償があるとも知れないよ。それでも、君は転生を願うのかい？」

「ぐすん……うん。代償とかどうでもいい」

瞬間、轟音。

真つ暗な居室が巨大な何かに破碎され、メキメキと崩壊していく。破壊の源はハイブリッドエンジンの音を獣のように唸らせ、鋭い眼光を思わせるヘッドライトを光らせながら突き進む。

それはあわれな主人公を新世界へ導く希望の象徴——大型貨物トラックである。

居眠り運転か、飲酒運転か。何らかの理由でかすかの自宅に突っ込んできたトラックはまっすぐにかすかへ向かっていき、かすかの視界が真つ白に染まる。

「おめでとう。君の願いは、エントロピーを凌駕した」

どこか遠くでキユウベエの声が響いたかと思うと、意識が暗転。肉体は原型を留めないタンパク質へ変わり、魂は新たな世界へ運送された。

享年十一歳と二ヶ月。こうして六野かすかの物語は終わりを迎えたのである。



神浜市。近年の急速な振興策により発展し、三百万もの人口を抱える大都市だ。中央区の摩天楼は霞が関の威容に勝るとも劣らず、地下鉄や高速道路など発達したインフラも国内有数の規模を誇り、第二の首都としても注目を集めている。

そんな都市の中央からやや北西よりの参京区に、その店はあった。

「激辛エビチリセットとスタミナラーメンセット上がったよー!」

「おーい瑞乃ちゃん、こっちのチャーハンまだ?」

「はいただいまア!」

「お姉ちゃん、四番テーブルのラーメンはネギ抜き!」

「はいよっ!」

中華飯店万々歳。神浜市土着の歴史ある名家、由比家が経営する名店であり——六野かすか改め、由比瑞乃ゆいみずのが看板娘として生を謳歌する舞台である。

満席の店内からひっきりなしに届くオーダーを、祖父と共に中華鍋を振るいながらテキパキ捌いていく。時には厨房を飛び出して接客に回り、客の注文を聞きつけ、対応し、新たな注文を記憶して、厨房へオーダーを届け上がった料理を客へ届ける。ハキハキとした接客と満面の営業スマイルも忘れない瑞乃の働きぶりに、客は機嫌を良くして食事  
にありつく。

ラストオーダーをこなして最後の客が店を出ていくと、ようやく瑞乃は一息、

「お姉ちゃん、今日もお疲れ様!」

「お、お疲れさま鶴乃。つて近い近い、離れて。結構汗かいてるから」

「ふんふん!」

「鼻息やめい!」

一息、つくひまもなかった。

不意打ち気味に後ろから引つ付いてきた妹、由比鶴乃をどうにか引つpegがそうと身によじる。しかし花の咲くような笑顔でスキンシップを図る鶴乃に毒気を抜かれ、苦笑しながら頭をなでた。前世ではいなかった二歳違いのかわいい妹に、瑞乃は強く出られない。

「あー、ダメになるうー」

「きゃー!」

気持ちよさげに目を細める鶴乃に辛抱たまらなくなり、後ろから抱えてわしやわしやと更になでてやる。そうしてしばらくはしゃいでいると店主の祖父から注意が飛び、二人は舌を出しながら閉店準備に取り掛かる。由比家の看板娘二人組が送る日常の一幕であり、六野かすがが由比瑞乃として転生してから、十三年と一ヶ月が経った頃のことだった。

— —

『久しぶりだね、六野かすか改め由比瑞乃。僕のこと覚えているかい？』

瑞乃が前世の記憶を取り戻したのは三歳の頃、キュウベえが姿を見せた瞬間だった。フラツシユバックのように記憶がめぐる中、キュウベえは魔法少女の使命について淡々と説明を始めた。

魔法少女は魔女を狩る。魔法を使ったり普通に生活しているだけでも魔法少女のソウルジエムは汚れる。これを浄化できるのが、魔女が落とすグリーンフシードだと。

しかし生まれたその時から魔法少女である瑞乃は、三年間も魔女退治をサボってきた。もうずっとサボっててもいいんじゃないのと聞くと、

『どうやら感情ではなく本能で動く赤子の状態だと、ソウルジエムは穢れないようだね。自我が芽生えた今となっては、きちんとグリーンフシードを集めないといけないと思う』  
『ちえっ……』

こうして嫌々魔女退治を始めた瑞乃だったが、驚くほどうまく行った。ほとんどの魔法を一撃で倒せるからだ。

キュウベえによると、前世と今生を無理やり転生の因果でつなげたため魔力量と魔法

の威力がすさまじく上昇しているらしい。

『インガ……? よく分かんないけど、このヘンテコなソウルジエムと関係ある?』  
『分からない。君の願い事は前例がないからね。もしかしたら関係があるかもしれないし、ないかもしれない』

瑞乃のソウルジエムは奇形だった。粉々になった陶器を無理やり接着剤でつなげたように亀裂が走り、いびつな凹凸が刻まれている。幸い指輪の形態に変化しておくとき形が目立たないものの、不気味なことに変わりはなかった。

こうして分からないことは脇に置いたまま、瑞乃は第二の人生をスタートさせる。

ご都合主義全開のサクセス転生者ストーリーを楽しみたい瑞乃だったが、障害は多かった。定期的に魔女を退治する義務もそうだが、幼稚園や小学校も、実家の万々歳の手伝いも嫌で嫌で仕方なかった。幼稚な子供たちとコミュニケーションを取るのにはストレスしかないし、せっかくの休日を店の手伝いで潰される。いっそフリーの魔法少女として出ていってやろうかとさえ思った。

しかし、

『お姉ちゃんすごい! こんなに大きなお鍋片手で持てるんだ!』

『そ、そう? すごい? すごいかな?』

『うん、お姉ちゃんってすごいよ! お料理もめちゃくちゃ美味しいし、お勉強もでき

るし、力持ちで働き者だし！ 鶴乃、お姉ちゃんの妹でほんとうにうれしいな！ ふんふん！』

『鶴乃おく、愛してるぜえ〜……』

『わぶつ、お姉ちゃん苦しいよー！』

妹の存在が瑞乃をつなぎとめた。

由比鶴乃。瑞乃の二歳下の妹は、厨房にて細腕で中華鍋をぶん回す瑞乃を手放しで称賛した。

実際、瑞乃のスペックは莫大な魔力により非常に高くなっていた。生まれ持った体にも才能もあったのか、店主の祖父に料理を教われれば基礎から応用の調理技術、アレンジレシピまで瞬時に閃き、魔法少女の強靱な肉体がアイデアを実行に移す。小3の少女が身の丈ほどもある中華鍋や肉きり包丁を巧みに操り厨房に立つさまは、参京区で話題になっていた。

しかし厳しい祖父も、実の娘に料理の腕を追い越され余裕のない父親も、瑞乃を褒めることはしなかった。だから瑞乃は、初めて褒めてくれた鶴乃のためだけに料理を頑張ろうと決めた。

『お姉ちゃんと私がいれば、きつと由比家のえいこーも取り戻せるよね！』

『うん、そうだね！』

由比家はかつて由緒正しき名家だった、と祖父が語ると、鶴乃はそれを取り戻そうと目を輝かせた。瑞乃はお家の栄光などどうでもよかったが、鶴乃が万々歳を繁盛させて栄光を取り戻そうと提案すると、瞬時に同調した。妹が笑顔になるならなんだってする覚悟だった。

日中は学校、放課後は家の手伝い。夜は妹とイチャついて、魔女退治は基本深夜にすばやく。睡眠時間が平均よりも短いせいか身長は伸び悩んでいるものの、こうした生活サイクルで瑞乃は第二の人生をエンジョイしていた。

――

「そんでき、お姉ちゃんは学校でも家でもみんなから頼られて大変だから私をもっと頑張ってお姉ちゃんを支えるんだあー、って言った後、はあはあしながら言うの。息継ぎ忘れてたあ、って。かわいすぎじゃんね？ 鶴乃ちゃんサイカワじゃんね？」

「ああもう、分かったから離れなさい。暑苦しいわ」

「じゃんね？」

「……」

「あいつた!!？」

夕暮れの参京区郊外。人気のない裏路地を歩きながら少女に詰め寄っていた瑞乃は、デコピンを食らって大きくのけぞる。

瑞乃に圧をかけられていた少女はというと、呆れた顔で腕を組む。

「まったく、使い魔が近くにいていうのに。そんな調子じゃいかげん怪我するわよ、由比さん」

「この最強お姉ちゃんがケガするはずもなし。今日も安心安全な新人研修を約束するぜ、やっち」

自信満々に笑ってみせる瑞乃に、やっちと呼ばれた少女——七海やちよは苦笑した。

二人の関係はクラスメイトから始まった。

神浜市立附属学校の中等部。同じクラスにしながら、二人の関係は希薄だった。やちよは眠たげな目元と整った容姿、モデル業をしている噂などもあつて高嶺の花。一方、瑞乃はクラスの爆弾扱いだった。スキあらば妹自慢と実家の宣伝攻勢をかけてくる圧力少女として恐れられていた。

『キュウベえ、本当にこんな人が……？』

『ああ。こんなでも、彼女の経歴はとても長い。教えを請うにはびつたりだと思うよ』  
『よしそこに直れこの美人とエイリアンが』

そんな二人の関係をつなげたのがキュウベえである。

最近魔法少女になったばかりのやちよに、魔法少女のいろはを教える先生役として瑞乃は目をつけられた。妹と中華の宣伝でひたすら圧をかけてくることで有名な瑞乃にやちよは腰が引けていたが、頼られたら断れない瑞乃の性格が幸いし、そこそこの質の高い新人研修を実施できていた。

今日は研修の7日目。表向きは部活動の名目で万々歳に都合をつけ、放課後に活動している。

二人は雑談しながらも使い魔の魔力をたどり、結界を発見。慣れた様子で変身して準備を整える。

いざそこへ入る前に、やちよはふとした疑問を投げかけた。

「使い魔ってグリーフシードを落とさないのよね？ あえて見逃す手はないの？」

「見逃す人もいるけど、私はおすすめしないな。見逃した使い魔にもし鶴乃を傷つけられたら立ち直れないもの。やっちは大切な人いる？」

「……いるわ。そう考えると、倒すしかないわね」

魔女から分裂した使い魔は倒しても見返りがないが、妹を傷つけるリスクがある以上見逃す手はなかった。やちよと共に結界へ入り、戦いが始まる。

魔力を凝縮した槍で使い魔を追い込むやちよ。その後ろで中華鍋を担ぎながら、いつでもフォローできるように位置どる瑞乃。いつもどおりにやちよをメインとした立ち



回りで、あつさり使い魔は討伐された。

特に危ないところもなく結果が崩れ、元の裏路地に戻る。

同時に変身を解く二人。すると、瑞乃がおもむろに一枚の紙を差し出した。そこに書かれていたのは、

『万々歳セットメニュー一品無料』

「一週間お疲れさま。もうなんにも教えることないや」

「これは？」

「免許皆伝の証みたいだな。あつ、決してウチの味を覚えさせてリピーターにしようなんて企んでないよ？ ホントに、ホントだから」

「本音が漏れてるわよ、もう……」

やちよはくすりと笑った。そんな風におどけられると、遠慮して受け取らないわけにもいかない。何かお返しをしようにも、「ウチの中華を食べてもらえるのが何よりのお返しじゃんね」と言われるのが目に見えているからだ。

無料券に手を伸ばし——瑞乃の手ごとガツチリと掴んだ。

「えっ？」

困惑する瑞乃を置いて、やちよの思考が加速する。

やちよは小学生時代から優れた美貌で注目を集め、成績も優秀な優等生だった。中学

生になってからはモデルのスカウトも受け、ますます女性としての魅力が増している。そのためか、友達と呼べるほど踏み込んだ関係の同級生は居なかった。瑞乃のように自然体で接し、小突き合えるような仲の友人は初めてだ。

魔法少女のレクチャーから始まった付き合いは、果たしてレクチャーの終わった今も続けられるのか。瞬時に膨れ上がった不安は勝手にやちよの体を動かし、関係を掴み取った。

「ねえ、瑞乃」

目をぱちくりさせる瑞乃に、やちよは一步步み寄る。

「今から行ってもいいかしら？」

「えっ？ まあ、いいけど……ち、近いよ」

そのままさらに距離を詰めると、瑞乃は顔を赤らめて目をそらした。この女、自分から近づくのはともかく他人から近づかれるのは大の苦手である。

それを見抜いたやちよは意地悪な笑みを浮かべ、さらに顔を近づける。

「何言ってるの。いつもあなたの方からこうしてくるくせに」

「そ、そうだけど……んもー、調子狂う！ 早く行こー！」

「耳が真つ赤よ」

「誰のせいだっ！」

こうして二人は万々歳へ向かい、やちよは万々歳の味に舌鼓を打ち、繋ぎ止めた関係に満足して弾む足どりで帰っていった。

しかし瑞乃にとつては不幸なことに、やちよは目の覚めるような美人だった。落ち着いた口調で人当たりもよく、刺激の強い万々歳の中華料理を食べる姿も気品にあふれている。そんな魅力あふれる人物を突如瑞乃が連れてきたならば、

「お姉ちゃんの浮気者っ！」

「痛い痛い！ 反抗期!? 反抗期来ちゃった!?!」

姉と同じレベルでシスコンを拗らせる鶴乃がスネてしまうのは、自明だった。やちよが帰った直後、ほっぺたを膨らませた鶴乃は瑞乃へポカポカパンチをお見舞いする。

目を白黒させる瑞乃だったが、

「怒る鶴乃もかわいい……!」

「はーなーせー!」

魔法少女の身体能力を活かし、鶴乃を力づくで抱きしめた。ほっぺたをつねられながらも恍惚とした目で鶴乃をハグするその姿は率直に言つて手遅れである。

姉妹の痴話喧嘩は、厨房の祖父がしびれを切らしげんこつを落とすまで続いたのだ。た。

## 第2話

「あつ、中華シスコンがいるぞ！　おい、今日も三食中華か？」

「おうともさ！　朝はエビチリ昼は点心、夜はリッチなホイコーローだい！」

放課後の校門前にて、帰途に就く男子生徒たちに声をかけられた瑞乃は威勢よく返した。男子生徒たちは「不摂生！」と笑いながら、手を振って去っていく。瑞乃は手を振り返してから、校舎の時計を仰ぎ見た。待ち合わせの時間の五分前だった。

免許皆伝の日以来距離の近くなったやちよは掃除当番で遅れている。やちよを待つだけなら教室の外でも良かったのだが、今日は校門前で待ち合わせがあるのだ。

「あつ、由比姉妹のやべー方！」

「お前も中華にしてやろーかア!？」

名物扱いの瑞乃は、声をかけられるたび返答する。

そうしてしばらく待っていると、それまでとは質の違う控えめな声が聞こえた。

「あの、あなたが由比瑞乃さんでしょうか？」

振り返ると、まず目につくのが触角みたいなアホ毛。寝癖なのか髪型なのか判断に迷う角を揺らす彼女は、瑞乃とは違う水名女学園の制服をまとっている。お嬢様校として

有名なだけあって、控えめな声掛けにもどこか気品が漂う。

「キュウベえからあなたを頼るよう言われました。梓みふゆと言います」  
梓みふゆ。今回の待ち人だった。

やちよの時と同じく新人の魔法少女で、キュウベえからお世話を頼まれた。瑞乃に断る理由はなく即決で引き受け、待ち合わせ日時と場所を指定し今に至る。

瑞乃は馴れ馴れしく距離を詰めに行った。

「どうもご丁寧に。知つての通り私が由比瑞乃。よろしくみつふ！」

「みつふ!? まあ、あだ名で呼んでいただけなんて素敵です。じゃああなたのごことは、みっちゃんと呼んでよろしいですか？」

「えっ、まさかの順応? あ、はい、みっちゃんです。」

「はい、よろしくみっちゃん！」

しかしここでカウンター。唐突なあだ名呼びに對しみふゆは目を輝かせ、両手で瑞乃の手を取って、満面の笑みを浮かべた。まさかの順応っぷりに瑞乃はたじたじである。

「あだ名呼びなんて普通の女の子みたいですよ……」

「そ、そう? ところで、恍惚としてないで離れてほしいな」

「いいじゃないですか。ワタシたち、あだ名で呼び合う仲なんですよ?」

「あだ名引つ張るなあ!」

「梓みふゆは歴史ある名家の出身である。実家でも学校生活でも、名家の名に恥じない言葉遣いや人間関係に腐心してきた。だからこそ、普通の女の子らしい振る舞いには強い憧れがあつたのだ。」

その憧れの一つだつたあだ名呼びをうっかり瑞乃から仕掛けてしまったことで、みふゆに対する第一印象は最高評価だ。手を取つたまま、ぐいぐい距離を詰めてくる。道行く生徒たちは「あらあら」「来ましたわ?」などと囁し立てている。

そんな面映い空気を破るように、ドスの効いた声が響いた。

「瑞乃……? 何、してるのかしら……?」

「あつ、やちよいいところに! この子を止め——つて目え怖!」

光のない目でじつとりと睨みつけてくるやちよ。きよとんと首を傾げて瑞乃とやちよに視線を行つたり来たりさせるみふゆ。周囲は「修羅場!」と一層の盛り上がりを見せている。

場の中心で針のむしろにさらされている瑞乃は、幾度か視線を右往左往させてから、明後日の方向に指を差す。

「あーっ! 白色の特定外来種があんなところ!」

迫真の演技。オーディエンスは一斉にあらぬ方向を振り返る。

そのスキに瑞乃はみふゆの手を引き、真つ黒な目をしたやちよが後を追いかけるの

だった。

――

数分後、新西区の駅前のカフェに腰を落ち着けた三人は、改めて自己紹介。

しばらく光のない目でみふゆを凝視していたやちよだったが、少し前の自分と同じ境遇であることを知るとすぐに態度を軟化させた。

「そういうことだったのね。私は七海やちよ。よろしくね」

「粹みふゆです。やちよさん……やちちゃんと呼んでもいいですか？」

「やちちゃ……？ い、いいけど」

みふゆは「やちちゃん、みちちゃん……」と口ずさみながらニコニコ。瑞乃とやちよは顔を見合わせ、小さく苦笑した。

みふゆが落ち着いたのを見計らい、瑞乃は魔法少女と魔女について説明を始めた。ソウルジェムのこと、魔法のこと、魔女のことなど。特にもっとも危険な魔女探しと退治については、今から実地でやりにいくので重点的に説明する。みふゆは「早速ですか」と顔をこわばらせていたが、意を決してうなずいた。

三人はカフェを出て、人通りの多い表から一本外れた路地を歩く。

「みつふは自分の固有魔法を知ってる？」

ソウルジェムで魔女の反応を探すみふゆに、瑞乃が声をかける。

固有魔法。魔法少女の願い事が変化した特別な魔法のことだ。最初からなんとなく使い方まで分かる者もいれば、何も分からない者もいる。みふゆは前者のようで、「はい。幻覚の魔法ですよ」と答えた。

瑞乃は十年間の魔法少女経験の中で、みふゆと同じ幻覚タイプの魔法少女を想起。みふゆに合った戦い方を組み上げていく。

「そういえば、瑞乃の固有魔法ってなんなの？」

「……分かんない」

間を空けてから世界競泳レベルで視線を泳がせてからの返答。バレバレのウソだった。

しかし、みふゆもやちよも追及はしない。常に自信に満ちた瑞乃の瞳に、確かな恐怖の色を認めたからだ。

若干重くなった空気をまとい、三人は夜の帳が下りだした路地を行く。しばらくするとようやく魔女の気配を感知する。

ほどなく結界を見つけ、瑞乃、みふゆ、やちよの順に中へ。幸いそれほど広大な結界ではなく、数分で最深部の魔女まで到達した。



穢れと絶望に満ちた魔女の威容に、みふゆはごくりとつばを呑む。

「これが魔女……なんて禍々しい」

「はい、じゃあ一人で好きに戦ってみて」

「……えっ!? 一緒にやってくれないんですか!？」

さらりと投げだされたみふゆが目をむくものの、瑞乃はどこふく風だ。

「とりあえずみつふに今できることを把握してから、私の考える戦い方とすり合わせしたいからさ。というわけでファイツ！」

「む、無理ですよ！ あんな化物相手に一人でなんて……!」

「大丈夫」

瑞乃はみふゆと正面から向き合い、まっすぐ瞳を見つめながら、

「何があっても私が守る。危なくなったら絶対助けるし、ケガ一つさせないよ。だから安心して、今のみふゆを見せて?」

あなたは私が守るから。瑞乃の誠実な瞳と言葉にロマンスの波動を見て取ったみふゆの体温は急激な高ぶりを見せる。心臓が早鐘を打ち、頬の紅潮がすさまじい。同時にみふゆのソウルジェムが強く輝いて、高ぶった魔力が自然にみふゆを変身させた。

「……分かりました。見ていてください、みつちゃん、やつちゃん。これが、ありのままのワタシですっ!」

「頑張つてー」

「……」

「やっち、無言でつねるのやめよ？ 痛いから痛いイタタタ！」

みふゆが戦っている間、瑞乃はやちよにつねられる腕の痛みと戦っていた。無事にみふゆが戦いを勝利で終えた後、やちよは早足でさっさと帰っていったという。

――

万々歳の看板娘、由比鶴乃には姉がいる。

名を由比瑞乃。鶴乃が物心ついたときから瑞乃は厨房に立つて、祖父や父と肩を並べていた。料理の腕が優れているだけでなく、勉強もスポーツもなんでもできて、とつても優しい自慢の姉だ。

しかしそんな瑞乃にも一つだけ欠点があった。

『鶴乃がいれば友達とか要らず』

『もー、お姉ちゃんのシスコン！』

友達がない。

人当たりがよくて誰にでも優しいものの、妹の鶴乃を溺愛するあまり友達ができた試

しが無い。鶴乃はそのことが嬉しくもあり、心配でもあった。姉の人間関係に安心している自分が卑しく思えたこともあった。

しかしそれも過去の話だ。

中華飯店万々歳、定休日の店内。

カウンターには瑞乃と、その左右に二人の少女が腰掛け仲良く話している。

「ねえやつち。この前撮影に行つたの、そろそろ雑誌に載るよね。どこの雑誌？」

「絶対教えない。からかうつもりでしょ」

「からかうなんてそんな……仕事とオフのギャップをニヤニヤ指摘するだけですよ、ねえみっちゃん？」

「そうそう！」

「それをからかうつて言うのよ！」

艶やかな黒髪がまぶしい高身長少女は、七海やちよ。中学生ながらモデルとして活躍しているスタイル抜群の美女だ。

もう一人、どことなくお嬢様然とした方は梓みふゆ。由緒正しい水名区の名家出身で、真正正銘のお嬢様だという。

「むー……」

「あ、鶴乃じゃん。どしたの、こっちおいでよ」

カウンターの影からこっそり三人を覗いていた鶴乃は、あっさり瑞乃に見つかる。やちよとみふゆともすでに顔見知りだ。しぶしぶ出ていくと、適当な席に腰掛け——るところは、瑞乃の背中にくつついた。

「つ、鶴乃？」

「あら」

「あらあら」

困惑する瑞乃、微笑まじげなやちよ、みふゆ。鶴乃は瑞乃の背中にくつついたまま、かわいらしい威嚇の視線を左右に向ける。

やちよとみふゆは年上の余裕で微笑を浮かべていたが、それが気に食わなかったのだろう。

鶴乃は名探偵になった。

「怪しい」

言葉に向けたのはみふゆである。

「やちよさんは分かるよ？ 同じ高校だもん。でもみふゆさんって学校も違うし、住んでるところとか部活とか趣味もいろいろ違うよね？ どんな絡みでお姉ちゃんと仲良くなつたの？」

「それは……」

みふゆはやちよ、瑞乃とアイコンタクト。魔法少女特有のテレパシーで会話しているのだ。

鶴乃はこれがますます気に食わない。自分を差し置いて気心知れた三人が言葉もなく通じ合っているようにしか見えず、猛然と食って掛かる。

「お姉ちゃんをたぶらかそうだったって、そうはいかないんだから！」

あまりの剣幕に場は沈黙。

数秒後、三人が同時に我に返る。もっとも早く口を開いたのは瑞乃だった。

「こら、鶴乃。さすがに。それはさすがに、だよ。みふゆは——」

「みつちゃん」

たしなめるような口調の瑞乃を一言で黙らせ、みふゆは鶴乃に対し、体ごと向き合う。二人の視線がぼつちりと交錯し、みふゆはニコリと笑みを浮かべた。

「お姉ちゃんのことを大好きなんですネ」

「当たり前だよ！ お姉ちゃんは私の大切なお姉ちゃんなんだから！」

「知っていますよ。つい最近知り合ったばかりのワタシより、鶴乃さんはよっぽどみつちゃんと仲良しですよネ」

「その通り！ この最強の妹である由比鶴乃こそ、お姉ちゃんを世界で一番大切に思っているんだから！ ふんふん！」

「では、そんな鶴乃さんにお願いです」

みふゆは身を乗り出して、鶴乃を下から覗き込むように、

「お姉さんのことを何も知らないワタシに、教えていただけませんか？ どこが好きなのか、どこがいいところなのか」

「お安い御用！ まず料理が上手で——頑張り屋で——なんでも出来て——」

堰を切ったように姉のいいところを語りだす鶴乃。的確な相槌を打つみふゆの話術により、鶴乃の表情は次第にやわらかくなっていく。

とはいえ、横で聞かされている本人からしてみれば恥ずかしいことこの上ない。

「ちよつ、本人がいる前で何言い出すの!? むぐぐ……」

「面白いから大人しくしてなさい」

瑞乃は背中にかぶさったままの鶴乃の口を塞ごうと席を立つが、やちよに力づくで着席させられる。やちよは意地悪な笑みを浮かべていた。

「お姉ちゃんって教えられたこと大体何でも一回で出来るようになるけど、夜中にこっそり起き出して忘れないように復習してたりするんだよ！ そのことを指摘したらすつごくしどろもどろでバレバレなウソついたりしてかわいいんだ！ 朝とか家で一番早く起きてお店中ピカピカに——」

「拷問か?! さすがに、さすがに拷問やで?!」

本人の目の前で行われた褒め殺し作戦に瑞乃のキャラは壊れ、みふゆと鶴乃は共通の好きなものを見出して仲良しに。やちよは思った以上に出てくる友達のいいところに呆れつつ感心し、最後には耳まで真っ赤になった瑞乃がカウンターに突っ伏していた。

「やちよー、みふゆー！　また来てねー！」

帰る頃にはすっかり仲を深め、鶴乃は満面の笑みで二人を見送った。

「むむ……罪悪感が……」

瑞乃は何か言いたげに口を開いては閉じるを繰り返していたが、結局何も言わないまま、困ったように笑いながら鶴乃の頭を撫でたのだった。

## 第3話

瑞乃がやちよ、みふゆと出会ってから二年の月日が流れた。その間に瑞乃がしでかしたことと言えば、神浜市立附属学校きつての問題児として名を馳せたことだろう。

けっして校則に反したり非行に走ったりしたわけではない。むしろ普段は成績優秀で明朗快活なムードメーカーとして、生徒にも教師にも支持されている。だからこそ、ここぞというところではつちやけるギャツプが学校側を悩ませていた。

たとえば家庭科の調理実習では、

『中華鍋はもちこみ禁止です!』

『えー』

『えーじゃない!』

実家から中華鍋を持ち込んでひと悶着あった。

体育祭の組分けで妹と敵対することになると、

『この由比瑞乃が鶴乃の敵になるわけじゃないじゃんね!』

『先生、奴が裏切りました!』

『七海を呼べ、急げ!』



自分の赤組をあつきり裏切り、やちよに首根っこ引つ掴まれて自陣に連行された。

中二の折、文化祭で出し物をする事になったときなどは、

『最後尾こちらになっておりまーす!』

『由比さん! お客を独占するのは辞めましょう!』

『予算の範囲内できっちりやっています! 先生も一つどうですか?』

『おいしい!』

大人気なく本気を出してプロ級の肉まん屋台を経営し、学校史上トップの収益を上げた。材料不足ですぐに閉店したものの、一つのクラスがお客を独占したとかで学校には保護者から苦情が殺到した。これを受けた有志の教員たちは由比瑞乃対策委員会を設置、瑞乃がやらかす兆候を察知して阻止する体制が構築されつつある。

なお、瑞乃の二つ年下の妹、由比鶴乃が中等部一年に入学したのだが、

『由比さん……あなたはそのままのあなたのままでいてね……』

『えっ?』

あまりに問題を起こさないで、出席するだけで泣いて感謝された。大切な妹の株が相対的に上がったので、瑞乃はもつとやらかそうと決めた。

そんなやらかし女王が中3の春、登校初日を終えた放課後に何をしているかという  
と、

「むいむい」

友人の自宅で携帯を見ながらニヤニヤしていた。

時刻は午後五時。カウンター付きのシステムキッチンと高い天井、洒落た調度品が目につくりビング。その中央に設置されたソファの上で、瑞乃はみふゆから借りた携帯電話の液晶を見つめている。

向かいのソファに腰掛けるみふゆは、心底不思議そうに首をかしげた。

「そんなに面白いですか？ その小説」

「面白くないわけではないよね。転生ジャンルは人類の叡智じゃんね」

瑞乃が携帯のネットから見ているのは、前世でも大好きだった転生ジャンルの小説だった。時代が変われどジャンルの傾向は変わらず、行間の広い文章の上で転生主人公が順風満帆な転生ライフを送っている。由比家にはネットへ接続する環境がないため、こうして携帯持ちの友人に端末を借りているのだ。

「ワタシも読みましたけど、都合が良すぎじゃないですか？ 何の力もない主人公が別の世界に行っただけでそんな……たとえ神様に大きな力をもらっても、中身がダメな子じゃどうしようもないと思うんですが」

「いいの！ 転生ジャンルって大体そんなもんなの！ 悲しいとか苦しいとか、辛い現実にはリアルで十分。空想くらいご都合主義でいいじゃない！」

「割り切ったジャンルなんですわ……」

「ただいま」

知らない世界にみふゆが感心していると、家主のやちよが帰ってくる。リビングに姿を現したやちよを二人はお帰りで迎えた。

ここはみかづき荘。やちよの実家兼、祖母が経営する下宿屋だ。瑞乃、みふゆ、やちよの三人が魔女退治へ出かける前に落ち合う集合場所としてよく使われている。今日も学校を終えた瑞乃とみふゆ、早退してモデルの仕事をこなしてきたやちよが集合し、三人で魔女退治に出かけるところだ。

そろってみかづき荘を出て間もなく、やちよが瑞乃に向き合う。

「瑞乃。鶴乃の方は大丈夫？」

「大丈夫。完つ璧な演技で誤魔化しといた」

二年が経っても瑞乃は妹に魔法少女のことを教えていなかった。鶴乃も聡明なのでしつこく追及することはないものの、ふとした拍子にやちよたちとの関係性を問いただしてくる。

『えっ、やちよたちと何をしてるかいかげん教えてって？ ぼ、ボランテアよ、ボランテア』

今回もみかづき荘へ落ち合う前に聞かれたので、瑞乃は完璧な演技（自称）で乗り切っ

た。

なお、やちよとみふゆの視線は冷ややかだ。瑞乃のウソの下手さといえれば救いようがないことを知っている。おそらく鶴乃が気を利かせてくれたのだろう、と察した。

鶴乃がしびれを切らしたその時が潮時と踏んでいるが、鶴乃はやちよとみふゆにとつてもかわいいい妹分だ。できれば直接説明して向き合いたい思いがある。

「でも、ずっと鶴乃さんだけ仲間はずれなのはかわいそうですね」

「みつふ、さすがに。感覚が麻痺してるけど、魔女退治って命がけよ。今日明日死んでもおかしくない世界に、鶴乃が来ちゃいけない」

「そうですけど……」

「それに——」

「それに?」

即決で否定した瑞乃は何かを言いよどみ、かと思うと口をつぐんでかぶりを振った。「なんでもない」と言い捨てて早足であるき出す。変わらぬウソや誤魔化しが下手な仲間姿にやちよとみふゆは顔を見合わせ、後に続いた。

魔法の結界は狩場であり、迷宮でもある。どの程度入り組んでいるかは個体ごとに大きく差があるのだが、今回瑞乃たちが相手取った魔法のそれは、まさに大迷宮といって差し支えない規模だった。悪意と呪いが幾重にも重なって多数の階層を作り、上下左右に複雑な分岐と行き止まりが繰り返される。

「ようやく最深部だ……やっち、みつぶ、大丈夫?」

「私は大丈夫よ」

「ワタシも平気です。みっちゃんこそ大丈夫ですか?」

「余裕、余裕」

長い道中を突破し、最深部の魔法と相對する三人。瑞乃は立ちふさがる使い魔たちの多くを相手取った後だったが、転生によりブーストした魔力にはまだまだ余裕がある。みふゆは「相変わらずデタラメな魔力ですね」と呆れまじりに笑う。

始まった戦いは一方的だった。道中の攻略が本体のようなものだったのか、魔法本体の脅威は控えめだったからだ。やちよが槍で突貫すれば大穴が開き、みふゆがチャクラムを投てきすれば深く抉れ、瑞乃が中華鍋を叩きつけると大きく凹んだ。

「しづといわね……でもこれで!」

「終わりです!」

とはいえ耐久力の方は結界の規模にふさわしく、小一時間かけてようやく瀕死の状態

へ追い込んだ。

最後の一撃を叩き込むため、やちよとみふゆは連携して攻勢をかけ――

「えっ、ちよ、えっなんで？　なんでこんなところに？」

その後ろで瑞乃はパニックになっていた。

視線は頭上、幾重にも折り重なった多層の迷宮に釘付けにされている。

いつも飄々とした調子を崩さない瑞乃のただならぬ様子にやちよとみふゆは驚愕し――瑞乃のつぶやきを受け、それ以上の驚愕を味わうこととなった。

「何してるの、鶴乃!？」

――

「あうっ!？　いつ、たい……」

迷宮の魔女、結界上層部。

使い魔の体当たりで吹き飛ばされた鶴乃は壁に叩きつけられ、苦悶の声を漏らした。

涙でにじむ視界には、狂気と呪いを身にまとう不気味な使い魔たちがうごめいている。聡明な鶴乃は姉が自分を遠ざけた理由を察し、無力感でますます視界がにじんだ。

由比鶴乃には姉がいる。ウソをつく以外のことは何でも出来て、誰にでも優しくいつ

でも強い自慢の姉だ。

姉妹の間に隠し事はないと思っていた。たとえ学校生活で一緒にいられない時間が増えたとしても、姉は自分だけの姉であると信じていた。

だから、姉がやちよとみふゆとだけ何か大きな秘密を共有していることを知った時は、どうしようもなく寂しかったのだ。

『ボボボボランティアだよ』

問い詰めても本人は完璧と思っているバレバレのウソをつかれる。姉がどんどん遠くに行つてしまふよう、鶴乃は悲しくなった。

その悲しみを吹っ切るために、鶴乃は行動を起こしたのだ。

自宅にカバンを置くや否ややちよ、みふゆとの待ち合わせに向かう姉を尾行した。みづき荘を出た姉たちは商店街や駅前などの人の多い場所を散策し、やがて不気味な空間の裂け目に姿を消していった。

明らかに危険な気配の漂う空間の裂け目——結果に尻込みしていた鶴乃は、意を決して叫んだ。

『やってみなけりや分からない！ 出たとこ勝負だつていいじゃない！ 私にもお姉ちゃんをお手伝いできるかもしれないもん！』

結果、すぐに使い魔たちに見つかつて、逃げ惑っているうちに追い詰められた。

痛みにもうめいている間に使い魔たちはどんどん数を増やし、もう逃げることはできない。万事休す。

「やあ、由比鶴乃」

「えっ、たぬき？」

諦めが頭をよぎったその時、どこからともなく白い獣が現れる。

「たぬきじゃなくて、僕はキュウベえだよ。それより、君の姉が隠していたことを知って満足したかい？」

「お、お姉ちゃんを知ってるの？ こいつらは何なの？」

「これは魔女の使い魔だよ。君の姉と七海やちよ、梓みふゆは魔法少女なんだ。今頃結界の最深部で魔女と戦っているだろうね」

「魔女、魔法少女……そっか」

キュウベえの簡潔な説明から鶴乃は理解した。きつと姉とやちよ、みふゆは悪い魔女を成敗する魔法少女なんだ。こんな風に危険な敵と戦うから、だから自分を遠ざけていたんだと。

「君も魔法少女にならないかい？」

「……私でもなれるの!？」

「ああ。姉と一緒に戦うこともできるよ。それに、戦う使命を負う代わりになんでも願



「いが一つ叶うんだ。どうかかな？」

「なるなる、魔法少女になるよ！ えっと、願い事、願い事はね……！」

「急いだ方がいいよ」

大好きな姉の隣に立って支えることができる。その手段が提示されて飛びつかないはずもなく、懸命に願い事をひねり出す鶴乃。しかしその間にも使い魔たちはじりじりと距離を詰めて来ており、深く考える余裕はない。

とりあえず目の前の怪物たちを願いでどうにかしてもらおう。取り急ぎそう決めた鶴乃が口を開くと――

「ちよつと待ったああっ！」

轟音。続いて、巨大な赤い塊が結界の床をぶち破り姿を現す。

その塊は希望そのもの。死の絶望と共に新生の希望をもたらし、魂を運送する神の使い――大型貨物トラックだった。

赤を基調に黄色い雷文模様で彩られたその荷台部分には、『中華飯店万々歳』のペイントと共に電話番号と簡易な地図まで添えられている。

瑞乃自身は、荷台を引くキャビンの上に仁王立ちしていた。

「ゆけーい、セキトバくん！」

微細なネジからエンジンに至るまですべて魔力で構成されたトラックは、圧倒的質量

と速度をもつて使い魔の群れに突進。包囲網をぶち破ったかと思うと急制動をかけ、ドリフトしながら巨大な荷台を振り回す。遠心力と魔力でハンマーと化した荷台が、使い魔を塵のように薙ぎ払った。

あんまりにも魔法つぼくないアクションに鶴乃が啞然としているうちに、使い魔たちは全滅していた。トラックは空気中へ溶けるように消え、同時に迷宮全体の存在が揺らぐ。最深部の魔女本体にとどめが刺されたのだ。

暗い路地裏に瑞乃、やちよ、みふゆ、ケガをした鶴乃の三人が投げ出された。

――

「お姉ちゃんはいつつもお店のために頑張ってるのにその上あんな怖い敵と戦ってるなんて頑張りがすぎだから私が魔法少女になって神浜の平和を守るお手伝いをするんだあー……息継ぎ忘れてた」

「ままた待つて待つて、マジで待つて落ち着いて」

「私は落ち着いてるよ!」

ふんふん、と鼻息を荒くする鶴乃に瑞乃は押されていた。

魔女の討伐後、鶴乃の無事を確認してから解散した。鶴乃がキュウベえから素質を認

められたことを知ったやちよとみふゆは、別れ際に「姉妹でよく話し合つて」と言つていた。

万々歳に戻つてからそのとおりによく話し合つていゝのだが、鶴乃の主張は終始変わらない。自分も魔法少女になつて瑞乃の手伝いをするんだと。

むろん瑞乃としては認めるわけにいかない。妹が命がけの戦いに身を投じることこそうだが、魔法少女稼業には字面以上にダークな部分があるからだ。

どうどうと鶴乃をなだめすかしながら、瑞乃はなけなしの語彙力で説得を試みる。

「ほら、お姉ちゃんつて最強のお姉ちゃんだからさ。やつちとみつふもすつごく強いし、魔女退治なんて朝飯前なわけ。鶴乃まで危ないことしなくていいんだよ」

「そう言つて私だけずつと仲間はずれにするつもりでしょ！ 今度という今度は私も譲らないよ。ここで折れたら最強の妹の名折れだもん！ キュウベえ探して来るね！」

「待つてつてばー！」

言うや否や外へ駆け出していく鶴乃の腕をどうにか掴み取る。

しかし鶴乃は何を言われても折れる気はなかった。姉があんなに恐ろしい怪物と知らないところで戦つてゐるのを聞いて、黙つていられるわけではない。戦う力があるならなおのことだ。絶対に譲らない気持ちで鶴乃は振り返り――

「お願いだから……ひつぐ……言うこと聞いてよお……」

「お、お姉ちゃん!？」

ぼろぼろと涙をこぼす姉の姿に、目を丸くしてしまふ。

鶴乃は瑞乃が泣いているところを見たことがなかった。転んでひざを擦りむいても遊具から落っこちても「あいつた!」の一言で済ませ、すぐに笑う。

初めてみる姉の涙に鶴乃の意志が揺れた。

「ほんとに危ないの……お姉ちゃんは大丈夫だから……鶴乃の願い事を、私のために使わないで……」

「え、ええ……もう、ガチ泣きなんて反則だよ……」

困惑しながらハンカチをあてがってやる鶴乃。

しばらくそうしていると涙がおさまり、静かな店内に瑞乃の小さな嗚咽が響く。

大切な姉を泣かせてしまった鶴乃に残された選択肢は一つしかなかった。

「……分かった。魔法少女のことは保留にするよ。どうしてもなりたくなったら、お姉ちゃんに相談するから」

「うん、うん……ごめんね」

「なんで謝るの? お姉ちゃんらしくないよ? はい、ちーんってして」

ハンカチは一瞬で涙と鼻水まみれになったが、姉を泣かせたショックでいっぱいはいっぱいの鶴乃はそれどころではなく、困惑しきりだったという。

「訳が分からないよ。もつと効率的な説得の仕方があつただろう？」

「誰のせいだ悪徳営業エイリアン！ ああもう、鶴乃にかつこ悪いとこ見られた……最悪……」

同日夜、鶴乃が深く眠っている横で、姉とエイリアンが密談していた。

エイリアンことキュウベえは無機質な瞳で瑞乃を見返しながら、「彼女が望めば、僕は契約を交わすよ」と釘を刺した。別にキュウベえの協力には期待していないため、はいと瑞乃が流す。

「君たちが魔法少女の真実と呼ぶ情報を話せば、すぐに諦めたんじゃないのかい？」

「お姉ちゃんだけにそんな辛い思いさせたくない、つつつて逆効果になるかもしれないじゃん」

「そうなのかな？ あまりに非論理的だよ」

魔法少女の真実。それはキュウベえの契約がブラックとされる最たる部分だった。

ソウルジェムは魔法少女の魂そのものであること、魔法少女はいずれ魔女になつてしまふことの二点からなる。契約に際してキュウベえは聞かれない限りこのことを言わ

ないが、瑞乃は知っていた。

というのも、およそ十二年の経験年数が原因だ。三年生き残れば大ベテランとされる魔法少女業界でそれほど経験を積めば、隠された情報にも自然と触れる機会がある。たとえば他の魔法少女のソウルジェムが砕けたり、魔女化を目撃したりなど。

これらの真実を知っているからこそ、鶴乃には魔法少女になつてほしくなかった。普通の女の子として長生きし、万々歳で幸せになつてほしかった。

はたしてその思いは涙を通して伝わったようだが、

「それにしたつて泣き落としはないわ……かつこ悪い……」

「姉というのは大変な役職なんだね」

最強の姉としてははずべき醜態だった。きつと明日からダサイ姉として距離を置かれるのだろう。

軽く絶望して頭を抱えていると、

「お姉ちゃん……」

「わわ」

寝ぼけているのだろうか。ぐにやぐにやした動きで鶴乃が瑞乃の背によりかかり、おぶさるような形で寝息を立て始めた。

穏やかで安心しきつた寝顔に嫌悪の念は欠片も見えず、瑞乃はまた泣きそうになつた

後、口を真一文字に結んで鶴乃を布団へ運んだ。

最強の姉が弱気になってどうする。こちとらご都合主義に守られた転生者だ。妹の人生を悪徳エイリアンから守る程度のこと、楽勝に決まっている。

瑞乃は大切な妹のぬくもりを全身で感じながら、明日からまた頑張ろう、と決意を新たにするのだった。

## 第4話

神戸市立大附属学校中等部には、二人の有名人がいる。一人は由比瑞乃。誰にでも分け隔てなく接し、太陽のように明るく快活な性格で男子女子問わず人気だが、いたずらと非行の境目程度の微妙なやんちゃをほぼ毎日やらかす問題児である。成績優秀かつ他の生徒たちをノリと勢いで味方につけるため、教師たちは手を焼いていた。

その問題児に対する最終兵器が、七海やちよだった。

『みーずーのー……』

『あ、般若』

『誰がよ！ 鶴乃、お姉さんはもらっていくわね』

『お姉ちゃあーん!?!』

などと、体育祭で自クラスを裏切った瑞乃を力づくで分かせた光景は、生徒たちの記憶に新しい。

特にトラブルがなくとも二人は自然と一緒にいることが多く、日々命がけの戦いを共にするためか、その距離感の近さは普通の仲良しとは一線を画していた。一部の物好きたちの間ではそういう仲なのではないかと噂が立つほどに、やちよと瑞乃の仲は良かった。



た。

そんな中等部の常識が崩れ去ろうとしている。

昼休みの教室、いつもどおりに机をくつつけ、やちよと瑞乃がお弁当を広げていた。「それでね、いつもより早起きして仕入れのイロハとか帳簿の付け方とか習うはずだったんだけど、朝起きたら鶴乃がパジャマのスソがっちり掴んでるの。どうにか抜け出そうとしたらお姉ちゃん、つてかわいい寝言もらしちやって、もう二度寝一択じゃんね？寝坊してめつちや怒られたけど、さすがにだよね」

「……あつそ」

「う、うん」

話が広がらない。

瑞乃の妹かわいいトークは平常運転だ。そこにやちよがツツコミや質問を入れて和気あいあいとなるはずだが、今日のやちよは非常にそっけない。怯まずに話を続ける瑞乃だが、やちよは心ここにあらずだった。

（私の願いが、罪のない人を巻きこんだのかも……）

やちよの抱える深刻な悩み。それは願いに關するものだった。

やちよはモデル同士で組むユニットのリーダーとして活動しており、魔法少女になつた折にはこのユニットのリーダーとして生き残ることを願った。そのおかげかどうか

は定かではないが、リーダーとしてうまく活動できている。

しかし看過できないのは、競合する他のグループが不祥事で電撃解散したことだ。そのグループはやちよたちの対抗馬として業界では有名で、やちよたちはおそらく劣勢になると予想されていた。

この競合グループが引退したことで、やちよたちユニットの地位はひとまず安泰となった。ただ、やちよの心は晴れない。自分の願いが競合グループの不自然な解散を誘発したのではないかと疑念を抱いている。

願いを叶えたキュウベえに聞いたはず勇氣は湧かず、鬱屈とした疑念はやがて不安と罪悪感へと変わっていく。友人のシスコン話など聞いている余裕はなかった。

「じゃ、じゃあこんな話は？　じいさん主催で父と料理勝負やってさ、私が圧勝したせいで父、大陸へ修行の旅に出ちゃって——」

胸に手を当てて、自分の願いを何度も反芻するやちよ。するとふいに瑞乃の声が途切れた。

「ね、ねえやっち。私、何かしちやったかな？」

「……」

瑞乃の声は震えていた。こちらの機嫌をうかがうような、今にも泣き出しそうな弱々しい態度が気にさわる。

がたん、と音を立てて立ち上がり、そそくさとお弁当を片付けて教室を出ていくやちよ。

「能天気でなんにも考えていないあなたと一緒にしないで。人が悩んだるときにうるさいのよ」

吐き捨てられた言葉のトゲは瑞乃に突き刺さり、やちよが出ていって数分間、瑞乃はびくりとも動かなかった。

――

やってしまった。

やちよが後悔したのは翌日のことだった。瑞乃はただいつもどおりに振る舞っていただけなのに、悩み事があるからとナーバスになってひどい八つ当たりをしてしまった。願い事がどうこうという不安よりも、あの子の瑞乃が能面のように無表情になっていた事実が、やちよの心に重くのしかかっていた。

今日は土曜日だが、瑞乃の働く中華飯店万々歳はやちよの実家から徒歩で行ける範囲にある。謝りに行くなら早い方がいいと祖母に助言を受けたこともあって、やちよは飲食店の混雑しない時間帯に万々歳へ出発した。足取りは重かった。

一人で勝手に悩んで、くよくよして八つ当たり。いくら瑞乃でも許してくれないかもしれない。やちよは走馬灯のように、瑞乃との思い出を回想し始めた。

最初の印象は先輩風を吹かせるシスコンだった。

『槍で突進するならもつと思いい切りよくするといいよ。半端な気持ちで相手の間合いに突っ込んで損だから。こんな感じ』

『へえ、槍も使えるのね』

『ふふん、だてにベテランじゃないんだよ』

中華鍋と中華包丁を振り回しているくせに、やちよの槍の扱いへのアドバイスはやたら的確で、すぐに上達できた。過去に幾人もの魔法少女と出会ってきて、その中に槍を扱う子がたくさんいたからという。しかし同い年の子に露骨な先輩ヅラをされるのは気に食わず、瑞乃がアドバイスばかりで積極的に戦おうとはしないこともあって、反骨心がめきめき育った。

それが災いしたのは新人研修の5日目のことだった。

使い魔へ完璧に対処し、手早く魔女本体も始末できた。なぜか魔女の結界が解除されなかったが、一人でも十分にやれることを証明できた気がして、誇らしかった。

『どう、由比さん？ 今回は文句のつけようがないでしょう？』

『えつとねー……』

やちよが平坦な胸を張っていると、瑞乃の姿がブレた。

『え?』

気づけば瑞乃はやちよの背後に、中華鍋を構えて立っていた。魔力で出来た分厚い鍋は、原型の崩れたアンコウのような魔女の一撃を食い止めていた。瑞乃が割って入らなければ、やちよの上半身が食いちぎられていただろう。

やちよが我に返るよりも早く、瑞乃は鍋で魔女を押し返す。続いて鍋を中華包丁に変形し、一閃。肉と一緒に骨も断つ重厚な刃がアンコウを細切れにすると、ようやく結果が解除された。

死の恐怖でへたりこむやちよに視線を合わせながら、瑞乃は苦笑した。

『あれが本体だったみたいだね。倒したと思っても、結界が消えるまでは油断しちゃダメ。死ぬよ』

実感のある言葉だった。

このときやちよの中で、瑞乃は口だけのシスコンから実力ある先生に格上げされた。けれど素直に認めるのはシャクだったから、ふいと顔を背けて、

『本当に強かったのね、あなた』

『当然! 私是最強のお姉ちゃん由比瑞乃! 年季が違うのよ年季が!』

『ふふ、年寄りみたい』

『誰が魔法おばさんだつて?!』

『そこまで言つてないわよ!』

強さと経験でマウントを取りにくる瑞乃と、冷静にカウンターを返すやちよ。遠慮なく小突き合う関係はこのとき始まったのだろう。

お互いに気を使わずありのままの気持ちとを交わせる関係。失うことが怖くなって、やちよの重い足取りは急ぎ足へと変わった。

「あ、やちよ」

「こんにちは鶴乃。瑞乃はいる?」

すぐに参京区の万々歳へたどり着く。時間帯のためお客はすっかり捌けており、厨房で皿洗いをしていた鶴乃が出迎えた。

鶴乃は「いるけど……」と表情を曇らせる。

「なんだかすごく落ち込んでるみたいなんだ。私が大好きって言つてもぎゅって抱きしめても反応がなくなつて、『転生したい』とか言つてるの……」

「ごめんなさい。それは私のせいなのよ……」

やちよが悩みを抱えていて、つい八つ当たりをしてしまったことを明かすと、鶴乃は一瞬だけむつとした顔に。続いて顔を逸らし、拗ねたように言った。

「私が何言つても立ち直つてくれないんだもん。早く仲直りしてきてほしいな」

鶴乃に促され二階の居住スペースへ。

瑞乃の部屋の前で一つ大きく深呼吸してから、扉を開ける。

真つ暗な部屋の隅で膝を抱えていた瑞乃は胡乱げに顔を上げ、やちよと目が合うなり弾かれるように立ち上がって、

「やっちー！ ごめん、ごめんね！ 気づいてあげられなかったね！」

やちよへ飛びかかった。

意味不明だったが、謝りたいのはやちよの方だ。抱きつく瑞乃を一度引き離し、しっかり目を合わせる。

「私こそ悪かったわ。悩み事があって、八つ当たりしちゃった……ひどいことを言っ  
ごめんなさい」

「そんな！ あんなに露骨に悩んでたのに気づかなかった私が悪いんだよ……ごめ  
ね」

そこまで分かりやすかっただろうか？ とやちよは首をかしげた。モデルのユニツトの話は瑞乃にしていけないし、願いのことも教えていない。

何度かごめんの応酬を交わした後、やちよはその点を聞いてみた。

「分かりやすいよ！ 露骨に胸に手を当てて、難しい顔してき。たしかにもう中3なのに、やっちは全然変わらないもんね」

「……何の話?」

この時点でやちよはイヤな予感がしていた。とてつもなく大きな認識の相違があるような予感がしていた。聞かないほうがいいような予感が。

はたしてその予感は的中することとなる。

瑞乃はやちよの肩に手を置き、もう一方の手でサムズアップしつつ「大丈夫!」と言つて、

「貧乳はステータス! むしろそつちの方がスラつとした感じで、モデルっぽいんじゃないかなっ!」

やちよはグーパーを繰り返した。

華麗なスウエーバックで回避する瑞乃。勢いを活かしてバク転し、やちよと相対する。

しばし沈黙のままにらみ合う双方。瑞乃はにじみ出るやちよの殺気に冷や汗をダラダラ流し——脱兎のごとく駆け出した。窓から飛び出し屋根の上を跳ねて逃げる。それを追うやちよの表情は、般若だった。

屋根を飛び跳ね、ビルの壁面を走り、人目のある通りでは単純なダツシュで駆け回る二人。ときにやちよが魔力の槍をぶん投げるが、瑞乃は後ろに目がついているかのようにに躲して見せる。この世のものとは思えない表情で追いかけるやちよと、ホラー映画の



登場人物じみた顔つきになって、瑞乃の追いかけてこは注目を集めた。

参京区から北養区、新西区をぐるりと回った二人が足を止めたのは、どこかの河原だった。

「はあ、はあ、つ、捕まえた……！」

「ご、後生だから、お命だけは……！」

お互いに息も絶え絶えで、後ろからフラフラと距離を詰めたやちよが瑞乃を押し倒す。夕日に照らされる河原に二人の汗だくの少女が重なり合った。

両者とも魔力には余裕があるが、体力は別物だ。何をやる気力もなく、息を切らす音だけが響く。その間、瑞乃は心中で念仏を唱えていた。

脳みその九割を妹が占めている瑞乃といえど、やちよの反応からして地雷を踏んだと察することはできる。きつとやちよの体力が戻れば処刑されるに違いない、愛する鶴乃よ先立つ不幸を許して、と腹をくくる。

やちよの息が整ってきた。短くも楽しい人生だった——ぎゅつと目を閉じた瑞乃だったが、やちよからの追撃はない。

「ぶっ、あはは！ 何が後生よ、もう！ あはははっ！」

「あ、あれ？」

それどころか、どこか吹っ切れたような笑いを漏らしている。

「あー、おかしい。私たち何やってるのかしら」

やちよ自身、自分の気持ちに分からない。ただ、全力で区をまたいで数時間も鬼ごっこをしたあげく、貴重な魔力まで無駄遣いしたことを考えると無性に馬鹿らしくて、自然に笑えてしまった。願い事がどうこうなんて真剣に悩んでいたことが嘘みたいにおかしかった。何も解決していかないのにとても気分が晴れ晴れしていた。

瑞乃にはやちよの笑いの意味が分からない。けれど楽しい気分につられたのか、「ふふっ」といたずらっぽく笑った。

「何やってるってそりゃ、青春じゃない?」

「何それ、漫画みたい」

二人でひとしきり笑うと、やちよが体を起こす。しかし瑞乃の体からはどかずにマウントをとったままだ。

「ところで、よくも人のコンプレックスを指摘してくれたわね」

「ひっ、あは、あははっ! やめ、やめてー!」

「反省しなさい、この牛女!」

瑞乃の脇下に手を入れてでたらめに指を動かすと、瑞乃は苦しそうに身をよじらせる。悩みは有耶無耶になっても女のプライドを刺激された屈辱は別だ。瑞乃はこの二年で無駄に胸部の発育だけは良いので、余計にやちよの恨みは深い。瑞乃が笑い疲れて

動けなくなるまで徹底的にくすぐった。

「何、やってるのカナ、二人とも……？」

「青春よ」

「……」

なお、帰りの遅い二人を心配して探しに來た鶴乃は、薄暗い河原で汗だくになりながらイチチャイチャする姉と友人を見つけ、目から光が消えた。

笑いすぎてお腹が痛い瑞乃はその場で言い訳もできず、ヤキモチを焼いた妹とひと悶着あつたのはまた別の話だ。

## 第5話

神浜市には魔法少女が多い。東西地域に分かれての歴史的な確執は古くから憎悪や欲望の温床となり、救いを求める無数の少女たちがキュウベえと契約を交わしてきた。少女たちは狭い地域で切磋琢磨し、弱肉強食の中で揉まれた魔法少女は他の地域と比べて強力に育った。質、量ともに神浜市の魔法少女たちを超える地域はそうそうないだろう。

そんな神浜市でもっとも幅を利かせているのが、西のベテラントリオと呼ばれる魔法少女グループだった。

一人は七海やちよ。強力な固有魔法こそないものの、およそ二年半の経験で培った対応力で新西区の平和を守ってきた。現役のモデルとして活躍する美貌から、その方面でのファンも多い新西区のボスだ。

もう一人は梓みふゆ。やちよとほぼ同じ時期に活動を始めた魔法少女で、チャクラムを用いた変則的な攻撃と幻覚の固有魔法が特徴だ。前衛のやちよが槍で突撃する後ろから、幻覚とチャクラムの投擲で支援する。その連携の恐ろしさは神浜市で三年間生き残っている現状が示している。

そして最後の一人は由比瑞乃。参京区で経営する中華飯店万々歳の看板娘にして、いつ魔法少女になったかも定かでない大ベテランだ。ただし、肩書の割にはさほど有名ではない。

『参京区は初めて？　じゃあぜひウチの中華を食べてつてほしいな。かわいいウチの妹も紹介するよ！』

と、鉢合わせした魔法少女全員が店と妹の宣伝に圧され、本人の印象が薄れてしまうためである。なお、実際に店へ連れて行かれた者の五割がリピーターになったとかどうとか。

そんな神浜市の有力者三人が、深刻な顔で席に着いていた。

場所は新西区駅前のバーガーショップ。瑞乃、やちよが隣り合って座り、対面にみふゆが掛けている。

三人の目前にはそれぞれ注文したセットメニューがほかほか湯気をたてているが、瑞乃が醸し出す緊張感に吞まれてか、誰も手をつけない。

三人の顔を知っている通りすがりの魔法少女は、険しい表情で黙り込む有力者たちを見かけ、顔を青くして耳をそばだてた。

重苦しい緊張感の中、ついに瑞乃が口を開く。

「鶴乃が、一緒にお風呂入ってくれなくなつた」

「はい、解散」

「お疲れ様でしたー」

「まてまてまてーいー!」

やちよとみふゆは席を立つ。盗み聞き勢はいっせいに白け、解散した。

慌てて友人二人を引き止めた瑞乃は、必死の形相で悩みを語る。

「それだけじゃないよ?!」 いっつも朝起きたら布団に潜り込んできてたのに、今朝はむしろ布団と布団の間に距離空けて普通に寝てたんだよ!　これは事件じゃんね!?!」

「はあ……事件発生、なんて言うから何かと思えば」

「結局いつものノロケじゃないですか」

三人が集まった目的は瑞乃のお悩み相談だった。「事件」などと大げさな言葉で釣られて三人集まればこれだ。

ただ、それぞれの事情があり三人が顔を合わせる機会が減っていたため、ちようどいきっかけではあった。

やちよとみふゆは再び腰を下ろす。

「なんかすっごく小さな声で『ヤダ』って言って、顔とか赤かったし……おしめを替えたの私だよ?　今更恥ずかしがることないのに……」

「って言ってみたら反応は?」

「耳まで真っ赤になって『お姉ちゃんのアホっ!』って言われた」

「みつちゃん、デリカシーって言葉知ってます?」

「もちろん! 私たち魔法少女が内緒話でよく使う——」

「それはテレパシー」

ツッコミも気にせず、瑞乃はおもちやを手でいじる。セツトメニユーのおまけについできたそれは、何かのアニメのキャラクター人形だった。スイッチを押すと『ほっほっほ』と笑い声が響く。

「一体どうしちゃったのかな? とりあえず、鶴乃の好きなこのアニメキャラグッズで

ご機嫌とろうと思うんだけど」

「もので釣ろうなんて浅はかね」

「だからわざわざみかづき荘じゃなくて、ここに集合したんですか……」

有名なチェーン店であるこの店は、セツトメニユーに版權キャラのグッズを付ける期間がある。瑞乃の浅い作戦にやちよとみふゆはため息をつく。

鶴乃の行動はそれほど奇特なことではない。単に一人の女の子として姉に甘えるのが恥ずかしくなってきただけだろう。いわば一人娘がお父さんの洗濯物を拒否するようになるのと同じ、かもしれない。

「鶴乃鶴乃鶴乃……」

ただ、死んだ目で妹の名をつぶやく瑞乃にそんなことを言うのはためらわれる。やちよとみふゆはテレパシーで方針を共有してから、なぐさめ作戦を開始する。

「意識されてるんじゃない?」

「意識つて?」

「好きな人に裸を見られたり、甘えたりするのつて恥ずかしいじゃない。実の姉であつても」

「……やっち、さすがに」

瑞乃はやちよから体を引いた。引きつった笑いを浮かべている。

「女の子同士、しかも姉妹関係でその発想は引く」

「やっちゃん、さすがにですよ?」

「ちよつとみふゆ!」

まさかの裏切りにやちよが目を丸くしていると、瑞乃は体をかき抱くように手を交差させた。

「そういうえば修学旅行でお風呂に入ったとき、やっち私のことチラチラ見てたような

……」

「そんなモノ牛みたいに揺らしてたら誰だつて見るわよ!」

「あつ、認めた! みつぶ、この人自分がムツツリだつて認めましたよ!」



「大丈夫、ワタシはそんなムツツリやつちゃんも好きですよ？」  
「はっ倒すわよあなたたち！」

額に青筋を浮かべ、瑞乃の無駄に育った胸部をつつこうとするやちよ。芝居がかった悲鳴をあげる瑞乃に、ニコニコ楽しそうに笑うみふゆ。神浜市きつてのベテラントリオが送る、平和な日常的一幕である。

すったもんだの末、鶴乃もずっと幼いままではない、成長を受け入れないといけない、と結論がついた。内心分かっていた瑞乃も「そんなもんだよね」とししぶしぶ納得し、ハンバーガーを食る。

「この機会に話しておきたいんだけど……」

やちよはついだとばかり、真面目な話を切り出した。魔法の不足についてだ。

ここ最近、神浜市では魔法が不足している。魔法が落とすグリーンフシードがなければ魔法少女のソウルジェムを浄化することができないため、問題は深刻だ。実際、不足したグリーンフシードを求め他の区に侵入した魔法少女が、縄張り争いを起こす事件が発生している。

やちよは同じ魔法少女同士で争いたいとは思っていない。もし困った魔法少女に出会ったとき、グリーンフシードに余裕があれば、融通したいと考える。その方針をみふゆと瑞乃にも共有しておいた。

といつても瑞乃は妹以外のことになるといい加減なので、ハンバーガーを貪りながら「うんうん」と分かった風にうなずいていただけだ。

「あら、そのバーガーは食べたことないわね」

「一口交換する？」

「ありがと、いただくわ。はむっ」

「食い意地イ！ 一口つてレベルじゃないよ!？」

「おいしい。瑞乃も、はい。……みふゆ？ どうかした？」

瑞乃とやちよがさらりとバーガーをシェアしていると、対面のみふゆから強い視線を感じる。見ると、みふゆはまばたきもせず据わった目つきでやちよたちを眺めていた。

「気のせいでしょうか。二人共、近くないですか？」

やちよと瑞乃は隣がけて座り、肩が触れ合うような距離だった。

指摘を受けたやちよはそつと距離をとるが、追及はまだ終わらない。

「ここに来たときも、流れるように隣同士で座りましたし……遠慮がなくなってる感じがします」

「い、いろいろあつたのよ」

「いろいろ。そうですか、ワタシがない間に二人きりで、いろいろあつたんですね。二人だけで仲良しに、なったんですね……」

いろいろ、とは例の追いかけっ子事件と、それに続いて遠慮がなくなったやちよと瑞乃の交流もろもろのことだ。

けっして仲間はずれにしたわけではないが、一人だけ学校の違うみふゆは疎外感でおかしくなりそうだった。とかすでおかしくなっていた。張り付けたような笑顔で「二人だけ、二人だけ……」と繰り返している。

やちよは冷や汗を流し、こっそり横の瑞乃をひじで突いた。

瑞乃もさすがにハンバーガー食べてる場合じゃないと気づいたのか、頭をフル回転させる。幸いなことに、万々歳にやってきた水名女学園の生徒からいい感じの情報を仕入れていた。

「そうだ、聞いたよ。みっふ、箏曲部のコンクールで全国に出たんだって？　動画で見たよ」

「本当？　すごいじゃない！」

「ありがとうございます。そう言われると、頑張ったかがありました。……そうそう、ワタシも聞きましたよ」

みふゆは身を乗り出し、下からやちよたちを見上げるように、

「河原で汗だくになってイチヤイチャしていたそうですね」

「ぎへっ」

「うふふ、変ですね。ワタシたち友だちなのに、聞いた聞いたって伝聞ばかり……どうして直接お話できないんでしょうね？」

「あばばば」

瑞乃はすでに追い詰められ、使い物にならない。妹と料理と戦い以外は割とダメダメな瑞乃にこれ以上を期待するのは酷だろう。

極限まで拗ねたみふゆに対処するため、やちよはドリンクで一度口を湿らせ――

「じゃ、じゃあこれは知ってる!?! 私この前男子に告白された!」

「ぶふうっ!?!」

「本当ですか!?!」

瑞乃のすさまじい話題転換に噴き出した。やちよはもちろん、謎の情報網を持つみふゆにも初耳のニュースだった。めんどくさい気配は消えたので、ひとまず安心して瑞乃が語りだす。

瑞乃はクラス内カーズトや性別のくくりを気にせず、気の向くままに誰にでも話しかける。見た目も割とよく、かといってやちよほど高嶺の花感がないので、あまり女子に耐性のない男子が交流すると「この女ワンチャン惚れてね?」と思春期特有の勘違いが発生しやすい。

瑞乃に告白した男子はその典型例で、校舎裏に瑞乃を呼び出し一世一代の告白を敢行

した。

「で、なんて答えたんですか!？」

どこか不安げに、けれど恋バナに目のない女の子らしくみふゆが聞くと、瑞乃は胸を張った。

『私は妹一筋なんで』

「……」

ドン引きである。

やちよとみふゆはしばしの沈黙の後、「まあこういう子でしたね」と納得するとともに、名も知らない男子に黙祷を捧げた。その男子は「シスコン極めたり、か……」と言い残し、去っていったという。

「ふふん、男子に告白されて振ったの、このグループだと私が初じゃんね。どうよ、このモテ女のオーラは」

「どうやらまた物理的にマウントを取られたいようね」

「ごめんさい」

マウントを取ろうとしたところにやちよが釘を刺す。

するとみふゆは貼り付けたような笑みを崩し、くすくすと自然な笑いを漏らした。

「本当、いつまでも変わりませんね、みっちゃんは」

妹一筋で、すぐにマウントを取ろうとして、どこまでも自由気ままに動き回る。瑞乃は出会ったときから何も変わらない。

その意を受けた瑞乃は目を瞬かせ、くしゃりと笑う。

「うん、私はずっと変わらないうよ。死んで生まれ変わってもね」

その笑顔を見たみふゆとやちよは妙な胸騒ぎを覚えたけれど、すぐに次のバカ話に花を咲かせて、それ以上気にすることはなかった。

ベテラントリオの日常はどこまでも騒がしく、平穏である。

――

そして平穏とはいっつか崩れ去るのが常だった。

久しぶりに三人揃ってのおしゃべりを存分に楽しみ、上機嫌な瑞乃が万々歳に帰ると、入り口の引き戸が勢いよく開かれる。中から大慌てでまろび出てきたのは愛すべき妹、鶴乃だ。

鶴乃は今にも泣き出しそうな顔で瑞乃を認めると、すがりついて泣き出した。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんどうしよう!?!」

「落ち着いて、大丈夫、お姉ちゃんがついてるから」

しやくりあげる鶴乃の背中をさすり、頭を撫で、焦る心を抑えながら落ち着くのを待つ。

鶴乃は嗚咽で途切れ途切れになりながら、たつた今仕入先から連絡が入ったと説明した。

そこは今朝から祖父が食材の仕入れにトラックで出かけたところで、連絡の内容はと  
いうと。

「おじいちゃんが、倒れたって……！」

万々歳の受難が始まった。

――

祖父は病院に運び込まれた後急激に容態が悪化し、息を引き取った。医者は老衰による急性心不全と死亡診断書に書き込んだ。

『自分のやりたいことを探して、大切にすればいい』

今際のきわ、祖父は鶴乃にそう言い残した。由比家の栄光に固執せず、自分の幸せを見つけてほしいようだった。

『ぶつちやけお前が勝つとは思わなかった』

瑞乃にはそう言った。あの料理勝負は娘といい勝負をさせて父親の威厳を取り戻させようとしたものらしい。妹の前で姉が負けるわけがないじゃん、と瑞乃は開き直った。

『お前は何でもできるが、なんでもやる必要はないんだ』

必要があるうがなかるうが、瑞乃はやりたいうようにやるだけだった。

通夜と葬式では祖父の人徳によるものか多くの関係者が集まり、口々に哀悼の意を表した。鶴乃は沈んだ空気の中、何度も瑞乃の胸に顔を埋めて泣いた。由比家の栄光とそれを取り戻そうと奮闘していることは祖父から伝えられたもので、鶴乃は祖父と万々歳が大好きだった。

だから祖父の遺してくれた万々歳が潰れてしまうことを、誰よりも悲しんだ。

祖母と母親は祖父を失った悲しみのためか、もともとひどかった放蕩癖がさらに悪化。わずかな保険金と遺産にまで手を出し、遊興の限りを尽くすようになった。

祖父の跡継ぎであるはずの父親は瑞乃との料理勝負で惨敗してから中華の大陸へ修行の旅に出ており、連絡がつかない。万々歳の経営を受け継ぐ大人は誰もおらず、子供でしかない鶴乃は泣いて悔しがるしかできなかつた――

『お姉ちゃんにお任せあれ』

しかし瑞乃は別である。

なぜなら瑞乃は転生者であり、最強のお姉ちゃんだからだ。お姉ちゃんが妹の涙を見



過ごすことは決してあり得ない。すぐさま万々歳再建計画が始まった。

まずは祖父の遺したメモに従い食材の仕入れ先へ片端から連絡。時には直接仕入先を訪れてあいさつ回りを行い、顔をつないだ。大人たちは十五歳の少女が後を継ぐことに難色を示していたが、

『これを食らうてから考えてください』

『バカな、うますぎる……?!?』

全力で質を追求した瑞乃の料理を味わい考えを一変させ、万々歳をこれからも支援し続ける確約を交わした。

むろんうまくいくばかりではなかった。祖父が提供していた五十点の中華料理ではなく、大体九十から百点程度の料理を提供するようになったので、昔ながらの常連客の幾人かは「万々歳の味ではない」と酷評し、離れていった。

それでも新生万々歳は純粹な味と接客の質によって多くの新規客を獲得し、参京区だけでなく市外にまで名を轟かせる有名店となった。

祖父の死から一ヶ月後。

変わらず元気な店長代理の声が、お昼の万々歳に響く。

「いらっしやいませ三名様でよろしいですねお好きな席へどうぞー!」

「すみませーん、チャーハンセット二つとスタミナラーメン一つで、ラーメンはネギ抜き

で」

「こっちはホイコーロー肉抜きください」

「はいただいまア！」

厨房で中華鍋を振り回しながら新規客を声で案内し、おしぼりとお冷を届けるついでに笑顔の一つ。厨房への帰り道ではすばやく新規のオーダーをとって記憶し、火にかけて鍋をかきまぜつつもう片方の手で皿を洗ったかと思うと、中華鍋の方へ戻る。さらに盛り付け、食器の片付けなども平行して行う。

「す、すごい！ 本当に噂通り、究極のワンオペだ！」

「残像が見えるぞ。あの子本当に人間か？」

「とりあえずSNSにアップだ。いいねのためには肖像権なぞクソ喰らえだ」

無遠慮な客の撮影にもしつかり愛想笑いを返す。こうして撮影された常軌を逸するワンオペの動画がネットに出回り、新規が増える。最高の中華にハマったりピーターで売上が増えるという寸法である。

「お、おいしい……！ でもウォールナッツだつて負けてません、まなかが本気を出せばこのくらい……！」

カウンターでチャーハンを頬ばりながらぶつくさ呟く女の子も、評判を聞きつけた一人だった。幅広い年齢層が集まりつつある。

日中、学校に行かせている鶴乃の参戦は夕方からなので、必然的に瑞乃のワンオペだった。もちろん人間ができることではないため、魔法少女姿に変身して作業している。都合よく変身後の装束に中華っぽい雷紋模様があるせいか、変わった制服として受け入れられている。

「お姉ちゃんお待ちせ！　すぐに着替えるからね！」

「お帰りイ！　とりあえず二番と六番の片付けと三番さんのオーダーよろしくウー！」

「しゃっしやー！」

鶴乃が帰ってくると一気に作業量が減る。妹と比べ色素の薄いサイドポニーの茶髪を揺らし、仕事帰りのお客を姉妹でせっせともてなしていく。夜の客足は昼ほど多くはなく、ほどほどの忙しきで閉店時間を迎える。

ラストオーダーをこなし閉店準備が済むと変身を解除し、伝票の整理や帳簿と向き合う時間がやってくる。鶴乃がお風呂に入っている間に魔力で強化した脳みそを使って最速で終わらせる。

「うーん……」

帳簿の上にはかんばしくない数字が並んでいた。

黒字なことは黒字なのだが、母と祖母の放蕩癖がどまるところを知らない。由比家再興のための資金を貯蓄するには何年かかるのか分からない。

「宝くじでも当たれば一発なんだけど……」

ついひとりごちると、後ろに気配。

振り返れば、愛すべき妹が何やら神妙な表情で突っ立っていた。

「お、お風呂あいたよ」

「うん、ありがと。髪、かわかそっか?」

「ううん、自分でやる」

瑞乃は肩を落とし、入浴セットを持って立ち上がる。すると、鶴乃は「あのさ」と思いつめた声をあげる。

「お姉ちゃん、無理してない?」

「ぜーんぜん。体力はまだまだ余裕だし、中学も出席日数は足りてるから。ちょっと忙しくなったけど、楽勝だよ」

「そっか……そうだよね! だってお姉ちゃんは、最強のお姉ちゃんだから!」

「その通り! お姉ちゃんにできないことはない! だから鶴乃は何も気にせず、お姉ちゃんを信じてね!」

「うん! お姉ちゃん大好き!」

久しぶりに抱きついてきた鶴乃の表情はうかがえなかつたけれど、きつと満面の笑みで安堵しているに違いない、と瑞乃は予想した。

その日は数カ月ぶりに鶴乃と同じ布団で眠りにつき、深夜二時に目を覚ました。飲食店の仕込みにしたって早すぎる。目的は魔女退治だ。

「鶴乃に心配かけないように……」

日中は魔女や使い魔の数が少なく、かといって夕方は忙しくて、夜の閉店後に出かけると鶴乃に心配させてしまう。必然的に睡眠時間を削って退治に出かけていた。戦いが長引くと睡眠時間は一時間未満になることもある。

負担を感じない訳ではない。いくら魔法少女といっても魔力と体力は別物だ。不健康極まる生活習慣に成長期の体が耐えられる保証はない。しかし疲れを覚えるたび、

『君より辛い思いをしている人はいくらでもいるよ?』

過去の残響が瑞乃の心に発破をかける。

今の瑞乃は神浜市が誇る最古参の魔法少女だ。無力だったあの頃とは違う。莫大な魔力と魔法で常に体を強化していれば無理なことはないだろう。

瑞乃は鶴乃が笑顔でいられるなら、何でもやる覚悟だった。

――

春、定休日の万々歳。

瑞乃が電話台に行儀悪く寄りかかりながら、声を落とした。

「うん、うん、そういうことだから。え？ 無理なんてしてないよ。平気平気。そつちこそ、みつふと二人で無理しないでね。困ったことがあつたらなんでも相談して。力に——切れちやつた」

通話していたのはやちよだった。

祖父の死後家の手伝いで中学三年の冬を休みがちになると、疎遠になつてしまった。万々歳の事情やこれからのことを報告すると、途中で通話が切れた。

瑞乃は電子音を流す受話器を無表情で見つめると、ゆつくりと台に戻す。するとカウンターの陰で話を聞いていた鶴乃が、猛然と食つて掛かる。

「お姉ちゃん！ 今の話、ほんとなの？ 悪い冗談だよね？」

「わつ、鶴乃？ 盗み聞きはよくないなあ」

「いいから！ 冗談つて言つてよ！」

「ん——」

本当だよ、と白状した。

瑞乃は高等部への進学——高校生活を断念した。瑞乃が高校生になれば店を回す人員がいなくなり、由比家の収入が激減する。当然の判断だった。やちよとみふゆには出来る限り軽い口調で言つたものの、特にやちよが激しく動揺して、途中で通話を切られ

た。

鶴乃はしばらく唾然としていたが、やがて目に大粒の涙が浮かぶ。

それが溢れる前に、瑞乃は妹を抱きしめた。

「もー、なんで泣くの」

「だって、お姉ちゃん……やちよさんと学校に行くの、楽しみに……無理してないなんてウソじゃない！ ウソつき！」

「無理はしてない。私は私のやりたいようにやってるだけ。いい、聞いて？」

瑞乃としても、やちよとまた同じ学校に通い、時折みふゆと合流して青春するのが惜しくないといえどウソになる。ただ、今回の件は瑞乃なりのけじめでもある。

そもそも瑞乃が父親に勝利しなければ、後継ぎは父親で決まりだった。経営は苦しくなっても、今のようなゴリ押し魔力式ワンオペ経営などやる必要はなかっただろう。

だから、これは瑞乃なりの責任のとり方だった。よかれと思ってやってきた結果、万々歳を追い込んだことに対するけじめ。父親が帰ってきて、母親と祖母が放蕩癖を辞めるその時まで、全力で万々歳を守る。

幸いにも瑞乃にはそのための力があるし、何よりお姉ちゃんである。妹の笑顔のためなら、お姉ちゃんは何でもできるのだ。

「鶴乃は心配しなくていいの。鶴乃の大切な場所は、私がぜーったい守るから」

「……………」

鶴乃は何かを言いたげに口を開けたかと思うと、我に返ったようにうつむいて、蚊の鳴くような声で「うん」とうなずいた。

こうした紆余曲折の末、由比瑞乃店長代理による万々歳のゴリ押し経営が始まったのである。



## 第6話

瑞乃の経験は神浜史上でも類を見ないレベルで長い。魔力を節約して最小の労力で魔女を倒す技術から、日々の生活で溜まる穢れを抑えるメンタルコントロールも習得しているため、毎日魔女退治に出かける必要はない。せいぜい週に一度あるかないかの頻度で深夜に家を抜け出している。さらに鶴乃がお年頃に突入して姉を抱きまくらにすることがなくなつたので、深夜徘徊が鶴乃に感づかれることはなかつた。

今夜も8日ぶりの魔女退治を終え、帰路についた。早めに決着が付いたから長く寝られるはずだったが、

「黙つてちゃ分からんぜ、嬢ちゃん」

「ひええ……」

瑞乃は顔も名前も知らない魔法少女を尋問していた。

照明を落とした暗い万々歳。ご丁寧に二階から持ってきた電気スタンドとカツ丼代わりの中華丼（日本発祥）で取り調べっぽい雰囲気が漂う。容疑者の少女は頭にたんこぶをこさえ、涙目ですっかり萎縮している。

ほかほか中華のいい匂いが漂う中、瑞乃が迫る。

「ここ新西では、魔法少女同士のケンカはご法度。ましてや魔女を倒した直後の同業を不意打ちで襲うなんて……エンコの覚悟はできとるんか？」

「ごめんなさいごめんなさいもう二度としません！」

「うん、いいよ」

少女は戦いを終えた直後の瑞乃を襲った。

当然のように中華鍋で防いだ瑞乃はひとまずみねうちで少女を気絶させ、万々歳へ運んだ。少女のソウルジェムは没収——するのはかわいそうなので、テーブルの上に置かれている。

ごめん一つで許された少女は何を言われたかわからないように目を瞬かせ、

「いいん、ですか？」

「これでも結構魔法少女長くやってね。グリーンシード強盗も初めてじゃないんだ」

「はあ……」

「で、提案なんだけど。強盗するガッツを別のことに活かしてみない？」

魔法少女同士が争う原因はたいいていグリーンシードの不足だ。魔法少女の生命線であるグリーンシード、その元である魔女が不足すると、少女のような強盗も出てくる。

「別のことって？」

「私といつしよに魔女退治しようぜ！」

「嫌です！」

「即答!？」

少女は頭をかかえ、耳をふさいでうずくまった。

「だって私、魔女があんなに怖いなんて知らなかったんです……キユウベえは素質があるって言ってたのに、魔法の力もクソザコだし……あんな怪物と戦ったら、絶対死んじやいますよ……」

「な、仲間といっしょなら……」

「仲間? 万年ぼっちの私にケンカ売ってるんですか? 余計萎縮して動けませんよっ

!」

「え、ええ〜……」

少女は典型的な被害者系魔法少女だった。キユウベえに魔法少女のきらきらした部分だけ売り込まれ、軽い気持ちで承諾したはいいもの。実際に戦う力も度胸もないタイプだ。神戸市にはこうした力のない魔法少女が無数に存在していた。この手の魔法少女は強くなる努力も立ち向かう勇氣もなく、ただ魔女になるのを待つしかない。

「どうせ私なんて何やつてもダメなんです……やることなすこと空回り、努力は全部無駄になって、良かれと思ってやるのが悪い結果を呼び寄せる……魔法を使えるようになって、どうせ……」

ただ、瑞乃はけっしてそれをよしとしない。

自己嫌悪と共にみるみる濁っていく少女のソウルジエムに、グリーンシードを突きつける。穢れはグリーンシードに吸収され、本来の輝きを取り戻した。

貴重なグリーンシードを使われた少女は、目を丸くしている。

「なんで……」

「セットメニューに変なおもちゃ付ける店、あるじゃん？」

瑞乃はグリーンシードをおもちゃのように指でもてあそび、中華丼の横へ置いた。

「ウチもマネしようと思つて、この中華丼は試作品。今度から裏メニューで提供するよ」

「裏、メニュー……そんなことだろうと思つた。どうせお高いんでしょ？」

「四九〇円税込」

「ワンコイン!？」

「ただし、口外無用。どうしても困ってる人がいればさすがにだけど、有名になったら裏メニューっぽくないじゃんね」

使用したグリーンシードは、まだ一、二回使えるだろう。少女の手にそれを握り込ませ、まっすぐに向き合った。

「向き合うのが嫌ならそれでいい。戦わなくてもいい。辛くなったら、いつだって逃げ

ていいんだ。だからもうちよつと、生きてみよう?」

「……はい。はい……!」

泣き崩れる少女の肩を抱き、落ち着くまで胸を貸す。二十分ほど経つてから、少女は鼻をすすりながら出ていった。去り際に頭を下げていった少女の瞳には、小さくとも確かな希望が灯っていた。

何をしてても状況が悪化して、一縷の希望に手を伸ばせば新たな絶望が待っている。少女の境遇はかつての瑞乃そのものだった。放っておけるわけがなかった。

「もうちよつと生きて、なんて。どの口が言うんだか」

瑞乃のつぶやきは誰にも聞かれることなく、夜の神浜に消えていく。

この日から万々歳は、力なき魔法少女たちの最後の希望としてひそかに噂されることになる。噂の内容は、店長代理に黒タマ中華丼と注文すると、魂を浄化する奇妙なおもちやが付いてくるとかどうとか。

――

瑞乃が見知らぬ少女に同情を与えた報いを受けたのは、半年後のことだった。

「やっち、みつふ! 久しぶり!」

お昼のラッシュアワーを終えた昼下がりに、やちよとみふゆが万々歳を訪ねてきた。瑞乃が急遽進学を断念してからは疎遠になっていたので、瑞乃は満面の笑みで二人に駆け寄る。

しかし二人は暗い顔で「ええ」「はい」と愛想なく返すばかりで、再会を喜ぶ気分ではないようだった。ひとまずカウンターに座らせて話を聞くと、理由はすぐに分かった。

「魔法少女は、魔女になるの?」

やちよとみふゆは縋るような目で瑞乃を見つめていた。瑞乃が否定してくれることを期待していた。その気持ちがあついても、瑞乃は「そうだよ」と応えるほかなかつた。

やちよとみふゆは、偶然魔法少女が魔女になる瞬間を目撃したという。ソウルジェムが穢れきり、異形の怪物が現れる瞬間を。二人はすぐさまキュウベえを問いただし、『魔法少女の真実』を知る。それでも信じられず、むしろ信じたくなくて、一番信頼できる瑞乃のところへやってきたのだ。

二人が目撃した魔女は、万々歳の噂を聞きつけた力のない魔法少女だった。万々歳へたどり着くまでに力尽きた瞬間に、二人が鉢合わせした。二人へ間接的に真実をつきつけたのは瑞乃だった。

そうした経緯は知るよしもないが、瑞乃は真実を語る。キュウベえから聞いたものと

同じ説明に、やちよとみふゆはさらに顔を青くした。

「魔法少女が魔女になるなら……私たちが倒してきたものは……」

「そんな、そんなのって……あんまりですよ……」

瑞乃は二人におしぼりを渡して、店先に準備中の札を吊るしておいた。真実を知った魔法少女への対応はもう慣れっこだ。

二人の嗚咽が止むまで瑞乃は黙って隣に座り、時折背中をさすって、手を握った。

「ねえ、瑞乃」

最初に立ち直ったのはやちよだった。

「元は魔法少女だった魔女を倒すのって、同じ魔法少女を殺してるってことよね……あなたはどうやって受け入れたの？」

「相手の身になって考える、かな。たとえば私が魔女になって大切な誰かを傷つけたら、いつそ死にたくなる。だから魔女も使い魔も、見かけたら即倒すのが供養だと思う」

「……」

やちよは真剣に瑞乃の考え方を咀嚼している。

その間に、まだ泣き止まないみふゆが割って入ってきた。

「ワタシは普通の女の子になりましたかっただんです」

みふゆが語ったのは願い事についてだった。みふゆは普通の女の子に憧れていたけ

れど、たとえ普通になっても自由を享受できる自信がなく、せめて夢の中だけでも自由でありたいと願った。普通になることを諦め、願い事を妥協した。

「でも魔法少女になった時点でもう、普通ではなくなっていたんですね……こんなゾンビみたいな体にされて、最後には化物に……」

「違うよ」

「ふえ？」

みふゆの柔らかなほっぺを引つ張り、正面から見つめ合う瑞乃。強く引つ張りすぎてみふゆの頬に痛みが走る。

「痛い……」

「でしょ？ 痛がって、泣いて笑って嫉妬して。ゾンビはそんなことしない。それは普通の女の子がやることじゃねえ」

「あ……」

目を丸くして絶句するみふゆの頬を離し、瑞乃は身を引いた。思案しているやちよと呆然とするみふゆを見やり、何かを諦めたように小さく息をつく。

瑞乃に二人の気持ちは分からない。たとえ契約前に真実を知っても、ためらいなく魔法少女になったと思うから。

けれど友達が参っているのは見ていられず、瑞乃はいつかのよう提案する。



「どうしても受け入れられないっていうなら、辞めちゃおう」

魔法少女を辞める。あまりにもあつさりとした言い方にやちよとみふゆは耳を疑い、瑞乃はもう一度繰り返す。

「苦しいとか辛いとか、そんなのもうたくさんでしょ。魔法少女とか辞めちゃおうよ」

――

瑞乃に促されやちよとみふゆがやってきたのは、新西区の建設放棄地だった。雑草だらけの空き地と鉄筋がむき出しの建設物が散在するばかりで、誰も寄り付かない。

向かい合う三人を西日がオレンジ色に照らしている。やちよとみふゆの瞳は不安で揺れており、一方の瑞乃は不自然なほど晴れ晴れしていた。

「ソウルジェム貸して」

瑞乃はこれから固有魔法を使って、やちよとみふゆを普通の少女に戻す。キュウベエには不可能と聞いていた所業なので、二人は半信半疑のまま瑞乃にソウルジェムを委ねた。

瑞乃は二つのソウルジェムを地面に置き、膝を着いて手をかざす。するとソウルジェムを中心に、目を焼くような光の輪が展開された。

光輪は十重二十重に絡まり合い、リールからほどけた糸のように宙を漂う。

「これは……!？」

「因果。今から二人の因果をいじって、魔法少女になったことをなかつたことにするよ」

「そんな都合のいいことが本当に……?」

「できるでできる。都合がいいのは私の領分——それが私の、魔法だから」

瑞乃は転生して物語のように順風満帆な生活を送りたいと願った。その祈りは歪んだ因果と絡まって、どこまでも都合のいい固有魔法として結実する。

『都合主義』の魔法である。

内実は因果への干渉。あらゆる事象の因果へ自動的に干渉し、瑞乃に都合のいい結果になるよう誘導する。多大な魔力と集中力を消費すれば、具象化した因果を操作し意図した通りに過去を改変することもできる。

神々しい光輪を前に一歩後ずさるやちよとみふゆ。

瑞乃は少しずつ光輪へ意識を没入させながら、最後の了承を確認した。

「因果を操作したら、魔法少女になってから得たものを全部失う。それでも、魔法少女を辞める?」

「はい。やっちゃん、みっちゃんと一緒なら、乗り越えられるかもしれないですが……辞めることができるなら是非ありません。お願いします」

「私も同じよ。辞めることができれば……?」

そこでやちよは違和感を覚えた。

魔法少女になってから得たものを全部失う。これは魔法の力や身体能力、戦うための力を失うのだろうか。それとも文字通り全部だとすれば――

「分かった。じゃあ――さよならだね」

光輪がより強く発光し、恐ろしいほど強大な魔力が瑞乃を中心に渦を巻く。

魔力の奔流の間から見えた瑞乃の寂しげな表情と、わずかに風に乗って聞こえた声から、やちよは最悪の可能性に思い至った。

「待って、待ちなさい!　もしかして文字通り全部って意味じゃないでしょうね!」

「全部だよ。魔力、体力、戦うための力――出会いも友だちも仲間もみんな、なかったことになる」

「……え!」

みふゆもやつと失うものを悟って、信じられないというように瑞乃を見やる。

因果とは原因と結果を意味する。やちよとみふゆが魔法少女になったことが原因で、その結果が瑞乃との出会いであり、友情だ。原因の方をなかつたことにすれば、それに連なる様々な結果も消滅してしまふ。やちよたち三人は赤の他人に戻る。この融通の利かなさこそ、過去の改変という破格の固有魔法の欠点の一つだった。

とつさに瑞乃へ駆け寄ろうとするやちよだが、嵐のような魔力に圧されてうまく進めない。みふゆはオロオロと判断に迷っている。

「今なら言える。私と友だちにしちやって、ごめん」

そんな中、瑞乃の声が聞こえた。罪を懺悔するような声音だった。

「私ってすつごいイヤなやつでさ、何やつてもダメで、うまくやつてる他人が妬ましく、辛いことから逃げてばつかりのクズなんだよね」

いつも自信満々で最強と自称してはばからない瑞乃とは別人のような、悔悟に満ちた自虐だった。待てと言われたのにも気づいていない。

自我が芽生えたその時から、固有魔法の知識があつた。使い方も危険性もみんな把握できて、それでも自動発動の能力だけは止めようがなかつた。

やちよは一步距離を詰める。

「やつちとみつふみたいになすつごいいい子たちと、友だちになれるわけない。きつと無意識にご都合主義で、二人の因果に干渉してたんだと思う。私の友だちになるように、二人の運命を捻じ曲げたんだ」

やちよはさらにもう一步距離を詰める。瑞乃はぼうつとした表情で光輪に手を伸ばしており、改変までの猶予はない。後少しでやちよの手が届く。

「私の友だちにさせてごめん。でもこれで正しい形に戻るから——」

やちよの背をみふゆが押す。それでようやくやちよは瑞乃の体に手が届き、首根っこを掴んで引つ立たせる。

卑屈極まる自虐モードの瑞乃はトランス状態のように目が死んでいて、まだ光輪へ手を突っ込もうとしている。

果たしてやちよのとつた行動とは。

「バカッ!」

「へぶっ」

ビンタである。

ばあん、と小気味よい破裂音が広い空き地に響き渡る。魔力の乗った本気のビンタは瑞乃に正気を取り戻させ、瑞乃は呆然として熱い頬に手をやった。可視化された因果の光輪はその一撃で砕け散り、静かな空き地が戻ってくる。

数秒後、事態を把握した瑞乃は堰を切ったように喋りだす。

「さすがに! 予告なしのガチビンタはさすがにだよあつち!? 親しき仲にも礼儀ありって言葉を——」

「瑞乃」

「あつ、はい」

氷のように冷たい声音だった。どんな魔女よりも恐ろしいやちよの迫力を前に、瑞乃

は冷や汗が止まらない。

「あなたはこう言いたいのか？ 私があの時あなたに抱いた気持ちも、笑いあつた思い出も、全部あなたの変な魔法のおかげだったって。私が今怒ってるのも、全部」

「は、はい、きつとそうだろうなと……」

「ふーん」

やちよの両手が瑞乃の両頬を挟み込む。普段眠たげに見える目元がカツと開かれ、

「ふざけてるの？」

「ひいっ!？」

瑞乃を扶るように睨みつけた。

同時に瑞乃は悟る。今までやちよに怒られたと思つたことはあるが、あれはただのツツコミだ。今のやちよこそ真のプンプンモード——ガチギレやちよであると。あまりの迫力に見ているだけのみふゆでさえ、目を丸くして後退っている。

やちよは一度深呼吸。

それから、震える声で言った。

「あなたにすつごく怒ってるこの気持ちも——三人一緒なら、魔法少女を続けたいって思つてることも全部まやかしだつてそう言いたいなら……私はあなたを許さない」

やちよは悲しくて、腹立たしかつた。三人で一緒に築いてきた思い出、絆、友情。み

んな瑞乃が作り出した偽物に過ぎず、正しくないものだと、大切な仲間である瑞乃自身に否定されたことが悲しくてたまらない。

たしかに瑞乃の固有魔法ならそれほど強力な効果もあるだろう。先程の魔力の嵐はやちよもみふゆも経験したことのない規模のもので、どんな不可能も可能にできるかに思えた。因果に干渉することもできるだろう。

しかしだからどうしたという話だ。

「決めた。私は魔法少女を続ける。この気持ちを忘れてなあなあであなたを許すくらいなら、魔女になった方がマシよ」

「……男前だなあ」

「うるさい」

やちよの睨みを受けた瑞乃は背筋を正して口をつぐんだ。

一人残されたみふゆはというと、

「ワタシも続けます」

心を決めていた。

真実を知ってからは、過酷な魔法少女の宿命のことしか考えられなかった。そこに究極の二択を迫られることで、宿命以外に得た思い出や絆のことへ思い至った。これを捨てるくらいなら魔法少女でいる方がいい。何よりも、

「三人一緒にいればどんな運命だつて乗り越えられる。そんな気がしますから」

みふゆはやちよと目を合わせ、意を同じくして並び立つ。

そうしてへたり込む瑞乃に対し、手を差し伸べた。

「……本当にいいの？ 魔法少女を続けて、私なんかの友だちのままでいいの？」

「今度親友のことを悪く言ったら、もう一発行くからね」

「私もお手伝いしますよ」

「……っ！ ごめん、ごめんね。ひどいこと言つたよね……！」

こうして少女たちは手を取り合つて立ち上がり、新たな因果を紡いでいく。ご都合主義の加護があろうとなかろうと、三人一緒にいる限り希望が潰えることはないだろう。

——

その夜のこと。

珍しく臨時休業となつたため、瑞乃は鶴乃と共に居間で湯呑片手にくつろいでいた。分かりやすく上機嫌な姉に、鶴乃は嬉しそうな笑顔で、

「お姉ちゃん、何かいいことあつた？」

「んふふー、実はね——」



瑞乃が語ろうとしたその時、びしり、と硬質な音がする。

まさか不吉なフラグのごとく、湯呑に亀裂でも入ったのか。そう思っただけで見てみるが、湯呑自体は無傷だった。鶴乃のものも同様で、姉妹そろって首をかしげる。結局気のせいということでは流石、瑞乃は友だちと仲良くなれことを語り出す。

紡がれる絆の裏で瓦解していく何かがあるなどと、その時は誰も知る由はなかった。

## 第7話

「ねえ、まなていー」

「人を海棲哺乳類みたいに言わないでください」

北養区、洋食店ウォールナッツ。かつては上流階級御用達の洋食店として名を馳せた老舗の厨房で、瑞乃は泡立て器を慣れた手付きでかき回していた。菓子類を作っているのか、厨房には甘い香りが充満している。瑞乃の隣ではまなていーと呼ばれた少女がむすつとしながら、手際よくイチゴのヘタを取っている。

まなていーのクレームに瑞乃は首をかしげて、

「まなていーはお気に召さない？　じゃあくるる、まなな、マナケインのどれがいい？」

「全部却下です！　まなかには胡桃くるみまなかって名前があるんですから。普通にまなかと呼んでください」

「下の名前呼び捨てとか距離近すぎて恥ずかしいじゃん！」

「あだ名呼びの方がもつと近いですっ！」

あまり真剣に付き合っているとボケ倒されて疲れてしまう。まなていーもといまなかはため息を一つこぼして、ジト目で瑞乃をにらみつける。すると確かな経験を感じさ

せる瑞乃の洗練された動きが目についた。普段の言動もこれくらいきちんとしていればいいのに、と思わずにはいられない。

五つも年齢が違う二人の関係が始まったのは、一ヶ月前のことだった。

お昼のラツシユを乗り越え若干緩んだ空気の漂う万々歳。その平穩を打ち破る勢いでまなかが店に押しかけてきた。

『たのもー！　ここのチャーハンのレシピを教えてくださいだきたく参りました、胡桃まなかです！』

『産業スパイだ、であえであえー！』

『ちゃーらー！』

『きゃー!?!』

由比姉妹はまなかの勢いを押し返す圧で迎撃し、烏龍茶でおもてなししながら尋問したところ、まずレシピ狙いの産業スパイではないことが分かった。

まなかは洋食店ウオールナツツ店主の一人娘で、父親の影響を受け料理を作ることが何より好きだった。幼いころから父親を始め先達の料理を味わい、模倣して自分の技術を磨き上げてきた。美味しい料理に出会うとすぐさま自分で味を再現し、技を盗むほどに研究熱心だった。

そんなまなかが技を盗めなかったのが、万々歳のチャーハンだった。

口に入れたとたん広がるごま油の香ばしい風味と、噛めば噛むほど味わい深くなるパラパラの米粒。さらにアクセントの刻みねぎと重厚な豚肉が加わって織りなす美味しさといえばまさに旨味の暴力で、かといってしつこすぎず後を引かない。出されたら出された分無限に食べられる仕上がりだった。

何度挑戦しても同じ味にならない。じゃあ直接聞けばいいじゃない、と聞きにきたとか。

事情を知った瑞乃は非常に気まずい表情で、真実を語った。

『ごめん……実はズルをしてるんだ』

瑞乃は万々歳で料理を作るにあたり、けっして正当ではない手段で味を向上させていた。

同じ失敗を二度としない生まれ持った要領の良さ、センス。自動的にあらゆる因果へ干渉しいい結果を引き寄せるご都合主義の魔法。そういった武器をはるかにしのぐ強力な方法を、瑞乃は所有していた。

『お姉ちゃん力、じゃんね』

『はっ。』

お姉ちゃん力である。

サイカワの妹を持つ最強のお姉ちゃんとしての自負と、妹の前で無様を見せられない

プライドの二つからなる特殊な力だ。妹の笑顔と幸せを守るためには半端な料理は作れない。この覚悟が瑞乃に不可思議な力を与え、料理技術の向上に大きく影響していた。

『つまり鶴乃がいる時点で、私の料理は極限に達していたんだ……』

瑞乃流料理の真髓を語ると、まなかはしばし沈黙して目をぱちぱち。お姉ちゃんつたら、と照れる鶴乃とドヤ顔の瑞乃に対し、こう言った。

『日本語でしゃべってくださいます?』

真顔だった。

小学生には少し分かりにくかったかもと瑞乃は反省し、お互いに都合のいいとき料理研究をしようと提案。現行万々歳のレシピはお姉ちゃん力の比重が大きいので公開しても問題なく、まなかとは料理仲間としてたびたび顔を合わせる仲になった。

なお、まなかは「バカと天才は紙一重つてやつでしようか……」とことあるごとに呆れている。

「で、さつき何を言いかけたんです?」

「んー、実は相談したいことがあって」

かき混ぜていたボウルを置き、次の作業に取り掛かる瑞乃。その表情は珍しく憂いに満ち、瞳が不安で揺れている。

らしくない料理仲間の様子にまなかは胸を張って応えた。

「どうぞ話してみてください。瑞乃さんにはお世話になっています。まなかが精一杯相談に乗りますよ」

「ありがとう。実は今朝気づいたことなんだけど——」

瑞乃はしばしためらうように言いよどみ、やがて意を決して言った。

「私は変態かもしれない」

「……はっ。」

目が点になるまなかを置いて、瑞乃はぼつぼつと語りだす。

瑞乃は万々歳の厨房から裏方までワンオペで店を回しているので、営業日に鶴乃と触れ合えるのはほとんど業務上のやりとりにとどまる。だからこそ定休日を姉妹で仲良くのんびりできる日として大切にしていたのだが、最近はまなかとの料理研究が増え、鶴乃との交流の時間が減った。

そのせいで不安になったのだろうか。

「今朝、鶴乃に聞かれたの。『お姉ちゃん、明日何の日か覚えてる?』って」

「鶴乃さんの誕生日ですよね?」

明日は鶴乃の記念すべき誕生日だ。瑞乃が世界一愛している最高にかわいい妹の誕生日。その準備をするために、まなかとの料理研究に力を入れている。

瑞乃はよどみなく作業を続けながら、「そうそう」とうなづく。

「そんな大事な日をお姉ちゃんが忘れるわけないよね。天地開闢の記念日を忘れても鶴乃の誕生日だけは絶対忘れないじゃんね」

「たとえば壮大過ぎてよく分かりませんが、そうですね。瑞乃さんが忘れたら事件です」  
「でしょ？ だからその、ありえなすぎて魔が差したというか」

妹の誕生日を忘れるなどと、天地がひっくり返つてもあり得ない仮定。さらに、普段の鶴乃は瑞乃のウソや誤魔化しをたやすく見抜くこともあつて、あえて瑞乃はこう返したという。

『『えーとなんだったかなー』つてとぼけたのね』

すると、ものほしげにそわそわしていた鶴乃の表情が見る間に曇つた。この世のすべてに絶望したかのように目から光が消え、曇天の空よりも暗い雰囲気をもとつた。

「かわいそうじゃないですか。なんでそんな意地悪するんです？」

「うん、私もすぐ謝ろうとしたんだ。でも無理だった」

妹にこんな顔をさせた姉がとる次の行動としては、すぐに発言を撤回し謝るのが正当だろう。しかし当時の瑞乃は正しい選択をしなかった。不可能だった、と表現するのが適切かもしれない。

手元から目を離さないまま「どうしてですか？」と問うまなかに、瑞乃はバツが悪そ

うに告白する。

「鶴乃の曇った顔見てたらさ……あのね、変な意味じゃないんだけど——興奮しちゃつて。ゾクゾクしちゃったのね」

「……は？」

まなかは手を止めた。でなければ手元が狂いかねなかった。

瑞乃は作業を止めないまま、非常に意地の悪い笑みを浮かべている。

「鶴乃っていつもひまわりみたいな笑顔で、本気で落ち込むことはほとんどないの。だからギャップっていうのかな、曇った顔見てたらゾクゾクキョキョキしちゃって……うひひ……これって普通だよな？ 変態じゃないよね？」

「変態！ 紛う方なき変態ですよ！ ちよつ、今すぐ距離を取りたいんですけど!」

「じゃああえて一歩近づいてみる」

「寄らないでくださいっ！」

作業中のため逃げられないまなかは瑞乃に対し腰が引けている。変態は気持ち悪い笑みを貼り付けたまま半歩まなかに接近し、まなかは悲鳴をあげた。

「よしできた。こんな感じでもいい？」

「へんた……あ、はい。いい感じです。後は型に入れて焼くだけですな」

近づいたついでに作業の成果を確認してもらおう。職人氣質のまなかはすぐに切り替



え、次の調理手順を指示した。

指導通りに出来上がった生地を型に流し込みながら、瑞乃は言う。

「で、さっきの続きなんだけど」

「まだあるんですか……もうお腹いっぱいなんです」

「いやいや聞いた方がいいよ。まなかのためにも」

「私のため……?」

鶴乃曇らせ事件の告白はまだ終わらない。

普段明るい鶴乃と曇らせ鶴乃のギャップにハートを射抜かれた瑞乃は、さらに魔が差した。この曇り空を最後まで曇らせたらどうなるのかしら、と。ただ涙の雨が降るだけには留まらないだろうと姉の直感が告げており、じゃあ何が降るのかと好奇心が湧いた。

そうしていけない好奇心のままに、こう追撃したのだ。

『さーて今日もまなかとの逢い引き楽しみだなー』って」

「ちよつとお!!?」

この追撃を受けた鶴乃は死んだ魚のような目で視線を巡らせ、ある一点で目を留めた。その先を追ってみると万々歳厨房の壁で、そこには大きな中華包丁が吊るされていた。

鶴乃は包丁を見つめながら、ぼそりとこうつぶやいたという。

『まなか……まなかも私のお姉ちゃんを奪っていくんだね』

「とういうわけで、夜道では気をつけてねっ！」

「気をつけてねじゃないですよこの変態シスコン！ 曇りのち血の雨じゃないですかっ  
！」

「ああつ、女子小学生に暴行を受ける中卒女子の図！」

手元の正確性を維持しつつ足で瑞乃を蹴りつけるまなか。口と足で乱闘しながらも作業に一切の影響を出さないのはさすがの職人芸だった。

そこでタイミングよくオーブンのベルが鳴る。予熱が完了したそこへ型にはめた生地を入れ、レシピ通りの時間を設定。用済みとなった調理器具を片付けると、焼き上がるまでは手持ち無沙汰になる。

まなかはオーブンを見つめながら、腕を組んで唸った。

「うーん……」

「あ、一応言っとくけど冗談だよ？ 鶴乃はいい子だから」

「知ってますよ。お姉さんと違って鶴乃さんは常識人です。そうじゃなくて」

知り合って日の浅い由比姉妹のことを、まなかは信頼している。笑顔が曇りに曇った結果、お昼のドラマみたいなことにはならないと信じている。信じたい。

気がかりなのは鶴乃の気持ちだった。

「鶴乃さんには本当に謝った方がいいですよ」

「へ？」

「大切な誰かに自分の誕生日を忘れられるって、普通に辛いです。瑞乃さんだって嫌ですよね？」

「いや、私はむしろ忘れてほしいかな」

「はい？」

瑞乃は不思議そうに首をかしげている。まなかの真剣な助言も理解しきれしていない。

「だって私なんかが生まれちゃった日だよ？ 祝うどころか呪われても文句言えない

し。忘れてくれた方がいいよ」

なぜなら瑞乃は誕生日が苦手だからだ。

瑞乃は自分自身が何より嫌いである。生まれた日を祝われる謂れはないし、呪われて然るべきだと考える。だから、意地悪された鶴乃の気持ちを思いやれない。

まなかは数秒絶句した後、大きなため息をついた。

「……急に卑屈になられると、びっくりしちゃいますね」

「ご、ごめん、そんなつもりはなかったの。癖というか、なんとというか」

一ヶ月前、やちよとみふゆに怒られて以来のことだ。前世の卑屈さを親友に見られた

影響か、瑞乃はふとした瞬間に、自己嫌悪が抑えられなくなる。過剰なほど自信満々な瑞乃が無意識に「私なんか」と卑下するので、周囲は困惑を禁じ得ない。

「別にいいです。ただし今度卑屈になったのを聞いたら、やちよさんに言いつけますから」

「やめて!」

「必死ですね」

鶴乃にだけは絶対に弱い一面を見せないと誓っているためか、卑屈になるのはやちよ、みふゆ、まなかの前だけだった。みふゆは自己嫌悪の塊のような瑞乃を肯定し、なぐさめる。一方のやちよは「親友のことを悪く言うのはこの口かしら?」と静かにすぐむ。その圧力たるや、十年以上命がけの戦いを切り抜けてきた瑞乃を恐怖させるほどだった。

話は脱線し、怒ったやちよがいかに怖いかを力説しだす瑞乃。怒らせる方が悪いんでしようとなまなが呆れているうちに、生地が焼き上がる。

ふわふわスポンジ生地の中に、まなか監修のもと瑞乃が準備したホイップクリームと刻んだイチゴ、その他フルーツをサンド。生地のでっぺんにたっぷりとクリームを塗りつけ、ヘラで平面にした後イチゴを載せ、細かなデコレーションを入れていき、最後に大きなチョコプレートのを盛り付ける。

王冠のように鎮座するチョコ板には、ホワイトチョコで文字が綴られていた。

『HAPPY BIRTHDAY TO TSURUNO』

「この手作りバースデーケーキとプレゼントがあれば、過去最高に喜んでくれるよ！  
ありがとうね、まなていー！」

「普段はこちらが教えてもらう側ですからね。このくらいはお安いご用です」

まなか監修、瑞乃が調理を担当したお手製バースデーケーキ。まなかとの逢い引き、  
もとい洋菓子講座の成果が結実した瞬間だった。

毎年鶴乃の誕生日はささやかなプレゼントと市販のケーキでお祝いしていたが、今年  
は洋菓子の知識もあるまなかという伝手もあり、瑞乃が一念発起。お菓子作りのイロハ  
を学びながらお手製ケーキを作ることになった。このケーキとプレゼントがあれば  
きつと喜んでもらえる。その慢心こそ、瑞乃に魔が差した原因かもしれない。

瑞乃は完成したバースデーケーキを慎重に箱で包み、保冷バッグに入れる。手早く厨  
房の片付けと掃除を済ませると、あわただしく帰る旨を告げた。

「もう帰るんですか？」

「これからやつち、みつふとみかづき荘をデコんなきやいけないよ。明日はまなか、本  
当に來ない？」

「お店の手伝いがありますから」

「おっけー。では改めて」

瑞乃は箱を脇に置き、居住まいを正して深く頭を下げる。

「ありがとうございます、まなか先生」

「……い、いきなり殊勝になんないでください」

数日間洋菓子作りに付き合ってくれたお礼を言おうと、まなかは恥ずかしげに顔を逸らす。

瑞乃としては本当にいい経験になったことと助かったことの筋を通しただけだが、慣れていないまなかはみるみる頬を紅潮させていた。

二三言葉を交わし、「鶴乃さんが喜んでくれるといいですね」と言って別れる。

いそいそと去っていく様子からして、会場のデコレーションにも時間と力をかけるつもりだろう。妹のために全力を尽くす姿勢にまなかはくすりと笑って、

「いいなあ、鶴乃さん」

小さくそうつぶやいた。

――

参京区から新西区への道中。由比鶴乃はこの世のすべてに絶望したかのような顔で、

とぼとぼとみかづき荘へ歩を進めていた。

今日は鶴乃の誕生日だ。年上の親友であるやちよ、みふゆがみかづき荘で誕生日会を開いてくれる。おめでたい日ではあるものの、鶴乃の表情が晴れることはない。

「お姉ちゃん……」

知らずのうちに漏れる声。万々歳を出てから何度もお姉ちゃんと口に出している。しかしいくらつぶやこうとも、お姉ちゃんこと瑞乃が誕生日会に来てくれることはない。

『えーとなんだったかなー』

初めてのことだった。昨日の朝、鶴乃が誕生日のことを尋ねると瑞乃は忘れていた。

瑞乃は進学を断念してまで万々歳を守ってくれている。いつも忙しそうにしているからもしかすると忘れているかもと危惧していたが、本当に忘れられるとは思っていなかった。

『今日もまなかとの逢い引き楽しみだなー』

聞いたとたん、経験のないドス黒い感情が鶴乃の心に渦巻いた。無意識に包丁へ目をやっていたことに気づくと、鶴乃は自分が嫉妬していると分かった。

瑞乃はもう鶴乃だけの姉ではなくなっていた。魔法少女の先達としてやちよ、みふゆと仲が良く、料理人としてまなかも仲を深めている。さらに鶴乃のまったく知らない

不特定多数の少女とも親しくしている。

『瑞乃さん、いや瑞乃様！ 本当にありがとうございました！』

『黒タマがなければ私たち今頃……』

『私たちみたいな才能なしに戦い方まで教えていただいて……』

『大げさだつてば。一回同情した以上は最期まで面倒見るのが筋じゃんね。最期まで、ね』

黒タマと呼ばれる何かをきっかけに付き合い始めたらしい少女たちは、よその区の魔法少女だった。ときに見滝原や風見野など、市外まで足を伸ばし様々な相談に乗っているようだった。強力な魔法少女として頼りにされる瑞乃は、力のない鶴乃が踏み込めない一面で、ただ眺めていることしかできなかった。

「いつからだろう……」

溝ができたのはいつからか、と自問すればすぐに答えは出る。まだ祖父が存命だったころ、鶴乃が魔女の結界に巻き込まれたときの話だ。

追い詰められた鶴乃が魔法少女の契約を交わそうとした瞬間、さつそうと瑞乃が現れた。禍々しい敵を圧倒的な力で蹴散らす瑞乃の背中と、その後抱きしめられたときの安心感。あの気持ちを思い出すとなぜか胸が高鳴り、まともに目も合わせられなくなってしまう。



そうして少しだけ距離を取っていた間に、瑞乃は鶴乃だけの姉ではなくなっていた。鶴乃が知らない一面が増えていき、ついには鶴乃の誕生日さえ忘れてしまった。

「私が悪いんだ……」

重い足取りで姉のいない誕生日会へ歩を進める。その面持ちといえは断頭台へ行進する罪人よりも暗く沈んでいた。

瑞乃は万々歳の営業時間後も帳簿とにらめっこして唸っていることが多く、姉妹の間に交わされるやりとりは業務上のものが多くなっていた。だから姉とたくさん話せるはずの誕生日会をずっと鶴乃は楽しみにしていた。祝われる側だけれど、瑞乃のためにある仕込みも用意していた。

ポケットの中に忍ばせたその仕込みをみると、やるせなさが増す。もはや地に沈み込んでブラジルまで突き抜ける勢いの落ち込みっぷりに、通行人が二度見していく。みかづき荘にたどり着いた。おしやれな庭と2階建ての家屋を前に、鶴乃はため息をつく。

もう楽しみな気分ではないけれど、落ち込んでいればやちよとみふゆの気遣いが無駄になる。両手で頬を叩き、元気な自分を演じてインターホンを鳴らす。

『開いてるわ。入ってきて』

「お邪魔しまーす！」

わずかに期待して玄関を見ても、姉の靴はなかった。

心が折れそうになりながらもどうか空元気を振り絞る。

リビングの前で深呼吸し、意を決して扉を開くと――

「お誕生日おめでとう！」

クラッカーの破裂音。おめでとうの垂れ幕と、どこか嗅ぎ慣れた料理の香り。眠たげな目を緩ませるやちよと、触角アホ毛をピコピコ揺らしているみふゆ、そして――

「……ほっ?! お姉ちゃん?!」

「よく来た妹よ！」

世界でたった一人の、姉の姿が目に入った。

その瞬間、陰鬱な気持ちがあつたように吹っ飛ばす。

「なんで……そっか、思い出してくれたんだね！」

「思い出す? 何言ってるの、鶴乃の誕生日を忘れるわけないでしょーが！」

「え、でも……」

「はい証拠オ！」

瑞乃がテーブルの上をびしつと指差す。そこには店で見るよりも三割増でいい香りを漂わせる料理の数々と、ろうそくの立てられたケーキがある。ケーキのチョコ板にはハッピーバースデーのメッセージと、デフォルメされた鶴乃の似顔絵が描かれており、

相当の手間暇がうかがえた。

「半月かけてまなかと共同で作ったケーキだよ。今日思い出したんじや絶対無理なクオリティなんだから！」

「お姉ちゃん……！」

「鶴乃おー!？」

「ほら、泣いた」

「だから言っただんですよもう！」

鶴乃は泣き崩れた。姉に忘れられたわけではなかった。自分だけのお姉ちゃんではなくなっても、間違いなくお姉ちゃんはお姉ちゃん、自分はその妹なんだと、そう考えると涙が止まらなかった。

「私、不安で、でも今すつごく嬉しくて、うええ……」

瑞乃は慌てながらティッシュをあてがいがい、やちよとみふゆは微笑ましげに姉妹を見守っている。瑞乃の『誕生日忘れたフリしてサプライズ大作戦』につきあわされた二人には、分かりきった結果だった。

しばらく安堵の涙を流す鶴乃をあやしていると、ようやく落ち着く。ついに楽しいお誕生日会の始まりかに思われたが――

「お姉ちゃん？」

「ひえっ!？」

鶴乃が光のない目で姉と向き合った。

「最初から覚えててくれたんだよね?　じゃあなんで忘れたフリしたのカナ?　私すっ

ごく寂しかったんだよ?　わざわざ玄関の靴まで隠してさ」

「それはその……サプライズといえますか……」

「へえー、そっか。サプライズかあー」

「ご、ごめーん!　ひっはらはいでー!？」

嬉しさと怒り半々の笑顔で鶴乃は瑞乃の頬を引っ張り回す。

お誕生日会がスタートしたのは、瑞乃の頬がすっかり赤くなつた頃だった。

――

和気あいあいとお誕生日会を楽しむ四人。料理を食べ、雑談を交わし、なんでもないことで笑い合う。あつという間に時間が過ぎて、作り過ぎかと思われた料理もほとんどが空になった。

宴もたけなわの空気が漂いだした頃、やちよが「あつ」と声を出す。

「プレゼント、忘れるところだったわ」

「あ」

いわゆるプレゼント贈呈だ。お誕生日会の最初に渡すはずだったが、鶴乃をなくさめるのに気を取られ今まで忘れていた。

「ではワタシからはこれを」

「わあ、ゴージャスな豚さんだ！　ありがとう！」

「なんと耳の先についているのは火打ち石なんですよ」

「どう使えと!？」

みふゆから贈られたのは金ピカの豚の貯金箱だった。贅沢な色合いのせいでも今にもお金が集まりそうな金運を感じる。耳の先にある火打ち石は本当に火をおこせるので、非常用にもなるかもしれない。

「じゃあ私からはこれね」

「現金!？」

「違うよお姉ちゃん」

やちよから贈られたのは厚みのある茶封筒だった。目をむく瑞乃だが、知った顔の鶴乃にやんわり止められる。このプレゼントは鶴乃自らがやちよに希望したものだ。さつそく開封して封筒から出てきたものは、写真だった。瑞乃の。

「わ、私?」

学校行事などでは、カメラマンが撮影した生徒の写真を購入できる制度がある。中学時代の修学旅行、体育祭、毎日の昼休みなどの日常を送る瑞乃が写されているので、おそらくそのルートの写真だろうと推測する。

「ん？　なんで私の写真をこんなにあつちが持つてんの？」

やちよがぶいとそつぽを向き、瑞乃は戦慄した。

「わあ、私の知らないお姉ちゃんがいつぱい！　ありがとうやちよー！」

「……まあ鶴乃が嬉しいならいいか。最後、私からね」

鶴乃が笑顔だったのでひとまずスルー。

トリを務める瑞乃から贈られたのは、綺麗にラッピングされた小箱だ。

上目遣いで「開けていいかな？」と聞かれたのに瑞乃がうなずき、中身があらわになる。

箱に収まっていたのは、黄色い紐だった。鶴乃のイメージと髪色に合わせた色彩のオンラインズイエローで、シンプルながら頑丈かつ上質な手触りが特徴だ。

万々歳のへそくりを使って豪華なものを用意することはできた。しかしあまりにお金をかけると遠慮して喜ばれないと判断した上でのチョイスが髪紐だった。

はたして鶴乃の反応はというと、

「ほっ？　これって……」

「か、髪紐だけど。どうかかな？」

なぜか絶句していた。

もしや手抜きと思われたか。ファッションに興味のない瑞乃だが、仕事柄ファッションに詳しいやちよとついでもみふゆにも協力してもらい、選びぬいた髪紐だ。鶴乃の反応にむくむくと不安が湧く。

同じくやちよとみふゆも不安を覚え始めたとき、鶴乃はポケットに手を突っ込む。そうして取り出されたのは、今開封したばかりの箱と同じような小箱だった。

鶴乃は嬉しくてたまらないとばかり、満面の笑顔で箱を差し出す。

「お姉ちゃん、これ開けてみて！」

「え、これって……?」

言われた通り開けてみれば、中身も同じく髪紐だった。ただし色合いは鶴乃のものと異なり、燃え上がる炎のようなオレンジ色だ。

「今年のお姉ちゃんの誕生日、万々歳がいろいろ忙しくて流れちゃったでしょ？ だから今日一緒にお祝いしようって思ってたの。そしたらほとんど同じプレゼント選んでるんだもん。すっごい偶然だよね、ふんふん！」

「瑞乃、そうだったの？」

「みっちゃんは意地でも誕生日を教えてくださいませんか……知ってたら私たちもお祝い

したんですが」

瑞乃の誕生日は、高校進学を断念し本格的に万々歳を引き継いだ時期と重なる。その埋め合わせを今日するつもりで、鶴乃が準備していたのがプレゼントの髪紐だった。あまりお金をかけると遠慮して喜んでもらえないと踏んでの控えめなチョイスだった。

「お姉ちゃん、つけ合いっこしようよ!」

姉妹はそれぞれの髪ゴムを外し、色違いの髪紐を結びつける。それぞれ左右で対になるサイドポニーに結び、腕を組んで並ぶ二人にやちよとみふゆは「似合ってる」と微笑んで、それを受けた鶴乃もまた、姉とのおそろいの髪紐に心の底から幸せそうな笑顔を浮かべていた。

鶴乃の笑顔を見た瑞乃は、覚悟を決めたように言う。

「鶴乃」

「なーに?」

「私を殴って」

「うん分かっ……ええ!」

瑞乃は自分を恥じていた。これほどまっすぐで健気な妹の笑顔を曇らせて悦に浸っていたことが恥ずかしくてたまらない。

たしかに鶴乃はかわいい。笑顔が曇ったときのギャップともっと曇らせたい気持ち



も否定できない。

けれどやっぱり一番は、幸せそうに笑っている鶴乃だ。

それを忘れていた罪悪感、無念な思い——早い話、妹がまぶしすぎて発狂寸前である。

「殺して、いつそ殺して、歪んだ私でごめんなさい……」

「みっちゃんが乱心です！ やっちゃん！」

「任せて！」

「つて、魔力ビンタは命に関わるからやめーい！」

「あつはははー！」

いつかのようにやちよがビンタを準備すると、正気に戻った瑞乃が逃走。色素の薄い茶髪ポニーを振り乱し距離を取る。

にぎやかなみかづき荘に少女たちの悲鳴と笑い声が響きながら、緩やかに時が過ぎて行った。

——

騒がしくも楽しく、幸せな日常。

その喧騒に紛れ、何かが軋む音がする。

誰にも気づかれないことなく、日常は終わりに向かっていた。

## 第8話

誕生日を楽しんで以来、由比瑞乃は最強になった。

『私も高校には行かずにお姉ちゃんのお手伝いするよ！』

『たわけ！』

『たわっ!?!』

以前なら声に詰まって泣き出してしまうような鶴乃の提案にも強気で言い返し、半ば強引に言いくるめ妹の将来性を確保した。

唯一の弱点だった妹のおねだりにさえ対抗できるこの強さも、誕生日がもたらした恩恵である。

魔法少女の強さはメンタルに左右される。

魔法の元となる魔力を生み出すのが魔力であり、感情の振れ幅が魔力を生むため、ネガティブな感情によりメンタルが不安定になれば弱体化してしまう。逆にポジティブな感情によりいい意味で振れ幅が大きくなると強くなる。

この点で言うと、誕生日会を楽しんだ瑞乃はまさに最強と呼ぶにふさわしい状態だった。前世を思い出して卑屈になりかけていたものの、妹のかわいさを再認識することで

心が持ち直した。鶴乃の笑顔を見るためならどんな無理でも通す決意。妹の笑顔を想い、オレンジ色の大切な髪紐で髪を結ったなら、出来ないことは何もない。

魔女退治、力のない魔法少女たちのサポート、全力ワンオペ。一切のそつなく完璧にやりとげる毎日。

『こんなにしつかりした娘がいたら、何もやることないわね』

母と祖母はそう口をそろえ、虚ろに笑った。実際問題はなかったので、瑞乃は口をぐんだ。

『お姉ちゃん、あのさ……』

『何暗い顔してるの。大丈夫、お姉ちゃんは何でもできる！』

曇った表情の鶴乃を元気に説き伏せ、ますます頑張つてみせた。瑞乃は常に生き活きして、当初は心配していた周囲さえ活力でねじ伏せた。

頑張れば頑張るほどうまくいく。失敗を恐れる必要はない。だから、もう何も怖くない。

そうして一年が過ぎた頃のある日。

「いつ、た……!?!」

深夜、使い魔の結界にて。

瑞乃は使い魔に苦戦していた。直撃を受けた腹部がじわりと熱を帯び、呼吸が出来ず

に視界がかすむ。

特に強力な相手ではない。精神攻撃や幻惑など、厄介な搦手を使われたわけではない。神浜市では最弱と呼んで差し支えないレベルの使い魔に、瑞乃は手を焼いている。

「げほっ、っほ……さっきのあれがフラグだったかな」

急所に迫る使い魔の攻撃を横つ飛びで回避しながら、瑞乃は先程の不吉な体験に思いを馳せる。

万々歳を閉めた後、帳簿をつけながらお茶を呑んでいたときのことだ。いつも使っている湯呑に亀裂が入った。ごく小さなものだったのでセロテープと接着剤で無理やり補修したが、中身の圧力に耐えきれず、湯呑は自壊して粉々になってしまった。

愛用しているものが壊れるフラグを察知しつつも、瑞乃は気にせず深夜の街に繰り出した。フラグだろうがなんだろうが、ねじ伏せるのがご都合主義だ。それが転生者の特権だから、とタカをくくっていた。その結果が大苦戦である。

「力、入んない……っ！」

魔力は充実している。穢れもそれほど溜まっていない。しかし夢の中で足が空回りするように、体が思うように動かない。

かといって見つけた使い魔を逃すのは瑞乃の矜持に反するため、紙一重で攻撃を躲しながらチャンスをうかがう。回避と牽制の攻撃に徹しながら、長年の経験と勘で使い魔

の動きを見極めていく。

「使っちゃうかな……?」

温存している手札を切るために、バチバチと装束の雷紋模様を帯電させる。

しかしその必要はなかった。幾度目かも分からない攻撃を見切り、弾いたところに完璧なカウンターを叩き込むことができた。

使い魔の結界は消えた。深夜の路地裏に、瑞乃は一人荒い息をついている。割れるような頭痛と世界が波に揉まれているようなめまい、強烈な眠気が瑞乃を襲い、立っているのもやっとだ。

裏メニュー用のグリーンフシードを一つか二つ調達する予定だったが、これでは戦いにならない。全力で身体能力を強化してもかろうじて手足が動く程度だ。

明日も朝が早い。鶴乃に心配をかけないように、今日は早く戻って寝ようと決める。

フラフラとソンビのような足取りでどうにか万々歳にたどり着く。深夜とはいえ誰にもその姿を見られなかったことは、瑞乃にとつて都合が良かった。

しかしそんな都合主義もカバーしきれないほど、瑞乃は弱りきっていた。

「いつ?」

万々歳の勝手口を通り、階上へ上がろうとしたところ、階段につまずいてしまう。転倒した拍子に頭を打ち、意識がもうろうとする。

おまけに大きな音を立ててしまい、

「お姉ちゃん!？」

階上から、パジャマ姿の鶴乃が顔を見せる。血相を変えて瑞乃に駆け寄った。一年近く都合良くも隠し続けてきた深夜徘徊が、この瞬間に露見する。

どうしてこんなに調子が悪いのか。生まれ変わったはずなのに、どうして悪い結果になってしまうのか。自分自身に深く落胆した瑞乃の視界が歪んでいく。

ブラックアウトする最後の瞬間に見えたのは、涙目でお姉ちゃんと叫び続ける鶴乃の曇った顔だった。

――

「過労ですね。二、三日ゆっくり休めば良くなるでしょう」

沈んでは浮かびを繰り返す意識の中、瑞乃は淡々とした声を聞いた。嗅ぎ慣れないよそのシーツの匂い、空気。重いまぶたを開いてみれば真っ白な天井が見え、視界の端にひらめく白衣が見えた。同時に最後の記憶を思い出し、病院に運び込まれたのだろうか。察しがつく。

ベッドの脇からくぐもった泣き声が聞こえる。きつと愛する妹だろう。過労で倒れ

たことを心配し、悲しんでくれているに違いない。すぐに笑顔を取り戻すため、瑞乃は重い体を総動員して起き上がる。

そこにいたのは、チャイナ服の中年オヤジだった。

「いや誰エ!？」

「アイヤー、娘よ。苦勞をかけたアル!」

「娘つて、え、ウソ、父!？」

「アイヤー!」

オヤジは瑞乃と鶴乃の実の父だ。瑞乃に料理勝負で完全敗北したショックにより中華の大陸へ修行の旅に出て以来音信不通だったが、ようやく修行を終えて帰ってきたところ、娘が過勞で倒れていた。ご近所に聞くと義理の父も死去し、なんと二人の娘が店を守っていたというから、父は己の不甲斐なさに男泣きしている。

「アイヤー!」

すっかりチャイナにかぶれて胡散臭いことこの上ないが、修行を終えた父はかつての父ではない。万々歳を回すのに十分な料理の腕と胆力を身に着けた新生父である。彼は涙を拭い、店は任せて休むアル、と瑞乃に言った。

「でも半端な腕じゃ逆効果に……」

「こいつを食らうアル」



「おいしー!」

父が差し出したタッパーを受け取り、中の料理を口に運ぶと、瑞乃は親指を立てた。これなら今の万々歳でも十分通用する。父は厨房に一人で立てる人材として育てていた。

「瑞乃!」

「は、母と祖母?!」

続いて駆け込んできたのは母と祖母。瑞乃と鶴乃が稼いだ収益をひたすら散財し続けてきた二人だが、娘の過労を受け心を入れ替えたらしい。これからは万々歳の一員としてきちんと稼業に協力する、と涙ながらに語った。最初からそうしてよ、と言いかけたのを瑞乃はこらえた。

瑞乃は家族が苦手だ。どうしても前世を思い出してしまうから。特に両親のことは父と母としか呼べないほど敬遠している。

それでも万々歳を支える——すなわち鶴乃を笑顔にする手伝いをしてくれるなら、大歓迎だった。

母と祖母はこてこてにチャイナかぶれした父に引きつった笑みを浮かべながら、部屋を出ていく。娘をねぎらい、涙を流す家族たちに演技の色は見えなかった。瑞乃のゴリ押しワンオペはもう必要ないだろう。

「やっっちゃったなあ」

ぼつりとひとりごちる瑞乃。今にも泣きそうな鶴乃の顔が脳裏をよぎった。

無理をしているつもりはなかった。普通の人間にできないことだろうと、魔力で身体を強くすればたいいの不可能は可能にできる。魔力と体力は別物だが、体力が尽きても自動発動の『ご都合主義』により、限界を超えて働くことができる。

しかしおよそ二年間、ほぼ休みなく瑞乃は限界を超えて活動してきた。膨大な魔力とご都合主義で賄えないほど疲労が蓄積し、倒れてしまった。きつと鶴乃やちよ、みふゆに心配をかけてしまっただろう。

「みんなに心配を……心配を……」

チラ、と病室の扉を見る。

数分間待っても動く気配はない。静かなベッドサイドにもお見舞いの品はない。

「……えっ？ お見舞いは？ 鶴乃は、やっちとみつふは？」

ここに来て瑞乃は最低かつ最悪の考えに至る。

「なんで誰も私のこと心配してくれないの!？」

瑞乃はかまっちゃちゃん体質である。倒れて心配をかけることを悪いとは思う。しかし心配されないならされないでひどく落ち込む。

面会謝絶？ 過労で倒れた程度で？ 誰からも愛されてない？

嵐のように荒れ狂う不安の念で真っ青になりながら、瑞乃は一人で百面相をしている。まさかやちよとみふゆが親友と呼んでくれたのも夢だったのでは、と泣きそうになった時、扉が動いた。

「瑞乃さん！ 大丈夫ですか!?!」

「だから誰!?! しかも多い!」

入ってきたのは名前も知らない三人の少女だ。

一応そのうちの一人の少女には見覚えがあった。彼女は元気にツツコミを入れる瑞乃の姿の前に、ほっと息をつく。

「よかった、元氣そうですね」

「私たち、瑞乃さんの裏メニユーに救われたんです」

「忘れられてるとは分かってたんですけど、心配でいても立ってもいられなくなって。あ、リングおむきましようか?」

「あ、うん、いただきます」

彼女たちは、瑞乃の同情に救われた魔法少女たちだった。

裏メニユーによる格安価格でのグリーンフシード販売。それだけでなく、瑞乃は戦い自信のない魔法少女に簡単な講習を実施していた。力なき魔法少女に手を差し伸べる慈悲深い人として瑞乃を慕うグループの代表が、見舞いにやってきたのだ。

「ごめんなさい。私たちが面倒をかけたせいですよね……」

「これからはもつと私たちだけで頑張りますから。瑞乃さんはゆっくり休んでください  
ね」

「待った、待った」

肩を落とす少女たちに、瑞乃は向き直る。

「私に気を遣ってあなたたちが無理したら、そっちのほうが寝覚め悪いよ。これまで通り、困ったことがあれば遠慮なく相談して」

「でも……」

「いいから。こつちもこれからちよつと暇になりそうだからさ」

一度同情した以上は徹底的に付き合うのが瑞乃なりの筋である。押しに弱い少女たちにぐいぐい詰め寄って了承させると、少女たちは頭を下げて、退室していった。

再び取り残される瑞乃。

時間は夕刻、一般的に放課後と言われる時間帯だ。鶴乃、やちよ、みふゆがいつ来てもおかしくない。瑞乃は三人が来るのを今か今かと待ち構え、物欲しげに扉を見つめていた。

「来ないじゃんねえ……」

しかし来ない。もつとも心配してくれそうな三人の誰も来ない。

やっと扉が動いた頃には、もうとつくに瑞乃の我慢が限界を迎えていた。

「瑞乃、入るわよ」

「……………ぐうぐう」

やちよとみふゆがやってきた。

瑞乃はシーツを頭から被り、わざとらしい寝息を立てていた。まるで拗ねた子供だ。

二人はベッドサイドに置かれたお見舞いの品を見ると、瑞乃のご機嫌を察した。顔を見合わせ、ほっと息をつく。

「……………はあ、ひとまずいつもどおりで安心したわ」

「倒れた、と聞いたときは本当に心臓が止まるかと思いました」

「……………ごめん。わぷっ」

バツが悪い瑞乃はシーツから顔を出し、気まぎれに目を逸らす。すると、やちよがかさず瑞乃の身体に抱きつく。みふゆもベッドにすがりつくような姿勢になった。瑞乃からは二人の表情は見えなかった。

「裏メニユーのこと、さつきすれ違つた子たちに聞いた。あなたがすごい魔法少女だつてことはよく知ってる、でも——無茶しすぎよ、バカ」

「お店の経営に加えて他の子たちの面倒まで見ていたなんて……………そんなの、倒れるに決まっています」

「私たちに出来ることがあれば何でもやるわ。だから約束して。もう一人で無理しないって」

「……ごめん」

心配される喜びなんて、欠片もなくなっていた。親友二人の震える声を前に、瑞乃はただ謝ることしかできなかつた。やちよが不満を表明するように、抱きしめる力を強めた。

両親がその気になってくれたので、負担が減ることを伝えると二人はいくばくか表情を和らげ、言葉少なに退室していった。

瑞乃は本当に大切な誰かに心配をかける辛さを初めて味わっていた。言いようのない罪悪感で今にも心がはちきれそうだ。もしも鶴乃が号泣しながら病室に入ってくれば、その瞬間に瑞乃の魂が弾けるかもしれない。

「お姉ちゃん」

「つるっ!」

などと考えているときに鶴乃の声がしたので、瑞乃はベッドの上で跳ねた。幸い鶴乃の声は奇妙に落ち着いており、瑞乃が弾け飛ぶことはなかった。

しかし瑞乃が声の方向へ目をやると——心臓を破りかねない勢いで、心拍が跳ねた。

鶴乃は手に、一枚の紙を持っている。

「つ、るの……それ……」

「これ？ 宝くじだよ。一等の、八億円の当たりくじ」

「うん、そつちじゃなくて……」

瑞乃が凝視していたのは、宝くじを握る鶴乃の手。左手の中指にはめられた指輪だ。

見覚えのある形状と、そこから漂う魔力、覚悟を決めたような鶴乃の勇ましい顔つき。

瑞乃は言葉を忘れたように呆然と口を開けている。

鶴乃は姉の視線を受け、左手のひらを開いてみせる。すると指輪が輝いて、魔法少女

の証たるソウルジェムへと姿を変えた。

「私も魔法少女になったよ」

静かに、宣言するように、鶴乃が告げる。

「お父さんもお母さんも戻ってきた。願い事でたくさんお金も用意したし、私も戦える

ようになったの。今までずっとお姉ちゃんが頑張ってきた分、今度は私がお姉ちゃんを

頑張つて支えるよ。だからお姉ちゃんはもう、無理をしないで」

「そっか」

「相談できなかつたのはごめんなさい！ でも私、どうしても我慢できなくて——」

「大丈夫、分かっている。鶴乃は私のために覚悟を決めたんだよね。お姉ちゃん嬉しいよ」

「……お姉ちゃん？」

沈みかけた太陽の光が、窓から差し込んでいた。瑞乃の顔は逆光で陰になっている。鶴乃が目を細めていると、瑞乃はほすんと仰向けになる。

「ごめん、まだちよつと疲れてるみたい。眠くなつてきちゃった」

「あ、う、うん。じゃあまた明日くるね。着替えとかいろいろ準備してくる」  
「ありがと、よろしく」

そのまま寝息を立て始めた姉に鶴乃は首を傾げながら、病室を出ていく。  
瑞乃は疲れていた。

――

「おかしいな。君は妹が魔法少女になることに反対していたじゃないか。どうしてそんなに落ち着いているのかな」

「出たなセールス星人」

瑞乃が夜中に目を覚ましたとき、まず目に入ったのは無機質な赤い瞳だった。

キュウベえは瑞乃の無駄に育った胸部に猫のように頭を乗せ、のんびりくつろいでいる。  
「今後の参考に教えてほしいな。どうして君は動揺しないんだい？」



瑞乃は鶴乃に普通の女の子として生きてほしかった。魔法少女となって戦いの運命を背負い、やがて魔女になる末路など迎えてほしくなかった。

しかし鶴乃は、大切な姉を支えたいがためにキュウベえと契約を交わしてしまった。鶴乃を間接的に契約させたのは瑞乃といえる。キュウベえの統計学的な推測では、このパターンで契約すると瑞乃が相当に動揺するはずだった。

その予想に反して瑞乃は一眠りしたらもう落ち着いている。

「簡単なこと。私には『ご都合主義』があるんだ！」

「どういう意味かな？」

瑞乃が勝ち誇った笑みで語るのには固有魔法のことだった。因果に干渉しあったことをなかつたことにできる魔法。その気になれば鶴乃のソウルジェムを借り、因果を操作してすぐにでも契約を無効化できる。確実な解決策があるからこそ、瑞乃は一時的な動揺だけで済んだ。

「なるほど。僕が君の固有魔法を把握していないこと。契約で目減りしたエネルギーに比べ、神浜市の魔法少女と魔女の数が異様に少ないこと。いろいろと納得できたよ。それほどの固有魔法を使えるなんてね」

「……怒った？」

「いいや。でも、卵を潰されると困るよ。できれば止めてほしいな」

「善処します」

疑問を解消したキュウベえは四足で立ち上がり、ゆらりと煙のように姿を消した。いくらキュウベえでも怒るかもしれない、と内心警戒していた瑞乃は息をついて、力なく天井を見上げる。

鶴乃は魔法少女になった。契約に至るまでの願い、祈り、気持ち。様々な鶴乃の思いを無駄にはできない。だからすぐには魔法少女を辞めると言えない。

けれど鶴乃が魔法少女の真実に絶望した時、心折れて魔女になってしまふその時は、問答無用でご都合主義を行使する。それが瑞乃なりの精一杯だった。

『中身がダメダメじゃ意味がない』

いつか誰かに言われた言葉が反響する。

「ダメダメじゃない。私は転生した。何をしても失敗ばかりの私じゃない……」

胎児のように身を丸め目を閉じる。過去の自分はもう死んだ、今の私はなんだってできると、壊れたスピーカーのように繰り返しながら、瑞乃は眠りに落ちて行つた。

軋む音に、気づくこともなく。

——

時は少し遡る。

――

新西区、里見メデイカルセンター。充実した医療設備と豊富な人材による手厚い医療で評判のそこは、市内外問わず総合病院として広く知られている。病棟の突き当りには患者や見舞い客が談笑するラウンジが設けられ、広々とした空間で人々が憩いの時間を送っている。

そんなラウンジの隅の椅子に腰掛けながら、鶴乃は絶望していた。

「お姉ちゃん……」

うわごとのように何度もつぶやいているのは、大好きな姉のことだった。

鶴乃の姉、瑞乃は過労で倒れ、ラウンジからほど近い病室へ運び込まれた。意識のない姉の姿を思い出すたび、鶴乃を強い後悔の念が襲う。

鶴乃にとって、瑞乃はなんでも出来るヒーローだった。料理も接客も鶴乃が物心ついたときには大人よりもうまく出来ていて、父が料理の腕に嫉妬していたほどだった。父が出奔し祖父が死去してからは、瑞乃一人で万々歳を守ってきた。その上、魔女や使い魔と呼ばれるとても危険な怪物と戦い、人々を守っている。鶴乃とも友だちであるやち

よとみふゆは「私たちが知る中で最強の魔法少女」だと太鼓判を押していた。本当になんでも出来る自慢の姉だった。

しかしそれはただの思い込みだったのだ。

鶴乃はベッドで眠る瑞乃の姿を前に、愕然とした。

鶴乃は大きかった瑞乃の背丈をいつの間にか追い越していた。瑞乃の身体は鶴乃の記憶よりもずっと華奢で、大きな中華鍋を振り回しているとは思えないほど小さな手をしていた。

こんな身体でずっと無理をしていたのだと思うと、鶴乃は気づけば病室を飛び出して、ラウンジでうなだれていた。

「私のせいだ……」

瑞乃に無理をさせたのは自分だ、と鶴乃は自責する。

祖父から聞いた由比家の栄光に憧れ、それを取り戻すために店を開く祖父を尊敬した。瑞乃は興味がない様子だったが、鶴乃に合わせるように店を手伝うようになった。

それだけでも鶴乃は瑞乃に思いを押し付けた責任を感じるが、極めつけは一年前の春のことだ。

『高校に行かないなんて、悪い冗談だよね……？』

瑞乃は万々歳を守るために高校進学を断念した。

無理をしてないと強がりの笑みを浮かべる姉に、鶴乃は言葉を呑み込んだ。あの時きちんと自分の気持ちを告げていれば、姉が倒れるほど無理をするようなことはなかったかもしれない。そう考えると胸が痛くなり、自然に涙が滲んだ。

「う、うええん……」

嗚咽を漏らす鶴乃。

場所が場所だからだろう。周囲の患者や見舞い客たちは遠巻きになって、痛ましげに鶴乃を見つめている。いつもならすぐになぐさめてくれる瑞乃は、ベッドの上で眠っていた。それを思い出すとますます鶴乃の心が痛みを増す。

「大丈夫ですか?」

すると、優しい声がかかる。

鶴乃が顔を上げると、見たことのない制服姿の少女が、ハンカチを差し出していた。

「私、環いろはって言います。事情は分かりませんが……お話して楽になることも、あると思いますから……」

——

環いろはは神浜市外に住む中学一年の女の子だ。

友だちはとても少ない。まともに話が出来るのは、里見メデイカルセンターに入院している妹とその友だち、両親くらいのものだ。いわゆるコミュ障のぼっちと呼ばれる人種である。

しかし誰かの役に立ちたいと思い、困っている人を捨て置けないお人好しの気性にかけては、右に出るものはいない。

だからこそ、ラウンジで一人嗚咽を漏らす制服姿の女の子を、見過ごすことができなかった。

妹のお見舞いを済ませた帰り道、女の子の隣に寄り添う。

「由比鶴乃さんですね、よろしくお願いします、由比さん」

「鶴乃ちゃん」

「え？」

「由比さんより、鶴乃ちゃんがいいな……」

「わ、分かった。よろしく、鶴乃ちゃん」

「うん……話、聞いてくれるかな？」

鶴乃は訥々と涙の訳を語った。中華飯店万々歳のこと、祖父のこと、なんでも出来る姉のこと。自分が気持ちを呑み込んだせいで、姉が倒れてしまったこと。

「その気持ちって？ 今からお姉さんにそれを伝えることは、できないの？」

「無理だよ、そんなの！」

鶴乃の気持ち。あの日姉に告白できなかった本当の気持ちとは、けっして口に出していいことではなかった。

「私ね、万々歳は好きだけど、いつの間にかお姉ちゃんの方がもつと大事で、大好きになつてたの。だから、お姉ちゃんが無理するくらいなら万々歳が潰れてもいい、つて言おうとした。最低だよね？ 私か万々歳を好きだからお姉ちゃんが必死で頑張つてきたのに。そんなこと言ったら、お姉ちゃんの今までの努力を全部踏みにじっちゃう……」

姉は鶴乃の笑顔を守るために万々歳を全力で守つてきた。しかし鶴乃は自分のために頑張つてくれる姉のことを何よりも大切に思うようになっていた。姉が無理をせず、にただ笑顔でいてくれるなら、他の何もいらなと思えるほどに。

けれど鶴乃は姉の頑張りを誰よりもそばで見してきた。その努力をすべて踏みにじる覚悟がないから言葉を飲み込み、姉は無理を続けて身体を壊した。

互いを思いやる故のすれ違い。

事情を知つたいろはは声を詰まらせ、目を伏せる。

「私はお姉さんの気持ち、分かるなあ」

「え？」

「私にも妹がいるの。環ういつていうんだけど……お姉ちゃんつてね、妹の前だとかっこつけようとするんだよ」

できないこともできると強がり、無理なことも平気平気と虚勢を張ってやり通す。倒れるまで頑張るのはやりすぎだが、姉とはそんな不器用な生き物だと、いろはは照れ笑いをこぼす。

「もし私がお姉さんの立場なら、鶴乃ちゃんが本当の気持ちを言ってくれない方が辛いと思う。鶴乃ちゃんが一人で泣いて、こんなに悩んでるって後で知ったら、お姉ちゃんはずごくシヨックだよ」

「で、でも……」

「お姉さんを傷つけちゃうのが怖いんだよね？」

鶴乃はこくりとうなずいた。本当の気持ちをぶつける覚悟がない。たとえそのせいで後でもっと深く傷つけるかもしれないと分かっている、ふんぎりがつかない。

「じゃあ、お姉さんを支えてあげて」

妹のためならお姉ちゃんは何でもできるし、できてしまう。だから無茶をしてしまうのは仕方がない。それをすぐに引き止めたり、手を取り合って協力したりできるように、すぐそばで支えてあげて、というは言った。

「そばで、支える……」



「その通りだ、由比鶴乃」

するとタイムリングを図ったように、白い獣が現れた。いつの間にかラウンジからは人が消えている。

一見謎の白いタヌキもどきにも見えるキュウベエの登場に、いろはは目を丸くした。

「な、何この子？ タヌキ？」

「ボクはキュウベエ。ボクの姿が見えるということは、環いろは、君にも素質があるみたいだね」

けれど先に、とキュウベエは鶴乃へ水を向ける。

「由比鶴乃。君の姉は魔法少女として、かなりの無茶を重ねている」

「そ、そうなの!？」

「ああ。力のない魔法少女にグリーンフシードを恵み、新人に戦い方を教え、その上で自分のグリーンフシードは深夜に確保している」

「さすがお姉ちゃん、優し……え、深夜!？」

「そう。君が寝ている間にね」

鶴乃は啞然とした。誰にでも優しい自慢のヒーローは、誰よりも身を削って戦っていた。知らなかった自分が恥ずかしかった。

「けれどボクと契約すれば、君は姉の隣に立てる。無理をしないよう支えてあげるには、

格好の立場だよ」

「そっか、確かに。しかも願い事まで叶えてくれるんだよね」

「ああ。なんでも一つだけ叶えてあげられるよ」

まさしく渡りに船。この時点で鶴乃の中で契約すること自体は確定されており、残るは願い事を何にするかだった。今すぐ由比家の栄光を取り戻す、と一瞬だけ考えたものの却下。それこそ姉が必死で積み上げてきたこれまでを否定する行為だ。

悩んでいるそのとき、過去の姉のほやきがりフレインする。

『宝くじでも当たれば一発なんだけど……』

帳簿とにらめっこしていた姉の言葉だ。

そうと決まれば一直線。鶴乃は高らかに願い事を宣言した。

「宝くじで一等を当てたい！」

こうして鶴乃は魔法少女となり、姉の隣に並び立つことを決意する。

思いやるがゆえのスレ違いが発生していることなど露とも知らず、姉妹は坂道を駆け落ちていく。

## 第9話

瑞乃は鶴乃に普通の少女でいてほしかった。

魔法少女になればソウルジェムの穢れを浄化するため、魔女との命がけの戦いが義務付けられる。よしんば穢れがたまらなかつたとしても、ふとしたイベントで絶望し魔法化することもある。

瑞乃自身は死ぬことも魔女になることも怖いとは思わない。前世では死が唯一の逃げ道だったし、いつそ魔女化して周囲一帯を壊してしまった方がマシと思える経験を何度もしてきた。魔法少女の真実を知っても「それ契約する前に言つてよ」と口を尖らせるだけだった。自分だけの問題なら何も怖くなかつた。

ただ、鶴乃が魔法少女の宿命を負うことだけは耐えられない恐怖だった。もしも鶴乃が魔女との戦いで傷ついてしまったら、もしも宿命に耐えきれず絶望してしまつたら。考えるだけでも恐ろしく、自分の落ち度で宿命を背負わせてしまつたと思うたび、罪悪感が心をきしませる。

妹を魔法少女にしてしまった。瑞乃は転生してから初めての絶望を味わっていた――

「いいかルーキー、今からお前を一人前の魔法少女になるまで徹底的にしごいてやる！」

泣いたり笑ったりできなくてやるからな！ 返事イ！」

「さーいえっさー！」

「誰がサーだ私は男か!? 返事はいかイエスマムだろオ！」

「イエスマム！」

——わけでもなく、妹の前で教官ごっこをしている。

新西区、建設放棄地。魔法少女の訓練にはうってつけの広い空き地で、由比姉妹は元気よく声を張り上げる。

初めての魔法少女実戦講習に緊張しているのか、鶴乃は若干顔をこわばらせて意味もなく敬礼している。初々しいその様子に瑞乃は内心で興奮していた。

「いいか、魔女退治では当然激しい運動が必要とされる。運動の前にやることは何だ、ルーキー!?!」

「はっ、準備体操でありますっ！」

「その通り！ そして我々由比家における準備体操といえは!?」

「鶴乃体操第一イイイ！」

「大正解！ 優秀すぎる鶴乃ちゃんに花丸あげちゃう！ さっそく両の拳を交互に天高く突き上げまして」

「突いて、突いて、百回突いてえー！」

「はあああーっ！」

空き地の外まで響き渡る無駄に大きな声を発しつつ、姉妹で謎の正拳突き体操を始める。前日の夜にロードショーで見たミリタリー映画の影響だろう。絶望のぜの字も見えない馬鹿騒ぎ。瑞乃が過労で倒れてから二ヶ月後のことだった。

瑞乃は魔法少女の真実を知っているからこそ妹を魔法少女にさせなかった。そのことを知っていたやちよとみふゆは、鶴乃が瑞乃のためを思っただけで魔法少女になったと聞くと、瑞乃の心労を思いすぐになぐさめに向かった。しかし強がりの苦手なはずの瑞乃は「平気平気」といつもの調子で、実際何の不安もなかった。

なぜならご都合主義があるからだ。

もしも鶴乃が絶望するようなことがあれば、因果を操作し原因ごとなかったことにする。なんなら魔法少女になった経緯さえ修正してみせる。それまでは瑞乃を思っただけの道を選んだ鶴乃の意志を尊重し、先輩魔法少女としてサポートする。

鶴乃が魔女になることは自身の死や魔女化よりもはるかに怖い。しかし取り返しのつかない失敗をなかつたことにできる反則級の魔法があればこそ、瑞乃は平静でいられた。

そうしてもっとも大きな不安の種が除かれた瑞乃の心に去来したものは、妹の前で

かっこつけたい気持ちだった。頼りがいのある鬼教官として鶴乃をしごき、実戦訓練で実力を披露し「お姉ちゃんすごーい！」とほめてもらいたい。幸い万々歳の経営はチャイナ帰りの父親と改心した母、祖母が担当しているため、姉妹で活動する時間は大幅に増えた。瑞乃が過労で倒れたのを心配し同行しようとしたやちよとみふゆには『ありがとうでも姉妹水入らず！』と言いおいて、瑞乃は存分にお姉ちゃん教官ごっこを楽しんでいた。

ただし、目論見は瓦解寸前である。

『こ、これが魔女！ 久しぶりに見ると怖いね……！』

『怖い？ ふっふっふ、仕方ないなあ。今回だけお姉ちゃんがお手本を見せちゃおうとーうー！』

『すごーい！ さすがお姉ちゃん！』

当初はうまくいっていた。尻込みする鶴乃の前で、意味もなく抜刀術じみた構えをとって、中華包丁の一閃で魔女を細切れに。鶴乃は予想よりもはるかに達人めいた姉の技に見惚れ、手放しで称賛した。瑞乃は鼻高々だった。

『これがお姉ちゃんの本気なんだね！』

『甘い！ 私はまだ変身を二つ残しているのだ！』

『二つも!!？ まるで終盤で真の力を解放したクウシンサイ先生みたいだよー！』

リアルにインフレバトルじみた動きをするせいか、魔法少女には隠された真の変身能力があると本気で誤解した。後ででまかせを指摘され謝ることになるとは露知らず、瑞乃はお調子に乗り続けた。

『な、なんかこの魔女戦いにくいよ?!』

『搦め手タイプの魔女だね。この手合を倒すには……全力で正面から突撃イ!』

『すごい! でも』

しかし幾度めかの実戦講習で瑞乃が魔女を瞬殺すると、鶴乃の笑顔が曇る。

『お姉ちゃんが倒したら私は何と戦えばいいのかな……?』

『ごめん、次こそは!』

その次の戦いでは、比較的強力な魔女を相手取った。それまでとは一回り強い穢れを感じさせる魔女に対し鶴乃は息を呑み、全霊で戦う覚悟を決める。しかし、

『この魔女は鶴乃にはまだ早い! おだぶつ!』

『ええーっ!』

『どう? お姉ちゃんすごいでしょ?』

瑞乃が瞬殺したせいで肩透かしに終わった。

実際どんな相手だろうと正面から力でねじ伏せる瑞乃の実力は高く、鶴乃はすごいすごいと称賛せざるを得なかった。瑞乃はますますお調子に乗り、鶴乃が隠れてふくれっ

面をしているのに気づけなかった。

そうして姉妹のスレ違いは、ある事件をきっかけに表面化していく――。

――

新西区郊外。空き家だらけの寂れた住宅街の一角に、ある魔女の結界が発生していた。瑞乃と鶴乃は結界の前に陣取り、逢魔ヶ時の西日に照らされる二人からは長く黒い影が伸びている。

「うーん」

腕を組んで結界をにらむ瑞乃。どこか浮かない表情だった鶴乃は、珍しく姉が悩む姿に首をかしげた。

「お姉ちゃん、入らないの?」

「先客がいるみたい。集中してみて」

「ほっ? ……ほんとだ」

言われた通り集中すると、結界の内部に魔女や使い魔のものとは別の魔力が数体感じられた。どこかで感じたことのあるような魔力パターンで、思い出す前に瑞乃が答えを出した。



「やっちとみつぶ、それからかなっちなか」

新西区の顔にして由比姉妹の友人、七海やちよと梓みふゆ。瑞乃の過労に前後してやちよのみかづき荘に入居した、雪野かなえの魔力だった。みかづき荘がチームで魔女退治をしているらしい。

「みかづきチームだね！　じゃあ早く入ってお手伝いしようよ！」

「この地域だと基本、横槍は禁止なの。いくら友だちでも弁えるべきかなあ」

「えー？　基本、つてことは例外もあるんでしょう？　それってどんなときき？」

「先客が苦戦してて大ピンチって時は、さすがにかな。戦況を知りたかつたらもつと集中して魔力を——」

瑞乃はハツとして言葉を止め、目を見開いた。

鶴乃は言われた通りに結界内へ魔力を集中し、戦況を探る。無数の小さな穢れと、中央に陣取る巨大な穢れ。小さな穢れに包囲されたやちよとみふゆの魔力は不自然に動きを止め、かなえの魔力だけが自由に動いている。

「大ピンチじゃんねえ!?!」

「お姉ちゃん!?!」

血相を変え結界に飛び込む瑞乃。

慌てて鶴乃も後に続く。瞬時に世界が穢れと呪いに塗りつぶされ、視界いっぱいにお

ぞましい魔女の空間が広がった。林立する卒塔婆、人の下半身と十字架を無理に合成したような外見の化物、鳥居に吊るされた白い顔。

そんな結界の中央で、やちよとみふゆは包囲されている。下半身と十字架の化物から触手のように荒縄が伸び、二人を縛り付けていた。

鳥居に吊るされた白い顔が魔女の本体なのか、ひととき強力な穢れをまとっている。そのエネルギーが口腔に集中し、大砲のような光弾として発射された。

拘束されたやちよとみふゆに逃げるすべはない。二人をかばうように前へ出ていたのは、かなえだった。

「くっ……!？」

鉄パイプとキセルを横した得物に魔力を集中させ、どうにか防ごうとしている。しかしどう考えても迫りくる光弾の穢れの方が強力だ。このままでは三人とも吹き飛ばされるか、良くてかなえ一人が確実に死んでしまう。大ピンチだった。

「鶴乃! やつちとみっふを!」

「……ちやーらー!」

「瑞乃!？」

「鶴乃さんも!？」

別人のような鋭い声音で指示が飛ぶ。鶴乃はその通りに動く。やちよとみふゆを拘

束している使い魔に、炎をまとった一對の鉄扇で躍りかかる。

使い魔は怯んだものの、拘束はまだ解けない。

一方、瑞乃はかなえの眼前に躍り出ていた。

「かなつち！ 鶴乃の方手伝って！」

「だが……！」

「いいから！ あれ受けたら死ぬよ！」

あれ、と呼ばれた穢れの圧縮光弾。並の魔法少女が受ければ消し飛び、実力者のかなえであってもただでは済まないそれは、すでに目と鼻の先だった。使い魔との戦いで必死の鶴乃を除き、誰もが瑞乃の死を悟った。

「えいやー！」

しかし瑞乃の気合と共に、光弾は粒子となって碎け散る。

中華包丁を握った瑞乃の腕が掲げられている光景から、弾を切り裂いたのだと予想がついた。

中華鍋で受け流すには強力すぎて、かといって防げばノックバックで吹っ飛ばされる。ゆえに、正面突破の切り上げ一閃だった。

「かなつち！」

「わかった……！」

呆けている余裕はない。かなえは冷や汗を流しつつも、鶴乃の方の支援へ回る。

最大火力の一撃を防いだ瑞乃に対し、魔女は攻撃を威力から数へと切り替える。口腔からタンかつばのように、必殺の光弾が雨あられと迫る。

瑞乃は魔女に対し半身をとり、左腕一本で中華包丁を振るう。迫りくる弾の嵐はことごとく切り裂かれ、刃に触れた端から光の飛沫しぶきとなつて散つていく。

埒が明かないと見たのか、魔女は統率された使い魔を数体瑞乃へ差し向ける。瑞乃は弾を片腕で切り払いながら、ついでとばかり接近する使い魔すら切り捨てた。

「す、す……!?!」

その間に鶴乃たちの方は窮状を脱していた。

かなえの助力もあり、使い魔を撃退した鶴乃たち。

姉の活躍に声を漏らした鶴乃は、瑞乃が包丁を振るいながらも一方の手に魔力を集中しているのを見て取った。

(ビームだ、絶対ビームだ!)

まるでデカゴンボールのクウシンサイ先生のように、特大のビームで魔女を仕留めつつもりなんだと、鶴乃はワクワクしながら姉のアクションを見守る。

切り払われた光弾が瑞乃の周囲にきらきらと降り積もる中、魔力の集中した片手をついに強く突き出す瑞乃。

果たしてそこから発射されたものとは。

「セキトバくんっ！」

「ええーっ!？」

大型貨物トラックである。

赤を貴重に雷紋模様で彩られ、万々歳の宣伝がデカデカとペイントされたそれは、当たり前のように宙空を駆けて魔女本体へ迫る。

もちろん正面からただ突っ込んでくる敵を静観するはずはない。魔女は穢れのエネルギーを溜め、威力重視の光弾を発射する。

セキトバくんはエネルギーの塊にあわや撃墜されるかに思われたが、

「甘〜い」

華麗なバレルロールで光弾を躲す。もしも貨物の運送中であれば物損からの賠償請求不可避の回避マニユーバである。

しかしお届け先が魔女であればどんな請求を受ける謂れもない。セキトバくんはバレルロールの回転を加速させ、銃弾のごとく魔女へ突っ込んだ。

下顎の部分に正面衝突。もしこの現場を見られれば万々歳の株が逆に下がりそのようなほどの強烈な一撃だった。

そのリスクに見合うだけの威力を発揮され、跳ね飛ばされた魔女は宙空でキリモミ回

転して無防備をさらしている。

「やっち、みつふー！」

叫びと同時に、鶴乃の両横を風が駆け抜ける。やちよとみふゆだった。

「これで終わりです！」

みふゆが身体を一回転させながら全力でチャクラムを投擲。実体を伴う高度な幻覚のチャクラムが後続き、死に体の魔女を刻む。

「捉えたー！」

チャクラムの嵐に紛れ、槍を構えたやちよが突撃していく。投げられたチャクラムを足場として、空中で更に加速。一筋の光条と化したやちよが魔女を貫き、ほどなく結界が崩壊したのだった。

――

ひび割れたアスファルトの上に、グリーンシードが落ちる。それを中心に瑞乃、みふゆ、鶴乃、かなえの四人が結界から投げ出され、最後に宙を舞っていたやちよがふわりと着地した。

誰が何を言うでもなく、ぱちんと小気味よい音を響かせる。

「おつかれー。久しぶりだけど結構やれるもんだね」

「お疲れ様。ま、古い付き合いだもの」

「お疲れです。なんだか昔を思い出しちゃいました」

瑞乃、やちよ、みふゆの三人がハイタッチ。三人での久しい連携にそれぞれ思うところがあるらしい。

かなえは臆せずその輪に割って入り、瑞乃に声をかけた。

「あなたがいなければ、死んでいたと思う。ありがとう」

「なーに最強のお姉ちゃんにかかれば楽勝楽勝。それよりあなたがかなつちだよね？」

話は聞いているよ」

「か、かなつち……?」

雪野かなえ。みかづき荘を経営するやちよの祖母に懐き、みかづきチームとして下宿を始めた魔法少女だ。やちよ、みふゆと同年代で、クールな目元と物言いが特徴。音楽が好き、と瑞乃は聞いている。

困惑するかなえにみふゆが苦笑い。

「みつちゃん、初対面でその呼び方はびつくりしますよ？　ワタシだつてもう自重してるのに」

「そうかな。じゃ、雪野さん」

「極端だな。好きに呼んでくれ。私も、瑞乃と呼ばせてもらう」

「ん、よろしくかなっち」

かなえは決して人付き合いの得意なタイプではないが、事前にやちよたちから瑞乃の話を聞いていたことと、助けられたこともあつて心象は良かった。瑞乃は勝ち気な笑顔で、かなえは微笑を浮かべて互いによりよくする。

メンバーの消耗度合いを確認してグリーンフシードの使用の是非を決める前に、瑞乃は鶴乃へ水を向けた。

「鶴乃も初めてだよね。この子は私の妹で——」

鶴乃は疲れているのか、いつもより数段小さな声でかなえと言葉を交わす。やちよとみふゆは、「助けてくれてありがとう、鶴乃」「鶴乃さんが来てくれなかったら危ないところでした」と鶴乃の労をねぎらう。

そこが鶴乃の限界だった。

「うう……うわぁーん！」

「鶴乃!? どこさ行くだぁー!」

鶴乃は涙を散らしながら、踵を返して駆けていく。

嵐のように過ぎ去った姉妹にかなえは目を丸くしてから、追いかけるべきかどうか判断に迷う。しかしやちよが肩に手を置いて、「よくある姉妹のじゃれ合いよ。帰りま



しよう」と言ったので、その場ではひとまず解散する。

とはいえ、鶴乃の様子が気がかりなのは確かだった。魔法相手にあれほど活躍する瑞乃の姿を見れば手放しで「私のお姉ちゃんはずごいんだ!」と自慢するのがやちよ、みふゆたちのよく知る鶴乃だ。泣いて走り去るのは腑に落ちない。

やちよとみふゆの意見はテレパシーもなしに「後で確認しよう」と一致。

しかし確認するまでもなく、直接姉妹のじゃれ合いに巻き込まれることになるのは、この時は知るよしもなかった。

――

「決闘少女?」

昼下がりのみかづき荘、リビング。家主のやちよは、客人の魔法少女たちの言葉に首をかしげた。

「私たちも別の魔法少女から聞いた話なんですけどね?」

前置きして話し出したのは、十咎<sup>とがめ</sup>ももこ。比較的経験の浅い魔法少女で、先輩としてやちよを頼りにする中で親しくなった中学生の女の子だ。続いてももこの友人である水波<sup>みなみ</sup>レナ、秋野かえで。魔法少女同士仲良くしたいとのやちよの提案で、ドーナツとお

茶を囲って親睦会の最中である。

彼女たちが切り出したのは決闘少女の噂だった。

「うん、いるらしいんです……手当たり次第に決闘を申し込んでくる魔法少女が」

「決闘する理由は不明だけど、かなり強いつて聞いてます」

かえでとレナの言葉を、「だからやちよさんも気をつけてくださいね」とももこが締める。

やちよは話を聞くと、まず忠告にお礼を言ってから、ため息をついた。

「誰だか知らないけど、ずいぶん命知らずもいたものね」

「えっ?」

「つまり……やちよさんがシバくってこと?」

「ふゆう、レナちゃん! 言い方!」

「あっ……」

「違うわよ」

噂通りなら危険な相手だ。魔法少女の真実を知らない者同士で戦えば、ルールの上での訓練でさえ誤ってソウルジエムを傷つける危険がある。他の魔法少女に敵意のある者が決闘少女であれば、やちよも黙って見ていられない。

しかし、そういうった危険があるのはここが神浜西でなければの話だ。

「三人は由比瑞乃って知らない？」

「あつ、知ってます」

「やちよさんとみふゆさんが表のボスなら、裏のボスって言われてる人ですよね」

「ええ。その子が根っからの平和主義者なの。もし決闘少女なんてのがいたら、とつくに成敗されてると思うわ」

「知り合いなんですか!？」

「親友よ」

魔女退治を深夜帯に一人で行っていた瑞乃は、西でもほとんど知られていない。しかしある程度経験のある魔法少女なら、神浜西で争えば裏ボスが黙っていないとの噂としてよく知られている。

つまり決闘少女の犯人は経験のない新人で、かつエスカレートすれば瑞乃が出張ってくる。よって心配の必要はない、とやちよは判断した。

が、やちよの脳裏に白い病室がよぎる。ベッドの上には瑞乃が横になっていた。

瑞乃は大体なんでもできる。本人もそれを知っていて、周囲も知っているからいろいろな役目を背負わせた。結果、過労で倒れたのが半年ほど前のことだ。

万々歳は家族が手伝ってくれるようになったそうだが、鶴乃が魔法少女になった心労だつてあるはず。甘えてばかりではいられない。



「瑞乃、つてさつき言つてた人だよな？」

「女の人……？」

「やちよさんつてもしかして……あうあう」

仲良く顔を赤くする三人は、いろいろな面で一步も二歩も先を行っているやちよに、畏敬のまなざしを向ける。レナは素直な敬意をごまかすように、こつそりやちよのドーナツをかつぱらった。

一方、スマホの向こうにいる裏ボスはというと、

『鶴乃が修行パートに入っちゃった！ どうしよう!？』

「訳がわからないわ」

パニックになっていた。

やちよが聞くところによると、獄門の魔女戦でなき別れになった一ヶ月前のあの日以来、鶴乃は一人で魔女退治に出かけることが多くなった。理由を聞いても「修行パートだよ！」の一点張りで話にならず、心配になって後をつけようとすると、

『もしこつそりついてきたら……お姉ちゃんを嫌いになっちゃう、かもしれないんだからっ！』

と脅迫され、瑞乃が動けないという。

「……心配ないんじゃない？ 聡明な子だし、この前の戦いでも動きは良かったわ。た

「いいの相手には負けないでしょ」

『分かってても心配なの！ 鶴乃があんなに反抗期なの初めてなんだから！ やっち、鶴乃の相談に乗ってあげて！』

「やちよは白けていた。みかづき荘の固定電話ではなく、珍しくやちよ個人にかけてきたと思えば妹の話題である。不可思議にどろりとした感情が鎌首をもたげた。

「が、次の一言であつさり」と感情が浄化される。

『お願い！ やっちだけが頼りなの！』

「仕方ないわね。任せなさい」

「親友の頼みを断るのも気が引けるからと付け足して、やちよは鶴乃の奇行調査を快諾。

「ももこたちのもとに戻ると、なぜかももこたちは顔を赤くしてチラチラ視線を交わし合っていた。

「どうかした？」

「と聞いても三人そろって歯切れが悪いので、隣に座っていたレナに詰め寄る。

「や、やちよさん、近いです……！」

「あ、砂糖がついてる。ふうん、レナちゃん、私のドーナツを一つ食べちゃったのね」

「えっ、あ、そうです！ けっして変なことを考えてるわけじゃ……！」

「いたずら好きな悪い子には、おしおきをしなきや」

形のいいレナの顎をくいつと持ち上げ、至近距離で見つめるやちよ。レナはやちよの仕草からあふれる女性の魅力に身動きがとれず、ぼうつとした顔でなすがままになつてしまふ。

妙なスイッチの入つたやちよによるお仕置きは、レナが耳まで真つ赤になつて瀕死になり、ももこが新たなドーナツをやちよの口に突つ込むまで続いたのだった。

――

親睦会から数日後。

神浜を騒がす決闘少女は、間もなくやちよの前に現れた。

――

ももこから下手人発見の報を受け、やちよが駆けつけたのは寂れた神社の裏手だった。管理者のいなくなったポロポロの社の裏は、野良猫と魔法少女のたまり場としてよく利用されている。隣接する草地には冷蔵庫やソファ、やたら大きな錆びだらけの中華

鍋などが不法投棄されており、神浜の闇を思わせた。

道中で前もって変身してやってきたやちよの視界に、見慣れたオレンジ色が映る。同じく変身したももこ、レナ、かえでの三人が、オレンジ色と問答していた。

「もう！ いつまで待たすんだよー！」

「もうすぐ来るからちよつと待ってって、な？」

「なんならレナが相手になるけど」

「や、やめようよレナちゃん。なんかあの子すごそうだよ……」

やちよは頭を抱えながら、社の陰から出ていく。見覚えのあるオレンジ色の背中に近づいていった。

「もう待てない！ レナって言ったね！ 私の大きいなる野望のために、ここで倒させてもらうよー！」

「上等……ひっ!!」

ゆらり、とオレンジ色の後ろに現れたやちよに対し、レナが後ずさった。

「ほっ？ 私の気迫に押されたんだね！ そんな調子じゃ勝負にならな——」

「つ・る・の」

「ひゃああっ!!? や、やちよ!?!」

オレンジ色とは鶴乃である。名を呼べば弾かれたように振り返り、冷や汗を流してや



ちよと向かい合う。今はあまり会いたくない相手の登場を認めると、涙目で抗議しだした。

「や、やちよを呼ぶなんて卑怯だよ!」

「やちよさん、知り合いなのか?」

「ええ、古い付き合いよ。連絡してくれてありがとうね。で、鶴乃」

やちよの眠たげな瞳がすうっと細まり、鋭い眼光が光る。

「何のつもり?」

神浜西の裏ボス、もとい瑞乃は徹底的な平和主義者だ。やちよでさえ最近まで知らなかったことだが、グリーンフシード狙いの強盗に遭つてもたんこぶ一つで許し、相手に負い目を感じさせない形でグリーンフシードのストックを提供していたらしい。その成果もあつてか東西地域と中央区の情勢は非常に落ち着いており、史上稀に見るほどの和平が実現している。

瑞乃が過労で倒れたあの日、鶴乃ともその情報を共有している。決闘騒ぎはせつかくの和平を壊しかねないもので、やちよは毅然として鶴乃を睨む。

「わ、私は……」

「瑞乃だつて心配してる。何か悩みがあるなら相談に乗るし、私でダメならみふゆだつて——」

「お姉ちゃんは関係ないよっ!」

静かな境内に鶴乃の叫びが響く。鉄扇が炎をまとい、鶴乃を中心に渦巻いた。

「……関係あるって言ってるようなものじゃない」

「問答無用だよ! 私は最強の妹になるために、少しでも強くならなきゃならないの!

そのためには戦うしかないんだよ、ふんふん!」

「少し見えたかな。分かった、私が相手になる」

「ほんと!?!」

「その代わり私が勝ったら、あなたの悩みを洗いざらい吐いてもらおうわ」

「ははー! どうせ私が勝つんだから、考えてもしょうがないよね!」

先手必勝。しゃっしやー、と独特の掛け声とともに鶴乃がやちよへ躍りかかる。一歩間違えればボヤ騒ぎになりかねない炎の台風に対し、やちよは冷静にその場を動かさない。

鶴乃も、観衆たるももこたちも、やちよの次の動きに目を凝らした。まさか神浜の有力な古参魔法少女がこの初撃に対応できないはずはない。問題はその後はどう反撃するかだ、と考えた。

しかし彼女たちの予想はことごとく裏切られることとなる。

「えっ!?!」

やちよはまったく動かなかった。やけどするような距離まで攻撃が迫っても、身じろぎ一つしない。

鶴乃は反射的に炎を抑えにかかるものの、全力で放出した炎は中々収まらない。やちよの身体に大やけどをさせてしまうと思われたそのとき、やちよの身体が崩れた。

「それ、ダミーだから」

「うわあ!」

魔力の扱いに慣れれば、武器を精製するのと同じようにいろいろなものを形成できるようになる。その理屈で作りに出したダミーの身体が炎に溶けて消え、本体は鶴乃の背後に回り込んでいた。

あらかじめ魔力で作っておいたロープを鶴乃に巻き付け、捕縛。ぐるぐる巻きにされた鶴乃は目を白黒させている。

「ほ、ほどけない……!」

「い、いつの間に!」

「全然見えなかった……」

「ふゆう、すごーい」

執拗に巻き付いたロープは魔法少女の力でもびくともしない。妙に胸元を強調するような縛り方に鶴乃は顔を赤らめ、涙目で叫んだ。

「と、とどめを刺して！」

「……これ以上ダダこねるつもりなら」

やちよは懐からスマホを取り出し、画面を見せつける。そこにはダイヤルのマークと『みずの』の文字。発信ボタンに指がそえられていた。

「分かるわね？」

「わ、分かった！ 全部話すからお姉ちゃんには秘密にしておいてえ！」

「えげつないな……」

地の底から響くような恐ろしい声音に、ももこたちは顔を引きつらせる。

縄を解かれた鶴乃はその場に正座し、先ほどまでの威勢がウソのような弱々しい口調で、深刻な悩みを語った。

「お姉ちゃんがね、強すぎるの」

鶴乃の姉、由比瑞乃は強かった。人としても魔法少女としても鶴乃が知る限り最強のお姉ちゃんです。同じ魔法少女になってからはますますその強さへのあこがれを深くした。魔女との実戦で姉が力を振るうたび、鶴乃は誇らしい気持ちになれた。

しかし、ある時鶴乃は思い出してしまふ。なんのために魔法少女になったのか。無理をする姉の隣で支えになるために魔法少女になったのではなかったか、と。

このまま姉と一緒にいても甘やかされるだけで、一生力になれない。そう悩み出した

とき、獄門の魔女と遭遇した。

魔女は強かった。鶴乃がそれまで見てきた魔女や使い魔とは比べ物にならない圧力を感じたし、実際やちよとみふゆ、かなえの三人が大苦戦していたことから実力がうかがえる。

それほどの魔女をあつさり倒してみせた姉の力は、どれほど遠いのか。姉の支えになるためにどれほどの時間がかかるのか。

鶴乃は焦った。まずは姉に甘えないために、一人で戦うようになった。使い魔や魔女もそこら中にウヨウヨいるわけではないから、よりたくさん戦いの経験を積むには魔法少女と戦えばいい、と思い立った。

「だから私は、急いで最強にならないといけないんだ。お姉ちゃんの隣に立って、無理しないように支えてあげられる、最強の妹に！ そのためならなんだってやるよ！」

「それが大いなる野望ってわけね……」

要は、お姉ちゃんの力になりたいたくて魔法少女になったのに、お姉ちゃんが強すぎる。じゃあさつさと強くなろう、というわけだ。

やちよは頭痛を抑えるようにこめかみへ手をやった。

「お姉ちゃんの力になりたい、か。結構いいやつじゃんか。私でよければ相手になるよ」「わ、私も、得意じゃないけど、少しくらいなら」

「レナも同感。ま、コテンパンにされて逆に自信を失うかもだけど」  
「なにおー!」

なぜか親睦を深めているかもれトリオと鶴乃にもつと頭痛が強まった。

瑞乃は魔法少女としての素質が高い。その上、いつ契約を結んだのかも分からないほど長い経験がある。単純な強さを根拠に隣に並ぶのは、不可能に思えた。

ただ、本気で強くなろうとしている鶴乃に無理だからやめようと言えるはずもない。

「……鶴乃。ウチのチームに入らない?」

「え?」

「一人で戦うのは危険だもの。決闘じゃなくて訓練なら、ももこたちだけじゃなくて私も付き合うわ。みふゆと、かなえにも声をかけとく。瑞乃には内緒ね。だから他の魔法少女に挑んだり、一人で魔女と戦ったりしないこと。いい?」

「やちよ……!」

鶴乃は大きな瞳を潤ませて、タツクルの勢いでやちよに突っ込む。

「うっ」

「やちよっ、ううん、やちよししよー! ありがとうございませすっ!」

「し、ししよー?」

こうして決闘少女は神浜から姿を消し、代わりにみかづきチームに一人、新戦力が加

わった。最強の姉に並び立つ最強の妹を目指す道のりは、まだ始まったばかりである。

――

鶴乃は夜からお店の手伝いがあるから、と嵐のように去っていった。一気に静かになった神社の境内裏に、やちよのため息まじりの声が響く。

「で、感想は？　最強のお姉さん？」

「……………ごめん。私の考えが足りなかった」

「えっ!？」

突如聞こえた第三者の声に、ももこたちが目を見開く。周囲を見回すと、不法投棄された錆びた中華鍋がひとりでに動いた。

鍋の中から現れたのは、一人の少女。鶴乃とは逆サイドのポニーと、万々歳のエプロン、動くのに窮屈そうな胸部が目を引き。顔立ちはどこか鶴乃に似ている。

少女は気まずげにももこたちを見やると、頭を下げる。

「初めまして、由比瑞乃だよ。もち、レナち、かえちーも、迷惑かけてごめん」

「ちよ、ちよっと待った！　いろいろとツツコミどころが多すぎるぞ!？」

瑞乃は鶴乃を付け回していた。いくら嫌われるリスクがあるとしても、万が一一人で

魔女と戦ってケガをすれば後悔では済まない。魔力を極限まで薄め、中華鍋に身を潜めながらココソコとストーキングしていた。今日も同じようにしていると、妹の決闘現場およびお悩みを知るところとなり、こうして姿を現したという。

「ストーキングって……」

「それ犯罪だよね?」

「姉妹だからセーフじゃんね」

しれつと言いつける瑞乃に対し、ももこたちはおおよその人となりを探した。シスコ  
ンだ。

「私たちに謝る必要はないよ。驚いたけど、迷惑だったわけじゃないし」

「そっか。ありがと、ももち」

「……普通にももこ、でいいけど?」

「検討しとく。やっち」

「やっち!」

瑞乃はやちよにも向き直り、頭を下げる。親しき仲にも礼儀あり。この世でもっとも大事な妹の悩みを聞き出してくれたやちよには、感謝してもしきれない。

「はい、どーいたしました。相変わらないうところは真面目よね」

「さすがに、ね。これからも末永く鶴乃をよろしく。私と一緒に、無限に甘やかす自信



があるからさ」

「もちろん、責任持つてしごいていくわ。追い越されないように頑張つてね、お姉ちゃん」

「ふふっ、そうだね」

西のボスであるやちよと対等に接する瑞乃は、妹を心から気にかける年上のお姉さんだった。一方今のやちよは、ももこたちに向けていた年上の女性らしさというより、少女らしい気安さを漂わせている。ももこたちは珍しいものを見たように目をぱちくりさせ、二人のやりとりを見守っていた。

話が一段落すると瑞乃を除いた全員が変身を解除する。すでに日は沈み、西から東の空にかけて藍色のグラデーションがかかっていた。そろそろ解散だろう。

「とっろで」

唐突に瑞乃が言い出した。

やちよは顔をしかめ、ももこたちも急速にざわざわと変化していく空気を感じ取り、無意識に身構える。

振り返った瑞乃の表情は、気持ち悪いニヤニヤ笑いだった。

「健気鶴乃ちゃんかわいすぎない？ 必死で頑張つてくれてる姿見てたら私ゾクゾクしちやって——」

「解散、解散。帰るわよ」

「え、いいの？ あの人ほっといて」

「アレはただのシスコンバカよ。ほっといたら朝まで付き合うハメになる」

「ふゆう……神浜の魔法少女って、変わった人多いよね」

「人の話を聞けえーい！」

逃走するももこ、レナ、かえで、やちよの四人を妹成分でおかしくなった瑞乃が追いかける。なぜかドタバタと駆け足で解散していき、やちよと瑞乃は息を切らしながら「またね」と手を振り合ったのだった。

## 第10話

1

新西区から参京区へ通じる夜道を、やちよとみふゆが連れ立って進む。瑞乃を訪ねるために幾度となく通い慣れた道のりだったが、二人の足取りは重く、表情は暗い。しとしと湿っぽい梅雨時の小雨が降り始めても、二人の歩調は早まることもなかった。

通夜のように暗い雰囲気。その形容にふさわしく、二人は親しい人の通夜を経験した。

やちよの祖母、みかづき荘のオーナーでもある女性が逝去したのだ。老衰だった。やちよ、みふゆ、かなえ、かつて下宿したことのある女性たち、多くの人に見送られ、穏やかに旅立った。

悔いのない大往生。人として最良の終わり方だった。しかしいくら納得しようにも、大切な人をなくした悲しみをごまかすことはできない。やちよは魔女退治もしばらく休み、みかづき荘で一人静かな時間を過ごすが多くなつた。

そこへ瑞乃が連絡を入れたのが、先程のことだ。

『久しぶりに三人で話さない?』

うろんげにスマホの液晶を眺めていたやちよをみふゆが支え、今は待ち合わせ場所の万々歳へ向かっている。

「やっちゃん、着きましたよ」

「……あ、ええ。入りましようか」

心ここにあらずなやちよは、取り繕うように笑って、万々歳ののれんをくぐる。

引き戸を開けると照明の半分が落とされ、普段の盛況ぶりとは違うシツクな雰囲気漂う万々歳が、二人を出迎えた。

カウンターの向こうには胸元のきつそうなバーテン服の瑞乃が立っており、シヤカシヤカとカクテルをシエイクしている。

「いらっしやい。鶴乃、タオルを」

「ちゃーらー」

「えっ、えっ。なんですかこのノリ」

同じくバーテン服の鶴乃に頭をふかれながら、二人はカウンターへ案内された。

困惑しきりのみふゆを置いて、やちよはくぐもった声を発する。

「マスター、いつもの」

「へい」

「お、お酒?! ダメですよやっちゃん、ワタシたち未成年で——」

「烏龍茶よ」

「もう、何なんですか、もう!？」

グラスに注がれた烏龍茶カクテルを一気に呷ったやちよは、音を立ててグラスを置く。熱い吐息をつくやちよはまるで疲れたOLのようで、みふゆは思わず見惚れてしまった。

「情けないわね、私」

ふつ、と自嘲の笑みを浮かべるやちよ。

「ここに来るまでに考えてしまったわ。瑞乃、あなたにおばあちゃんの死をなかったことにしてもらおうって」

「やっちゃん……」

「でもやつと目が覚めた。あんなに悔いのない顔で逝ってしまったんだもの。乗り越えなきゃいけないわよね」

「……そうですかい」

人は死を避けられない。残された者たちは悲しみを背負い、引きずり、乗り越えていく。それを魔法でなかったことにするのは人としていけないことだ。理屈では分かっているけど、感情が納得できない。やちよが数日間悩み続けたことだった。

実際にそのズルを可能とする瑞乃と対面し、やちよはやつと決意できた。悲しみを背

負う覚悟ができた。

親友の覚悟を見て取ったみふゆは口を引き結び、やちよの白い手に自分の手を重ねる。

その様子を見ながら瑞乃は新しい烏龍茶のシェイクを再開し、内心で白状した。

(まあ寿命で死ぬと私何もできないんだけど)

ご都合主義は因果を操作する。死者の蘇生も不可能ではない。しかし寿命による死者の因果は瑞乃でも触れることができなくなるので、やちよに頼まれても断るしかなかった。万々歳の危機の折、祖父の死を操作しなかつた理由である。

能力を半端に知っているやちよが悩んでいるかもと危惧し、呼び出してみると案の定だったらしい。しかし今は烏龍茶のカテキンで思考が落ち着いたようで、どこかすつきりした顔つきになっている。

「マスター、みふゆにも同じものを」

「へへ」

「今日は朝まで付き合いますよ、やっちゃん」

一晩限定のバー万々歳にて、少女たちは飲み明かす。アルコールではない別の何か、少女たちの喪った悲しみを満たしていく。大人になつたら今度は三人で本当のバーに行こうと約束し、やちよが雰囲気酔いつぶれるまで、ノンアルコールの酒盛りは続

いた。

大人の階段を登りつつある三人を前に、鶴乃は寝ぼけ眼をこすりながらこうつぶやいたという。

「何コレ？」

あえて言うなら深夜のテンション、阿吽の呼吸、ノリと勢い。

やちよを抱えてみふゆが店を後にすると、瑞乃は酒瓶つぼい業務用烏龍茶ボトルをラッパのみして、ハードボイルドにキメた。

「呑まなきややつてらんないよな……」

お姉ちゃんたち、たまに訳分かんない。

鶴乃は遠い目をしながら二階へ引つ込み、変な夢を見たと思ひ込むことにした。

――

2

昼下がりの中華飯店万々歳。お昼の経営が終わり、夜に向けてあわただしく厨房が回されているが、店長代理だった瑞乃の姿はそこにはない。中華大陸への修行ですっかりチャイナにかぶれた父親を中心に、改心した母と祖母が駆け回っている。

では瑞乃が何をしているかというと、

「うーむ」

すりきれた漫画を片手にうなっていた。

注文を待つ間の時間つぶしとして小さなラックに収められた漫画、雑誌。その一つを熟読している。

さぼっているわけではなく、家族の要請を受けてのことだ。瑞乃の過酷な労働実態を知った父親たちから頼むから休むアルと請われ、しぶしぶ従っている。

「お姉ちゃん何うなってるの?」

「鶴乃、おかえりー」

「ただいまー」

学校から帰ってきた鶴乃は着替えもせず瑞乃の隣に座り、姉の顔をのぞきこむ。瑞乃は依然うなりながら、読んでいた漫画を閉じた。

「ウチの漫画のラインナップ、古臭くない?」

古びた電話帳とともに収められた漫画のどれも古い。しかも場末の青年誌の片隅に載ってそうな微妙画風のものばかりだ。おっさん客層がメインだったかつてと比べ老若男女幅広く来店する今となっては、見直しが必要になるだろう。

「といっても今どきの漫画とか知らないし、どうしよつかないーと思って。鶴乃はどう思



う？」

「もう、お姉ちゃん！」

「えっ、な、なに？」

がたん、とカウンスターに手を付き立ち上がる鶴乃。

「せつかくお休みなのにまたお店のこと考えてる！ もっと休んでよう！」

「はっ、たしかに」

とはいえ、休めと言われて休める人種が二年間のワンオペの末倒れるはずもなく、瑞乃は気がつけば店のことを考えてしまう。仕事があればあるだけやるし、なければ適当に自分で探してくる。瑞乃は頑張ることが好きだった。

したがって、今回の漫画の件も見つけたからには解決までこなしたい。

ふりふり怒る鶴乃をなだめながら、

「じゃ、鶴乃にお願いしていいかな？」

「ほっ？」

お願い。基本的になんでもできる姉からの珍しい言葉に、鶴乃の氣勢が削がれる。

「学校で今流行りの漫画とか小説について調べてきてほしいの。鶴乃って友達が多そうだから、幅広く意見が聞けると思うんだ。どう？」

「お姉ちゃんが、お願い、私に……」

鶴乃はうつむいてぶるぶる震えたかと思うと、勢いよく瑞乃の方へ身を乗り出し気炎を上げた。

「任せて！ この最強妹系魔法少女由比鶴乃が、全学年全生徒先生に至るまで徹底的に調査の限りを尽くしてくるよ、ふんふん！」

「む、無茶しないでね？」

「お姉ちゃんにだけは言われたくないカナ！」

張り切りすぎて空回りしなければいいけどと不安になりながらも、それはそれで落ち込んだ妹をなぐさめ愛でるチャンスだと考え、瑞乃の方も「うへへ」と興奮するのだった。

――

さつそく翌日から始まった鶴乃の漫画等嗜好調査は順調に進んだ。すべての先生に聞くことはさすがに難しかったものの、暴走機関車じみた勢いでほとんど全生徒から意見を集め、今は男女問わず少女漫画が流行りらしい、と瑞乃に最終報告を行った。

胸を張ってドヤ顔を決める鶴乃にがまんが利かず、瑞乃は抱きついて店先でいちやいちやモードに突入。寛容な父親もさすがに渋面だったが、居合わせた客がそろつていい

笑顔を浮かべ見物していたので、まあいいアルと見逃した。

そうして数日後の万々歳。古びたラックの中身は一部の需要ある古本を残して半分近くが少女漫画に刷新された。ジャンルごとにバランス良く配分されたラインナップの評判は上々で、瑞乃と鶴乃はハイタッチを交わした。

「へえ、これが今の流行りなんですね」

厨房の火が落とされ、人気のない定休日の万々歳にて。真新しい漫画の一冊をばらばらめくりつつ、みふゆが興味深げな声を上げた。特に用があるわけではないが、なんとなく遊びにきたのだ。

しばらく流し読みをしていたみふゆだが、あるページでぴたりと手が止まり、頬が朱に染まる。そのままゆっくりと舐めつくすようにページをめくっていき、ほどなく読み終えた。

「面白かった？」

「面白いというより、参考になりましたね」

「斜め上の感想じゃんねえ」

せつせと店内にモップをかける瑞乃は首をかしげる。なんの参考にするつもりなのやら。

みふゆは若干頬に赤みを残したまま、じとつとした目を瑞乃に向けた。

「ところでみっちゃん？　あなた、しばらくお休みするよう言われてましたよね。というか今日定休日でしょう。なんで働いているんです？」

「なんでって……なんでだろ？」

言われてみれば不思議だった。ひとまずモップを片付け、行儀悪くカウンターに寄りかかりぼうつとしてみる。

すると、油のしみたメニューの短冊が目に入った。市場の相場と今月の売上、先月先々月の原価、収益、損失、その他あらゆる数字が頭の中に駆け巡り、適切な価格設定か否かを脳が無意識に考え出す。

同時に店内のレイアウトも見渡した。お客がもつともくつろげてなおかつ効率の良いい動線を確保できているかどうか。改善案は何かないか。無駄に優秀な瑞乃の頭脳が回転を速め――

「みっちゃん？」

一声で止められた。

「今何を考えてました？」

「価格設定とか軽減税率の会計処理とか」

「お休みの日くらい、お仕事は忘れていいと思います」

「だって無意識に考えちゃうんだよ！」

「……はあ。さっそく使うときが来たようですね」

ゆらり、とみふゆが立ち上がる。強敵を前にしたように瑞乃の肩が跳ね、身構える。

「み、みつふっ？」

一步、二歩と少しずつ距離を詰めてくるみふゆ。徐々に歩調が速まって、あつという間に瑞乃の眼前まで迫った。

「なにになになに!？」

それでも歩みが止まることはなく、瑞乃は慌てて後ずさり。壁際まで追い詰められ、逃げ道がなくなつて——どん、とみふゆが壁をついた。瑞乃の顔の横、両手について左右を塞いでいる。

互いに息遣いを感じられる至近距離。みふゆのやさしげな目元とさらさらの銀髪がよく見える。桜色のくちびるが妙に目を引く。

最近読んだ漫画の影響だろうか。頭が真っ白になった瑞乃はゆっくりと目を閉じて

「……みつふっ」

「え」

笑いをこらえる親友の声に、ハッと我に返った。

「ぶ、ふふっ、あははは！ みつちゃんったら、漫画じゃないんですから!」

「み、みつふ、みつふうー!」

みふゆが読んでいた少女漫画の内容と、先程までのシチュエーション。思考が追いついた瑞乃は顔を真っ赤にして、振り上げた両手を意味もなくぐるぐる回した。

みふゆは涙目で笑いながら、

「すみません。でもみつちゃん、可愛かったですよ?」

「か、かわわ!?!」

「耳まで赤くなって、うっとり目を閉じて。一体何を期待したんでしょうね?」

「さっ……」

瑞乃には分かっていた。仕事中毒になりかけている自分を思いやっつての行動だった。悪意なんてかけらもないのだと。実際、仕事のこととは頭から吹き飛んでいた。

かといつて漫画に影響され純情をもてあそばれた羞恥は抑えようもなくなくて。

「さーすーがーにー!」

「あらあら、気持ちいいですー」

したり顔の親友の背中へ、ポカポカパンチを繰り返すのだった。

## 第11話

鶴乃がみかづき荘に加入してから半年。瑞乃の周囲を含めた神浜全体に、平穩な時間が流れた。

鶴乃はやちよとみふゆの指導のもと、安全で確実な魔女退治の手法を習得し、十分一人前と呼べるレベルに。みかづきチームにはやちよ、みふゆ、かなえ、鶴乃に加えさらに十咎もここ、安名メルも加入し、新西区では最大派閥のチームとして活動するようになった。

万々歳の経営も軌道に乗り、今は鶴乃が願い事で用意した八億円をいかにうまく運用するか慎重に検討している。二号店を出すもよし、バイトを雇って今の店舗の経営をさらに円滑にするもよし。客足も途絶えず、毎日嬉しい悩みには悲鳴をあげている。すべてが希望に満ち、みんなが幸せだった。

――

曇天の空の下、今にも泣き出しそうな空模様を見上げながら、瑞乃は一人歩を進める。

大通りから一步離れた細い路地は街灯も少なく、人けもなかった。

平日の昼下がり。万々歳の仕事から解放された瑞乃だが、結局学校には編入していない。やちよを始め強く勧められたものの、二年も必死で守った店に愛着がわかないはずもなく、変わらず優秀な料理人として活動している。今日はその一環で、町内会の会合に代表として顔を出してきたところだ。

鼻歌を歌いながら、薄い茶髪のサイドポニーをしっぽみたいに揺らして、上機嫌に道を行く。片腕には野菜や肉の詰まった紙袋が抱えられていた。町内会に出た商店街の代表たちから頂いたおすそ分けだ。過労で倒れた瑞乃はことあるごとにチャホヤさされている。

魔法少女としても人としても瑞乃は恵まれていて、この上なく幸せだった。

「おっと」

長年の勤に従い、反射的にかがむ。

頭上を通り過ぎる硬い何かを感じながら、流れるように水面蹴り。

何者かの足を見事に払い、マウントを取ること成功する。

「見ない子だね。今どきグリーンフィールド強盗は流行らない、よ……？」

襲撃者は顔も名前も知らない魔法少女だった。久しぶりの強盗を諫めようと口を開くが、強い違和感に首をかしげる。



きらびやかな装束や魔力パターンからして、一見魔法少女のように見える。しかし無数の修羅場をくぐってきた瑞乃の経験は、襲撃者の正体を看破していた。

「使い魔……?」

「違う。私はお前たちの敵になる区の魔法少女だ」

「ははあ、そういう……面倒なのが来たなあ」

瞬時に変身し、中華鍋を叩きつける瑞乃。魔法少女の姿を騙った使い魔は押しつぶされ、死に際に一瞬だけ真の姿を見せてから、消滅していった。

魔法少女の姿に化け、同士討ちや仲間割れを誘発する欺瞞特化の魔女。幸い一体ごとの力は強くないようだが、一応共有しておいた方が無難だろう。

冷静に判断した瑞乃は引き続き万々歳へ向かう。一度荷物を置いてから、直接みかづき荘へ知らせに行く腹積もりだ。

しかし瑞乃は珍しく都合の悪いことに、万々歳で引き止められることとなる。

「瑞乃、お客さんアルよ」

「お客? 私に?」

昼の部から夜の部へ移行する仕込みの時間だったが、万々歳のカウンターに見知らぬ少女が腰掛けている。

少女は怜悯な瞳で瑞乃を一瞥すると、席を立って瑞乃に歩み寄り。

「お初にお目にかかる。自分は和泉いずみ十七夜かなき。大東区のまとも役をやっている。会えて光栄だ」

そう言つて頭を下げた。

——

十七夜は二年前契約を交わした魔法少女だった。正義感が強く面倒見のいい性格のためほどなく大東区のまとも役としての地位を確立し、同地区のテリトリー管理や新人の指導、グリーンフシードの融通などを主導してきた。

そんな十七夜の耳に届いたのは、西で裏のトップを張る由比瑞乃の行いだった。

「本当なのか？」

気を利かせた父親は席を外し、十七夜と瑞乃はカウンターに隣り合つて腰掛けてい  
る。

きよとんと首をかしげる瑞乃に、十七夜は言った。

「東の魔法少女から聞いた。神浜全体でグリーンフシードが不足した折、東西の分け隔てなくストックを融通したという話だ」

「黒タマのこと？ なんなら今もやってるよ」

「やはりか」

うんうん、と感慨深そうにうなづく十七夜。わざわざそんなことを確認するためにやってきたのだろうか、と瑞乃がますます首をひねる。その様子を受け、十七夜は言葉の次いだ。

「力なき魔法少女に施しを与え、弱者を救済してきた最後の希望。噂に聞いた時は半信半疑だったが、やはりあなたは素晴らしい。実質無料に等しい低価格で真に追い詰められた者へグリーフシードを供給し、悲劇を防いだ行いは称賛に値する。販売の体をとることで施しの印象を薄れさせ、求めやすくした発想には脱帽を禁じ得ない。あなたのよいうな偉人が神浜の最古参を務めていることは本当に——」

「ストーツプ、さすがに！ それ以上はさすがに案件だよ!？」

「何がだ？」

心底不思議そうな十七夜。一方、瑞乃は心臓が早鐘をついていた。顔は耳まで熱く、嫌な汗が吹き出ている。

「いきなり人を褒め殺しにするとか心臓に悪いわ！ あと、私はそこまでいいやつじゃないから！」

「しかし事実は事実だろうか？ あなたの奇策によつて、神浜の魔法少女の多くが救われている。自分が契約する前のこととはいえ、地区の代表として礼を述べるのは当然のこ

とだ。本当に感謝しているぞ」

「あばばば……」

まっすぐすぎる十七夜の称賛に瑞乃はひたすら困惑していた。

そもそも例の裏メニユーはそこまで深い考えがあつたわけではない。単に同じ境遇の少女が困っているのを見かけ、放っておけなかつただけだ。神浜の秩序に貢献しようなど欠片も考えてはいなかつた。

その点を訂正しようとする、

「グリーンフシードだけではない。戦力の乏しい者には自ら手ほどきをしていたと聞く。あなたのおかげで多くの魔法少女が魔女化を逃れ、一人前の魔法少女として育つた。この功績はもつと誇るべきだ。もつとも、過労で倒れるまで尽くすのはやりすぎだがな」

「だ、だから違つてば……」

手ほどきの件も誤解だった。

裏メニユーを購入していた少女の一人が唐突に「頑張つて生きてみます」と言い出し、嫌な予感がして後をつけたところ、使い魔に返り討ちにあつていた。ひとまず助け出した後、一人で戦えるようになるまで付き合つた。これと同じようなことが数度発生したものの、一度同情した相手に最後まで付き合うのは人として当然のことである。特にほめられる謂れはないだろう。

と、意見を述べる余裕はない。人を聖人君子のように褒め立てる十七夜の劍幕に圧され、口が回らなかつた。

十七夜は一度もてなしのお冷を口に含んで、一拍の間を置く。

「東と西に等しく接するあなたにこそ問いたい。神浜に根付く東西の対立について、どう思う？」

「どう、って……」

敬意に満ちた輝く視線から、一切の偽りさえ許さないような、鋭い眼光に切り替わる。妹の幸せ以外ほとんど何も考えていない瑞乃には、『生命とはどこから来るのか?』と同レベルの深すぎる問いかけだった。まともな思考ができるはずもない。

だから瑞乃は一切の言葉を飾らず、率直に述べた。

「みんな元氣有り余ってるなーって思う」

「元氣? どういうことだ?」

十七夜の目が値踏みするように細まる。瑞乃は鶴乃の笑顔を思い出しながら、「えつとねー」と続けた。

「私は妹が世界の何より好きなんだ。顔も名前も知らない誰かを嫌ったり、憎んだりする暇がないくらいに。だから、東西のどつちに生まれたかで言い合いしてる人って、相当元氣有り余ってるってことじゃんね」

何かを嫌うことは好きになること以上にエネルギーがいる。鶴乃を愛するので忙しい瑞乃には、いちいち出身を気にする余力がなかった。そんな暇があれば鶴乃の幸せを夢見るほうが何倍も有意義だし、何より世界でもっとも憎い者は生涯一人だけと決めている。

十七夜は目を丸くして、幾度かぱちぱちと瞬かせた。それからふつと笑みをこぼし、「何かを嫌う暇などない、か。やはりあなたがここのトップで良かった」

「それはどうも。私も、なぎたんみたいにしつかりした子が東にいればみんな安心だと思ふよ」

「な、なぎたん?」

なぎたん、なぎたん、なぎたん、と難しい顔で繰り返す十七夜。お気に召さなかっただろうかと瑞乃が不安を抱き出したとき、「いや」と首を振る。

「珍妙な響きだが、なぜかしつくりくる。これからも是非そう呼んでくれ」  
これ以上なく気に入っていた。

それから十七夜は大東区の平和な現状や、中央区、南風区との関係がどうか、これからの神浜市内魔法少女たちの展望などを姿勢演説よろしく語った。あまりの熱意に瑞乃は何度もわかったようにうなずき、なるほど、そのとおりだ、などと相槌を打った。もちろん話の六割は理解できていなかった。

たつぷり一時間はたった頃、十七夜は一息つく。音に聞く神浜市最古参の偉人(?)と愛する神浜市について語り明かしたことで、大いに満足していた。一方の瑞乃は「私ここに来る前何するつもりだったっけ?」と忘れてしまった予定を思い出そうとしていた。

「今日は有意義な時間だった。そろそろお暇させてもらおう」

「はいはい。今度は是非営業時間に来てね。うちの中華は絶品だよ!」

「ああ、きつと」

結局思い出せずに入り口まで十七夜を見送ったとき、異変がやってくる。

引き戸が割れるような勢いで開かれ、名前の知らない少女が顔を見せた。

少女は肩で息をしながら店内を見回し、十七夜を見つけるとぎよつとして肩を震わせる。その隣にいた瑞乃と目が合うと、今にも泣き出しそうな顔で詰め寄ってきた。

「瑞乃さん! 大変です!」

「何かあった?」

「穏やかではないな」

少女は十七夜をきつと睨みつけてから、瑞乃に涙目ですがりつき、

「私の仲間が、西の魔法少女に襲われましたっ!」

東西の火種に火を付けたのだった。

— —

万々歳に少女が駆け込んでから二時間後の夕刻。

「これは骨が折れるかも……」

瑞乃は鏡だらけの魔女の結界内で、強敵の気配に苦笑いをこぼしていた。

迷宮のように入り組む結界は床、壁、天井のそこかしこに鏡がはめ込まれ、合わせ鏡がどこまでも続いている。一部の鏡からはコピーしたものと思しき魔法少女の人影がぬつと歩み出て、瑞乃へ生氣のない瞳を向ける。こうして作られた魔法少女のコピーが、東西間の対立を煽ろうとしたのだろう。

ならば結界の主たる魔女ごと倒してしまえばいい。瑞乃はそのつもりで結界を探し、見つけ、すぐに攻め込んで今に至る。

『それ、たぶん魔女の仕業だよ』

泣きついてきた少女の涙を拭いながら、瑞乃はすぐに心当たりを話した。魔法少女をコピーした使い魔に遭遇したこと。紛らわしいセリフで神浜市内の対立を荒立てようとしていたことなど。

卑劣なやり口に十七夜は腹を立て、すぐに退治へ出かけようとしたものの、



『みかづき荘に行つて共有しといてくれない？ 表向き、西の代表はあつちだから。東西で方針を決めてから動いてほしいんだ』

瑞乃の助言を受け、急ぎ足でみかづき荘へ向かつていった。東の魔法少女である十七夜が西で魔女退治をしていれば、後々対立の火種になることもある。そうなつては結局魔女の思う壺だ。事前に代表同士が取り決めをしておく必要があつた。

あくまでも力なき魔法少女たちの抛り所として知られる瑞乃は、みかづきチームよりも自由に動くことができる。先んじて討伐した使い魔の魔力パターンを探し出し、尖兵として乗り込んだのだ。

「よいしょつ、と。床は抜けそうにないか」

次々に襲い来るコピーの魔法少女たちをなぎ倒しながら、少しずつ奥へ進む。中華鍋を全力で床へ叩きつけるもののびくともせず、セキトバくんで一気に深部へ行くことは不可能と分かつた。

幸いコピーたちは脅威ではない。厄介な固有魔法まではコピーでできないらしく、得物を使つた純粋な闘争が主となる。その点、膨大な魔力で身体能力を強化し、かつ豊富な経験で読みあいにも強い瑞乃が苦戦する要素はなかつた。最深部の魔女に備え魔力を温存しつつ、少しずつ先へと歩を進めていく。

「すー、はー」

瑞乃はいつか来るであろう脅威を予見し、深呼吸で心を整えた。

この手の魔女は、たいてい仲間のコピーを出して攻撃を躊躇させるものだ。いくらコピーと分かっているても、鶴乃のコピーが出てくれば瑞乃の手も鈍るだろう。そのスキを狙い撃ちされてソウルジェムが碎かれることのないよう、あらかじめイメージトレーニングで心構えをしておく。

雑兵の使い魔やコピーを相手しながらも十分な時間を使い、覚悟が完了する。これで瑞乃を動揺させる存在はなくなつた。心身ともに完全な状態の最強お姉ちゃんが、果てのない鏡の迷宮を突っ切っていく。

魔力と体力はまだまだ余裕がある。みかづきチームが来る前に魔女を倒すことができれば、きつとみんなが褒めてくれるだろう。鶴乃も笑顔になるに違いない。

つい楽勝ムードで皮算用を始めたその時、ついに鏡の迷宮が動きを見せた。

絶え間ないコピーと使い魔の大群が途絶えたのだ。

しん、と静まり返る鏡の大迷宮。何かが来ることは明白だ。

瑞乃はあらゆる脅威に対処できるよう、万全の態勢で待ちの姿勢を取るが――

「……なん、で」

覚悟、心構え、イメージトレーニング。すべての準備を無駄にする刺客が、迷宮から放たれる。

鏡からずりりと生まれ落ちたその人影に瑞乃の目は釘付けとなり、まともにもろれつも回らない。

「なんでお前が……お前みたいなやつが……」

人影が顔を上げる。目の下に濃いクマが出来、頬はやせこけ、髪はぼさぼさ。遠目に見ても明らかな死相が浮かんでいる。中華鍋と中華包丁を両手に構えたそれは、生気のない瞳で瑞乃を睨む。

目が合ったとたん、瑞乃の心は暴発した。

「お前みたいなやつが、なんで生きてるんだっ！」

突進から包丁を一閃。その人影が慣れた手付きで中華鍋を構え、初撃を防いだのを見ると、瑞乃は今生で初めての本気の苛立ちを覚えた。

「二度と、見なくていいって思ったのに……！」

瑞乃の攻撃を弾き、互いに距離を取る。

人影の正体はかつての瑞乃。

自分を殺したいと願って止まない、六野<sup>むの</sup>かすかだった。

――

鏡の結界の主、鏡の魔女は魔法少女をコピーする。コピーは固有魔法を除き外見や戦闘能力などは本物とほとんど変わらず、集団の連帯をかき乱すにはうってうけの能力と言えるだろう。

しかし鏡の魔女にとっても、六野かすかはイレギュラーだった。

鏡で写し取ったはずの魔法少女、由比瑞乃のコピー。外見も性格も大きく違うかすかの姿を取った理由は、魔女当人はおるか他の誰にも分かりはしない。

「消えろ、消えろ、消えろっ！」

おそらく瑞乃には分かっているのだろう。だからこれほど必死なのだろう。

何をしても要領が悪くて、努力が全部空回りして、周りに迷惑をかけてばかりの過去の自分。やっと転生して忘れかけていた大嫌いな自分が、追いかけてきたのだから。まるで「お前は何も変わっていない」とでも言うように。

「いたっ?! この……っ！」

大ぶりの中華包丁を鍋で強く弾き、がら空きになった瑞乃の腹を蹴りつけるかすか。戦況はかすかの優勢だった。

かすかの能力は瑞乃のそれと完全に同じだ。技量が同じであれば、当然冷静さを欠いた方が不利になる。それが分かっているにも、瑞乃は感情を抑えきれなかった。

一刻も早く六野かすかを殺す。もしもその前にみかづきチームがやってきて、最愛の

妹に過去の自分を見られたら——考えるだけで瑞乃の心を恐怖が満たし、ますます冷静さを失わせた。一見してもかすかと瑞乃の関係は分からないなどと、当たり前前の発想さえ出来なかった。

「セキトバくん！」

出しぬけに手のひらから希望の象徴を発射するが、サイドステップで簡単に避けられる。避けた先に獣のように飛びかかり、結局不利のままの打ち合いが続く。

包丁と鍋が数十も打ち合わされ、両者息の切れる頃には、瑞乃は生傷だらけになっていた。対するかすかは相変わらず死んだ目をしながらも、無傷のまま武器を構えている。

（早く、早く……！）

瑞乃はすでに布石を打った。冷静になれないなら、後はその布石が奏効するのを待つしかない。

ただしもう時間は残されていなかった。結界の入り口の位置に覚えのある魔力を複数感知する。その中には鶴乃のものも含まれていて、瑞乃の元へやってくるまで猶予はない。

（こんな姿見られたら、もう……！）

瑞乃は鶴乃の前で、お姉ちゃんでありたかった。弱くてかっこ悪くて、ゴミみたいな

過去の自分なんて、死んでも見られたくなかった。

「はあああつー！」

悲鳴のような掛け声をあげ、何度も何度も包丁を振り回す。かすかは体捌きだけで刃を躲し、要所で深いカウンター。鮮血が舞い、装束の雷紋模様が赤黒く染まっっていく。

後少しで布石が効果を発揮しようかというとき、ついに瑞乃の時間が切れた。

「お姉ちゃん！」

「つ、鶴乃……やだ、みないで、こないで！」

「え、えっ!? お姉ちゃん、ケガして……」

背後から鶴乃が猛ダツシユでやってくる。みかづきチームと十七夜の魔力反応もやや遅れて近づいてくる。

そのタイミングでやっと、瑞乃の布石が帰ってきた。

「い、このっー！」

瑞乃は武器を捨て、捨て身の特攻でかすかに突進。かすかはソウルジェムを狙い包丁を振るうものの、急所が一つしかない以上狙いを読むのは容易だった。クロスした腕で斬撃を無理やり受け止め、かすかを押し倒す。

血まみれでふらつく瑞乃を蹴り飛ばそうとするかすかだが、

「大人しく転生しちゃえー！」

背後から巨大な質量が迫ってくる。

ハイブリッドエンジンを獣のように唸らせ、クラクションを響かせながら爆走するそれは、先程回避したセキトバくんだ。

転生者はお約束から逃げられない。たとえひとたび回避しようと、巧みなハンドリングで確実にキャラクターへ新生の希望をお届けするのが、神の使いたるセキトバくんの特性だ。

大技まではコピーできなかつたかすかは逃れられない死を前に硬直し——ふっ、と安心しきつた微笑みを浮かべる。

そうしてセキトバくんは再び六野かすかに迫り——

「だ、だめえーっ！」

妹の目の前で、最強のお姉ちゃんごと撥ね飛ばした。

——

神戸市の平穏が崩壊したのは、いつもと変わらない一日だった。

みかづきチームのやちよとみふゆ、かなえ、ももこ、鶴乃、メルの六人は学校からみかづき荘に集まり、リビングでくつろいでいた。鶴乃はこの日だけたまたま、メルの占

いを受けるつもりで万々歳にも寄らず直接やってきた。

『おい、鶴乃。今は私がやちよさんと話してるんだぞ』

『そんなことより聞いてよししよー！　うちのラーメンが、参京区ラーメンロワイヤルで殿堂入りしたんだよ！』

『一位ですらないのかよ!?　どこ目指してるんだ万々歳!?』

『振り返るとなんと！　その電話ボックスは忽然と姿を消していたそうなんです！』

『はいはい……』

各々好きに話していると、呼び鈴が鳴る。

出てみれば大東区の和泉十七夜だった。出迎えるよりも早く、インターホン越しに十七夜は言う。

『東西が分断されかかっている。話をさせてくれ』

切羽詰まった声音を聞くや否や中へ招き入れ、事情を聞いた。珍しい来客にみかづきチームは意外そうな声をあげ、十七夜に追い回された経験のあるかなえは露骨に顔をしかめていた。

しかし事情が共有されると、すぐに全員が表情を引き締める。

『すぐに出るわ。十七夜、瑞乃はどっちへ向かったの?』

『参京区の郊外へ向かうと言っていた』



魔法少女の姿を騙る魔女が現れたこと。その魔女が東西の対立を煽ろうとしており、心当たりのある瑞乃が先行して討伐へ向かったこと。

『早くしないと！ お姉ちゃん、きつとまた無理しちゃう！』

『分かっている。手分けして探すわよ！』

『ワタシたちはこつちを！』

急遽編成された東西連合チームは手分けして参京区の郊外を探し回り、ついにそれらしき巨大な結界の入り口を見つける。見つけたのは鶴乃、やちよの二人組で、別働隊に連絡してからすぐに中へ侵入した。

入り口から道中の使い魔はことごとく倒されており、二人は程なく瑞乃の魔力反応がある地点へ到達することができた。

しかし、到達できただけだった。

『だめえーっ！』

血まみれの瑞乃が使い魔の一体を押し倒し、セキトバくんと呼ばれる飛び道具で自身もろとも跳ね飛ばされる。

使い魔は消滅し、天高く舞い上げられた瑞乃の小さな身体が、弧を描いて結界の地面へ落下していく。

『お姉ちゃん！』

その身体の真下に滑り込み、かろうじて受け止める鶴乃。姉はピクリとも動かず、全身から血を流していた。

とつきに全力の身体強化で防御力を高めたらしく、見た目ほどのダメージはなかった。しかし並の魔女なら一撃で吹き飛ばす威力を受け、完全に意識を失っていた。

すぐに入り口へ向かってとんぼ帰りし、救急車を呼ぶ。やちよは『こっちの方が速い』と言つて瑞乃をひつたくり、直接病院へ担ぎ込んだ。

それからのことを鶴乃はよく覚えていない。

担架に乗せられた瑞乃が無機質なりノリウムの廊下を進み、大きな部屋に運び込まれたこと。じくじくと点滅する手術中のランプがやけに目に残っていること。暗く冷たい廊下のベンチに、仲間たちがうなだれていたこと。コマ落ちした映画のように記憶が欠けている。

『すまない。自分が引き止めておくべきだった……』

『アイツが負ける魔女なんて例外中の例外よ。あなたに責任はない』

『例の魔女には絶対に手を出さないよう周知しておきましょう……』

西と東のトップが暗い顔で話し込んでいたけれど、内容は曖昧だった。

手術の終わった瑞乃は全身包帯だらけでベッドに横たわっていた。峠を越えたので直に目覚めると診断されたけれど、瑞乃は一ヶ月、二ヶ月経つても目覚めない。瑞乃の

ベッドサイドにはお見舞いの品が山のように溢れ、鶴乃が知らない魔法少女たちが数え切れないほど訪れた。

その間鶴乃は、何をしても何を話しても空虚で、動かない姉の手を握っている間だけが唯一、感覚を取り戻せる時間だった。

今日も変わらず、鶴乃は姉の手を握りながらベッドサイドに腰掛けている。

「お姉ちゃん聞いて！ この間大東区から流れてきたすごく強い魔女と戦ったんだ！ みんなピンチだったけど、さっそうと駆けつけた私が炎扇斬舞！ やちよししょーの大ピンチを救ったんだよ、ふんふん！」

姉は目覚めない。

「由比家直伝の子供用全身シャンプー、あれの色違いが夏に出たんだ。久しぶりにお姉ちゃんとお洗いつこしたいな」

目を輝かせて飛びつきそうな話を出しても、鶴乃の声は届かない。それでもめげずに話し続ける姿を、やちよとみふゆは痛ましげに見守り、寄り添っていた。

面会の終了時間に近づき、三人は病室を出る。やちよとみふゆは何を話すべきか分からず、沈黙して病室の廊下を歩いていく。

すると、懐かしい声が聞こえる。

「鶴乃ちゃん？」

「……いろは、ちゃん？」

「どうしたの、ひどい顔だよ？」

環いろはだった。妹の病気は完治し、経過観察が終われば無事に退院できると見込まれている。お見舞いにやってきた帰りに、鶴乃と鉢合わせしたのだ。

やちよとみふゆは顔を見合わせ、気を利かせて二人きりにする。

鶴乃の口はいろはに対して、不思議とゆるくなった。

「お姉さんが、昏睡状態……!？」

「うん。お姉ちゃんの支えになるって誓ったのに、そのために魔法少女になったのに……なんにも、できなかつた……」

いろははそこまで聞くと、鶴乃の右手中指に指輪を認める。以前キュウベえに遭遇して間もなく、いろはも魔法少女になっていた。

いろはは願い事で妹の病気を治し、希望に満ちた明日が待っている。それとは正反対の鶴乃の現状に、いろはは何一つ言葉が見つからなかった。

しかし鶴乃は一步引いた位置のいろはだからこそ、口を開けたのだろう。考えつく限りの弱音を吐き、涙を流し、目がはれぼつた頃には多少心が持ち直していた。

「ぐす、ありがと、いろはちゃん。ちよつとだけスッキリしたよ」

「私に出来ることは、これくらいしかないから……」

「これくらいなんてもんじゃないよ！ 嫌じゃなかったら、またお話聞いてほしいな」  
 鶴乃はいろはと連絡先を交換し、頻繁に話し合う仲になった。しだいにやちよ、みふゆといったみかづき荘のメンバーとも顔見知りになり、同じ魔法少女のよしみもあつてかすつかり馴染んだ。

そうして日々は過ぎ去っていき、昏睡から2ヶ月後。多くの人々が待ち望んだ瞬間が、ついにやってきた。

「つ、るの……？」

「……っ！」

うつすらと目を開いた瑞乃。ずっと聞きたくて仕方なかった声を聞いたとたん、鶴乃の目からとめどなく涙があふれ、もう離さないとばかりすがりつく。

喜びと希望に満ちた鶴乃の泣き声を聞きながら、朦朧とした瑞乃は強く思う。また、迷惑をかけた。

――

恵まれた少女の夢を見た。

少女はお母さんの連れ子で、四歳の頃新しいお父さんに出会った。お父さんとお母さ

んは仲良しで、暇さえあれば熱い視線で見つめ合い、外でもお互いを抱きしめていた。けれど協力して何かを成し遂げることだけは、世界の誰よりも苦手だった。

少女は何か習い事を習うことにした。お母さんはピアノを習わせようとして、大きなピアノを買った。

お父さんは急に大きなピアノが家に届いて、とても怒った。何も相談されなかったから。お父さんはお母さんの首を締めめた。少女の方を指さして、何か必死で叫んでいた。

二人に仲良くしてほしくて、少女はピアノを練習した。やつと音符の読み方を覚えそうな頃、ピアノはどこかに売られてしまった。お母さんは機嫌を悪くして、お父さんはガラスを割った。

少女はテストで悪い点を取った。お父さんは激怒して、お母さんは包丁を投げた。お父さんは血を流して倒れた。少女は指指され、ののしられた。

お父さんはすぐに怒って、お母さんは頭が悪かった。子供を生んで育てる体験は、子供な大人の二人には、難しすぎることであった。少女は何度も指さされ、そのたびに両親は血を流した。

おまわりさんに相談へ行った。けれど少女は恵まれた格好をして、毎日ごはんを食べることができた。おまわりさんは『君より辛い思いをしている子はいくらでもいるよ？』と言って扉を閉じた。お父さんは世間体がどうか叫んで、お母さんを殴った。少

女はまた指さされた。

学校では何も言えない暗い子だった。教科書や机はいつもぐちゃぐちゃで、くさい、きもい、寄るなど言われた。先生は暗い子なんて見えていないようだった。

少女は携帯を買ってもらった。たまたま見つけた小説の中で、主人公はいつも必要とされ、誰かにほめられ、迷惑をかけることがなかった。自分もこうなりたいと思った。

けれど現実は何も変わらなくて、お父さんはお母さんを突き飛ばした。お母さんは机の角に頭をぶつけて動かなくなつた。お父さんは輪っかを天井から吊るして、椅子を蹴つ飛ばした。左右に揺れるお父さんは目を大きく開いて、最期の言葉を少女に贈つた。

『お前さえいなければ』

――

あの頃と何も変わっていない、と少女は考えた。

「もう戦わなくていい、頑張らなくていいから……無理しないで、お願い」

「もう二度と目を覚ましてくれないんじゃないかって、ワタシたちずっと……」

いまだ起き上がれない少女、瑞乃の左右から、やちよとみふゆががりついている。

瑞乃はたとえ生まれ変わっても誰かを泣かせ、迷惑をかけてばかりだ。最愛の妹にそれほど悲しい顔をさせた時点で姉失格だろう。

半分欠けた天井を無気力に見上げながら、瑞乃はただなされるがままだ。医者はまだ意識が混濁しているかもしれないと言っていた。

やちよとみふゆに続き、みかづき荘のメンバーを始め多くの人物が病室を訪れた。かなえ、ももこ、メル、レナにかえで、十七夜、その他顔も名前も知らない匿名の少女たち。口々によかったとつぶやき、多くが安堵の涙を流していた。

「お姉ちゃん。家に帰ったら、ずっと一緒にいようね。ごはん食べて、お風呂入って、同じお布団で寝てさ。もう放さないんだから」

面会時間の終了間際、鶴乃は耳元でそう囁いて、病室を出ていった。

誰もいなくなった個室。消灯時間が過ぎ、点滴の雫が落ちるわずかな音だけが響く病室で、瑞乃はむくりと身体を起こした。

天井だけではなく、どこを見回しても左半分が欠けている。さらに左腕の感覚が完全に喪失していた。

おぼろげな記憶の中で、医者は「すでに完治しています」と言っていたのを思い出す。

「ヤブ医者?」

「それは違うよ」



ベッドサイドテーブルにはいつの間にか白い獣が鎮座していた。白い陶器のような身体にビー玉みたいな赤い目がくっついていて、神出鬼没の宇宙人、キュウベえだった。

「ソウルジェムを見てみるといい。宝石の形態だね」

瑞乃は眠気を払いつつ、ソウルジェムを十数年ぶりに宝石の形態へ変化させる。無数の亀裂が入ったソウルジェムは、一部が亀裂に沿って欠損していた。

「……えっ?」

「ようやく代償の支払いが始まったんだ。欠損した魂に相当する部位が機能不全を起こしていないかい?」

「うん、起こしてる、けど……えっ、あの、何がどうなってるの? あの時間いても分からないって言うてたじゃん」

「輪廻に逆らった魂の行く末を、僕らはずっと観測していた。あの時は分からなかったけれど、君のおかげで興味深い結果が得られたよ。聞きたいかい?」

「お願い……」

キュウベえは瑞乃の身体に起こっている異変を、分かりやすく説明し始めた。

「まず、君の魂はすでに死んでいる」

輪廻のシステムに逆らった反動で、六野かすかの魂は粉々に砕け散った。キュウベえ

がその魂をソウルジエムに変質させると、転生で束ねられた因果が膨大な魔力を生み、砕けた魂を無理やり圧縮形成。奇形のソウルジエムが出来上がった。

「卑近なたとえをするなら、砕けた割れ物をテープか何かで無理につなげ合わせている状態だ。テープにあたる魔力が少なくなれば亀裂が広がってしまう」

「ああ、そういえば」

因果を具象化したあの日も、連日のハードワークで魔力を使いすぎていたあの頃も、どこかでヒビの入る音が聞こえた。魔力が少なくなったことでソウルジエムの亀裂が広がっていたのだ。なりふり構わない先の戦いでその亀裂が深まり、ついには欠けてしまった。

「本来、魔力にそこまでの万能性はない。君が生きていること自体、都合の良すぎる奇跡だよ」

色のないキュウベエの声音に呆れが混じる。少しの間を空けて、

「見ての通り、君の魂にはすでに大きな綻びが出来た。ご都合主義でも維持できないほどのね。そこを起点にして少しずつ欠損していき、いずれ完全に消滅するだろう」

「いずれ、つて?」

「およそ一年。魔力の使いようによっては多少の誤差が出るよ」

「……そつかあ」

そうかい、と繰り返して、瑞乃はベッドに寝転んだ。いびつな形のソウルジェムを指輪に戻し、大きなため息をつく。

余命一年と言われても、瑞乃にさほどのショックはない。もともと諦めた命だった。合計で三十年以上生きて、愛する妹や仲間にも恵まれ、楽しい思いもたくさんした。結局迷惑をかけてばかりだったけれど、悔いはなかった。

しかし後一年の間に、鶴乃だけは普通の少女に戻しておきたい。鶴乃が魔法少女の宿命を負うことだけは、自身の死よりも耐え難いことだった。

「それは無理だよ」

「え？」

が、キュウベえはあらかじめ知っていたように否定する。

「魔法少女の契約は生物の死と同じく、本来は不可逆反応なんだ。これを覆す君のご都合主義は、おそらく大量の魔力を必要とするだろう？」

「そりやそうだけど……」

「さつき言ったとおり、魔力を多く使えば君はより早く死ぬ。契約を白紙に戻すほどの改変は、試みるだけでも即死だと推測できるよ」

「えっ、ちよ、ええっ」

瑞乃は飛び起き、嫌な汗を流しながらキュウベえに詰め寄った。瞳孔が開き、口がカ

ラカラに乾いていく。

「鶴乃が魔法少女の宿命を背負うってこと?」

「そうだね」

「……そうだね、じゃなーい!」

「何をやる気だい?」

瑞乃の壊れたソウルジエムを中心に、因果の光輪が展開。暗い病室が明るく照らされる中、瑞乃は円環に手をつ込んだ。

「私があの日、過労で倒れたのをなかつたことにすれば……!」

瑞乃が倒れたたくさん心配をかけたから、鶴乃が契約を結んでしまった。倒れた事実を消してしまえば契約自体がなかったことになるはずだ。

そう見込んでの行動だったが、びしり、と嫌な音が鳴る。

「いつ……!?!」

ソウルジエムの亀裂が広がっていた。同時に魂が碎ける尋常ならざる激痛が全身に迸る。常人ならショック死しても不思議ではない苦痛。失神の瀬戸際でどうにか持ちこたえ、魔法を止めた。

すると、左腕だけでなく左肩から胴体にかけての感覚がなくなっていた。

「なるほど、因果の具象化だけでも桁違いの魔力を消費するようだね。内容にかかわら

ず、意図的な改変は不可能だ。君にできることはもうないよ」  
今度こそ目の前が真っ暗になった。

瑞乃は鶴乃に普通の少女として生きてほしかった。いつか絶望し魔女化する宿命など背負ってほしくなかった。普通の少女として青春を謳歌し、女性としての幸せを見つけてほしかった。

今やすべては過去形だ。ご都合主義があるからいつでも契約を反故にできると慢心した瑞乃のせいで、鶴乃を救う手段はなくなった。自滅覚悟で改変しようにも、因果操作はかなりの手間がかかる。下手に試して半端な状態で死んでしまえばそれこそ最悪だ。

つまり、瑞乃は最愛の妹に魔法少女の宿命を負わせ、その上早死して悲しませるだけ悲しませて生涯を終えるのだ。

最悪の人生を予見した瑞乃の瞳に、大粒の涙が浮かぶ。

「なんで、なんで……なんでうまくいかないの……私だって頑張ってるのに、鶴乃が大好きで、幸せになつてほしくて、誰よりも愛してるのに……なんで迷惑かけちゃうの……」  
「君が君であるかぎり、ずっとそうだと思うよ。もともと、君に来世はないけどね」

淡々としたキュウベエの指摘が追い打ちになり、瑞乃はしくしくと枕を濡らした。迷惑をかける自分が大嫌いで、向き合うことすらせずに転生して逃げ出した少女の末路

は、とてもあわれだった。

けれど瑞乃は諦めない。

迷惑をかける自分が嫌いなのは変わらないが、それ以上に鶴乃のことが大好きだからだ。

鶴乃は生きる理由をくれた。生きることから逃げた瑞乃に、向き合う勇気を与えてくれた。姉としてこれに報いるまでは、死んでも死にきれない。

「私にはまだ、ご都合主義がある。改変はできなくても、どうにかなる」

自動発動のご都合主義は、周囲の因果へ絶えず干渉し、瑞乃に都合の良い結果を呼び寄せる。この魔法が生きている限り、諦めるのは尚早だ。鶴乃を魔法少女の宿命から解放し、ついでに瑞乃の命さえ救うような都合の良い方法が、どこかに転がっているに違いない。

「そんなものがあるわけじゃないじゃないか」

瞬間、瑞乃の魔法がキュウベエの発した言霊を因果へ変換。キュウベエさえ観測できない謎のプロセスを経て、瑞乃に都合の良い結果を生み出した。

誰にも認知できない因果干渉の恩恵を瑞乃が受けたのは、翌日の昼のことだった。「瑞乃さん。あなたに、会ってほしい人がいるんです」

見舞いに訪れたその少女は、瑞乃が最初に黒タマ中華丼を提供した力のない魔法少女だった。

少女は病室の入り口にととて駆け寄り、外で待っていた人物を招き入れる。

瑞乃よりも数センチ低い小さな体躯。腰まで伸びた赤みの強い茶髪は内向きのカールがかかっている。年の頃は小学生の高学年程度だろう。

その女の子はどこか人を食ったような笑みを浮かべ、鈴のような声を鳴らす。

「初めまして、由比瑞乃。わたくしは里見灯花。わたくしたちマジウスと一緒に、魔法少女の宿命から解放されよう！」

――

由比瑞乃は神浜市の最古参にして最強の魔法少女だった。力のない魔法少女には東西の区別なく手を差し伸べ、多くの少女たちに慕われた。強力な神浜の魔女や使い魔の多くを単身で撃破し、一般人の被害を防いできた。まさに誰もが理想とする魔法少女の鑑だった。

しかしある日を境に昏睡状態に陥り、数カ月の眠りについてしまう。

ようやく目を覚ました翌日――

由比瑞乃は失踪した。

――

お姉ちゃんは何でもできる。

妹のためなら、たとえ妹が望まないことであろうと、笑顔が曇ることがあろうと、お姉ちゃんは何でもできる。

そして由比瑞乃は、お姉ちゃんでありたかった。



## 第12話

由比瑞乃は長い昏睡から目覚めた翌日、忽然と姿を消した。ベッドの上には妹から贈られたオレンジ色の髪紐が残されていた。

由比家は警察に搜索願を届け、鶴乃を始め瑞乃と近い魔法少女たちは総出で神浜中を探し回った。しかしいくら聞き込みをして、魔力を探って回っても成果はなく、ただただなぜ、どうしてと少女たちは繰り返すようになった。そのうち神浜市内からキュウベえまで姿を消したが、誰も知ったこつちやなかった。

そんなある日、失踪から一ヶ月経った頃のことだ。

どこか暗い雰囲気 of 漂うみかづき荘に、一本の電話がかかってきた。

『もしもしやちち？ 私だよー』

やちよは受話器を握りつぶしそうになった。あふれでる感情と言葉を必死で抑えつけないから、震える声で対応する。

「今、どこにいるの？ 身体は大丈夫なの？」

『ごめん、どっちもなんとも言えないって感じ』

「なによそれ……」

『やちよ』

聞いたことのない真剣な声音で、瑞乃は親友の名を呼んだ。やちよは呼吸が止まり、次に考えていた質問も文句もすべて吹き飛んでしまった。

その空白にねじ込むように、瑞乃は告げた。

『一生のお願い。鶴乃を一人にしないであげて』

何を言い返す暇もなく通話が切れ、やちよはゆつくりと受話器を置いた。一番そばに居なきやいけないのは、あなたでしょうというつぶやきは、誰にも聞かれることなく空気に溶けた。電話台の前へたりこんだやちよは、後からやってきたももこに助け起こされるまで動くことができなかつた。

『私はお姉ちゃんを信じてる！』

件の妹、鶴乃は表面上とても元気一杯だつた。瑞乃が寝込んでいる間に猛特訓を重ね、チャイナにカブれた父親と母親、祖母と共に人気店の万々歳を回している。学校では友だちも多く、勉強では常に学年で一番、体育ではヒーローじみた活躍をするスーパー少女として大人気だつた。

けれどやちよたちは、そんな鶴乃を見ていられない。

『えへへ……お姉ちゃん……』

鶴乃はやちよとみふゆの前でだけ、魂の抜けたような顔を見せることがある。手首に

は瑞乃が愛用していた髪紐をミサングのように巻いており、それをじつと見つめながら、うわ言のようにお姉ちゃんと言っていると繰り返すのだ。

鶴乃はきつと瑞乃が戻ってきてくれると信じている。それでも生まれたときから、ともすれば両親よりも深く懐いてきた最愛の姉を失って、平気なはずがなかった。やちよはみかづき荘チームの一員かつ大切な友だちとして鶴乃に寄り添い、けっして一人にしなければならなかった。

親友の失踪と、それに傷つく鶴乃とやちよ。これを受けて独自の調査を進めているのは、梓みふゆだ。

「……が噂のポイントですね……」

神浜市内、北養区の山のふもと。駅にほど近いここには業務用スーパーも経営しており、買い物客の波ができていく。みふゆは触角アホ毛をレーダーのように動かしながら、スーパー周辺の雑踏に瑞乃の影を探した。

みふゆは神浜市内に根付く噂話に目がない。都市伝説じみた噂をフィールドワークで集めて回り、神浜ウワサファイルにまとめるほどのオカルトフリークだ。いつかのやちよと瑞乃が河原で盛っていたことも、フィールドワークの聞き込みから得た情報だった。

その情報網に引っかかったのが、『マギウスの翼』と呼ばれる秘密組織だ。

魔法少女の救済、宿命からの解放を標榜する謎の組織。みふゆはこの組織の頭目こそ瑞乃だと予想している。

『魔法少女になったことをなかつたことにする』

瑞乃はかつて、やちよとみふゆを実際に宿命から解放しようとした。理由は不明だが、あの力を旗頭に人員を集め、組織を作ってひそかに活動している。組織の拠点があると噂されているのが、北養区の山を中心とした地域だった。

ただし情報の信憑性は都市伝説と変わりない。落ち込む鶴乃たちにぬか喜びの絶望を与えないために、一人でやってきたのだ。

万が一噂の通りなら、どうして失踪したのか、組織を設立した動機は何なのかを聞き出す。それから力づくでも戻ってきてもらう。みふゆは決意を瞳にみなぎらせ、買い物客へ視線を巡らせつつ山のふもとを歩いて回る。

その熱意が報われたのは、搜索を開始して三時間後。すでに日も落ち夕飯の材料を抱える客が増えだした時間帯だった。

「うにゃー！　なんでこの天才がこんな雑用しなきやいけないの!？」

「噂の中華料理が食べたーいって言い出したの、みとつちじゃんね？　買い出しくらいいいじゃない」

「良くない！　かすかは上司への敬意が足りてないんだよ！　今度から食材は業者に発

注するからね！」

「え、いいの？　こそーつとカゴにお菓子放り込んでたの、できなくなるよっ！」

「き、気づいてたの!?!」

「ホントにやってたんかい道理で高くついたわけだ」

「カマかけ!?!　この魔法おばさんっ！」

「やかましいよキュウベえの擬人化あ！」

満載のレジ袋を右手に三つ抱え、小学生程度の少女を連れた人影。パーカーのフードを目深に被り、巧妙に魔力が隠されていてみみふゆには丸わかりだった。由比瑞乃その人だ。

認識した瞬間に湧いたのは驚きで、次に元気な様子を見て安堵。しかし鶴乃の光を失った目つきと、やちよの沈んだ表情が頭をよぎり、怒りが湧いた。連鎖するように喜び悲しみ寂しさが湧いて、制御の利かないままみふゆは身体を動かしていた。

むすつとする少女をどうどうとなだめる瑞乃の前に、ゆらりと立ちふさがる。

「久しぶりですね、みつちゃん」

「うにゃ？　梓みふゆだ」

「……私、瑞乃違うネ。しがな中華料理人アルヨ」

「変なキャラで誤魔化そうだったって無駄です。とりあえず、みかづき荘までご同行いた

「だけますか？」

「……」

瑞乃はフードをさらに深くかぶって、そっぽを向いた。みふゆのアホ毛が鬼の角よろしく逆立った。

「あなたって人は……」

人目の多いスパーの前でなければ、問答無用で変身し幻覚の魔法で捕獲していただろう。みふゆはごちゃまぜになった感情が暴発しないよう、必死で平静を保つ。

すると膠着した二人の間に、小さな影が割って入る。

「本当だよ、梓みふゆ」

瑞乃と言い合いをしていた少女だった。どこか見覚えのあるつぶらな瞳でみふゆを見上げ、にっこりと微笑んだ。

「この人の名前は六野かすか。参京区の裏ボスと言われた由比瑞乃とは一切関係ないよ。ね、かすか？」

「……うん」

「どういうことですか。あなた、みっちゃんの何なんですか」

「だーかーらー、みっちゃんじゃないんだってば。ちゃんと神経つながってる？」

割って入ってきただけでなく、会話がまったく噛み合わないことにみふゆの怒気が高

まっつていく。

両者がにらみ合い次第に空気が張り詰めていく中、先に引いたのは少女の方だった。いいことを思いついたとばかり、小さな両手を合わせ——ようとしたりと、レジ袋が重すぎて腕が動かなかった。

頬を膨らませながら、少女は改めて言う。

「場所を変えて話そっか。みかづき荘のメンバーはいつか勧誘するはずだったし、ちようどいいよね」

——

みふゆが招かれたのは山中の電波望遠鏡だった。表には見覚えのあるロゴマークが刻印されており、つい最近足繁く通った『里見メデイカルセンター』を連想する。その想像の通り、少女は里見メデイカルグループ代表の娘で、電波望遠鏡は系列企業の資産の一つだった。

施設の中には謎の黒いローブをまとった少女たちの姿があつた。ローブの少女たちの中には瑞乃のお見舞いに来っていた顔ぶれと一致する者も多かった。

やがて広々とした談話室に通される。テーブルをはさみ、瑞乃とみふゆは隣同士で、

対面に少女が座る。うつむいた瑞乃の左手をみふゆはずつと握っていた。

「改めて、初めまして梓みふゆ。わたくしは里見灯花。マギウスの一人だよ」

「梓みふゆです。マギウスとは、今噂になっていいる魔法少女救済のための組織、でいいのでしょうか」

「そのとおり！　話が早くて助かるよ。詳しく言うとなね——」

灯花はマギウスと、その手足となつて働く実働組織『マギウスの翼』について詳しく語った。

灯花を含む三人のマギウスの固有魔法を使い、今の神浜市では魔女化を回避するシステムが稼働している。このシステムを世界中に広げ、魔法少女を魔女化の宿命から解放するために活動するのがマギウスの翼の仕事だという。

システムの規模拡大には膨大なエネルギーを要する。屋敷の地下に眠る特殊な半魔女を魔女化させた際の相転移エネルギーを使い、システム拡大に使う。エンブリオ・イブと呼ばれる半魔女は神浜市内の穢れや人々の感情エネルギーを回収し、肥大化していずれ魔女になる。これを促進するため、マギウスの翼は有望な魔女を飼育、管理し被害者たちから負の感情エネルギーを回収する。同様の手順でウワサと呼ばれる特別な怪物も使い、人々からエネルギーを回収していくという。

「魔法少女を救うために、非道へ落ちるといいうわけですか」



みふゆは変身し、チャクラムを灯花へ突きつける。

眼前の刃をきよとんと見つめながら、灯花は首をかしげた。

「何か気に障った？」

「目的には共感できません。非道な手段も、魔女化の恐怖を思えば許容せざるを得ません。ですが……みつちゃんを脅迫してこんなことに加担させるのだけは、絶対に許せない」  
「脅してないよお！ きちんと一から説明して納得したから参加してくれたんじゃない  
！」

「……えっ？！」

「もう、早とちり！ 前頭葉動いてないんじゃないの？」

灯花の煽りも耳に入らない。みふゆは今日一番の驚きで固まりながら、うつむいたままの瑞乃を凝視する。

両手を上下にばたばたさせている灯花の抗議を受け、ひとまず変身を解くみふゆ。

ぼつり、と瑞乃が切り出した。

「……みとつち」

「今さらなんですがみとつちって誰です？」

「さと『みと』うかだからみとつちなんだって。シナプス焼き切れたネーミングセンスしてるよね」

「それ褒めてんの貶してんの？　じゃなくって、もうー！」

思わずつつこんでしまった瑞乃は頬を膨らませ、灯花に「プライベートな話するから、ちよつと席外してくれない？」と言った。灯花は「仕方ないにやー。晩ごはんの時間もあるから、あんまり長引かせないでね」と答え、談話室を出ていった。

広い部屋にぽつんと残された二人は、しばし沈黙してソファに身を沈めていた。

瑞乃はみふゆの記憶よりも小さく、弱々しい。色素の薄い茶髪のサイドポニーは失われ、肩口で切りそろえられている。

みふゆは不安に揺れる瞳で瑞乃に詰め寄り、口火を切った。

「信じられません。みつちゃんはこの様な悪いことする人じゃないじゃないですか。誰にでも優しくして、みんなを助けるヒーローです。関係のない人たちを巻き込むようなやり方なんて選ぶはずありません」

「みつぷ」

「きつと騙されてるんです。こんなこと止めて、西に帰りましょう。やつちゃんも鶴乃さんも、みんな心配——」

「みつふってばー！」

瑞乃の右手がみふゆの肩を激しくつかむ。フードの下からのぞく泣き笑いのような表情に、みふゆはハッと息を呑む。

「褒められたやり方じゃないって分かってる。鶴乃のお姉ちゃんとして恥ずかしい自分勝手な方法だつて。だから私はここにいるんだよ。由比瑞乃じゃなくて、六野かすかとして」

マジウスの目的はともかく、手段はテロリストのようなものだ。最強のお姉ちゃんとして選んではいけない手段だつた。鶴乃にとても顔向けできないから、瑞乃は姿を消して、六野かすかとしてここにいる。

「私は死ぬことも魔女になることも怖くなかった。だけど鶴乃が私のせいで宿命を負ったことだけはやるせなくて、すつごく怖い。鶴乃を解放するためなら、私はなんだってやるよ」

「ま、待つてくください」

みふゆには腑に落ちない。

鶴乃が魔法少女になったことがシヨックなのは理解できるが、だからといってマジウスのような非道に手を貸す理由はない。なぜなら、

「ご都合主義の魔法があるじゃないですか！」

かすかにはいつでも鶴乃を宿命から解放できる手段があつた。実際にやちよとみふゆを宿命から解放しかけたこともある。鶴乃一人を救うならそれで事足りるはずだつた。

指摘を受けたかすかは唇を噛み、右手で左腕を抑える。大きな過ちを悔いているようだった。

ふと、みふゆは左腕に目が行く。先ほど握ったときには不自然なほど動きがなく、死体のように冷たかった。次いで、かすかの左目の瞳孔だけが完全に開ききつているのも気がつく。

「失礼します！」

左手を拝借すると、糸の切れた人形のようにだらりとしていた。

「……いつからなんですか」

「目が覚めた後」

「お医者様は身体に異常はないと」

「異常があるの、魂の方だから」

かすかは達観した顔つきで指輪を宝石の形態へ変化させた。六年の付き合いがあるみふゆも初めて見るかすかのソウルジェムはひび割れ、亀裂に沿って一部が欠損している。

魔法少女の命そのものであるソウルジェムがこれほどに傷つき、欠けている。現実離れた光景にみふゆは絶句し、次なるかすかの言葉で目の前が真っ暗になった。

「私、もう長くないんだ」

かすかは一から事情を語った。

転生を願ったこと。その代償に魂が砕け、魔力で無理に延命していたこと。度重なる負荷で綻びが生じ、余命はあと一年もないこと。多大な魔力を要するご都合主義の改変が、使えなくなったこと。

「みつふの言った通りだったね。いくら強力な能力があっても、中身がダメダメじゃ意味がない。前世も今生も失敗ばかりで、周りに迷惑かけっぱなしだったよ」

でも、と続ける。

「鶴乃にかけて迷惑だけは……お姉ちゃんとしてのけじめだけは、投げ出しちゃいけない。鶴乃が一生魔女化しない都合のいい手段があるっていうなら——」

お姉ちゃんは何でもできる。

かすかはとつくに覚悟を決めていた。失敗と空回りの繰り返しで心が折れたら転生を願う。頑張ることはあっても心のどこかで逃げ道を探している自分が大嫌いだった。けれど残された命と手段を前にして、やつと逃げないことを決意したのだ。

互いに親友と呼んではばからないやちよとみふゆとも違う、世界でたった一人の妹。生きることを教えてくれた鶴乃のためにようやくかすかは無能なカスを卒業した。

お姉ちゃんのけじめを通すためなら、どんな非道であろうと受け入れる。妹の笑顔を曇らせてでも幸せを願う。

「……もしもワタシがこのままみかづき荘に戻って、鶴乃さんに全部伝えたらどうしますか？」

「……なんでもとは言ったけど」

視線を泳がせ、ぐつと言葉を詰まらせて。

「みつふと絶交するのは、やだなあ……」

すべて諦めたような、弱りきった微笑み。

六年間の付き合いで二度目に見る、最強の親友の弱い一面だった。やちよのピンタで立ち直ったあの時とは違い、かすかは自分の弱さに押し潰されそうになっている。

やちよならまた叱咤するかもしれない。鶴乃なら、他のみかづき荘のメンバーなら——しかしここにいるのはみふゆだけで、選択肢もまた一つだけだった。

「まあ、もともとマギウスの翼には入るつもりでしたからね」

寄り添うこと、である。

「えっ」

「魔法少女の救済。手段にはあまり感心できませんが、年長者としてひと肌脱ぐのも悪くありません」

かすかの身体を優しく抱いて、耳元に口を寄せた。かすかの身体は驚くほど華奢で、今にも崩れて塵になりそうに思えた。

「一人で背負うのは終わりです。あなたの罪も苦しみも、ワタシと一緒に背負います」  
「みつふ……」

「改めてよろしくお願いしますね、かすかさん」

かすかは唇を噛み締め、溢れ出そうとする感情を全力でこらえた。お姉ちゃんの意地を通すために何でもやると決意した。たとえ親友の前だろうと、けつして弱い姿は見せない。けれど虚勢を張れるほどの余裕はなくて、弱々しい力でどうにか抱き返し、「よろしく」と掠れ声で伝えるのが精一杯だった。

こうしてマギウスの翼に西の有力者二人が加入。由比瑞乃に続いて梓みふゆまで失踪したことで、神浜市内にはささやかなみのような予感が広まった。

ただならない何かが起ころうとしている、という予感である。

――

その予感が現実のものとしての的中するのは、半年後のことだった。  
「鶴乃ちゃんたちは私のこと、覚えてるかなあ……」

妹を探す一人の少女。

彼女がある店ののれんをくぐったとき、虚しい喜劇の幕が上がる。

## 後編

## 第13話

マジウスおよびマジウスの翼はテロリスト集団である。

魔法少女を解放する目的自体は宿命に絶望している多数に支持されよう。しかしそのために事情を知らない魔法少女たちや魔力のない一般人まで巻き込み、エネルギー源として利用する点は、客観的にはテロと大差ない。したがって組織のトップにあたるマジウス三人は、極悪非道冷酷無比を極めた狂人といっても過言ではない。

そんな狂人の一人に最近スカウトされた少女、六野かすかは固く決めていた。自分が組織に身を置くのは妹の将来を守るためであり、非道な集団に心を開くことは決してない。構成員同士をつなぐものは利害関係のほかなく、絆、友情、信頼などと甘い概念になびくことはあり得ない、と。

そのように決意した当初から三ヶ月経った春先。

食卓に着いたかすかは眉をひそめた。

「みとつち、さすがに。今回の味付けはホントに特別だから、いいかげんピーマンどけるの止めな？」



「いやっ！ 何食べようとわたくしの勝手だもん。大体、好き嫌いはダメなんて時代遅れだよ。今はサプリとかいろいろ発達してるんだよ？ 栄養学的に考えても、私がピーマンを食べないことに問題はなによね」

「栄養学も産官学もあるかい！ 食べ物を残すことにそこはかたない罪悪感を抱く、その心が重要なのっ！」

「そんな心天才は知りませーん！」

「貴っ様ア！」

「また灯花とかすかが荒ぶってるよ……」

「ディナーの時間くらい静かにしてほしいヨネ」

かすかの隣に腰掛けるマギウスの一人、里見灯花。メインおかずのチンジャオロースから器用にピーマンを摘出しており、作り手のかすかにお小言を言われている。もう一方の隣に掛けるマギウスの翼幹部、梓みふゆは「まあまあ」と困り顔でなだめにかかった。

対面に座ったマギウス、柊ねむとアリナ・グレイは料理をもさもさ頬張りながら、いつもの光景に呆れているようだ。

頬を膨らませた灯花は、お箸でびしっと対面のねむを指し示す。

「ほら、ねむだってピーマン残してるよ!？」

「……はあ、灯花。君の目はいつからただの節穴になってしまったんだい？」  
「たっ、食べてる!？」

眠たげな半眼で冷ややかに灯花を見返しながら、プロの手腕によるチンジャオロースをピーマン含め口に運ぶねむ。信じられないように目を丸くする灯花に対し、かすかはにやりと口元を緩める。

「ねむりんはみとつちと違つて偉いなー、すごいなー。にやーにやー言うだけの天才とは違うよねー」

「当然だよ。今年で十二歳にもなるのに、野菜の一つ食べられないようでは、一組織の頭目としてあまりに情けない。灯花、参考までに教えてくれるかい？ 親の敵みためにピーマンを毛嫌いし、料理人の意志を無下にするときの気持ちをもっとも、合理性に縛られた君の哀れな語彙力で表現できればの話だけだね」

「う……うう……!？」

かすかのリードにすかさず最高の煽りでもってねむは答えた。好き嫌いの一点で見事なマウントを決め、「むふっ」とドヤ顔になっている。

これを受けた灯花は餅のように頬を膨らませ、ふるふる震えたかと思うと、  
「天才を舐めないでよね! はむっ」

お皿の端によけたピーマンを一つつまんで、口に放り込む。しばらくの間、まるで爆

発物でも口に入れているかのようにぎゅつと目を閉じて口を動かしていたものの、ごくりと喉を鳴らしてから一言。

「お、おいしい？ おいしいよ、かすか！」

新天体か新元素でも発見したような喜びようで詰め寄ってくる灯花に対し、かすかは笑ってその頭を撫でた。みふゆはくすりと微笑んで、ねむはちよつとだけ口を尖らせて、アリナは我関せずとばかり食事を続けている。テロリスト集団マギウスの翼とそのトップによる、いつもの食事風景である。

（いつもの……？ あれれ？ テロ屋ってこんなもんだっけ？）

どこかイメージと違う。

かすかはふと違和感を覚え、灯花の笑顔を眺めながら、ここ数ヶ月の記憶に思いを馳せた。

――

灯花との出会いは病院だった。魔法少女解放の計画を発案した彼女は、人員を集めるため神浜市の有力な魔法少女たちを勧誘しようと考えた。父の所有する里見メディアカルセンターに、人材たるかすかが運び込まれてきたのはその矢先のことだった。

スカウトを受けたかすかは二つ返事で了承し、それから少し経って梓みふゆも合流。二人は灯花が父親のコネを使って用意した、中央区東寄りの高級マンションに同棲することとなった。

それからというものの、灯花はかすかとみふゆの部屋にしばしば押しかけるようになった。目的は組織運営のための打ち合わせ——ではなく、かすかの料理目当てである。みふゆが加入した日にかすかが振る舞った中華料理は、病院食に慣れた二人に合わせ若干薄めに調整された味付けが奏功し、見事に灯花の味覚を撃ち抜いていた。

するとある日、かすかは灯花の犯行現場を目撃してしまう。

『ピーマン嫌いとかベタな子供かっ！』

『子供じゃないもん！』

とても器用な手付きでチンジャオロースを爆弾処理している灯花は、かすかに猛然とそう言い返した。

かすかもプロの端くれだ。どんなに力を入れた料理であろうと、客の都合でお残しされた経験は幾度もある。これに営業スマイルでありがとうございませと応えることは容易だった。

しかしかすかはもうプロではないし、何より灯花は客ではなかった。

『お残しは、あかん』

ゆえに、ここから灯花とかすかの戦争が始まったのである。

味の問題ではなくもはや生理的にピーマンを受け付けないと主張する灯花と、自分の料理が好き嫌いなんぞに負けるはずがないと自負するかすか。灯花のお箸の進み具合や表情から好みを研究し、意地でもピーマンを食べさせるために様々な味付けを試行錯誤した。灯花を招いてピーマンが残されるたび、かすかは食べ残しを噛み締め敗北の苦味を味わった。

そうして数カ月経った今日、やっと勝利したのだ。

灯花の味覚、そして子供が嫌いそうな野菜ランキング万年首位との疑惑もあつたりなかつたりするピーマンに勝利した。

もちろん、かすかだけの力ではない。

『ねむりん、ありがとう！ 私やりとげたよ！』

『どういたしまして。僕もいろいろと学べたよ』

対面のねむりに感謝と勝利のテレパシーを飛ばす。ねむはゆつくりとお箸を進めながら、「むふつ」と笑みを深めた。

『これがマウントを取る、ということだね。ただの低俗なスラングかと思っただけど、経験してみると存外気分がいい。癖になりそうだよ』

『う、うん。やりすぎはさすがにだよ？』

『分かってるよ』

ねむの援護射撃があつてこそその成功だろう。

ねむは弱冠十二の身ながら、ネットに投稿した小説が出版されるほどの天才作家であり、弁舌が立つ。その語彙力に目をつけたかすが、こう言つたのだ。灯花にマウントを取つて、と。

小説の投稿などは灯花に任せきりだったので、ねむはそういったスラングに疎い。自分の優位性を相手に押し付けあたかもマウントポジションを取つたかのような優越感を得ることだとかすかに教えられ、実践したのが先程のことだ。

「むふっ」

「ねむ、どうかしました？」

「いいや、なんでもないよ」

思わず漏れ出たような笑みだった。みふゆに指摘されすぐに無表情へ戻つたもののかすかはこの子大丈夫かしらと不安を覚える。

(私は恐ろしいマウンティストを生み出してしまったかもしれない……)

おそらく将来犠牲になるであろう灯花に念仏を捧げつつ、ごまかすようにアリナへ視線をやる。

「と、ところで。グレイ氏が今日みたいな集まりに来てくれるのは意外だったな」

「アリナが来たら何かプロブレムでもあるワケ？」

「いやいや、ただいつもビジーなんだヨネ、って言うから。意外だったってだけ」

「あつそ」

会話が途切れる。

一切踏み込んで行かないかすかの様子に、灯花、ねむ、みふゆは食事の手を止めて目をぱちくりさせている。かすかは基本的にノーガードで懐に突っ込んでインファイトを仕掛けるようなコミュニケーションを得意としているので、一歩引いたようなアリナへの対応は意外だった。

わずかに温度の下がった食卓をごまかすように、かすかはしばし宙に視線を巡らせて、ねむへ水を向ける。

「そ、そうだ、ねむりん。この前おすすめしてくれた小説読んだよ」

「僕も例のウェブ小説を読んだんだ。この后感想会をしようか」

「ふん、そっちが感想会ならこっちは勉強会だよ。みふゆ、今日はびしばししごくからね」

「悪いケド、みふゆのパーフェクトボディはアリナがリザーブ済みなワケ。アナタは一人でゴーホームするといいいヨネ」

「す、すみません灯花。先約なので……」

「うにゃー!」

お残しせずに食事を平らげた五人は、それぞれ食後の時間を過ごす。かすかはねむとシンクに並び立ち食器を洗い、みふゆはスケブを抱えたアリナに別室へ引きずり込まれ、一人残された灯花は「なんでわたくしがこんなこと」とブツクサ言いながらねむの隣で食器を拭く係に回る。かすかは唯一苦手なアリナ、もといグレイ氏が姿を消したのでほつと息をついた。

テロリスト集団マジウスの翼と、頭目のマジウス五人による、ありふれた夜の一幕だった。

――

北養区、電波望遠鏡。山中に設置された巨大なパラボラが天に向かって口を開け、怪獣のように鎮座している。その基部にあたるオペレーティングルーム、スタッフ控室、地下の空洞などがマジウスの翼の拠点だった。

電波望遠鏡を囲むフェンスの向こう、怪獣の足元に、黒いローブをまとった少女たちが一堂に会している。部屋には到底入り切らない人数だった。翼を模したロゴのあるフードを深くかぶり、一様に顔を隠している。



彼女たちは顔と名前を明かさない。魔法少女の解放も、そのために魔女やウワサと呼ばれる怪物を利用することも、傍から見れば狂気の沙汰だ。もともと力の弱いこともあって、身元がバレることは死活問題になる。

そんな彼女たち『羽根』の前に立ち、堂々と振る舞う少女たちが五人。

「と、いうわけで、計画は順調に進んでるよ。春頃には計画を本格始動できそうだから、この調子で頑張つてね。それじゃ、今日もはりきつて行こー！」

そのうち三人は計画の要、マギウスだ。里見灯花が羽根たちに檄を飛ばすと、羽根の少女たちはそれぞれの持ち場へと散っていった。ねむ、アリナは横に立ってその様子を眺めており、マギウスの三人から一步引いた位置にみふゆとかすかが並んでいた。かすかは『六』の刺繍が入った黒いローブをまとっている。

「……計画は順調。僕たちが勧誘を始めてから一月足らずで人員は五十名を超え、エネルギー回収の手はずが整いつつある。改めて、すさまじい影響力だね。かすか」

「わたくしの見立てだと、人員の確保にはもつと時間がかかる予定だったのに。電波の広告も必要なかったかにゃー」

「それは良かったよ」

かすかは複雑な気持ちで笑みを浮かべた。

マギウスの計画には人手が必要だ。有力な魔女や使い魔を保護し、飼育して人々の負

の感情エネルギーを回収させる。ねむが創造したウワサと呼ばれる化物を管理し、感づかれないよう保守する。その他、地区ごとの支部と連絡を取り合い組織の秘匿を守るなど、業務は多岐に渡る。

こういった活動を担う人員を募るため、灯花は策を打った。電波望遠鏡から魔法少女にのみ届く電波を発し、神浜だけでなく市外からも魔法少女を集める。集まった魔法少女をスカウトし、ついでに電波で魔女も集まってくる、という一石二鳥の方法だ。

この策の実行に前後して、加入したのが六野かすかだった。

「かすかさんの役に立ちたい、って急に押しかけて来たんだもん。びつくりしちゃったよね」

「私だってびつくりだったわ」

そして後を追うように多数の羽根たちが加入した。

彼女たちはかつて由比瑞乃に助けられた魔法少女たちだった。グリーンフィードを安価に融通してもらい、戦い方を教えられ、一人前となった少女たち。瑞乃と同じように、彼女たちが自分たちと似た弱い魔法少女たちを手助けしだすと、ねずみ算式にかかわりが増えていき——通称『よわよわ魔法少女連絡網』が出来上がる。

西を中心にほそぼそと勢力を拡大してきた連絡網は、発祥となった由比瑞乃の昏睡と失踪を察知。行方が知れるや否や電波望遠鏡を訪ね——マギウスの目的、組織のことを

知るなり翼へ加入した。

その結果計画が加速。春先には神浜全土での活動基盤が整い、本格的にエネルギーを回収できる予定だった。

「さて、じゃあ私も出ようかな」

かすかが外へ足を向ける。魔女の捕獲、ウワサの管理、弱った魔法少女の保護と勧誘。人員がいくらあろうと、計画実現のための仕事はまだ多い。

「あ、じゃあワタシも……」

「みふゆは別行動！ かすかの力なら手助けなんて無駄でしょ！」

「貴重な戦力を遊ばせておくつもりはないよ」

「そ、そんなあ」

マジウスの指摘を受け、みふゆのアホ毛がしょんぼりとしおれた。

一人では何かと無茶をやらかすかすかを心配してのことで、実際かすかと行動を共にすることも多いが、毎日それを許しては無駄極まりない。今回は別行動が強制される。

灯花とねむは電波望遠鏡の内部へ引つ込み、かすか、みふゆ、アリナの三人は神浜の町へと散っていく。とある一日における、マジウスの翼の活動が始まったのである。

日中は魔女や使い魔の動きが少ない。もともとオバケじみた存在だからか、元になった魔法少女たちにとって学校にいる時間帯だからか、活発になるのは放課後にあたる正午以降からだ。

しかしマギウスが電波望遠鏡から広告を出すと、その常識が一変。魔法少女だけでなく市外の魔女まで神浜に集まりだし、ほとんど一日中魔女の気配が町にあふれるようになった。

マギウスの翼にとっては好都合だ。増えた魔女たちが神浜の町で呪いを振りまけば負の感情エネルギーが増幅し、半魔女のエサになる。数の増えた魔女に魔法少女達が苦戦し、さらに魔女が増えればもつといい。

「鶴乃に知られたら絶縁モノだよ……」

自己嫌悪を深めながら、姉を名乗れない愚かなかすかは魔女を狩る。瞬殺ののち結果が消え、グリーンシードと共に廃墟の中へ放り出された。

グリーンシードは穢れが溜まればもう一度同じ魔女が生まれる。そうでなくとも溜め込んだ穢れはイブのエサにできる。すぐに倒されかねない貧弱な魔女は、こうして種の状態でストックしておく方が効率がいい、とは灯花の言だ。

『かすか様！ 聞こえますか！』

「はいよ、どうしたの？」

グリーンフィードを懐に忍ばせると、テレパシーが入る。羽根の声だ。

魔力を探ってみれば、近くで戦っているらしい。ひどく焦った声だった。

『今、近くで魔女に対応していたんですが……』

「うん」

『鉢合わせしたアリナ様が超エキサイトして手に負えません！ 助けてください！』

「ええ……」

もしテレパシーではなく電話なら「あー、電波が、ぎぎー」と小芝居でもしていたかもしれない。げんなりしたかすかは肩を落としながら、仕事だからと自分に言い聞かせ現場へ急行する。

かすかの現在地からそう遠くない廃墟の一角に結界の入り口を見つけ、中へ入る。サイケデリックな魔女結界の中身はやはりけばけばしく穢れに満ちたデザインをしていたが、戦況はそれ以上に混沌としていた。

「アハハハッ！ サイツコー！」

「ひえー！」

「どういう状況!?!」

結界の主と思しき強力な魔女が一体と、なぜかもう一体の魔女が大喧嘩している。そ

こへアリナが嬌笑を上げながら魔力のレーザー掃射を浴びせかけ、三つ巴の大決戦。羽根たちはその余波を受け、悲鳴を上げて右往左往している。

三体の羽根たちを慌てて抱え結界の隅へ移動し、戦況を問う。

「あの魔女が強すぎたので、近くのアリナ様に救援を頼みまして……」

巨大な水がめを頂点に掲げ、本体へ絶えず水を掛けているあの魔女。イキガミの魔女というらしい結界の主と戦っていたところ、苦戦してアリナに救援を頼んだ。

駆けつけたアリナは魔女のデザインに至極感嘆し、「アメージング！ 捕まえてブリードしたいヨネ！」とはしやぎつつ突貫。固有魔法であるキューブ状の結界ですぐさま捕獲しようとした。

しかし二十七個のキューブはすでに他の魔女や使い魔で埋まっていた。そこで「バトルさせて強い方をブリードしてアゲル！ アリナの作品にふさわしいのはどっちなワケ!？」と、手持ちの魔女の中でもっとも強力な一体を解放。大決戦と相成ったらしい。「やっぱりグレイ氏、頭おかしいよ……」

頭を抱えた。ため息が抑えきれない。

かすかはアリナが大の苦手だ。かすかも経験が長いので魔女や使い魔をかつこい、かわいいかもと感じたことはあるが、ヨダレを垂らす勢いでエキサイトするアリナは異次元の域にある。

アリナは立体から絵画まで様々な芸術作品を発表する新進気鋭の天才アーティストである。やっぱりアーティストってどこかズレた人が多いよね、と偏見じみた考えも手伝い、かすかは最大限の距離をとってグレイ氏としか呼べないほどだ。

しかしいくら苦手な相手とはいえ、仕事となれば話は別だ。

羽根たちを手早く結界の外まで送り届けた後、エキサイトしているアリナの元へと跳躍する。

「アツハハハハハ！」

「アハハハハハ！」

「……何か用？」

「あ、いや」

ついついアリナにつられて大笑いすると、怪訝な顔を向けられる。

かすかは気まずさで顔を赤くしながら、一つ咳払い。

「遊びすぎ。羽根の子たちも巻き込まれて何人かケガしてたよ」

「ダカラ？ アリナの的にノープロブレムなんですケド」

「上司が遊び呆けてたら超プロブレムなんですケド。造反で人員が減ったら計画実現が遠のくよ。それでもいいの？」

「……チツ」

舌打ち一つに万感の不满を込めて、アリナはひとまず引き下がった。争う二体の魔女から距離を取る。

かすかはほつと息をつきながら、ロープの下の雷紋模様をバチバチと帯電させた。

「二体とも種にしちやつていい?」

「イキガミの方は残して。もう一体はブレイクしていいカラ」

「はいはい」

アリナの指示通りイキガミでない方にかすかが手をかざすと、閃光。爆発的な輝きで結界が余すところなく白に染まる。

『神様の手違い』

続いて大樹を焦がすどころか灰に変えうる山吹色の雷光が天から降り注ぎ、魔女の一体へ直撃した。『ほっほっほ、すまんおう。どうやら手違いでお主を殺してしまったようじゃ』そんなお約束的セリフがどこかで聞こえるような、手違いで転生させる神のごとき強烈な雷が、瞬時に魔女をグリーンフシードへと変化させる。

イキガミの魔女はすさまじい攻撃の余波で硬直し、そこへすかさずアリナが結界を展開した。

キューブ状の結界が迫り、立方体の中へ魔女がおさまる。中から出ることはできない。この結界の中に穢れや感情エネルギー、人そのものを入れて成長させ、野へ解き放



つ。アリナの重要な仕事のひとつだった。

「た、助かりました、かすか様、アリナ様」

結界が消えると、外の廃墟で待っていた羽根たちが頭を下げる。自身のキューブをニヤニヤ見つめているアリナの横で、かすかは「ううん、お疲れ様。気をつけてね」と羽根たちを送り出した。

かすかは迷う。エキサイトしすぎ、とアリナに注意すべきか。それともこつそり姿を消すか。

「お、お疲れさまです」

後者を選んだ。

「ステイ」

「はっ、はい」

しかし逃げられない。

キューブを仕舞い、変身を解いたアリナ。ずんずんとかすかに歩み寄り、エメラルド色のきれいな瞳が覗き込む。

「体力は平気なワケ？」

「……えっ？」

「アナタがハードワークで倒れたことがあるのは、灯花たちから聞いてるカラ。あんな

大技使って平気なワケ?」

「し、心配してくれるの?」

「は? かすかが倒れたら、羽根たちの士気がブレイクするっただけだヨネ」

「……」

かすかは絶句していた。なんていい子なんだろう、と。

みふゆの身体をデッサンするのに強制で徹夜させたり、魔女をアート扱いで愛でる印象があまりにも強かった。しかし思い返せばアリナはアートが直接関係しなければ、普通のいい子だったのだ。

たとえば食後に気まぐれで食器洗いを手伝ってくれたり、学校で後輩に画力指導をしているという話だったり。かすかはこういったアリナの一面に目をつむり、頭おかしいアーティストの面しか見ていなかった。

「ソーリー、アリちゃん」

「……は?」

「今までクレイジーサイコアーティストとか思ってたソーリー。あなた、マイフレンド。ないすつーみーちゅー」

「フアック」

「ぎゃー!」

瞬時に変身したアリナが至近距離からレーザーを発射。

紙一重で躲したかすかにさらなる追撃が迫る。

「人をおちよくる元気あるナラ、まだまだ平気だヨネ！」

「ノーノー！ ワタシとアナタ、友だちになりたいネ！」

「ふざけるのも大概にしろこの牛女！」

かすかのコミュニケーションは基本的にノーガード戦法。ひとたび気持ちを決めたら何も考えず距離を詰め、仲良くしたい気持ちを拳に込めて右ストレートで殴り抜ける。気持ちの表現は名前の呼び方だったり、話し方だったり様々。

今回の気持ちの表現は、いっとう最悪だったらしい。

「アリちゃんマイフレンド！」

「ヴァアアアアアッ！」

口を開くことにアリナの攻撃は激しさを増し、エメラルド色のレーザーが廃墟を穴だらけに。やがて建物の基礎部にまで衝撃が及び——廃墟の一角が倒壊した。

片や神戸市の最古参、片や規格外の固有魔法を使いこなす素質の高い実力者。倒壊に巻き込まれながらも瓦礫に埋もれるようなヘマはせず、むしろ降り注ぐ瓦礫の中でも追いかけて子続けた。

しかしほこりだらけになった両者、どちらからともなく動きを止める。遠くからサイ

レンの音が聞こえた。

「……帰ろっか」

「……ハア」

二人はすばやく姿を消し、後には無残にも倒壊した廃墟だけが残される。

傍から見れば仲が悪くなったのかなんのかわからないが、少なくともかすかは「アリチーとすごく仲良しになった」と確信できた、素敵な一日になったのだった。

――

3月。手で触れられるような鋭い寒気がなりを潜め、うららかな初春の空気が漂い始めた頃、かすかとみふゆの住居にマギウス三人が押しかけていた。

目的は情報共有と壮行会だ。支部の設立や人員配置、ウワサの創造などが一段落つき、四月から本格的なエネルギー回収ができる運びとなった。それに向けた景気づけの集まりである。

「だからってなんでここに集まるかな……」

「ワタシとかすかさんに用意されたお部屋なのに、もうただのたまり場みたいになります……」

「かすかー、ごはんまだー？」

かすかはみふゆと二人で晚餐を用意しながら、リビングからの催促にはいただいまーと返す。失踪した二人のために灯花が用意したこの一室は、すっかり幹部のたまり場だった。空き部屋には灯花の天文学系統の機材や学術書、ねむのハードカバーを中心とした蔵書が押し込まれ、みふゆの部屋にはアリナの画材が設置されて、常に絵の具が飛び散っている。

食費や家賃は灯花の実家持ちなので、かすかに文句はなかった。マギウスの三人がそれぞれ学校を終えて直接ここに夕食をたかりに来るようになったことから、いろいろと察したこともあり、当然のように歓迎している。

主食、主菜、副菜が同時に完成し、できたてのそれらを食卓へ運ぶ。

「あれ？ 今日中華じゃないんだ」

「たまには味変もいいもんでしょ」

伝統ある老舗の洋食屋直伝の洋食だった。灯花とねむはラーメン屋に行つて寿司が出てきたような顔をしていたものの、いざ口に運ぶと笑顔を見せ、アリナはいつもと変わらず黙々と食らっていた。

食後の空気は弛緩しきつている。いつしか当番制となった片付けを終え、マギウス印のマグカップでお茶を呑む。いつもはさっさと離席してアートを創り出すアリナだが、

今夜は乗り気でないらしく、肘をついてお茶をすすっている。

「かすか。この前の件なんだけど。始めてみると、なかなかどうして難しいよ」

「えっ、本当に始めたの？」

「なんの話？」

ふとしたねむの言葉にかすかは耳を疑った。

割って入ってきた灯花に対し、呆然として応える。

「ねむりんが、転生ジャンルの小説を書き始めた話」

ねむは作家である。魔法少女になる前は身体が弱く、灯花と共に入院生活を送っていた。そこで書いた物語を灯花の運営するサイトに投稿すると、またたくまに人気を集め本を出すことになった。

そんな真正銘の天才作家に、なんとかかすかは転生ジャンルをおすすめしたのである。

『転生小説？ 聞いたことのないジャンルだね。どんな話なのかな？』

『こんな感じ』

『……なるほど』

一読したねむはたつぷり十数分は考え込み、ネットのどこかで隆盛する転生ジャンルについて所感を述べる。

いわく、どの小説も話の起承にあたる部分がほとんど同じで、転結に当たる部分まで書かれていない。主人公が訳のわからない理屈で成功し続ける話だから、山も谷もない。小説の作法すら守っていないものも多く、読むのが辛い。

『総評としては稚拙の一言だよ。けれど——なぜか、惹きつけられる』

しかしだからこそ、転生小説は希望に満ちていた。辛いことも悲しいこともなく、あつたとしてもご都合主義で粉砕され、主人公は幸せに満ちた生活が約束されている。山も谷も落ちもない、文学的価値なんて論ずるに値しない文章の羅列であろうと、ねむがオススメされた小説のどれもが、その一点だけは共通していた。

希望を振りまく魔法少女だからこそ、希望に満ちた小説に惹きつけられるのかもしれない。そう結論したねむは、いつの間にか『僕も書いてみよう』と口に出していた。

そうして実際に何篇か書いてみたのだが、

「奥が深いね。面白さのテンプレートを遵守するだけだと、固有名詞を変えただけの量産品に成り果てる。かといって独自性を追求すれば、転生ジャンル特有の面白さを欠いてしまう」

「あのさ、オススメした私が言うのもなんだけど、無理しないでいいよ？　ねむりんみたいな人気作家まで転生モノの泥沼にはまらなくても……」

「泥沼か、清い泉かは、僕自身が決めることだよ。かすかが気にすることじゃない」

「そ、そう」

「納得いく形に仕上がったら、一番に見せてあげよう」

むふっ、と意気込むねむ。かすかは恐れ多い気持ちで苦笑いしつつも、「楽しみにしてる」と返した。

そのうち話についていけない灯花が「わたくしだけ仲間はずれ!？」とむくれ出し、アリナは顔をしかめて部屋を出ていった。

ねむとみふゆと手を組み三人がかりで灯花のかんしゃくをなだめる。ただの子供にしか見えない灯花の振る舞いに、かすかはふと気になっていたことを聞いてみた。

「魔法少女の解放って、なんでそんな計画思いついたの?」

魔法少女の解放。半魔法女の性質とマギウス三人の固有魔法を利用したこの計画は、とても複雑で規模が大きい。そもそもどうしてこれを思いつき、実行するに至ったのか。かすかのように、解放したい誰かが他にいるのか。兼ねてから気になっていたことだった。

「くふっ、そういうえば二人にはまだ言っただけでなかったね。私たちマギウスの欲しいものについて」

これに対し返ってきたのは予想の斜め上の回答である。

魔法化回避システムを世界規模に広げれば、感情エネルギーを自動でエネルギーに変



換し、宇宙の延命に利用される『自動浄化システム』が完成する。このシステムを対価にキユウベえと交渉し、灯花は宇宙の深遠なすべての知識を手に入れる。

半魔女が魔女化した際のエネルギーを使い、アリナは宇宙規模のアートのソウルを委ねる。ねむは地球そのものを原稿に、あらゆる奇跡を具現できるようにする、と灯花は説明した。

「と、いうわけなの。分かった？」

「……アリちゃんだけ意味不明すぎない？ 宇宙規模のアートって何？」

「そんなこと、本人に聞いてよね」

「聞いたところで理解できないと思うけど」

かすかはひとまず分かった風にうなずいておいた。アリナだけ内容がふわふわとして理解できなかったものの、それぞれ欲しいものがあつて計画に加担していることだけは分かった。

こんなことを考えつく小学生にモノを教えるなんて、学校の先生は大変だ。

「本当なんですか!?!」

と考えていると、みふゆが食卓に手をつけて立ち上がった。

「な、何がだい？」

「どんな奇跡でも可能になる、という点です！」

「うん、このわたくしが保証するよ。イブのエネルギーとねむの『具現』があれば、どんなことでもできちやう。何か叶えたい願いでもあるの、みふゆ?」

「はい、実は——」

「あーっ!」

かすかは奇声を上げながらみふゆの後ろへ回り込み、口をふさいで羽交い締めにした。

「ちよーつとみつぶ、こつち来てお話しよつか!」

きよとんとしているマギウスの二人を置いて、かすかとみふゆはドタバタとリビングを出ていく。

解放されたみふゆは涙目で「何するんですか!」と肩を怒らせた。もつともな反応である。

「せつかくみつちやんの命を救える手があるのに!」

続いて出てきた言葉は、やはりかすかの予想通りだった。

かすかの魂はすでに死んでいる。歪んだ因果の生む桁違いの魔力で無理やり延命しているが、キユウベエの見立てによると後一年も経たず崩壊し、消滅する。しかし計画が成功しねむの奇跡が可能になれば、死んだ魂を復元することだってできるだろう。かすかは生きることが出来る。

が、かすかはにべもない。

「あり得ないでしょ」

さすがに、のフリーズすら使わない。その方法での延命は絶対にあり得ない選択肢だった。

「な、んで……」

啞然とするみふゆに対し、かすかは困り顔で言葉を選ぶ。

「私たちが今やってることって、相当悪質だよな。魔女や使い魔、ウワサなんかをばらまいて、いろんな人を不幸にして自分たちだけいい思いをしようってんだから」

「そ、それがどういう……」

「そんな方法で延命したって、結局私は生きられないよ。だって、胸張って鶴乃のお姉ちゃんを名乗れないもん」

「……っ！」

鶴乃は優しく、まっすぐな女の子だ。マジウスのやり口をみればそんなやり方は間違っている、と声を大にして反対するだろう。仮に延命が成ったとして、それほどまっすぐな妹の隣にお姉ちゃんとして立てないのであれば。

「死んだほうがマシ」

断言するかすかの瞳に光はなかった。開き切った左目の瞳孔。どこまでも真っ黒な

その奥に燃えるものはお姉ちゃんとしての矜持であり、お姉ちゃん以外には理解できない狂気でもあった。

息を呑み、後ずさるみふゆ。

親友がこれほど追い込まれるまで気づけなかった自責の念。もう引き返せないところまで来ている確信。じわじわとみふゆの魂を絶望が染めていき――

「大丈夫」

耳元のささやきが、穢れをせき止めた。

かすかはみふゆを抱きしめ、あやすように背中をさすっている。

「このままじゃみつふも、やつちも鶴乃も悲しませちゃうもんね。大丈夫、秘策があるんだ」

「ひ、さく?」

「うん。私も、みんなも幸せでいられる、最高の方法だよ。だから私のことは心配しないでいい。出たところ勝負だからその時にならないと分かんないけど」

「本当ですね? ウソや誤魔化しなら怒りますよ?」

「私がウソつけないの、知ってるでしょ」

かすかは昔からウソがつけないタチだった。露骨に視線が泳ぎ、言葉が震え、どもる癖があった。

その点、今のかすかの言葉に一切のゆらぎはなかった。自身の余命について、本当に誰も不幸にならない最高の方法を知っているからだ。

「……分かりました。ワタシはみつちゃんを信じます」

「みつちゃんじゃなくて？」

「かすかさん、でしたね」

みふゆは弱々しく笑ってから、一度大きく深呼吸。心を落ち着けてかすかと手を結び、マギウスの待つりビングへ戻った。

灯花とねむは戻ってきた二人に心配げな顔を向けている。

「大きな声が聞こえたよ？ ケンカはよくないにやー」

「すみません二人とも。ちよつとプライベートな話だったので」

「痴話喧嘩ってやつかな？」

「そんなところです。お二人はこの後どうされます？ お泊りなら今から準備しますけど——」

笑顔のみふゆは二人の追及をかわし、さらつと話を流した。灯花とねむは怪訝そうにしながらも食い下がることはなく、いつもの日常が再開される。

かすかはその様子を、遠い目で見つめていた。

## 第14話

「鶴乃ちゃんは私のこと覚えてるかな……」

参京区、万々歳の看板を見上げながら、環いろはは不安げにひとりごちた。

いろはは神浜市に隣接する宝崎市の魔法少女であり、こうして平日の放課後に神浜のテリトリーへやってくる正当性はない。新西区の病院に入院していた妹の病気も完治したので、わざわざ参京区まで足を伸ばす動機はないはずだった。

しかし、その妹が突如失踪したとなれば、お姉ちゃんとして黙っていられない。

ただの失踪ではなく、いろはや家族の記憶からも妹は消えてしまった。神浜を訪れた折、変わったキュウベえに接触したのをきっかけに、いろはもようやく妹の存在を思い出したのだ。

そうしていろはは、大切な妹の行方を追って神浜市の探索を始めた。

『うわさを現実にするウワサ、ですか？』

すると現地の魔法少女チームでもあるももこ、レナ、かえでと行動を共にすることになり、ある怪異に巻き込まれる。

ウワサと呼ばれるそれは魔女や使い魔と同じように結界へ犠牲者を閉じ込めるのだ

が、ウワサの大本を倒せば犠牲者は帰ってくる。もしかしたらういも巻き込まれ、どこかで帰れなくなっているのかも。

そう考えたいろははいつそう探索に力を入れ始める。しかし神戸市の魔女や使い魔は強く、単独行動は厳しくなってきた。ももこのチームにずっとお世話になるわけにもいかない。

そこでいろはの脳裏をよぎったのが、かつて病院で知り合った年上の友だちだった。

「中華飯店万々歳……ここだよね」

最強の妹を自称する友だち。妹の存在とともについ最近まで忘れていた彼女は、実家のお店のことをよく話してくれた。

間違いのないようにいろはが見上げると、年季の入ったのれんに大きく『万々歳』と書かれてある。

参京区はういの入院していた病院に近い。何か手がかりがつかめるかもしれないし、久しぶりに数少ない友だちに会いたい気持ちもあった。

引き戸に掛けられた仕込み中の札に一瞬たじろぐものの、いろはは意を決して戸を開く。

「い。いんにち——」

「やちよししよ……」

「大丈夫、大丈夫よ……あつ」

「……」

入つてすぐのところ、その友だちは立っていた。由比鶴乃。オレンジ色の髪紐でサイドポニーを結い上げ、手にはミサンガらしきものを巻いている。けれどいろはに再会を祝う余裕はなかった。

ロングの黒髪をなびかせるスレンダーな美人と鶴乃が抱き合い、熱っぽい視線を交わし合っていたからだ。

うっとり見つめ合う両者だったが、やがて口をパクパクさせるいろはの存在に気づく。

いろはは即座に回れ右して駆け出した。

「おおおお邪魔しましたー!」

「待つていろはちゃん! 誤解だよう!」

「あら、知り合いだったの?」

全力ダッシュで逃げるいろは。しかし体育の得意な鶴乃にあっさり追いつかれ、店内へ連行されてしまう。

ひとまずカウンターに三人そろって腰掛けたものの、いろはの顔は赤い。鶴乃は気まぐずに言葉を選んでいる様子で、黒髪の美人だけがきよんとしている。



「わ、私はそういうのよくわからないけど……愛があればいいのかなって、思います……」

「だ、だからやちよししよーとはそういうのじゃないから!」

「そんな、私とは遊びだったの?」

「話をややこしくしないでえ!」

ひとしきり鶴乃が慌てていると、「それはそれとして」と、黒髪美人が無理に話を進めた。分かつててこじらせたようで、鶴乃は涙目になっている。

「鶴乃、この子は?」

「はあ、はあ……この子は、って環いろはちゃんだよ。やちよだつて知ってるでしょ?」

「いえ、初対面よ?」

「私も、初めてだと思えます……」

「ほつ? お姉ちゃんのお見舞いに行ったとき、会ってるはずだよね?」

お見舞い。その言葉から、病院で知り合ったのだというは見当をつける。

鶴乃とはういのお見舞いに行った日に知り合った。しかし最近になってういの記憶を少しずつ思い出すまで、鶴乃の存在さえ忘れていた。おそらくまだまだ忘れてる記憶があるのだろうか。

「実は——」

いろはは世界から消えてしまった妹のこと、それに伴い鶴乃のことも最近まで忘れていたことなどを説明する。鶴乃は「良かったー!」と胸をなでおろしている。

「ちよつと前からメールも電話も無視されるから、嫌われちゃったのかと思ってたよー」  
「えっ、でもスマホには何も……す、すごい数たまってる!」

いろはのスマホにはすさまじい数のメールと不在着信の通知が表示されていた。今朝見たときはどちらもゼロだったはずだ。

「事情が込み入っているわね……」

「あ、あの」

「二度目かもしれないけれど、記憶が戻らないの。私は七海やちよ。改めてよろしくね」  
「環いろはです。よろしくお願ひします」

黒髪美人ことやちよの主導により、三人の記憶について情報が整理される。

三人はそれぞれ病院での出会いをきっかけに面識があつたが、鶴乃だけがそれを覚えており、いろはも最近思い出し、やちよだけが記憶を取り戻せない。

これを聞いた鶴乃は蚊の鳴くような声で、

「長生き、物忘れ……」

「表に出なさい」

「ななな何も言つてないよ!」

がたりと立ち上がるやちよと、冷や汗を流す鶴乃。

「やちよさんだけじゃないですよ」

やちよの形相が鬼と化しあわや大惨事になるかというとき、いろはの新情報が二人を止めた。

いろはは鶴乃とやちよの二人だけでなく、みかづき荘チームの幾人かとも面識があった。しかしその一人であるももこには完全に初対面として扱われ、記憶が戻る様子はないわかった。

「あなたの妹さんを起点とした因果が、修正されているのかもしれないわ」

「因果、ですか?」

「ええ。存在そのものがなかったことにされている。そしてそんな大掛かりなことできる存在は——」

「きつとうわさだよ!」

「やっぱりそうなんですわ……」

「ほ?…いろはちゃん知ってるの?」

知っているも何もつい最近巻き込まれたばかりだと告げると、鶴乃とやちよの二人は目を丸くした。

ウワサは神浜市の噂話を現実にする怪物であり、噂の内容と違う行動を取ると襲いか

かってくる。鶴乃たち神浜市の魔法少女も新しい敵に手を焼いているとか。

そこまで説明すると、鶴乃が目を輝かせてやちよに迫る。

「ねえやちよししよー！　いろはちゃんも今度の調査についてきてもらおうよ！」

「ちよ、ちよつと鶴乃！」

「調査って？」

「私たちも噂についていろいろ調べてね。今度とあるウワサを探しにいろいろ調べて話をしてたところなの！」

「もう、オカルト話を聞いて回るのとは訳が違うのよ？　危険だつてあるかもしれないのに……」

明らかに乗り気ではないやちよだが、いろはの心は決まっていた。

「大丈夫です。ういを見つげるためなら、どんな危険だつて覚悟の上ですから」

「……怖くなるくらいまっすぐね」

ため息とともにしぶしぶ了承するやちよ。

決然とした顔つきで身を乗り出すいろはに、鶴乃は一瞬だけ何かをこらえるように唇を噛む。

その変化には気づかないまま、いろはが畳み掛ける。

「それで鶴乃ちゃん、どんなウワサなの？」

「……え、えつとね」

そうして鶴乃が告げたウワサの名は、口寄せ神社といった。

――

水名区のどこかにあると言われる口寄せ神社。噂によると、その神社で会いたい人名を絵馬に書き、作法を守ってお参りすれば再会できる。ただし幸せすぎて帰ってこれなくなるとか。

ういがその噂に捕まっているかもしれないし、何より手っ取り早くういと再会できるかもしれない。人を探しているには渡りに船の噂で、鶴乃、やちよと共に水名区中の神社を探し回った。

町おこしのスタン普拉リー、ビルの屋上に建つさびれた神社、水名区に伝わる悲恋の物語——様々な道程を経て、一行はようやく噂の神社を特定する。

歴史的な古い町並みの中央、スタン普拉リーのゴールでもある水名神社だ。昼間に参拝しても何も起こらないが、由来となった物語およびポイント十倍デーの導きを考えれば、夜に参拝することが噂の鍵と推測できる。

しかし特定できたときにはすでに日が落ちて久しく、道中の使い魔や魔女を相手して

いたせいで一行は疲れていた。翌日に改めて突撃することを決め、その日は解散となる。

いろはは鶴乃とやちよに頭を下げた。この二人がいたおかげで噂にたどり着き、明日にはういに再会することができるのだから。

「お礼なんていいわ。それより環さん、もう九時回ってるけど、本当に大丈夫？」

「なんならウチに泊まっていきなよ。通い続けだと、電車賃も馬鹿にならないでしょ」

「えっ、そ、そんな。悪いですよ、そこまでお世話になるなんて」

「いーからいーから！ 流されちゃいなよっ！」

「え、ええ〜……」

鶴乃の勢いに流され、いろはの一泊が決まった。実際中学生のお小遣いの毎日市外へ通うのは辛かったため、ありがたい申し出だった。道すがらやちよが両親への連絡を申し出たものの、どちらも海外出張で留守のため不要だった。

二人に連れられていろはがやってきたのは、新西区の古風なお屋敷だった。手入れの行き届いた中庭の中央に、どっしりと年季の入った戸建てが腰を据えている。門扉の横のプレートには『みかづき荘』と刻まれていた。

「お邪魔しまーす……」

「はい、いらっしやい」

「たっだいまー！」

中へ入って廊下を通り、リビングへ向かう。カウンター付きのシステムキッチンに、おしやれな絨毯とソファ、高い天井。広々とした空間に、三人の少女がくつろいでいた。「おかえりー、つていろはちゃん？」

「ももごさん。こんばんは」

「新しい入居者さんですか、七海先輩？」

「……」

そのうちの一人はいろはの知った顔で、ももごだった。ポニーテールの小さな子は小動物のようにトテトテと寄ってきて、最後の一人は怜悯な目つきで一瞥をくれただけだった。

いろはは緊張しながら自己紹介。小さな子が安名メル、長身で目つきの怖い人が雪野かなえ、と名乗った。やちよと鶴乃を合わせて五人がここに住んでいる。

(二人足りない……?)

一対の銀髪アホ毛がいろはの脳裏をよぎった。鶴乃のお見舞いに付き添ってきたやちよの横で優しげに微笑んでいるその人が足りない。

違和感を口に出す前に、やちよに「時間も時間だから先にお風呂入っちゃいなさい。

ごはんは、今日の当番誰だったかしら」と言われ、鶴乃に手を引かれてお風呂へ連れ去

られた。

由比家秘伝と呼ばれる子供用全身シャンプーでぴかぴかになったいろはと鶴乃は、ごはんを食べ、お茶を呑んで、歯を磨いてほどなくベッドへ。

部屋は鶴乃と相部屋で、鶴乃は夜を迎えた猫のようにいろはにすり寄って、一緒にベッドで寝ようと言いつ出した。

勢いでお風呂も一緒に浸かったいろはにとつて羞恥心など今更だ。流されるまま流されて、大人しく鶴乃の抱きまくらにされる。春先とはいえ夜はまだ冷えることもあり、鶴乃の子供のような体温は心地よかった。

このまま目を閉じれば明日になり、夜を迎えれば妹と会える。そう考えると目が冴えて、自然に口が動いていた。

「鶴乃ちゃん」

「ふわあ……なーに？」

「ありがとう。鶴乃ちゃんたちのおかげで、やっと一歩進めたよ。こんなに良くしてもらって、本当にありがとう」

「……気にしなくていいよ。だっていろはちゃんは、私たちと同じだから」

「え……？」

鶴乃は密着していた身体を離し、いろはと目を合わせる。暗くて表情はよく見えな



い。

「私のお姉ちゃんと、みふゆのことは覚えてる？」

「う、うん。覚えてるよ。お姉さんとは会ったことないけど、瑞乃さんだよね？」

「その二人ね、いなくなっちゃったんだ」

「……ええっ!?!」

鉛筆か消しゴムでも一つなくしたような、あっけらかんとした声だった。

「いろはちゃんと二回目に会ったとき、お姉ちゃんはぐっすり寝てたよね。やっと目を覚ましてくれたと思ったら、いなくなっちゃった。行方不明。みふゆも後を追うみたい……」

「そんな……」

いろはは鶴乃が姉を慕っていたことを知っている。過労で倒れたとき、昏睡状態になったとき、どれだけ気を病んでいたか。知っているからこそ、かける言葉が見つからなかった。

「だから私たちは同じだと思うんだ。今まで当たり前前みたいに一緒にいた人が、急にいなくなるのって本当に辛いよね、苦しいよね……ほっとけるわけないよね……」

「鶴乃ちゃん……」

大切な人を失った痛みを、鶴乃はよく知っている。二人の親友に置いていかれたや

ちよもそうだった。昼間のように二人で抱き合つて、痛みを忘れようとするこもよくある。

「なんで、どうして……」

無味乾燥だった鶴乃の声音が徐々にかすれ、水気を帯びていく。いくら暗くとも、鶴乃がどんな顔をしているのか丸わかりだった。

「なんで……いなくなっちゃったのかな、私が面倒をかけちゃったからかな、お姉ちゃんに甘えすぎたから、嫌われちゃったのかな……」

「違うよ!」

今度は鶴乃が抱きまくらになる番だった。いろはは背中に手を回し、あやすように撫ですさる。

「妹のことを面倒に思うお姉ちゃんなんていない。甘えられて嫌うなんて絶対ないよ!」

「ほんとお……?」

「本当だよ。だつて私もお姉ちゃんだもん。鶴乃ちゃんみたいな妹がいたら、お姉ちゃんはずごくうれしいよ。だから……大丈夫。きつとまた会える!」

「いろはちゃん……うええええん!」

鶴乃は赤子のように泣いた。姉が姿を消して以来、みかづき荘チームの前でも一人のときでもずっと抑え続けた涙が、滝のように流れた。

ひとしきり感情を吐き出すと、鶴乃は泣き笑いを浮かべる。

「ごめんね、私の方が年上なのに。いろはちゃんってお姉ちゃん力があるよね」

「うん、いいよ。お姉ちゃんりよ……へ？」

「お姉ちゃん力」

お姉ちゃん力とは、世にあまねくお姉ちゃんのすべてが持ちうる不思議な力である。ピンチに陥った妹がいると力を増し、どんな奇跡も叶えられるとかどうか。

「へ、へえー」

「明日、きつと会おうね。私のお姉ちゃんとういちゃんに」

いまいち理解できない謎。パワーだったが、鶴乃はスツキリした顔でそう言って、すやすや寝息をたてはじめた。年上なのに愛おしい鶴乃の寝顔にいろはは微笑を浮かべ、目を閉じるといつの間にか意識が沈んでいた。

――

翌日。

いろはは夜までみかづき荘で時間を潰し、夕刻になると水名神社へ。電車と徒歩で到着した頃には日が落ち、真つ暗な内苑の外門前に、鶴乃とやちよがそろっていた。

十メートル程度の高さを誇る立派な門をひよいと飛び越え、中へ。整備された石畳の上を歩き、絵馬の販売所に至った。当然開いているはずもなく、あらかじめやちよの用意しておいた絵馬に三人それぞれ会いたい人の名前を書く。

「鶴乃はアイツをお願い」

「了解！ ししよーはみふゆだね」

やり取りを横で聞きながら、いろはも環ういと書いた。記憶にしかない大切な妹にやつと会える。絵馬を吊るすと、いろはは弾むような足取りで社へ向かった。

二礼二拍手一礼。三人揃ってお作法通りにお見舞いすると、社を中心に奇妙な空間が形成される。

橙に染まる黄昏時の結界。小島のように浮かぶ無数の陸地を朱塗りの太鼓橋がつないでいる。

いろはが求めた妹は、一つの橋の中央に佇んでいた。

「ういー」

名前を呼んで駆け寄ったが、おかしい。妹らしきその人影は、壊れたスピーカーのようと同じ文言を繰り返すだけだった。ういじゃない、と確信するのに時間はかからず、いろはは振り切るように踵を返す。

やちよと鶴乃が偽物に騙されるといけないと、慌てて結界内部を駆けるいろは。いく

つか橋を渡つていくと、鶴乃の姿が見えてきた。太鼓橋の中央で誰かと相対している。

噂が作り出した偽の想い人。鶴乃の姉と思しきその人影は、

「なんで……うまくいかないの……」

ヒザを抱えていじけていた。

髪はぼさぼさ、手足はやせ細り、顔には死相。鶴乃に目もくれずぶつくさ恨み言を漏

らしている。

「あ、いろはちゃん。そっちは済んだ？」

「うん、結局会えなかったけど。えっと、この子は？」

「分かんない……お姉ちゃんじゃない、とは思うけど……あ、そっか聞いてみればいいん

だ。ねえ君、名前は？」

切り替えが速い。ウワサの怪物にためらいなく声をかける鶴乃に、いろはが目をむ

く。

ウワサの女の子は「六野かすか」と答えた。

「私は由比鶴乃！ お姉ちゃんのこと、何か知らないかな。由比瑞乃っていうんだけど」

「知ってる……私のなりたかったもの……だけど結局なれなかったもの……」

「なれなかった？」

「何をしてても失敗ばかり……誰も私を褒めてくれない……私だって頑張ってるのに、な

んで、なんで……」

「鶴乃ちゃんっ！」

「わわっ!?!」

唐突に太鼓橋が揺れる。

ウワサの少女がへたりこむ箇所から亀裂が入り、橋桁全体に拡大。またたく間に太鼓橋が粉々に砕け、六野かすかを名乗った人影は崩落して消えてしまった。

絵馬に書いた人物とはまったく違う誰かが出てきて、勝手に橋が壊れフェードアウトした。意味不明な展開に鶴乃というのは顔を見合わせる。

ひとまず考えは後にして、二人はやちよの元へ向かった。

「鶴乃さん……あなた、スキンシップが多いんですよ！ ワタシのみっちゃんにベタベタベタベタ……いくら妹でも限度ってものが」

「誰がいつあなたのものになったのよっ！」

「やっちゃん……なんで……?」

「……」

やちよは案の定、みふゆの偽物に攻撃をためらっていたが、鶴乃を見るなり激高した偽物を槍の柄でぶつ叩き、かつとばした。あんまりなスピード撃破にいろははポカンと口を開け、鶴乃は「さすがやちよししょー！」と歓声を上げた。

するとうわさの内容に反した三人に対し、結界の主である怪物、ウワサが姿を見せる。襲いかかってくるウワサに応戦していると、偽物だったシヨックを引きずっているのソウルジェムが穢れきり——穢れをまとった謎の怪物と化し、ウワサを瞬殺した。

「そこまでよ。まさか人に化けた魔女がいるなんてね」

結界から解放されるとよその地区の魔法少女に絡まれひと悶着あつたものの、どうかやり過ぎして一行はみかづき荘へ帰った。

結局誰も会いたい人物に会えず、結界に囚われていた一般人を解放できたことを除けば、収穫はなかった。

気落ちするやちよというろは。

そんな二人の横で鶴乃は、

(六野かすかつて誰だろう?)

姉のトラウマ、消し去りたい黒歴史への手がかりを、たしかにその最強の頭脳に刻み込んでいたのだった。

——

いろはたちが口寄せ神社のウワサを撃破した翌日、夕刻。北養区山中、電波塔の管理

施設の一室に、五人の少女たちが集まっていた。

彼女たちはマジウスおよびマジウスの翼。現在、魔女や魔法少女を特殊な電波で神浜に集め、ウワサと呼ばれる怪物を使って暗躍している悪の組織である。

会議室のカーテンは閉じられ、照明も落ちていかにも陰謀めいた雰囲気があったよつて  
いる。

六の字印のローブに身を包む幹部、六野かすかは長テーブルに肘をつき、重々しい声を発した。

「水名の口寄せ神社がやられたか」

「くっふっふ、しかしあやつはウワサ四天王の中でも最弱」

「こら、何ふざけてるんですか」

会議室の照明がついた。かすかと、なんとなく乗っていた灯花は「まぶしい」「うにゃっ!？」と悲鳴をあげる。

口寄せ神社はみふゆとかすかが共同で考えたウワサだった。あわよくばやちよと鶴乃率いるチームが計画完遂まで囚われてくれればと企んでいたが、乗り越えられたらしい。

マジウスの一人、アリナは片肘つきあくびを噛み殺しながら、「ウワサの一つが消された程度、ノープロブレムだと思っヨネ」



「それでもありません」

幹部、みふゆが腰に手を当て、表情を険しくした。

「やっちゃんのみかづき荘チームが中心となつて、西ではウワサの対策が立てられています。東の十七夜さんとも情報を共有しているようですし、このままでは次々にウワサが消されてしまいます」

「ねむだつて無限に創造できるわけじゃないからねー。何か対策を立てないと」

「問題はまだあります。魔法の少なくなつた近くの街から、魔法少女がやってきて諍いを起こしています。どうにか仲裁しなければいけません」

「……みつぶ、それは今の私たちにとってむしろ都合じゃんね?」

「そ、そうでしたね」

ウワサによるエネルギー回収が滞ることは問題だが、諍いによって穢れやマイナスな感情が生まれることはむしろマグウスにとって願つたりである。

みかづき時代の癖が抜けないみふゆは取り繕うように「ですが」と続ける。

「そこそこ名のある魔法少女もやってきています。やっちゃんたちと手を組む前に、ワタシたちで対応する方がいいのでは?」

「名のあるって、たとえば?」

みふゆはホワイトボードに『巴マミ』『佐倉杏子』と板書した。一方は強い正義感で長

年魔女退治に従事するベテランであり、もう一方は一匹狼で行動の予測が難しい強者である。

諜報担当の羽根が用意した資料を読み上げるみふゆに、灯花は元氣よく手を挙げる。

「はい、灯花」

「かすかに追い出してもらえばいいと思います」

「殺し合いになるけどいいの？」

平然とした確認。場の空気が一段重くなった。灯花とみふゆは目を丸くして、アリナはわずかに口元をゆるめている。

「かすか、バマミのこと知ってるの？」

「割と有名なベテランさんだよ。力に訴えるなら、最初から殺す気じゃないときつい手合。それでもいいならやるけど」

「うーん、魔法少女もわたくしたちの大切なエネルギー源だからね。殺すのはなるべく控えたいところかな」

「なるべく、じゃなくて絶対ダメです！魔法少女を救うために動いているのに、殺したら本末転倒でしょう!？」

「未来に生まれる何千、何万の魔法少女が救われるんだよ？ 将来救われる人数と比べれば、今の犠牲なんてほんのちよこーっと思わない？」

「な……」

みふゆは絶句するが、対応を考え中の灯花は気にしていない。

やがて挙手したのはアリナだった。

「あ、アリナ」

「真実を知らない連中って多いヨネ？ その見滝原のマジカルガールにレクチャーし

て、翼にジョインさせればいいワケ」

「そんな乱暴な……！」

「採用！」

「灯花!？」

「錯乱したりごねたりしても、わたくしが言いくるめるから問題なし！」

もちろん知ってたら出来ないことだけど、と前置きして灯花は語る。真実で心を弱らせたところに甘い救済をささやき、脳内をエンドルフィンやらドーパミンでいっぱいさせて何も考えないように誘導すれば、マジウスのための手駒にだってできると。

「ブレインウォッシュユ？」

「そのとおり。心理学は専門外だけど、天才に不可能はないんだよ。さつそく羽根たちを通じてコンタクトしよー！」

「ま、待って！ かすか、灯花を止めてください！」

「やだ」

かすかはぷい、とそっぽを向いた。あまりにらしくない反応にみふゆは唾然としてしまふ。

「別にいいじゃん、そのくらい」

見ず知らずの少女のために身を削ってグリーンフィードを集め、戦い方を教えて回った優しい女の子は、もういなくなっていた。目の前にいるのは目的のためなら文字通りなんでもできる、恐ろしい一人の少女でしかなかった。

それでもみふゆの頭からはかつての瑞乃がくつついて離れず、この子はもう瑞乃ではないと割り切ることまでできなくて。

「……………」

両手で顔を覆い、その場に膝を折る。しばらく後にかすかからハンカチが差し出されたけれど、その手を振り払って――

「ウソをつくのって難しいね」

顔をあげると、気まずそうに苦笑いするかすかが見える。すでにアリナも部屋を後にし、

かすかとみふゆの二人きりだ。

「ウソとは……………」

「市内の子ならともかく、見滝原の子まではさすがにだよ。殺す気でうんぬんはテキトー言っただけ。いやーでも、洗脳とか言い出すとは思わなかったな」

いくらかすかの経験が長くとも、市外の魔法少女の情報まで把握しているはずはなかった。それとなく争いを避けるためのウソだったのだ。

結局天才二人組が予想の斜め上にあたりにある洗脳という手段をとってしまったが、かすかはまだ甘さを捨てきれずにいた。

お姉ちゃんの狂気と矜持がかすかを動かしている。しかしかつての優しさもまだ、たしかに息づいている。

そのことに気づいたみふゆは無意識に、かすかの小さな身体を抱き寄せていた。

「みっちゃん……!」

「かすかだつてば」

このように、多少のイレギュラーと内部対立を抱えながらも、マジウスの計画はおおよその想定に沿って進行中である。

## 第15話

かすかの翼としての活動は東から南のエリアに限定されている。新西区や参京区で魔女をバラまいたりウワサを管理しているところをやちよや鶴乃、かつての顔見知りたちに目撃されては気まずいでは済まないもので、そのエリアは羽根たちに任せている。魔力パターンや声音、戦い方まで変えているから一見では分からないだろうが、念には念を入れてできるかぎり西側とは距離をとっていた。

そんなかすがが珍しく、新西区をうろついている。

新西区郊外。古い空き家や寂れた雑居ビルが立ち並ぶ中、大きな存在感を放つ廃墟の前で足を止める。風雨で薄汚れた看板に『神浜ミレナ座』とあることから分かるように、そこは廃墟となつた映画館だつた。

「廃墟、多すぎない……?」

神浜市のどこに行つても廃墟には困らない。マジウスの翼の活動にはありがたいものの、廃墟を多数放置する市の行政にかすかはちよつと引いた。

真つ暗な通路をおそるおそるの中へ行くと、チケツト売り場らしき広い空間に出る。すると奥から変身した状態の魔法少女が現れ、につこりと笑顔を浮かべた。

「調整屋さんによろしくお。あなたが六野かすかさんねえ？」

調整屋、八雲みたま。ソウルジェムに直接接触することで、魔法少女を強化するサービスを提供する。マギウスの用意したこの廃墟を拠点に、かすかが失踪した前後から活動している。新西区で経営している立地上かすかは利用をしぶっていたものの、みふゆからの強いすすめがあつてようやく今日やつて来たのだ。

とはいえ、長居はしたくない。みたまの言葉に無言でうなずき、「さっそくお願い」とつぶやく。

「はい。じゃあ服を脱いで、そこの寝台へ横になつてねえ」

「……はい？」

「脱いだ服はこのカゴに入れて。あ、もちろん下着も靴下も全部よお？」

「……」

かすかは懐からスマホを抜刀しすばやくタップ。110とダイヤルマークの表示された画面を紋所のごとく突きつけた。

「今宵の風営法は血に飢えておる」

「早まらないで!？」

スマホに伸ばされたみたまの手を機敏に回避。追撃してきたのでこれも回避。何度か攻防を繰り返したところがかすかも満足し、おもむろにロープへ手をかけた。

「もういいや。では親友をムツツリへと変えた自慢の全裸をごらんあれ！」

「冗談、冗談だから！」

「あ、そうなの」

「そうよ。大人しいタイプかと思っただらとんだお転婆さんねえ」

ほんのジャブのつもりで放った冗談にきれいなクロスカウンターを決められ、みたまは呆れ顔だ。それほどでも、とかすかは照れながら寝台へ横になり施術を急かす。マイペースな客にみたまは苦笑し、さっさと仕事へ取り掛かった。

ソウルジエムを指輪から宝石の形へ変えると、みたまが息を呑む。かすかは何も言わずに寝たまま、やがてみたまはこわごわと壊れかけのソウルジエムへ触れ、内部の魔力を少しずつ調整していく。

数十分後、かすかが熟睡しかけた頃、施術は終わった。上体を起こして伸びをしてみると少しだけ身体が軽くなったような気がする。魔力の巡りもかつてないほどスムーズだ。

「ふわあ……ありがと。領収書の名前は里見灯花でよろしく」

「……」

「ど、どうしたの、大丈夫？」

施術前の飄々とした物腰はどこへやら、みたまは顔を青くしてうつむいていた。背中



をさするべきか、それとも寝台へ横にして休ませるべきかとあたふたするかすか。

そうしているうちにみたまは顔を上げ、言葉を慎重に選びながらゆつくりと口を開く。

「落ち着いて聞いてほしいの。実はあなたの命は——」

「もう長くないって？ 知ってるけど」

「もう長くな——知ってたの!？」

かすかはみたまの気遣いを察し、申し訳なささと嬉しさ半々の気持ちを抱いた。

ソウルジエムは魔法少女の魂そのもので、命である。しかしかすかは願ひ事の影響で形成されたその時から魂が粉碎されており、それを魔力で無理に延命している状態だ。その延命手段もじきに使えなくなり、遠くないうちに本当に死んでしまう。

みたまは調整を通してその事実を知り、余命宣告する医者のような気分になつていた。

「気を遣わせてごめんね。でも私は大丈夫だから」

「だ、大丈夫ってあなたね……いえ、それならいいわ」

あつけらかんとしたかすかの言い分に何か言いかけるみたまだが、店と客の関係で踏み込みすぎはよろしくない。ましてや経営場所を融通してくれたマジウスの関係者となればなおさらだ。口をつぐみやるせない気持ちを飲み込む。

六番のローブを着直したかすかを、出口まで送る。魔力の調整によつて「体が軽い、こんな気持ち初めて……!」とひそかにウキウキしているかすかに、みたまは一つ言い忘れていたことを思い出した。

「あ、そうだ。言い忘れてたんだけど」

「なーに？」

「私ね、ソウルジエムに触れることでその人の過去が見えちゃうの。願い事とかも」

「は？」

「でもあなたの願い事は見えなかった。興味本位なんだけど、一体どんな願い事をしたの？」

「……」

ソウルジエムは魔法少女の魂そのものであり、深く触れると当人のプライベートな部分を不可抗力的に知ってしまう。願いやそこに至るまでの経緯も含めてだ。

しかしかすかの過去で分かったことは、おそらく3歳頃から魔法少女として活動してきたことと、その時代の思い出だけ。願い事については杳として知れなかった。

そこで、興味本位の質問。上機嫌になつていて、しかも余命すらも受け入れていることからこのくらい許されるかしら、と見込んでのことだった。

問われたかすかはゆっくりと振り返る。

涙目で唇を噛んでいた。

「えっ、あの、聞いちゃいけないことだった？」

「そういう問題じゃない……」

懐から拳銃のごとくスマホを取り出すかすか。再び110と入力したのをハツとして取り消し、検索エンジンを立ち上げた。

「通報するのはおまわりさんじゃなくて、消費者センターと……さーて番号は何番かなあ!？」

「ちよ、ちよつと待ってえー!」

「誰が待つつか! あのさあ、過去が知られるってそれ施術前に言うべきことじゃんねえ! インフォームドコンセント、知る権利、説明責任! 聞かれなかったからで済ませるのはキュウベえメソッドだよ!」

「あ、あんなのと一緒にしてほしくないわ!」

「いい勝負!」

きやあきやあ言い合いながら、クレーマーと店主がスマホを巡ってキャットファイトを繰り広げる。実力伯仲の二人の勝負は小一時間に及び、どうやら前世の情報は漏れないと察したかすかが訴訟を取り下げ、お互い肩で息をしながら和解の握手を交わした。みたまの方も懲りたようで、次に来たら特別サービスをすると約束し、かすかは店

を出た。

魔力が強化されたにもかかわらずかすかはどっと疲れた気分だった。しかし幹部としての仕事はまだ終わりではない。

新西区から見て南東にあたる、栄区へ足を向けた。

――

栄区の駅を中心に広がる繁華街を抜け、喧騒から隔絶されたわびしい一角に、その建物は悄然と佇んでいた。謎の男性の顔面が彫り込まれた正面の景観はモダンアートの一種だろうか。かつて神浜記録博物館として栄えたここは今やありふれた廃墟と化し、マギウスの翼の資産、ウワサとして利用されている。

ウワサの内容は神浜記憶ミュージアム。条件を満たして結界内に踏み入った者の記憶を奪い、他人に記録として見せることができる。エネルギー効率自体はあまり良くないものの、魔女化しない神浜において、魔法少女の真実を実体験の記憶として突きつける道具としての価値が高い。

かすかがここへやってきたのは、記憶ミュージアムを使ったある作戦について、みふゆと打ち合わせをするためだった。

「みっふー、来たよー。あれ？」

「かすかさん、いいところに」

中へ入ると、吹き抜けの広々とした空間が広がっている。展示物もないのでただただ広大な印象を受ける。

待ち合わせしていたみふゆはその中央に立つて、見知らぬ人影と対峙していた。

近づいていくとその人影の相貌があらわになり、かすかは「あ」と言っただけで足を止める。みふゆへテレパシーをつないだ。

『巴マミ、だよね？ どういう状況？』

みふゆと対峙していたのは話題の魔法少女、巴マミだった。ロールのかけられた金髪ツインテールが揺れている。

彼女はこれから打ち合わせ予定の『巴マミ強制スカウト大作戦』のターゲットでもある。見滝原で活動する凄腕の魔法少女であり、最近ではマジウスの翼を嗅ぎつけて調べて回っているのか。

作戦を通して接触するつもりではあった。しかしまだ打ち合わせも済んでいないのにどうしてここにいるのか。

『それがですな——』

すでに変身状態で、警戒心をむき出しにしているマミを横目に、みふゆとかすかは状

況を共有する。

マミはウワサの発する特殊な魔力を追い、記憶ミュージアムにたどり着いた。そこがかすかの到着を待っていたみふゆとぼったり遭遇、お互いに驚いて警戒しつつ膠着していたところだったらしい。

『なるほど。で、どうしよう?』

「テレパシーで内緒話? 私にも聞かせてもらえると嬉しいわね。それとも、聞かせられないようなお話かしら?」

「うわバレた」

不自然に見つめ合って沈黙していれば当然怪しまれる。指摘を受けたかすかが分かりやすく動揺したので、マミはさらに表情を険しくした。

「やっぱりあなたたちがマギウスの翼なのね。この街に魔女を集め、その上ウワサなんて怪物までバラまいて、一体何を企んでいるの!」

マミの手にはマスケット銃が握られ、銃口をかすかとみふゆへ向けていた。

神戸市に起きている異常現象、魔女の過度な集中にウワサの跋扈。その手がかりを求めやってきた施設に偶然にも居合わせた怪しげな魔法少女と、後からやってきたいかにも怪しいローブ姿の少女を前に、マミはすっかり臨戦態勢だ。

誤魔化しが効く相手ではない。大人しく帰ってもらえるとも思えない。よって、かす

かは選択した。

「知りたいなら、私たちの仲間になって」

作戦の切り上げ。穏便なスカウトである。

意を汲んだみふゆは身構え、マミは眉をひそめた。

「仲間ですって？ あなたたちみたいない怪しい連中に、力を貸すとも？」

「そりゃそうだ。まずは私たちについて説明しなきゃだね。巴氏は魔法少女の宿命を知ってる？」

「魔女と戦う運命のことでしょう」

「それだけ？」

訝しげに険を増すだけのマミに、かすかは察した。

みふゆに目配せすると、小さなベルを取り出して、かすかへ手渡す。

「……っ！」

ベルに向かって発砲。しかしかすかがさつと腕を振るうと雷光が弾け、弾体を蒸発させた。瞬時にもう一丁のマスケット銃を構えるマミだが、

「記憶の旅へ」案内、と」

ベルの音が響くと共に意識が闇へ沈んでいく。ウワサに記録されたかすかの記憶が、マミの記憶野へ流れ込んでいき、魔法少女の真実が実体験としてレクチャーされるの

だった。

——

ママは奇妙な結界の内部でハッと意識を取り戻した。結界の魔力パターンは魔女や使い魔、魔法少女のどれとも異なっている。ウワサが作り出した記憶の世界である。

「ええと、ここをこうして、こうやって——」

「そのあなた。少しいいかしら？」

目前には鉛筆と消しゴムを手に分厚い本へ書き込みをしている怪しげな少女の姿が。

少女は地べたに置いた本を前に頭をひねっていたが、ママの姿を見るや泡を食って慌てます。あまりにも怪しい。

「うわもう来た！ 仕事早すぎるよリアル私っ！」

「リアルの……？ 何か知っているみたいね。知っていることを洗いざらい教えてもらおうわ」

威圧的に視線を険しくするママは、次の瞬間愕然とした。銃の生成はおろか変身すら出来ないことが気がついたからだ。

少女はおどおどしながら本を盾にして、上目遣いにママをうかがっている。



「そう言われましても、私はウワサが勝手に作ったバーチャルかすかに過ぎませんで……この記憶の本をあなたに開示する以上のことは何も出来ず……すいません、すいません」

敵の策略にしてはえらくへこへこしている。マミは警戒と呆れ半々の面持ちで腰に手をやり、ため息をついた。

「その本を読めば、私を解放してくれるの？」

「は、はい、そう設定されています」

「なら早くしてもらえますか？ 私にもやることがある」

「だ、だけどまだ編集作業が——」

「いいから早く！」

敵かどうかいまいちつかめない少女の態度にしびれを切らした。なんにせよ時間稼ぎに付き合う気はなく、語気を荒げてやると少女は「はいい！」と背筋を正して本をマミへ開いてみせる。

とたん、中途半端に編集された少女の人生が、実体験としてマミの記憶野に流れ込んでくる。

少女は神浜市で三歳から魔法少女の活動を始めた。神浜市には同業が多く、少女は四歳の頃に二人の魔法少女と出会い、チームを組んだ。最年少だった少女はチームの二人

に妹のように大切にされ、かけがえのない絆が育まれた。

しかし、かけがえはあった。絆を信じていたのは少女だけだった。

そのことが判明したのは、たまたま他のチームのメンバーが、魔女化する様を見たときのことだ。

魔法少女はいずれ魔女になる。ソウルジエムは魂であり、これが穢れるとグリーンフシードへ転じる。

真実を知ったチームの二人は取り乱し、キュウベえに問いただした。魔法少女のかわいいういマスコットが残酷な真実を否定してくれると信じていた。

『だって、聞かなかつたじゃないか』

けれど、キュウベえの正体は少女たちのイメージとは違っていた。

詰問に淡々と返答され、少女たちは途方にくれた。魔女になりたくなかった。ソウルジエムが命そのものなんて信じたくなかった。

ただ、最年少の少女だけは何がそこまで辛いのかよく分からなかった。魔女になった方がマシと思える経験をたくさんしてきたから、真実を知っても少しびつくりするだけだった。

それでも大切なメンバーが落ち込んでいるのは見ていられず、ついに固有魔法のことを話してしまう。

『契約、なかったことにする?』

少女の魔法はとも都合が良かった。メンバーを普通の少女に戻すことなど造作もない。ただし代償として、魔法少女として得たすべてのものを失くす必要があった。記憶、経験、友情——チームとして育んだ、少女との絆も。

だから少女は、きつと二人は否定してくれると期待した。あなたたちとの思い出をふいにしてまで、普通に戻りたくはない。絆を失いたくない、と。

そう思っていたのは、少女一人だけだった。

大切な二人は少女の提案に飛びつき、二つ返事で契約破棄を受け入れた。失うものを少女が念押ししても、早くしてと急かすだけだった。

契約が破棄された翌日、少女はその二人のもとを訪ねたけれど、どちらも少女の知らない誰かと一緒にいて、幸せそうに笑っていた。

帰り道、少女はとぼとぼと一人ぼっち。

赤いのれんをくぐって家に着くと、明るい笑顔が迎えてくれる。

「おかえり、お姉ちゃん!」

その声が響くと共に記憶は途切れ、ウワサの結界は崩壊した。

「マミが昏倒してから間もなく、みふゆの表情に陰がさす。

「いつか知らないといけないとはいえ、乱暴ですね。巴さんは大丈夫でしょうか……」  
「大丈夫に決まってるよ」

「マジウスの翼をプレゼンするにあたって、魔法少女の真実は避けては通れない。そのことに心を痛めていたみふゆだが、かすかは自信満々だった。

「強い魔法少女ってたいいメンタルが強い。真実を乗り越えたやつち、みつふがい例だよ。巴氏は相当のやり手みたいだし、真実を知っても取り乱したりはしないと思う」

「……えつ、その理屈は、どうなんでしょう？」

「大丈夫、平気平気！」

魔法少女の強さはメンタルに左右される。先程の迷いのない一発には相当の威力が込められていて、マミの力を察するには十分だった。経験豊かなかすかの見立てによれば、マミが真実に屈することはあり得ない。おそらく真実を変えようのない現実として冷静に受け止め、その上でマジウスの翼の是非を判断し、自分の道をしつかり選び取るだろう、とかすかは推測している。これに首をかしげていたみふゆだったが、かすかの自信に影響されたのか「そ、そうですね！」と同調した。

「この場で誤魔化して逃げると、灯花やねむに捕まってひどいことをされるかもしれない。これが一番穏便な方法でしょう。さすがです、かすかさん！」

「ふっふっふ、さすがカスさすがカス。って誰がカスだって!？」

「ええ!？」

悪の幹部二人が黒い笑みを浮かべていると、横になっていたママが身じろぎする。

生気のない瞳で周囲を見渡し、ゆっくりと立ち上がる。

そうしてかすかたちに目を向けると、

「ぎゃー!？」

即座に発砲した。

照準はそれぞれのソウルジエム。悲鳴をあげつつ、弾体を雷光で迎え撃つかすか。

対するママはとめどなく涙を流し、マスケット銃を撃っては捨てて、撃っては捨てて

を繰り返している。

「魔法少女が魔女になるっていうなら! みんな死ぬしかないじゃない!」

「落ち着いて! 何も今すぐ魔女になるわけじゃないし、私たちはそのために——」

「うああああっ!」

「聞いてない……って、みっふ!」

「きゃあっ!？」

撃ち損じとして見逃した一発の弾が、ひび割れた地面を扶る。

そこから植物のつるのごとくりボンが伸び、みふゆの足を絡め取った。

瞬時に雷光で消し飛ばし、倒れかけたみふゆを助け起こす。

「あなたたちも私も、みんな、みんなあー！」

「みつちゃん、あなたさつきなんて言いました、ねえっ！」

「ごめーん！ でもみつちゃん言うな！」

単発銃とは思えない弾幕を捌きつつ、足元や壁から伸び来るリボンを躲していく。弾丸が古びた支柱の一部をえぐり飛ばし、銃声の中にびしりと何かがきしむ音がした。

記憶ミュージアムは廃墟だ。アリナとの追いかけてこで一つ倒壊させたことから、かすかは建物の脆さを実体験で知っていた。このまま付き合えばウワサがガレキで撃破されてしまう。

「みつふ、ちよつと外に出て！ 私がやる！」

「か、かすかさんを一人になんて……！」

「は、や、く！ 巻き込んだじゃうから！」

暗に邪魔と言われたみふゆは、悔しげに眉根を寄せると、口を引き結んで出入り口の方へ去っていった。

それを見るやかすかは魔力を高め、十数年ぶりの得物を袖口から引き出す。

魔法少女の装束に縫い込まれた雷紋模様が輝き、大蛇のように装束の上を滑って、かすかの手元へ。連結された雷紋の鎖がかすかの手に握られ、かすかを中心にとぐるを巻いた。

「えいつー！」

腕をひとふり。雷紋の鎖の穂先がブレたかと思うと、山吹色に輝く嵐が吹き荒れる。高度に制御されたそれは、マミの弾幕を一発残さず打ち叩き、蒸発させた。

長らく封印していた得物でも手付きに迷いはない。もともと使っていた中華鍋と包丁は、調理技術の向上と中華の宣伝目的で作りだした魔力の塊に過ぎない。本来の戦い方を解禁したかすかなら数百発の弾幕を迎撃することも可能だった。

吹き荒れる山吹色の竜巻。弾を一つ蒸発させるたびにスパークを発し、記憶ミュージアムがまばゆい光に照らされる。

そのまま防戦を続けていると、少しずつ弾幕が散発的になる。ようやく終わりかと思われたその時、マミの手元にひととき強烈な魔力が集中していく。

やがて形成されたのは、人が二三人は入ってまだ余るような大口徑。大砲に申し訳程度の引き金と撃ち金を付け足したような、マミの切り札だ。

「ティロ——」

悲痛な声とともに砲口が輝き、

「ファイナーレ！」

冗談のように巨大な魔力弾が発射される。たとえばかすかが弾いても回避しても、ミュージアムの倒壊は免れないだろう。

しかしかすかの経験値は伊達ではない。慌てずに威力を見極め、最適な行動を選択した。

「ほっ」

連なる雷紋の連結を解除。一つがマミの魔弾の進路上に位置取り、他の個体がそれを囲むように動く。

間もなく着弾すると、ミュージアムの外まで響く閃光と轟音が両者の視界を塗りつぶした。

埃が晴れたそこには軋みを上げながらも健在のミュージアムと、力尽きて膝をつくマミの姿がある。衝撃をうまく相殺できたかすかはほっと息をついて、変身を解除した。

マミの魔力は底を尽きかけていた。発狂による感情の振れ幅が魔力を増幅していたのだろう。その反動でソウルジェムが黒く濁っていた。

すばやく駆け寄ってグリーンフシードを使う。神浜で魔女化することはないが、かすかの場合魔力が少なくなれば即死なので、常にストックしているのだ。

「私は……私はあの子たちを……」



真実を知った動揺を吐き出し、穢れも浄化された。マミの目には若干の理性の光が戻ってきていた。

「あの子たちが、どうしたって?」

「……っ!」

「わわっ」

かすかが隣に寄り添うと、マミはマスケット銃を水平に薙いだ。

泡を食って距離を取り、向かい合う。マミは泣いていた。

かすかにマミの気持ちは分からない。魔女になることの何が怖いのか。ソウルジェムが本体だとしてだから何なのか。それより辛い経験をしたことがないんじゃないの、と僻んでさえいる。

そんなかすかだからこそ。

マミの言葉に深く、鋭くえぐられることとなった。

「私はあの子たちを巻き込んでしまった……魔法少女の宿命を背負わせてしまった……!」

かすかは妹を巻き込んでしまった。魔法少女の宿命を背負わせてしまった。

「魔法少女の後輩ができて、友だちができて嬉しかった……誰かのために頑張って戦うことが誇りだった、あの子たちもそれを分かってくれた……なのに、なのに……」

かすかは妹が魔法少女になってくれて、一緒に戦えて嬉しかった。妹のために頑張る姉であることが誇りだった。

「私が、私のせいで、あの子たちまで魔女に……!」

けれど妹はかすかのせいで、魔女化の宿命を負ってしまった。

壊れた蛇口みたいに涙を流し、懺悔するように語るマミ。浄化したばかりのソウルジェムがまた濁りだしている。きつと自分のソウルジェムも濁っているのだろうか、とかすかは思った。マミは鏡写しのかすか自身だった。

だからかすかはつい言ってしまう。

「分かる」

傷ついた誰かがもつとも腹を立てる言葉を。

「分かるよ。自分のせいで大切な人が宿命を負った。自分が魔女になることよりも、怖いよね、苦しいよね」

「あなたに何が分かるのっ!」

発砲。魔力でコーティングされた強力な弾丸がかすかに迫る。

燃えるような怒りと苛立ちで銃口がぶれたのだろう、ソウルジェムからわずかに狙いが逸れ、かすかの左腕に命中した。

血しぶきが舞う。貫通した銃創から砕けた骨がのぞき、とめどなく血が流れる。

「な、なんで、なんで避けないのよ……」

避けることも、迎撃することもできたはず。あまりにも痛々しい傷に、ママは勢いを失った。

「私も同じなんだ」

弾けた血痕が顔に付着したのも気にせず、かすかは語りだす。

「私には妹がいる。世界で一番大切な妹が。だけど私のせいで魔法少女になっちゃった。それだけじゃないよ」

一歩、ママに近づいた。

「魔法少女の契約を白紙に戻せる魔法があった。だからいつでも元に戻せると思って油断してたら、その力を失って……取り返しがつかないことになってた」

「え……」

自嘲の笑みを浮かべるかすかに、ママはやつと気づいた。この人は私と同じだと。

「笑っちゃうよね。それだけの力があつたのに、なんでもできたのに。大切な人を救えなくて何がお姉ちゃんだって話。あはっ、あははは！」

妹を大切に思う気持ちを抛り所に、かすかは頑張ってきた。一方のママは、悪い魔女を退治して人々を守る誇りに縋って、ずっと戦ってきた。

その末路が今の状況であるとママは悟り――

「でもー」

そのときにはもう、かすかの顔が鼻先まで近づいていた。

「でも、まだ諦めるには早い。すべての魔法少女が宿命から解放される方法がある。私たちマジウスの翼はそのために活動している。だから巴氏——いやさトモちゃん！」

「と、とも……う？」

場にそぐわない珍妙な響きに思わず声を出すマミ。

かすかはそんなマミのふくよかな体を、ぎゅっと抱きしめた。

「辛ければ泣いていい。当たり前散らしていい。私が全部受け止める。そうやって全部吐き出して、まだ立ち上がる元気があるなら！」

体を離し、見つめ合う。

涙に彩られ、けれど覚悟の炎が燃えているかすかの瞳が、マミを貫いた。

「私たちと一緒に歩こう」

かすかの頭に小難しい思考はない。危険因子の取り込み、実力、組織の強化、マジウスの思惑など、幹部として考えるべき事項はすべて吹っ飛んでいる。

ただひとつ残っているものは、最大限の共感。同じ苦しみを抱える少女をなぐさめ、肩を持ちたい気持ちだけである。

呆然とするマミの瞳には正気が戻り、ソウルジェムの穢れは止まっていた。

ママはかすかの熱い視線に負けじと見つめ返し、

「……いいえ。魔女を利用するような組織に、協力なんてできないわ」

一拍置いて、「だけど」と続ける。

「あなた個人に力を貸すなら、喜んで」

共感は一瞬も反響する。かすかがママを放っておけないのと同じように、ママもかすかを他人とは思えなかった。

かすかは心底嬉しそうに、子供のようにはにかいて笑う。

「改めて、六野かすかだよ。よろしく」

「巴马ミよ。大切な人を宿命から解放するために……よろしく」

お互いに固い握手を交わし、同じ志を確かめ合う。

そこでかすかに限界が来た。

「六野さん!？」

かすかの体が傾き、ママに寄りかかる。もともとの魔力量が多いため、ソウルジェムの穢れはわずかしかない。しかし左腕の上腕動脈から相当量の血液が流出していて――出血多量、である。

「た、大変! 誰か、誰か――!」

大慌てで上腕をリボンでぐるぐる巻きにして、テレパシーと肉声両方で助けを呼ぶ。

ミュージアムの外でしょぼくしていたみふゆを巻き込み、かすかはてんやわんやの末里見メデイカルグループ系列の施設へ運び込まれた。

こうして情に流されたかすかにより、見滝原のベテラン魔法少女、バママがマジウスの翼へ加わったのだった。

## 第16話

参京区教育学園。夕暮れに照らされる無人の校庭を抜けた先、地下水路に通じるマンホールの周囲に複数の少女たちが集まっていた。

「フェリシアちゃん、ここがあの人たちの拠点なの？」

「そーだぞ。なんか同じ服着たやつがたくさんいた」

「ウワサの魔力も感じるし、間違いないわね」

「なら急ごう！ もう時間がないよ！」

おなじみのいろは、やちよ、鶴乃の三人から成る神浜ウワサ調査チームに、傭兵魔法少女の深月フェリシアを加えた四人組だ。いろはと同じくウワサに巻き込まれたフェリシアは、ウワサを守る怪しげな集団に寝返るなどしたものの、結局はいろはの説得を聞き入れ共に行動している。

寝返った経緯もあってフェリシアが先導し、地下水路へ入っていく。

二房の長い金髪を揺らしながら、フェリシアは口を開いた。

「なあお前さ」

「……えつ、私？」

お前呼ばわりされたのは、すぐ後ろを歩いていた鶴乃だ。遅れて素っ頓狂な声が出たのに構わず、フェリシアは続ける。

「あの黒ローブの連中と前になんかあったのか？ あいつら『由比鶴乃か、まじか……』つつつて、泣きそうな顔してたぞ」

「そういえばさっきの小競り合いでも、鶴乃だけ狙われてなかったわね」

「鶴乃ちゃん、どう？」

「うええ？ なんにもないよう。さっき会ったのが初めてなんだよ？」

鶴乃は現在追跡中の黒ローブの少女たちに、はれものに触るような扱いを受けていた。諍いになれば露骨に攻撃を避け、鶴乃が前に出てくるとそれだけでタジタジになる。鶴乃自身も不思議で仕方なかったが、心当たりもまたなかった。

「わっ、コウモリ！ 顔にあたった、ぼっちい！」

「落ち着きなさい」

「ひゃー！」

フェリシアがさらに迫及しかけたそのとき、水路に棲むコウモリが鶴乃の顔面でダイブ。いろはもつられて悲鳴をあげたことで、疑惑はうやむやになった。

冷静なフェリシア、やちよに続き涙目の鶴乃、いろはが進んでいくと、物陰から例の黒ローブが姿を現す。



「ここで何を……げっ。由比鶴乃」

「こいつ今げって言ったぞ！」

「なんで!?! 私何もしてないよ、ねえやちよししょー!」

「聞いてみればいいのよ。そうやって出てきたからには、少しは話す気があるんでしょー?」

話し合いに慣れたやちよが前に出て、対話呼びかける。すると黒ローブの少女は期待通り、自身の所属や目的を語りだした。

魔法少女の解放を目的とした三人のマジウスがいること。その三人の手足となって動くのがマジウスの翼であり、黒ローブは黒羽根と呼ばれる構成員であること。ウワサを街にバラまいて被害を出すのは解放のために必要なことであることなど。

「七海やちよ。あなたほどの魔法少女なら分かるでしょう。解放の意味、それに継ぐ気持ちも……」

「ええ。でもね、他人を犠牲にしてまで救われようなんて思っはいいわ」

「そうだよ! 人の不幸の上に成り立つ解放なんていらんわ!」

「解放がなんなのかは分からないけど、誰かを犠牲にするのは違うと思う……」

やちよ、鶴乃、いろはがそれぞれ反論する。フェリシアはよく分からなかったので、頭の後ろで手を組んで突っ立っていた。

黒羽根の少女は悔しげに唇をかみ、いまいましてに吐き捨てた。

「お前たちはやはり、あの方とは違う……力もなく、声も出せない私たちを救ってくれたあの方とは……」

「あの方？」

「なー、もういいだろ！ 時間ねーんだよ！ さつさとコイツぶっ飛ばして奥に行こうぜー！」

「私も賛成だね」

赤い風が水路を駆ける。やちよたちの最後尾から駆け抜けたそれは槍をくるりとひとふりし、黒羽根の少女を薙ぎ払った。一撃で気絶する黒羽根。

突如姿を現した赤い魔法少女は槍を肩に担ぎ、ふんと鼻を鳴らす。

「解放だかなんだか知らねーけどさ。さつさとそのウワサを倒さねーとやべーことが起こるんだろ？ 御託に付き合ってる暇はないね」

「あなた、佐倉さん？」

彼女は佐倉杏子<sup>きょうこ</sup>。今回のウワサを調査する道中、やちよが出くわした市外の魔法少女であり、同じくウワサに巻き込まれた一人だった。

ミザリーウォーターと呼ばれるウワサは、区内のどこかで配布された水を飲むと、24時間後に不幸が訪れるというもの。ご丁寧<sup>ごていねい</sup>に24時間をカウントダウンしてくれる

サービス付きで、不幸が訪れるまで後一時間も無い。やちよたちは先を急いだ。

黒羽根が一人やられたことで、奥から同じような格好の少女たちがワラワラと駆けつけてくる。ひとまずウワサ調査チームと杏子の合同でこれを蹴散らし、水路の奥へ進んだ。

「聞こえてましたよ。あと一時間ですつてね」

「聞こえてたね。あと一時間だつて」

「ねー」

「だけどウチらには関係ない。ここで足止めさせてもらおうから」

「そのままご不幸になられて、辛酸をおなめくださいま——げつ、由比鶴乃……!?!」

「また『げつ』て言われたあ！ なんなのもー!」

「鶴乃ちゃん、本当にこの人たちと何も無いの?」

水路の奥、柱の林立する広い空間に出ると、今度は白いローブの二人組が待ち構えている。

その二人からも嫌そうな声を出され、鶴乃は涙目だ。

一方、白いローブの二人組はごにごによごによと内緒話をしている。テレパシー使いなさいよ、とツツコミたいのをやちよはぐつとこらえた。

「いい加減教えてほしいわね。ウチの鶴乃とあなたたち、一体どういう関係なの?」

「……アンタツチャブル、でございます」

「参京区在住の魔法少女、由比鶴乃に手を出した羽根は」

「すべての羽根から袋叩きにされた上打首獄門だ……」

「鉄の掟で定められているんだよね」

「ねー」

「怖っ!?! ちょっつ、みんな引かないで?!」

時代錯誤もはなはだしい極端な決まりにやちよたちは戦慄し、なんとなく鶴乃から距離をとった。それほどの罰があるということは、実はものすごいビップなのは、恐れ多いやんごとなき人物なのでは、とやちよたちの思いが一つになる。

実際、由比家は没落するまでは相当の名家だった。もしかするとそのあたりの血筋や縁者が関係していたり——その時、やちよはハツとひらめいた。

『魔法少女になったことをなかつたことにする』

魔法少女の解放、救済。ご都合主義を操る最強の魔法少女にして、鶴乃のたった一人のお姉ちゃん。

「瑞乃?」

鬼気迫る表情で、やちよは強く白ローブたちへ一步踏み込んだ。

「そのマジウスというのは、瑞乃のこと? 由比瑞乃。だから鶴乃を特別扱いしている。」

「そうなのね？」

「えっ、さあ……」

「由比瑞乃、つて人は、ウチにはいないよね」

「ねー」

しかし、空振りだった。

当然だ。やちよの知る由比瑞乃は、誰かを犠牲にしてまで救われることを考えない。むしろ自分を犠牲にする考え方をしていたし、そもそも犠牲を要するような力ではない。連想の飛躍だった。鶴乃はほっと胸をなでおろしてから、「お姉ちゃんはそんなことしない！」とやちよに抗議した。

問答にしびれを切らしたフェリシアと杏子が同時に得物を構え、それに対し白ローブ——白羽根の双子もローブを脱ぎ捨て抗戦。笛の音を武器とした双子の攻撃は、地下水路に反響し脅威となる、はずだった。

「鶴乃！」

「あいあいさー！」

しかし、やちよと鶴乃の息の合ったコンビネーションで完全に封殺されてしまう。

「この子の命が惜しければ、武器を捨てなさい」

「たすけてー白羽根のひとー！」

「な、なあつ!？」

「ひ、卑怯すぎるよお!？」

やちよに槍を突きつけられ、悲鳴をあげる鶴乃。やちよの目配せを受け、残りのメンパーも鶴乃を盾にする位置へ移動する。双子はまったく手が出せなくなったが、いろは、フェリシア、杏子はドン引きだった。

由来は不明だが鶴乃に手が出せない掟があるなら、利用しない手はない。双子たちはふくれっ面でふるふる震えながら笛を懐へ仕舞い、両手をあげた。

「今よ!、ここは私たちに任せて奥へ急ぎなさい!」

「やべーな、神浜……」

「やつ、やちよ!、先つちよがつんつんしてるよ!？」

「ああつ、やめるでございますこの外道!」

「仲間を人質にとるなんて恥ずかしくないの!？」

「仲間じゃないわ。かけがえのない親友よ」

「なおのことでございます!？」

鉄の掟と鶴乃による心理プレーで双子が動けない間に三人は奥へ急ぎ、ウワサの怪物と戦闘を始めるのだった。

――

やちよと鶴乃、双子がしばらく人質小芝居をしていると、空間が歪む。どうやら地下水路全体がウワサの結界に含まれていたようだ。浮遊感の後、水路の入り口にあたる校庭の裏手で投げ出される。

いろは、フェリシア、杏子の三人の眼前にくす玉が現れ、おめでとうのメッセージとイラストが描かれた紙を残し、煙のように溶けて消えた。ウワサの怪物を倒し、不幸を回避したのだ。

ウワサを撃破しただけでなく、それを裏で操る組織の情報も得た。今回の調査でやちよたちが得たものは大きい。

しかし笛の双子はそうもいかないようで、真つ赤な顔で両手をぶんぶん上下させている。

「こ、こんな手で負けるなんて納得いかないでございます！」

「西のベテランならもつと正々堂々戦うべきだよね！」

「ねー！」

「ああ、そう」

やちよが軽く聞き流すとますます双子のボルテージが高まっていく。ついに笛を構

え、延長戦が開かれようかというとき、その声はやけにはつきりと響いた。

「月夜さん、月咲さん。ここは退きましよう」

やちよと同時に、鶴乃も動きを止め、それからハツと弾かれたように声の方向を振り返る。はたしてそこには、行方知れずとなった親友が変わらない姿で佇んでいた。

バランスのとれた美しい体つきに、優しい目元、一對の触角アホ毛。かつてやちよたちとチームを組んでいた、梓みふゆその人である。

「みふゆー！ どこ行つてたの！ ずっとずっと探してたんだよ！ だー！」

「うぐっ！ もう鶴乃さん、飛びつくのはやめてください」

鶴乃のタツクルを受け止めたみふゆは、苦笑しながら頭を撫でる。鶴乃はふくよかなみふゆの胸に顔をうずめ、ぴくりとも動かない。

「ほんとに……みふゆなのよね？」

「ここは結界の中じやありません。口寄せ神社のようなウワサではないですよ」

「そう、そうよね……みふゆ、会いたかった……」

鶴乃のように駆け寄ろうとしたところ、みふゆが手を掲げてそれを制する。このタイミングで出てきたことも相まって、嫌な予感がやちよの頭を占め、果たしてその予感がすぐに的中した。

「やっちゃん。今、ワタシはマジウスの翼にいます。一緒にいることはできません」



「そんな……どうして!? 誰かを犠牲にして救われるようなんで、あなたがするはずないじゃない!」

「そうかもしれないですね。でもワタシは翼を辞めるわけにはいかないんです」

みふゆはマギウスの翼に所属していた。しかし何か事情があるらしい。やちよの頭脳が回転を始め、みふゆが失踪した当時のことを回想しはじめた。最後に会ったとき、みふゆは何をしていたか――

「……瑞乃、なの?」

アホ毛がびくりと動いた。その反応からやちよは確信を得る。

「瑞乃もマギウスの翼にいる。だから一人にしないために、翼を辞められないの?」

由比瑞乃。知らない誰かのために自分を犠牲にできる優しい親友の名前だ。失踪した瑞乃を追い、どうかしてマギウスの翼にいることを突き止め、みふゆも後を追った。

「いいえ」

しかしやちよの推理は空を切る。

「由比瑞乃はマギウスの翼ではありません。マギウスの翼の誰に聞いても、答えは変わらないでしょう」

みふゆの真剣な瞳にウソの色は見えない。それだけではなく、隣の笛姉妹も「ゆいみずの?」と疑問符を浮かべている。本当に瑞乃はそこにいないのだろうか。

それならどうしてとなおさら疑問の泥沼にはまろうというとき、きつぱりとした声が響く。

「お姉ちゃんの匂いがする」

「えっ、っ、鶴乃さん？」

みふゆの胸に顔を押し付けていた鶴乃は、みふゆの体をがっちりホールドしたまま顔を上へずらしていき、首元で鼻を鳴らした。

「ふんふん」

「な、何ですか何ですか!？」

「何ですか、つてこつちが聞きたいなあ。みふゆ、お姉ちゃんと一緒にいるでしょ？ しかも毎日」

光のないつぶらな瞳が、みふゆを下からえぐりこむように覗く。

「返して」

どろりとした、粘性のある声音。

「お姉ちゃんを返してよ」

得体の知れないプレッシャーに誰一人動けない。もつとも早く動いたのは、威圧されていた張本人のみふゆだった。

変身と同時に幻覚魔法で霧を呼び、鶴乃の拘束を逃れる。不意打ちで支えを失った鶴

乃はずんのめり、そのスキにみふゆは笛姉妹のもとへ駆けつけた。

「誓つて言います。みつちゃんもワタシのそばにいません」

そうして最後に言い残し、三人は姿を消す。

残されたのは呆然とするやちよたちと、うつむいて表情の見えない鶴乃の五人。

痛い沈黙を最初に破つたのは鶴乃で、「いやー、参つた」と空虚な笑みを浮かべている。

「お姉ちゃんの匂いだと思つただけだなー。気のせいだったのカナ」

「鶴乃……」

「あ、いろはちゃんごめん！ ういちゃんのこと、みふゆにも聞いとけばよかったね！」

「う、ううん、それより鶴乃ちゃん、大丈夫？」

「何が？」

何が、と振り返つた鶴乃の顔には、空虚な強がりかへばりついていて、何一つ押し量れない虚ろな顔つきにいろはは息を呑み、フェリシアは半歩後ずさっている。杏子はいつの間にか姿を消していた。

四人はみかづき荘へ足を向けた。帰り着くと疲れで全員すぐに眠り、翌日からはいろはの引越しと入居、フェリシアの入居とバイトなど新たな話題に追われ、鶴乃もいつの間にか普段の調子に戻っていた。

――  
――  
恵まれた少女の夢を見た。

ある日学校で配られたカードにやさしい言葉と電話番号が書かれてあつた。そこへ電話をかけて両親のことを相談すると、君は愛されているんだと言われ、少女は通話を切つた。

携帯電話からインターネットにつながることを知つた。誰でも意見を書き込める場所に辛い思いを書き込むと、甘つたれるな、幸せものめ、そのくらい普通だという旨の返信が、たくさん届いた。

『君、自分が世界で一番不幸つて思い込んでない？』

そうなのかも、と少女は思つた。

苦しいことや辛いことがあるのは当たり前で、頑張ることも当たり前。うまくいかないのは頑張つてないからで、頑張らないことは悪いこと。悪いやつが弱音を吐くのは気持ち悪いことだと、少女は魂の底まで刻み込んだ。

――  
――

うつすらと目を開けると、少女の視界に白い天井が広がった。左半分が欠けている。どこかで見たような光景で、視線を巡らせればやはり清潔感あふれる病室であることが分かる。ゆっくり上体を起こすとめまいがした。

「六野さん！」

「おはよう。気分はどうだい？」

「絶好調」

ベッドサイドには涙ぐむマミと、本を開くねむの姿があつた。

ねむはかすかの返答に目を細め、一度部屋を出ていく。ほどなく戻ってきた彼女には白衣の男性が連れ添っていた。先生を呼んできたらしい。

医師は軽い質疑応答の後、輸血の処置が行われたこと、今日一日ゆっくり休む旨を告げ、病室を後にした。悲しげなマミと今にもまぶたの落ちそうないつものねむが残される。

その頃には意識を失う前の記憶が鮮明になってきており、ふとボロボロになった左腕へ目をやる。そこには包帯の上から黄色い魔力製のリボンが幾重にも巻かれており、溢れ出る魔力が無数の花となって咲いては消えてを繰り返している。

「私の魔法よ。繋ぎ止める力があるの。ひどいことをしてしまって、本当にごめんなさい」

「え、いやあの、ぶっちゃけ今考えると、私の完全なマッチポンプで、トモちゃんが謝ることは何も……」

「それでも、あなたは私のすべてを受け止めてくれた。ひどい八つ当たりも、弱い私も、みっともない私もすべて。だから私はあなたの隣にいたい。お願い」

「そ、そっか。じゃあよろしく」

かすかとしてはただ熱くなって共感しただけなので感謝される謂れはないものの、ありがたうを貰って気を悪くするわけもない。とりあえずよろしくすると、本を閉じたねむが割って入ってきた。

「巴マミ。少々内密な話をするから、席を外してくれるかい？」

「……分かった。でも勘違いしないで。私はあなたたちマギウスの翼じゃない。六野さんに協力する一人の魔法少女よ」

「重々承知しているよ」

マミはねむを警戒の目つきで一瞥すると、かすかに微笑みを残して優雅に退室していった。

扉が閉じた数秒後、ねむはため息を一つ。

「みふゆと巴マミの証言から、記憶ミュージアムで起きたことはもう把握しているよ。あれほどの実力者を正面から説き伏せ、協力者に仕立て上げた点は評価できる。けれ

ど、わざと攻撃を避けずに受け止めるのは無茶が過ぎるよ。どうしてそんな馬鹿げたことをしたのかな？」

「ぐう……」

「……」

「あいつた!?!」

あまりにもスローテンポな語り口でかすかのまぶたが重くなってしまった。むすつとしたねむに頬をつねられ、目を白黒させている。

「どうしてと言われても、私のせいで泣いて苦しんでる子を、全力でなぐさめて何かおかしかな?」

「おかしいね。論理的に破綻している。君が重症の上意識不明と聞いたとき、泣いて苦しむ子はたくさんいる。君が倒れたら、誰がその子たちをなぐさめるのかな」

「そ、それは……」

「いいよ、少し意地悪な言い方だったね。でもこれだけは忘れないでほしい」  
君が無理をすると、悲しむ人がたくさんいる。

それだけ言うのが済んだのか、ねむは口調と同じくゆったりとした足取りで出ていった。

しばらくするとみふゆ、羽根たち、最後に灯花がやってきて、口々にかすかの無茶へ

お小言を残していった。みふゆは泣きそうなのをこらえながら、羽根たちは申し訳なきように、灯花はわかりやすくほつぺたを膨らませかすかの左腕をペしペし叩いた。話を聞くと灯花はかすかの出身に氣遣い、父に泣きついて西から遠いこの個人診療所を手配してくれたらしい。今度なんでも好きな料理かデザートを作る約束をすると、無邪気に喜んでくれた。

見舞い客が途切れ、消灯した薄暗い病室。天井を見上げるかすかは面映い気持ちで一息ついた。

ほんの少し頑張っただけでこんなにも心配してくれる人がいる。少女が知っているよりも、世界は優しくできていた。

その優しさを初めて教えてくれた妹へ、死ぬまでに必ず恩を返す。

「もつと、もつと頑張ろう」

張り切るかすかの目には希望が満ちて、ソウルジェムには魔力が充足している。無理無茶無謀と頑張ることの区別がつかないかすかには、できないことなど何も無い。

翌日退院したかすかはさっそく市内を駆け回って仕事に従事し、翼の面々はそろって頭を抱えたという。



## 第17話

神戸市中央区某所、マンションの一室。カーテンの開いたベランダから日の出の光が差し込み、3LDKの広々とした室内を照らし出す。リビングのテレビは朝の情報番組を流して、キッチンでは朝食のいい匂いが漂う。

中火で煮立つ鍋の前に、エプロン姿の少女が立っている。部屋の住人の一人、六野かすかだ。

鍋の中身を小皿にすくい、口に含んで一言。

「ん、こんなもんかな」

するとタイミングよくオーブンと炊飯器がブザーを鳴らし、かすかはあらかじめ用意しておいた容器に三人分のおかずをよそっていく。小鉢や副菜は冷蔵庫から取り出して、食卓へさつさと運んだ。動くのは右腕だけだが、一人で数人分の人手を賄っていたワンオペ時代に比べればどうということはない。

食器も含め準備を終えたところで、同居人の二人が顔を出す。

「ふわあ、おはようございませす」

「おはよーみっふ。顔洗っておいで」

一人は悴みふゆ。ふさふさした銀髪が寝癖で爆発し、口元にはよだれのあとが見える。

みふゆは「ほんとにお魚、お味噌汁に彩られた食卓をぼうっと見つめた後、泡を食って慌てます。」

「か、かすかさん？ 病み上がりなんですから、朝食はワタシが用意すると——」

「みつふがキッチンに立つ、すなわちテロ。おっけー？」

「て、テロは言い過ぎですつ！」

「その傷だらけの指を見て言い過ぎて言える？」

みふゆは絆創膏まみれの両手を見下ろすと、しょんぼり肩を落として洗面所へ姿を消した。昨晩かすかの代わりに夕食を担当し、こさえたものだった。むろん味の方も危な過ぎる手付き相応で、かすかともう一人の住人はそろつてもう止めてと懇願したのが灯前の話だ。

みふゆと入れ替わりでもう一人がやってくる。

「おはようございます、六野さん」

「おはようトモちゃん」

寝室から出てきたその少女はすでに制服を着込み、特徴的なくなるくるツイントールがセツトされている。淑女然とした優雅な雰囲気漂う彼女はバマミ。かすかの説得に応

じ、組織には入らないまま個人的に協力することを決めた魔法少女である。

「わあ、おいしそう。みふゆさんは？」

「顔洗いに行ってる。ちよつと待ってね」

実に行儀よく椅子に腰掛け、みふゆを待つマミ。やがて寝癖そのまままでやってきたみふゆを迎え、三人は「いただきます」と手を合わせた。マミの協力を取り付けてから一週間後の朝の一幕である。

かすかとみふゆが所属する秘密組織、マジウスの翼。協力を決めたとはいえ、一般的に悪と見られる行為も辞さないこの組織にマミが同調することはなかった。かといって自身の絶望、苦しみをすべて受け止めた上で共感と理解を示したかすかの元を離れる気にはならず、マミは外部協力者としての立場を得る。

この際問題となったのはマミの住処だった。どんな立場であろうと悪行に手を貸すことは変わらないので、見滝原に戻るわけにはいかない。そこに住まう大切な仲間たちと合わせる顔がなかったからだ。当初はビジネスホテルに連泊して活動するつもりだったものの、

『じゃあウチに来たら？』

と、かすかが提案。同棲中のみふゆと三人で住むこととなった。みふゆは『ワタシとみつちゃんの愛の巣が……』とふてくされ、かすかに小突かれていた。

みふゆは黄色いリボンでぐるぐる巻きにされたかすかの左腕に思うところがあるらしく、マミとの交流は限定的だった。とはいえかすか本人が気にしていないことと年上のプライドもあって、ほどなく気軽に言葉を交わす程度の仲に落ち着いた。

朝食を終えるとみふゆはすばやく身だしなみを整え、マミと共に玄関へ。これからマギウス本部のある電波望遠鏡へ向かい、それぞれ魔女の回収やウワサの管理などの仕事に従事する。かすかはマギウスの三人から「働きすぎ」との指摘を受け、今日一日は休みだ。

「いってきます」

声をそろえる二人にいつてらっしやいと返すかすか。扉が閉まって二人分の足音が聞こえなくなるまでじつとその場を動かさず、数分後、名残惜しそうに踵を返す。

しんとした広い部屋の中、洗濯機を回し、掃除機をかけ、ワイパーをかけ、晩の献立を考えながらお風呂を洗う。共用で使っているシャンプーが切れていたので、詰め替えパックを補充。止まった洗濯機から三人分の洗い物を取り出し、ベランダに出すと初夏の陽光が照りつけ、かすかの額に汗が浮かんだ。

「ふん、ふん、ふん」

お昼や晩の料理について考えているとつい上機嫌になってしまい、能天気な自分に苦笑を漏らす。瑞乃だった時代にはなかつた経験だった。

かすかは料理をすることについて、好悪の念を抱いたことはない。その先にある鶴乃の笑顔を見るための手段に好きも嫌いもなかったからだ。

しかしこだわりの料理を食べて笑顔を浮かべる灯花やねむ、みふゆ、マミ、羽根たちのことを思うと、知らず機嫌がよくなつて瑞乃時代のように力を入れてしまう。いつしか料理すること自体が好きになつていと気づいたとき、かすかは現金な自分に乾いた笑みを浮かべた。

一人で鼻歌をエキサイトさせていたことをごまかすように、ふとベランダから外を見渡す。目に入るのは密集する住宅街。少しづつ遠くへ視線を向ければ中央区のセントラルタワーを中心に摩天楼が墓標みたいに立っている。あの向こう側にかつての仲間や妹たちが住んでいるのだと思うと、途方もなく遠くまで来てしまった錯覚に陥る。

「つつ……い」

唐突な激痛。体が支えられず手すりに体重を預け、ずるずると座り込んでしまう。身を引き裂かれるような痛みだった。何を考える余裕もなく、妹の笑顔が走馬灯のように脳裏を駆け巡る。

震える手でエプロンのポケットをまさぐり、穢れに満ちた黒い種を取り出す。一度地面に転がしたそれに右手の指輪を押し当てると、徐々に痛みが引いてきた。

ソウルジェムから穢れが吸収され、輝きとともに魔力も回復する。それに伴い痛みが

消えると、かすかは力なくベランダに転がった。色素の薄い茶髪が汗で頬に張り付いている。

「んもー、何なの最近……」

かすかは潤沢な魔力と固有魔法の補助により、すでに死んだ魂を延命している。したがって魔力がある程度減少すると生命の維持に支障をきたし、魂が砕ける激痛が発作的に発生する。もともと魔力量が多い上に節約術を習得しているかすかにとって、発作は避けられるはずだった。

しかし最近はなぜか勝手に魔力が減ってしまう。まるで見えないどこかですさまじい魔法を行使しているかのように。

「ご都合主義、なのかな」

常時発動の固有魔法、ご都合主義。あらゆる因果に干渉し都合のいい結果を呼び寄せる魔法。おそらく浪費の原因はこれだとかすかは踏んでいるが詳細は不明だ。分かることといえばみふゆとマジウスの三人組の近くにいるとき、集中的に消費されることだけ。

「……うえ、ぐすつ……」

何をして迷惑をかけるだけの癖に、都合のいい幸せを願った。その幸せを守るためにもつと迷惑をかけようとしている。身を裂く痛みが当然の報いだとは分かっている。

も、かすかは泣きたくて仕方なかった。ペランダの地面にうずくまり、嗚咽を漏らすかすかの姿は、とてもみじめだった。

——

「ああつ、巴さんが死んだー！」

魔女の結界に悲痛な声が響く。それを聞きつけた古参の黒羽根たちは目を見張り、幹部が自らスカウトしてきた新入りの末路へ注目した。

その名はバマミ。長年一人で魔女退治を続けてきた実力者であり、その力はスカウトしてきた幹部だけでなくマギウスの三人も認めるほど。さっそく黒羽根の主要業務の一つである魔女の撃破および捕獲に駆り出されて今日が一週間目だったが、それもこれまでのようだ。

黒羽根たちの後方支援を受けつつ最前線に立っていたマミへ、使い魔と魔女の攻撃が殺到。逃げ場のない猛攻を前にマミは身じろぎもせず、すべてをその身で受け止めた。殺意と穢れに満ちた凶器がソウルジェムごとマミの身体を穿つ——

「あれっ!？」

かに思われた。少なくとも黒羽根たちの目にはそう映った。

魔女たちの攻撃が直撃したマミの身体は、糸細工のごとくバラバラとほつれ、無数のリボンに姿を変える。そのリボンは使い魔と魔女に絡みつき、蜘蛛の巣のように縛り上げた。

「惜しかったわね」

リボンで編み上げたダミーといつの間に入れ替わっていたのか、本物のマミが結界の上方から姿を現す。自然落下の最中にマスケット銃の大群を編み上げ、一斉射によりま<sup>ず</sup>は縛り上げた使い魔を蜂の巣にしたのち、続けて身の丈を軽く超える大砲を生み出す。

「ティロ・ファイナーレ！」

大砲から発射された希望の弾頭は魔女を貫き、結界が消滅。同時に魔女はグリーンフィールドへ姿を変え、優雅に着地したマミの手に収まったのだった。

「ふう……」

「すつごーいー！」

「マミさん最強、無敵！」

「私はマミさんなら抱かれてもいい」

「ちよ、ちよつと」

一息つくヒマもなく、興奮した様子の黒羽根たちがマミに詰め寄る。マミはたじたじ



になりながらもまつすぐな称賛を受け止め、「ありがとう」と顔を赤らめて答える。魔女退治に駆り出されてから恒例になりつつある一幕だった。

「もう、大げさよ。私よりかすかさんの方がよっぽど強いでしょう?」

「そりゃそうかもですけど、あの人強い弱いつて次元じゃないから」

「ママさんはなんというか、地に足のついた最強つて感じつすよね! 正統派、王道つて

いうか」

「分かる」

一人で磨き続けてきた力を褒められ、頼られる。面映い気持ちになると同時に、見滝原へ置いてきた友人たちの顔が頭をよぎり、ママの表情は少しずつ陰つていく。その様子に気づかないまま、黒羽根たちは輪の中心にいるママを口々に称えるのを止めない。

そろそろ強がりの微笑みにボロが出るかというとき、手を打ち合わせる乾いた音が空気を割った。

「はい、そこまで。もう日が暮れるよ。門限早い子は上がっちゃって、そうじゃない子は次の現場に行つてね」

輪の外から声をかけたのは、最古参の黒羽根。同じ羽根たちからはリーダーと呼ばれている人物だった。ロープの下からママへ目配せしてから、はしゃぐ羽根たちへ指示を飛ばす。

「ママを囲っていた羽根たちは名残惜しそうに「お疲れ様でした」「ありがとうございます」「ありがとうございました」などといさつを言い置いて、めいめい散っていく。

残されたのはリーダーとママの二人きり。人気のない中央区の郊外で二人は並び立つ。

「お疲れ様。いやー、巴さんが入ってから魔女退治がすごく楽になったよ。ほんと助かるー」

「そ、そう。なら良かったわ」

端切れ悪く目をそらしてママは答えた。ママの口を重くしているのは、一週間経って心に芽生えた猜疑心だった。それを黒羽根のリーダーに気取られてはいけない気持ちと、相談したい気持ち半々になっている。

黒羽根のリーダーの心象はけっして悪くない。相談してみるのもいいかもと考えつつ、ママはリーダーの方を盗み見る。

リーダーとの出会いは決闘だった。

『かすかさんにケガさせておいて同棲だとう!?! コロス!』

『や、やめようよリーダー』

『そうだよ、かすかさんにケガさせるような人だよ? 逆らったら殺されるよ』

一週間前、ぽつと出のくせにマギウスたちに重用されるママに、黒羽根白羽根たちは

不満をくすぶらせていた。それを自ら爆発させたのがリーダーだった。ママは喧嘩腰の相手によどみなく応対できるほど大人ではないので、リーダーの剣幕に戸惑うばかりだった。

が、リーダーはここで地雷を踏んだ。

『リボンなんか武器の頭メルヘン女に誰が負けるか！ 私の武器ハサミだもんね！

やーい、弱そうな武器ー！』

『よ、弱そうな武器……』

『リーダー、時雨ちゃんのこと悪く言わないでくださいっ！』

『ち、ちがつ……ええい、全部このリボンちゃんが悪いんじゃない！』

なんと魔法少女の武器でマウントを取り出したのである。当時近くにいた、パチンコを武器にする黒羽根まで巻き添えにしてママの地雷を見事に踏み抜き、黒羽根対新入り魔法少女の決闘と相成った。

闘いの決着は四秒で付いた。静かにキレていたママがリボンを数十丁のマスケット銃に変化させ、照準を向けるのに一秒。距離を詰める手段のないリーダーが詰みを自覚するのに一秒。『生意気言っすんませんでした』と土下座するのに二秒である。

第一印象は最悪の一言だったが、あの一件がなければ羽根たちに馴染むのもっと時間がかかっただろうことを思うと、リーダーがあえて芝居を打ったのではとママは推理

している。

「巴さん？　どうかした？」

「実はね……」

み　だから、悩みを打ち明けてもいい気がした。必死で言葉を選び、一週間で積もった悩みを――

「あつ、もしかしてもう辞めたくなくなっちゃった？　翼の活動」

「翼の活動なんだけど……えっ、な、なんで分かったの？」

言おうとしたところ、先回りされた。

マミはすでに翼への協力を辞めたくなくなっていた。リーダーはそのことをあらかじめ察していた。そろそろ辞めたくなくなるころだろうと。

「そりゃ分かりますとも。だいぶライン攻めてるからね、私たちの活動って」

「ラインって？」

「魔法少女が超えちゃいけない一線のこと。まあ瑞乃さん、今のかすかさんの受け売りなんだけどね」

いわく、魔法少女には超えちゃいけない、超えられない一線がある。一般人を巻き込まないという暗黙の了解のことだ。

この一線は気性や思想に関わらずすべての魔法少女が無意識に守っているという。

たとえば縄張りを侵されると問答無用で殺しにかかる子や、縄張りに関係なく同業を見るや殺そうとする子、使い魔を見逃して魔女になるまで犠牲者を許容する子であっても、積極的に一般人を巻き込むことはしない。誰に言われるでもなく、魔法少女はこの一線を必ず守る。

だからこそ、マジウスの翼は異端なのだ。目的のために一般人を巻き込み、一線を踏み超える。その後ろめたさがあるから羽根たちはローブで顔と名前を隠している。

「巴さんも後ろめたくなっただんでしょ？」

「……ええ。あの子達が今の私を見たらきつと失望してしまう。合わせる顔がない。正直そう思ってるわ。……待って、私『も』？」

リーダーはこくりとうなずいて、

「みんな後ろめたいよ。特に私たちかすかさん派の羽根は、ぶっちゃけ魔法少女の解放とかどうでもいいし」

あけすけにそう言ったので、ママはしばし呆気にとられた。

「ど、どうでもって。じゃあなんで黒羽根を続けているの？ 後ろめたいなら辞めればいいじゃない」

「恩返しだよ。よわよわ魔法少女の連絡網って知ってる？」

ママはその名前を知っていた。マジウスからは黒羽根の前身組織だと聞いていたし、

見滝原にいた頃にも魔法少女同士の互助組織のようなものとして噂程度に耳に入ってきていた。

「組織って呼べるほど立派なものじゃないけど……あれ作ったの、私なんよね」

リーダーは組織の起こりと発展について語った。かすかのグリーンフシード融通と戦い方の講習、それによって救われた魔法少女たちが同じ境遇の者たちを助け合い、ねずみ算式に影響力を増していったこと。そのねずみ算の頂点がかすかであり、すぐ下にいるうちの一人がリーダーだという。

リーダーは自嘲気味に笑った。

「世の中にはね、助けてって言えない子がたくさんいるんだ。自分一人じゃなにもできないし、戦う勇気もないくせに、弱音を吐くことさえ満足にできない。救いようのない子がたくさんいる」

そんな連中に決まってかけられる言葉は、戦え、勇気を出せ、誰かに相談しろ、現実に向き合え。強い選択肢ばかりだとリーダーは吐き捨てた。

「今のままじゃいけないから変われって言うんだよ。それができないから苦しいのに、できないことを頑張れって。でもね、あの人だけは違った。弱いままでもいい、戦わずに逃げてもいい。私たちのままでいいって言うてくれた。そんなあの人に私たちは救われたから——」

恩を返す。そのためには罪悪感を踏み倒し、超えてはいけな一線も軽々と飛び越えてみせる。黒羽根の多くはその覚悟を決めている。

リーダーも真実を知った当初は魔女になることが恐ろしかった。だから灯花の勧誘を受けてすぐ、瑞乃に味方してもらうために灯花を連れて相談に向かった。しかし瑞乃がかつてないほど追い詰められ、妹のことを気に病んでいるのを見ると、リーダー含む黒羽根たちは恐怖よりも報恩への想いを強くしたのだ。

遠くを見つめていたリーダーの視線がマミへ向けられる。ロープの陰に隠れた目は、強い感情でギラギラ光っているようだった。

「そのために私たちは戦う。あの人のために尽くす。巴さん、あなたはあの人と話してどうだった？」

「私、は……」

正面からまっすぐぶつかってきたかすかの瞳が脳裏によぎる。同時に、一週間かけて積み上げてきた罪悪感と、数年間正義を信じて戦ってきた矜持が頭をもたげ、マミは袋小路に陥った。その上友人たちを魔法少女の宿命へ巻き込んだ負い目、後ろめたさ——到底処理できない感情の津波がマミの心を押し潰さんとする。

その時、マミの背中が優しく二度叩かれた。

「大丈夫。私たちでも、かすかさんでも誰でもいいから……あ、いや、マギウスの三人は

ダメだけど。とにかく信頼できる人に相談してゆつくり決めたらいい。みんな味方だから、ね」

「……」

ママは一言、ありがとうと言い置いて、ゆつくりと帰路へついた。

——

「おかえりトモちゃん」

「た、ただいま」

発作から数時間後、涙のあとを拭ってけろりとした顔つきでママを出迎えるかすか。

ママはまだ慣れない調子で返し、もじもじしながら上がってきた。自室にこもつてから部屋着へ着替え、リビングへ出てくる。その手には一つのグリーンフシードがあった。

「今日は好調だったわ。魔女を三体捕獲して、ウワサのエネルギー回収も順調。魔法少女の解放にまた一歩近づいた」

「ふーん」

言葉とは裏腹に、ママの表情は暗い。笑いたくもないのに無理な笑顔を貼り付けようとしているのが丸わかりの顔だった。



リビングのソファに腰掛けたかすかは、ママを手招き。近づいてきたところで隣のスペースをぼんぼん叩くと、ママはおずおず腰を下ろした。

数秒の沈黙の後、口を開く。

「無理はしなくていいよ」

びくり、とママの肩が震えた。

「いくら立場にこだわっても、やることは変わらないからね。魔女を育てたり、ウワサを守ったり、辛いんでしょ？」

「……ええ」

ママは正義感の強い魔法少女だった。魔法少女と魔女の関係を善悪にあてはめ、自分たちが正義だと疑わず、誇りをもって生きてきた。だからこそ真実に一度は発狂し、理解を示されて嬉しかった。

その正義感が警鐘を鳴らしているのだ。見知らぬ誰かを犠牲にするマジウスの計画は正しくない、と。

かといって見滝原に戻る踏ん切りもつかず、ないまぜになつた感情が渋滞を起こしている。考えがまとまらないままママは訥々と言葉を漏らした。

「本当にこれでいいの？ 私には誰かを守るために戦つてきた。仲間もできた。誰かを不幸にしてまで救われようなんて、考えもしなかった……でも真実を知った今、あの子達

に合わせる顔がない。宿命を背負わせたことが、辛い……ねえ六野さん。私は正しいことをしているの……?」

それでもマギウスの計画に協力せざるを得なかった。自分のせいで宿命を背負わせた罪と向き合う覚悟がなかったから。唯一の逃げ道を示してくれたかすかに縋るマミ。

しかしかすかはマミの揺れる瞳に対し、残酷に言い放つ。

「正しくないよ」

同じ苦しみを抱えるマミ相手だからこそ、かすかははつきりと告げる。

「こんなやり方が正しいわけではない。だけど時間がない、他の手を考える頭もない。だつたらやるしかないでしょーが。罪だの何だの知ったこつちやない。私はただ自分が許せない。何でもできる力があつたのに、あの子に宿命を背負わせた自分が」

だけど、とかすかはマミの右肩をつかむ。その瞳はマミと同じく揺れていて、今にも壊れるかに思えた。

「だけど、割り切れないんだ。悪人になる覚悟を決められない。半端に悩んで迷って、どつちつかずであろうとしてる。やりたいこと、なるべき自分、今までの自分。全部ぐちやぐちやになって……だから——」

苦しいんだ。

苦しくて、辛いんだとかすかは言った。

ママの葛藤や悩みへの回答としては支離滅裂な言動。しかし本当の苦しみを抱える少女にとつて、これ以上ない慰めでもあつた。

(やっぱりこの人は、同じなのね)

本当に苦しくて辛いとき、人は誰だつて孤独だ。誰も共感してくれず、優しくもしてくれない。魔法少女になつてから孤独に耐えて戦つてきたママはそのことをよく知つていて、後ろ暗い前世を持つかすかもまた同様。鏡合わせの二人が持つ苦悩は共感し、響き合う。

ママはかすかの小さな右手を取り、指を絡める。

「決めたわ」

ママの瞳には強い光が宿つていた。暗闇の中で見つけた灯火がそこへ映り込んでいく。迷いに揺れていた声音は決然として曇らない。

「私には何が正しいかなんて分からない。でも貴女に——かすかさんに向けるこの思いだけは本物よ」

揺らぐ気持ち肯定も否定もせず、ただただ深い共感を示した魔法少女の先達。そんなかすかにママが向ける気持ちに近い言葉を挙げるとすれば、思慕かもしれない。もしくは——

「トモちゃん？　なんか目怖いよ？」

「これからもよろしくね、かすかさん」

「う、うん」

盲信と呼ぶこともできよう。

この翌日、マギウス本部へかすかと共に顔を出したママは正式に組織へ加入する意志を表明。市外出身の實力ある魔法少女として、かすか、みふゆに並ぶ幹部として名を連ねることとなる。

## 第18話

北養区、電波望遠鏡の真下。地下のフロア全域をぶちぬいた広い空間は毒々しい色彩に染め上げられ、魔女の結界を思わせる。元はポンプ室や電気室などがあるだけの小さなフロアだったが、マジウスが一人アリナの結界によつて拡張され、体育館程度のスペースが確保されていた。

そんな結界の中央に、巨大な生き物が安置されている。王冠と宝石で彩られた蛾のようなそれは天井すれすれまで届く巨体を誇り、通常の魔女とは比較にならない濃密な瘴気をまとう。

エンブリオ・イブ。マジウスが計画の要としている特殊な半魔女だ。大きな腹部には神浜市全域から集めた感情エネルギーと穢れが貯蔵されており、このエネルギーが臨界に達したそのとき、世界を変革できるほどの相転移エネルギーを生む。

そんな規格外の半魔女の足元にて、テーブルにつく人物が三人。

そのうちの一人は烏龍茶を飲みながら、イブの体を仰ぎ見る。

「わんぱくでもいい、たくましく育ってほしい」

「どこから目線?」

「お姉ちゃん目線」

「イブ相手にお姉ちゃん力を發揮するものじゃないよ、かすか」

組織の幹部、かすか。さらにその上に立つマギウスの二人、灯花とねむだ。イブの成長具合を確認しつつ今後の組織の方針を相談する幹部会議の真つ最中である。他の幹部クラスはそれぞれの活動で忙しく、取り急ぎ集まれる人員だけで話を進めている。

かすかは冗談もそこそこに、イブを見上げたまま言った。

「でもほんと、竹より成長早くない？ 私が来たころはこれの半分くらいだったよね？」  
「それだけエネルギーの回収が順調ってことだよ！ 特にかすかの働くと、後追いで入ってきたよわよわ魔法少女連絡網の影響が大きいよね」

「同感だよ。僕らが電波勧誘を実行する前に、初動でかなりの量のエネルギーを調達できたことは、この上ない僥倖だった」

「ふーん」

なんにせよ、妹を救う作戦が早まることに不都合はない。かすかの余命は短く、用意した秘策も成功する確証がないため、前倒しはむしろ非常に好都合だ。

灯花は紅茶をちびちび飲みつつ、複雑そうに表情を曇らせる。

「でも残念だなー。わたくしの考えた素敵な作戦、必要なさそうだもん」

「作戦って？」

「ワルプルギスの夜を神浜へ」招待する作戦だよ！」

ふーんと流しかけたかすかは数秒視線を宙に漂わせてから、目をまんまるにして灯花を二度見した。何言ってるのこいつと言わんばかりの視線をもともせず、灯花は得意げにボツとなった作戦を語りだす。

数百年単位で生存する伝説級の魔女、ワルプルギスの夜。魔力を持たない一般人には大災害として認識される天災的魔女を、灯花は神浜に呼ぶことができる。

まず羽根たちのマンパワーにより神浜市の電波局を制圧し、手中に収めた電波を灯花が調整してワルプルギスの夜へ照射。さらにねむが具現の魔法でアレコレすると、電波で市外から魔女を集めているのと同じ要領でワルプルギスの夜さえ呼べちゃうという。

すると神浜市が崩壊する代わりに、犠牲者たちから大量の感情エネルギーが発生。イブは簡単に孵化すること。ワルプルギスの夜は、魔女化したイブに食べさせれば問題ない。

かすかは苦い顔で眉間を押さえている。

「もうちよい人に優しくなろう？ 犠牲者の気持ち考えて？」

「未来で救われる何千何万の——」

「それも聞いた」

未来のためなら今の犠牲は許容できる。合理的な考えをさえぎられた灯花はぶくつ

と頬を膨らませた。ねむもまた同じように、罪悪感やためらいはまったくうかがえない。

(気のいい子たちなんだけど、こういうところがなあ……)

小さな友だちの困ったところを改めて突きつけられ、かすかは頭の痛い思いだった。指でとんとんテーブルをタップしながら顔をしかめる。

「計画に相乗りさせてもらってる手前、こんなこと言いたくないけどさ……さすがにそれ、ラインだからね」

「ラインって？」

「強行したら裏切るってこと」

空気が硬化する。灯花とねむは目を見開きかすかを見返してから、硬い表情でうなずいた。

かすかの立ち位置は最大戦力だけでなく、羽根の初期メンバーの楔でもある。造反はすなわち計画の崩壊なので、二人も神妙にならざるを得ないのだろう。

とはいえ、エネルギーの回収進捗はきわめて順調。わざわざ伝説を呼び寄せる危険極まりない加速案を実行する必要はない。焦らずコツコツと活動すれば年内には解放が成るのだから。

この調子で頑張るために、と灯花が言葉を継いで会議が続く。組織が保有する有力な



魔法の管理、エネルギーの回収効率ごとに分類した大物、小物のウワサの管理など。ウワサについては西に放している口寄せ神社、ミザリーウォーターが立て続けに破壊されており、西での警戒を強める必要がある。

ウワサはねむむが魔法で創造しているが、一つ生み出すごとに寿命が削れ、体調が大きく崩れる。出来る限り壊されてはいけない。

「そのことについて、報告がある」

方針を共有する灯花とかすかに、ねむむが割って入った。

「遺言のドツペルによるウワサの創造。その代償に僕の寿命があつたわけだけれど……おそらく、代償はもう不要だよ」

「えっ?」

灯花が身を乗り出した。計画に必要とはいえ、ねむむが支払う代償を本人よりも強く懸念していたのは灯花だったからだ。どういうこと、と口に出す。

「僕にも詳細は分からない。およそ一月ほど前から、ウワサを創造しても負荷を感じなくなつたんだ。現にここ最近では体調を一度も崩してない」

「そういえばずっと調子いいままだもんね。へー、そっか」

「何をニヤニヤしているのかな、灯花?」

「べっつにー」

不思議そうに首をかしげるねむに對し、灯花は満面の笑みで紅茶を口に運ぶ。かすかにとつてもこの小さな友だちが健康でいることは都合がよく、同じように烏龍茶を口に運ぼうとして、ふと気づいた。

親しい誰かが抱える不都合。なかったことになる代償。勝手に減っていく自分の魔力。試しに指輪状のソウルジェムへ意識を向けてみると、今朝グリーンフシードを使ったはずなのにもう穢れが溜まっていた。

「天才を自称するなら、何か仮説の一つでもないのかい？」

「情報が足りないにゃー。科学的な検証には、事実の観測を積み重ねることが不可欠なんだよ。想像だけでみんな間に合わせるねむとは違うんだから」

「むっ……その言い方だと、まるで僕が現実を見ていないように聞こえるよ」

「くふっ」

「灯花……いー」

「どうどう」

ヒートアップする二人をなだめながら、心当たりというより答えをそのまま察したかすかは薄く笑った。好都合だ、と。

どのみちもうまっとうに生きることとはできない。未来ある誰かのために少しでも命を使ったほうがいいだろう。とりわけねむは、弟と妹の違いがあるとはいえ同じお姉

ちやんであり、転生の希望を分かち合った同士なのだから。

ねむと灯花が仲良くいがみ合うのに挟まれながらも会議は進み、解散することに。

かすかは烏龍茶を飲み干して席を立つと、別れ際に言った。

「みとつち。約束のブツはもうできてるから、今夜ウチに来てくれる?」

「ほんど? 行く行く!」

「何の話かな?」

「ねむには関係ないよ!」

放っておくとキャットファイトでも始めそうな気配を感じ、かすかはむっとするねむを「まままま」となだめた。

「デザートの話」

かすかの左腕がちぎれかけて入院した折、いろいろと気を利かせてくれた灯花へのお礼のため、好きなデザートを作ると約束した。そのとおりに一品出来上がったから、という話だ。

話を聞いたねむはますます不機嫌そうに口を尖らせる。灯花は勝ち誇ったように胸を張り雰囲気は悪化の一途。衝突しやすい二人がこうなることはかすかにもうすす分かっていた。

「ねむりんも来な?」

分かっていれば対策を立てるのが料理人である。

「ちよつと作りすぎて冷蔵庫圧迫されてるの。一人増えたところで変わらないし、暇なとき来るといいよ」

「じゃあ今夜行く」

「えー!?!」

「みとつち。たくさんあるから大丈夫だつてば」

灯花はぶーたれて大いに不満を表明していたものの、取り分が減ることはないと言いつ聞かせるとやつと納得した。

プライベートの話もついたところで、今度こそかすかは席を立つ。肥大化していくイブに一瞥をくれた後、地下空間から出ていった。

――

北養区から中央区の住処へ向かう電車にて、かすかはぼうつと車窓の外を眺めていた。平日の昼下がりのためか車内は閑散として、向かいの窓の外に水名区の町並みがよく見える。大時代な瓦屋根や城跡、鳥居などが連続したかと思うと、ありふれた住宅街、商店街へと風景が切り替わる。

『水徳商店街前、水徳商店街前です。開くドアにご注意ください』  
「あつ、いけない」

知らずのうちにまどろんでいたのだろう。アナウンスを聞くと勝手に体が動き、車外へ。そのまま出口へ向かつて改札機に定期券を通したところで、やつと間違いに気づいた。

「何やってんだろ、私……」

水徳商店街駅。参京区の中央にあたるここは、かつて過ごした万々歳の最寄り駅でもある。

改札を通った直後に回れ右をすることはできない。しかしかすかはあえてそのまま直進し、参京区の町並みへ足を踏み出した。顔見知りの店主が多い商店街は避け、細い裏路地を迷いなくすすいすすい進んでいく。そうして一本の路地から出る直前、足を止めて角から顔を出す。

戸建てと雑居ビルに挟まれた赤いのれん。引き戸には仕込み中の札がかけられ、待ち時間向けの古びた丸椅子が3つ並んでいる。お昼の部が終わった今は人気がない。

「あ……」

声が漏れた。

入口横の小さなスペース。かつてメニュー表やおすすめ品の写真が貼ってあったそ

こには、見慣れた顔のピラがはられている。『探しています 由比瑞乃 十九歳』。  
気づけば早足でその場を後にしていた。

一口に神浜西部といっても広く、仮に知り合いと鉢合わせしても声色や魔力の隠蔽、  
パーカーのフードなどで身バレ対策は万全。とはいえかのみかづきチームのお膝元に  
長居するのは得策ではない。そそくさと逃げるように足を動かし――

「つつ……!?」

ほとぼしる激痛にたたらを踏み、壁によりかかった。死んだソウルジェムによる発作  
が始まったのだ。

ソウルジェムを延命させているご都合主義が弱まればいつでも発作は発生するが、ま  
さかこのタイミングで来るとは予想できず、かすかは路地の壁にもたれ、ずるずると路  
上に体を横たえる。全身の神経が直接刻まれるような痛みで視界は霞み、呼吸すらま  
まらない。

もしもみかづきチームの知り合いにこの場を発見されたなら、抵抗も言い訳もできな  
いままみかづき荘か万々歳へ連行され、かすかの意図はすべて水泡に帰すだろう。最悪  
の事態を避けるため、懸命に立ち上がろうと右腕を動かすものの、そのたびに空回りし  
て地へ落ちる。

あまりに都合が悪いタイミングにかすかが絶望しかけたとき、救いがやってきた。

「大丈夫ですか!？」

手が滑って路面に顔から落ちそうになったかすかの体を、滑り込んだ腕が支える。見ると、編み込みロングヘアが特徴的な少女が心配げな顔をしている。

「すぐに救急車を——」

「だ、め………いけない………」

「で、でも………」

大慌てでスマホを取り出した少女の手を、かすかの右手が掴む。困惑する少女だったが、かすかが「発作、すぐおさまる」と息も絶え絶えに伝えると、「わ、分かったからしゃべらないでください!」と言ってかすかの背中をさすり始めた。その際、ぐったりしたかすかの左手に目を留めわずかに目を見開く。

数分後。じわじわと痛みの波が引いていき、どうにか話せる程度には回復した。

かすかは袖で汗をぬぐい、壁を支えに立ち上がる。

「ごめんね、ありがとう。もう大丈夫だから」

「大丈夫に見えないですよ! フラフラじゃないですか………」

「持病の発作なの。慣れてるから平気平気」

「持病………? ま、待っててください!」

フードで目元を隠しながら笑顔で虚勢を張り、踵を返す。

すると、少女の方向から魔力の高まりを感じ、弾かれたように振り返る。そこには白と桃色ベースの魔法少女姿に変身した少女の姿がある。

目を丸くするかすかに、少女は強い口調で言う。

「その指輪、魔法少女ですよ？ 見ての通り私もなんです」

「う、うん？」

「えつと、それで、私の力つて、癒やしの力だから。悪いところがあつたら、すぐに治せます」

かすかは絶句した。あまりに都合が良すぎる。さらに、かすかはおろか少女当人さえも知らないことだが、少女の癒やしの魔法は万能だった。あらゆる肉体的な損傷はもちろんのこと、魂の損傷さえ治癒することができる。まさに今のかすかにとって救いの女神になりうる存在かと思われた。

「君、さては……めちやくちやいい子だな？」

「そう、なんででしょうか……？」

死を受け入れているとはいえ、かすかも進んで死にたくはない。みかづきチームではない通りすがりの一般魔法少女になら、ソウルジェムのことを隠す必要もない。

かすかがソウルジェムを宝石の形態にして差し出すと、少女は息を呑んだ。

「お願い」



少女がソウルジエムの正体を知っているかどうか分からない。しかし無数の亀裂と欠損に塗れたその様子から異常は明白で、少女は表情をこわばらせ癒やしの力を発動する。

桃色の優しい魔力が、山吹色の壊れた魂を包み込んで数秒。光が消えるや否や、少女はヒザに手をつけて息を荒げた。

「……はあつ、はつ……そ、そんな……」

かすかのソウルジエムに変化はなかった。欠損も亀裂もそのままだ。

通常の損傷であれば治療していただろう。しかしかすかの魂は二十年近く前に死んでいる。たとえばバラバラに解体された死体を元通りにつなげ、手厚い治療を施したところで生き返るはずはない。ご都合主義の魔法はその道理を捻じ曲げ、無理やり魂を延命させているが、治療の魔法が影響できる問題ではなかった。

『君が生きていること自体が、都合の良すぎる奇跡だよ』

どこかで聞いた声に分かっていると独りごちながら、かすかはソウルジエムを指輪へ戻す。

「ありがとう、これ治療費ね」

「えっ、でも私……」

ストックしていたグリーンフィードを落ち込む少女の手に握らせたところで、バイブの

音が鳴り響く。断りを入れて出てみると、切羽詰まった声が聞こえた。

『もしもしかすかさん!? 助けてほしいでございませう!』

「了解、場所と状況」

息を切らしたその声はひどく切迫していて、危機感にあふれている。瞬時に頭を仕事モードへと切り替えるかすか。

『悪質な誘拐犯に追われていまして……場所は水名区三丁目でございますっ!』

「ゆ、誘拐犯? あー、了解。すぐに向かうね」

『急いでほしいでございませう……きやあつ!? あーれー!』

「けっこう余裕あるでしょ君!」

ひどく大時代な悲鳴とともに通話が途絶すると、かすかはパーカーの下で変身し、困惑する少女の方へ向き直った。

「用事ができたから、私はもう行くね。いろいろとありがとう」

「そんな状態で動き回ったら危ないですよ! 大人しくしてた方がいいと思います」

初対面の相手を本気で思いやる少女の姿にかすかは言葉を詰まらせ、踵を返す。それから「またね」とだけ言い置いて、その場を後にするのだった。

かすがが発作に襲われた場所は、参京区と水名区の境にあたる。少女と別れてすぐに見えてきた瓦屋根や生け垣の上を、忍者のごとく飛び跳ね最短距離で駆ける。

ほどなく目的地の通りに面する塀が見え、その上に着地して下をうかがうと、常軌を逸する光景が広がっていた。

「ふんふん、ふんふん」

「おい鶴乃ー、まだ分かんねえのかよ？」

「あおう、その人泣いてますしそろそろ……」

「うう……ひどい辱めでございます……」

テレパシーの主、天音月夜。マギウスの翼の白羽根部門に所属する魔法少女で、最近双子の月咲ともどもミザリーウォーターのウワサを撃破されたことでマギウスにお小言を言われていた。

どこことなく大正ロマンを連想させる装束に変身している彼女は、羽交い締めになされて包囲されている。

金髪のツインテールの少女に抑えつけられ、しくしく泣いている彼女の横で、おさげメガネに小盾を装備した魔法少女が気まずげに佇んでいた。

「ふんふん」

「んっ！ くすぐりたいでございます……」

さらに、捕まった月夜の首元で犬のように鼻を鳴らす魔法少女が一人。橙色をベースに黄色いアクセントで彩られたその少女の前に、かすかは頭が真っ白になった。

由比鶴乃。かすかの大切な妹にして、もつとも顔を合わせたくない少女だった。

塀の上で身をかがめ、様子をうかがう。肌艶はもちもちつるつる、髪は毛先までよく手入れされていて、変に痩せた印象もない。あの金髪ツインテールは新しい友だちだろうか。元気にやっっているなら嬉しい。かすかの巡る視線は鶴乃の手首に巻かれた山吹色の髪紐を捉え、今更ながら自分の所業を省みて胸が締め付けられる思いだった。

妹が大切だ。幸せになってほしい。なのに今、もつとも深く妹を傷つけているのはかすか自身である。

拳を強く握りしめ、爪先が肌を破った。その痛みすら感じない深くへと意識が沈んでいき――

「お姉ちゃんの匂いしないなあ」

鶴乃の声で我に返った。そういえばこれ、どんな状況だよ、と。

鶴乃は念の為と言わんばかり、もう一度月夜の首元やその他デリケートゾーンに鼻を近づけている。月夜は顔が真っ赤で涙目になっている。

やがて顔を離れた鶴乃は満足げにうなずき、輝くような笑顔を見せた。

「うん、シロだね。放しているよフェリシア」

「どんな匂いだった？」

「なんか仏壇みたいな匂いがした！」

「和室！ 和室の匂いでございます！」

解放された月夜はよよよと崩れ落ちた。

悪質な誘拐犯じみた方法で学校に足止めされ、出てきたところを敵である鶴乃とフェリシアに待ち伏せされ、誘導尋問を受けたまらず逃げ出したと思ったら、通りすがりの魔法少女も加わった三人に捕まって、全身の匂いがかがれる辱めを受けたのだ。泣くのも無理はない。

金髪の少女、フェリシアは胡散臭そうに首をかしげる。

「鶴乃のそれってマジであてになんの？」

「もつちろん！ この私がお姉ちゃんとの匂いを間違えるはずないもん！」

かすかはくんくんと自分の匂いを確認した。鶴乃たちの行いについてなんとなく察したものの、乙女として看過できない発言だった。匂いきついんだろうか、と。

四人の頭上でかすかが青ざめていると、泣き崩れていた月夜が立ち上がり、半ベそかきながら鶴乃たちをにらみつけた。

「こんなひどいマネをして、ただでは済ませないでございます！」

「おう、やるか!? オレ一人でもバッキバキにしてやるぜ! 知ってること全部吐かせてやる!」

「ままま待つでございます、やるのは私じゃなくて……あわわ」

「……もしかして、さっきの電話で誰か呼んだとか?」

鶴乃が鋭く察すると、月夜は自信に満ちたドヤ顔で何度もうなずいた。

「理解が早いでございますね。マギウスの翼が誇る最高戦力、六番目の翼。羽根ではなかつた一人で翼となりうる大幹部を、お呼びしたでございますよ! 貴女がたなくて、あの方にかかれればケチョンケチョンでございますっ!」

「六番目の翼?」

鶴乃とフェリシアは顔を見合わせ、にひつと悪い笑みを浮かべた。

「そんなに偉い人なら、月夜ちゃんよりもっといろんなこと知ってるよね?」

「こつちは三人もいるんだぜ。そいつをガンとしてギョツと締め上げてやる!」

「はっ、し、しまったでございます!」

頭上のかすかとはというと、鶴乃に締め上げられるならむしろご褒美じゃんねえ、と気持ち悪い笑みを浮かべつつ妄想にふけり始めた。妹が絡めばいついかなる立場でもこなつてしまうのが、姉のサガである。

「あの、あなたたちもうわさを調べてるんだよね。その人に聞けば、何か分かるかな……」

「？」

「あなたもうわさを調べてるの？」

「うん、実は——」

そうこうしているうちに、通りすがりのおさげメガネの少女が事情を語る。どうやら神戸市のうわさを調べると言い残し消息を絶った先輩を探しているらしい。暁美ほむらと名乗った彼女は、手がかりを聞き出すため『六番目の翼』の到着を待つことにした。

『か、かすかさん、来てはいけません！ 畏でございます！』

『うへへ……え？』

「おっと、逃さねーぞ」

「その人が来るまで大人しくしててね」

「ごめんなさい……」

テレパシーで我に返ったかすが下を見てみると、そこには目を疑う光景が。月夜がフェリシアに首根っこを猫みたいに掴まれ、その上お下げの少女、暁美ほむらに拳銃を突きつけられている。念入りなことに、バレルには抑音器サプレッサーを装着済み。もしも人気が少ないこの通りでなければ即通報不可避のワンシーンである。

『私のことは構いません……靖国でお会いしましょう……がくつ』

「いやいや、さすがに」

ご丁寧に擬音つきで月夜が力尽きたところで、やつとかすかが動いた。

パーカーの袖口から山吹色の光条がほとぼしる。連なる雷紋の鎖はほむらの拳銃を弾き飛ばすと共に、月夜の体に巻き付く。ケガをさせないように調整して鎖を引つ張ると、掴んでいた手がすつぽ抜けたフェリシアがたたらを踏む。

弧を描いて飛んできた月夜の体を、かすかが優しく受け止める。

「え、えっ？ かすかさん？ どうして……」

「同じお姉ちゃんのよしみ。見捨てられるわけないじゃんね」

見捨ててもひどいことはされなかったと思うけど、とはあえて言わなかった。

しばし目を白黒させていた月夜だが、抱き留められた勢い余ってお互いの顔が極めて至近に位置していることに気づくと、紅潮して目を伏せる。正直右腕一本では重いのかすかが塀の上に下ろすと、不満げに頬を膨らませた。

「おい、なんだよお前！」

塀の下ではフェリシアが声を張り上げている。ほむらと鶴乃は何かを考え込むように、じつとかすかを見上げていた。

「これ以上の乱暴はやめてほしい。戦場じゃないんだからさ」

いつもより数段低い声色で、魔力もうまく隠蔽して、フードもかぶっている。鶴乃に身バレすることはないだろう。



しかしここにおけるかすかの敵は月夜だった。

「かすかさん？ ひどい声でございませうが、風邪でもひかれましたか？」

「ちよつ」

「普段はもつと高くてきれいなお声をしてらっしゃるのに……」

「ちよつと黙つて!?!」

「むぐ」

あわてて月夜の口を塞ぐ。フェリシアたちは眉をひそめ、鶴乃はというと身じろぎもせずじーつとかすかを凝視している。

とにかく月夜を助けることには成功した。結界でもない日中の町中でこれ以上事を荒立てるのは得策ではないだろう。かすかは月夜の手を引いて撤退を促す。月夜がこくこくうなずいたので、二人はそろつて踵を返し――

「なつ!?!」

唐突に、鎖が閃いた。

一瞬のうちにパーカーの袖口から伸びた雷紋の鎖が向かった先は、ほむらの左腕だ。そこに装備された小さな盾を、腕ごとがんじがらめにして絡め取っていた。

かすか以外は視認すら困難な早業に、場が静まり返る。

やがて静寂を破ったのは、気まずげに頭へ手をやるかすかだった。

「なんか魔力が物騒な動きしたから、脊髄で動いちゃったけど。今、何やろうとした？」  
「え、つと、その……」

片腕を拘束されたほむらは冷や汗を流し、必死で言葉を探している。

たしかにほむらは魔法を使おうとした。月夜の言葉が確かであればかすかは重要な情報源であり、ここでみすみす逃したくないと考え、魔法によつて確実な足止めを試みた。

その魔法とは、時間停止。自分と接触している物体を除きすべての時間を停止させる規格外の魔法だ。ひとたび時間を停めればどんな相手であろうと優位に動くことができる。弱点はあるものの、初見の相手に止められる道理はないはずだった。

しかしかすかはこれを阻止した。小盾に集中した魔力から不穏な気配を感じ取り、半ば無意識で止めてみせた。

自分だけが動ける絶対的優位を崩され、ほむらはほとんど頭が真っ白だ。

「巴さんっ！」

「へ？」

ゆえに、もつとも気になっている事実をダイレクトに口に出す。

「あ、あなたから、巴さんの……巴マミさんの魔力を感じます。私、その人を探してて……」

「ああ、そういう」

ほむらは大切な友だちと共に、魔法少女の先輩である巴マミの行方を追っている。かすかからはそのマミの魔力がわずかに漏れ出しており、だからこそ決して逃がす訳には行かなかった。

かすかは納得したような声を出し、鎖を引つ込める。時間を止められるようなスキは伺えない。

かすがが右手で左の袖をまくと、黄色いリボンでぐるぐる巻きにされた左腕があらわになる。

「こういうこと。ケガの手当をしてもらったの。本人は元気いっぱいだよ」

「ど、どこにいるんですか!？」

「それは言えない。ええつと、あなたはほむほむ？　かなちゃん、さやちゃんかな？」

「ほ、ほむらですけど……」

気が抜けるような呼び方に戸惑いつつ答えると、かすかはきつぱり言った。

『今はあなたたちに合わせる顔がない。きつとまた会えるから心配しないで』。そう言っただよ」

「そ、そんな！　どういうことですか!？」

「これ以上は言えないってば。一度持ち帰って、仲間の子たちと話し合ってみてよ」

探し人の搜索はたしかに進展したものの、大きすぎる新情報にほむらは困惑する。合わせる顔がないとはどういうことか。

ほむらとその友人の二人の名前までかすかが知っていたことと、リボンで手当されていることから、情報の信憑性は高い。

それ故にほむらは情報の処理が追いつかず、変身を解除する。戦う意志を維持している余裕はなくなった。

そうして今度こそかすかと月夜はその場を後に――

「お姉ちゃん?」

「ひよえっ」

出来なかつた。

奇声とともに堀からずり落ちそうになるかすか。

慌てて下を見ると、しきりに首をひねる鶴乃の姿が。

「お姉ちゃん、つばい匂いがするけど……鎖なんて使ってなかつたし、魔力もちよつと違うし……あつ!」

鶴乃がぼん、と掌を拳でたたくと、かすかの背筋にどつと冷や汗が吹き出た。

「六野かすか。あなた、六野かすかだよね! お姉ちゃん、由比瑞乃のこと何か知らない?!」

「えっ？ いや、知らないけど……」

今度はかすかが困惑する番だった。

月夜がかすかさんと呼んだのを聞きつけたのは理解できる。ただ、そこから由比瑞乃につながる意味が分からなかった。まさか口寄せ神社で発生したイレギュラーが、自分の黒歴史を妹に開示していたとは夢にも思っていない。

歯切れの悪いかすかの様子に、鶴乃とフェリシアは怪訝な視線を強める。

「本当かなあ？」

「あつ、逃げるぞあいつらー！」

これ以上付き合ってはられない。

かすかは月夜をもう一度抱え上げ、全力でその場から逃げ出した。

――

追跡はなかった。あつたかもしれないが、少なくともかすかの知覚範囲内に見知った魔力反応はなく、お稽古の時間が迫っているという月夜を実家まで送り届けた後、かすかは水名区を去った。別れ際、月夜の視線がやけに熱っぽくなっていたことにも気づくことなく、中央区のマンションへ足を向けた。

西日の差し込むリビングには誰もいない。

かすかはその場で全裸になり、お風呂場へ向かった。熱い熱湯を浴び、みふゆおすめのシャンプー、リンス、ボディソープで丹念に体を洗っていく。

洗面所で体を拭いて髪を乾かし、くんくんと自分の匂いを嗅いでみる。変な匂いはしない。

「こんな時間にバスタイム？ アリナの的にちよつと早すぎなんですケド」  
「女の尊厳がかかかってるんですケド。つて、アリちゃん？ 何してんの？」

洗面所の入り口には、制服姿のアリナが立っていた。

アリナ・グレイ。若き天才アーティストにして、魔法少女解放計画の一端を担うマジウスの一人。かすかとみふゆの住むこの部屋には、みふゆの体をデッサンしたりかすかの料理をせびりに来たりとよく出入りしている。

今日もその一環だろうかとかすかが向き直ると、全身を舐め回すような視線を感じ、顔を赤らめてバスタオルを巻き付けた。

アリナはもう興味を失ったようにぱつと顔を上げる。

「今夜中央区でビッグな予定があるのヨネ。ディナーをたかるついでに、予定の時間までブレイクタイムってワケ」

「ふ、ふーん」

「で、アナタは何してるワケ？」

かすかは閃いた。

アリナはアートの関わらない限り常識人ではあるが、歯に衣着せぬ言い方はしない。つまり、先程発生したかすかの悩みを相談するのにうってつけの人材だ。

かすかはギロチンの紐を前にした執行人みたいなたつぷり数秒間迷いに迷った末、やっと口を開いた。

「私って、くさい？」

「……はあ？」

かすかは先程の邂逅において、実はかなり傷ついていた。妹が自分を匂いで判別しかけていたことだ。

月夜の匂いを嗅いでいたことから、他人にこびりつくほど強いもの。今は由比家の子供用シャンプーではなくみふゆおすすめの品を共用で使っているのに、鶴乃は勘付きかけていた。それほど自分は匂うのかしら、と。

事情を聞き、三日月形に口を歪めるアリナ。

「思い合う姉妹、お互いに会いたくても会えないエモーショナルなワンシーン……ああ、想像するだけでゾクゾクしちゃうヨネエ……」

「エキサイトしてないで教えてよう！」

「……はあ、アホくさ」

「えっ」

不意にずかずかと歩み寄るアリナ。

かすかが後ずさる時間もなく、腕をつかんで引き寄せる。かすかの鎖骨のあたりに顔を近づけたアリナは少しずつ上に向かって顔をあげていく。息が吹きかかるたびにかすかの体がビクビク震えた。

やがてアリナは姿勢を戻し、至近距離できっぱり言う。

「ノープロブレム。今だけじゃなくて、エクササイズの後でも気になったことないカラ。アナタの妹の方がアブノーマルだと思うワケ」

「そ、そっか。そっかあ……ありがとう」

お風呂の熱と羞恥で赤くなっただかすがそう言うと、アリナは何食わぬ顔で背を向ける。洗面所を出ていきながら、「ハングリー。呆けてないでさっさとディナー作ってヨネ」と催促して、かすかはいそいそと身だしなみを整え、弾むような足取りでキツチンへ向かうのだった。



## 第19話

夜風に揺られる風鈴が音をたてる。蚊取り線香の煙が吹かれ、8月のカレンダーがぱらりとめくれ上がった。かすかたちが住む高層の部屋にはよく風が吹き込み、夜になると冷房がなくともある程度の涼がとれる。

「おいしいー！」

「灯花と意見を同じくするのは業腹だけど、僕も同意だよ」

食卓で杏仁豆腐を食う灯花とねむ、マミの三人を眺めながら、かすかは首をひねった。8月のカレンダーに何か違和感を覚えたのだ。何か大切なことを忘れているような。試しに優先順位の高い用や記憶を順に思い出してみる。

アリナが中央区での用を済ませた後、この部屋にまた立ち寄ること。自分の余命が後一年もなく、その間に魔法少女の解放を実現しなければいけないこと。明日の翼としての業務諸々。一つ一つを確認しても抜けはない。

しかしそれらよりもはるかに大切な何かを忘れている気がしてならず、ついにかすかは「うーん」とうなりだしてしまった。

「どうしたのかすか。お腹壊した？」

「いやさ……何か忘れてる気がするんだけど、思い出せなくて」

「かすかもかい?」

「も?」

顔を上げると、杏仁豆腐を口に運ぶのを一時停止した灯花とねむが目に入る。

「わたくしたちも何か忘れてるはずんだけど、思い出せないんだよねー」

「思い出せないということは、覚えておく必要のない些事である証左だよ。あまり気にしない方がいい」

「そうかなあ」

物忘れとは無縁そうな天才児二人から励ましを受けたことで、かすかの心が多少軽くなる。たしかに忘れたならもう仕方ない。思い出せたら幸運と考え、気にしないことにした。

かすかも自分の分の杏仁豆腐を用意しようとしたところで、玄関から物音。アリナが帰ってきたのだろう。

リビングの扉が開かれると共に「おかえり」と声をかけ――

「ぶふうっ! ファンキー!?!」

「ぶっ……」

「むふうっ、ど、どうやら今度のアートは前衛芸術のようだね……テーマは『芸術は爆発だ』

かな?」

「くふふ、あんまり似合っていないにや」

——ようとしたものの、部屋は爆笑の渦に包まれた。アリナに続けて入ってきたみふゆも空気にあてられ、こらえていた分の笑いを必死で表に出すまいとして、顔の筋肉がピクピクしている。

アリナは変身してキューブの一つを引つ掴み、全力でぶん投げた。食卓につつぶしてお腹を押さえ震えているかすかは機敏に反応し、片手でスタイリッシュにキャッチしたかに見えたが、微妙に距離を見誤ったのだろう。キューブは指の間をすりぬけて頭へ命中、スコーンといい音を立てる。角砂糖大であつても頑強な結界なので、かすかは「あいったー!」と涙目だ。

「誰のせいと思ってるワケ、クレイジーシスター!?!」

アリナは肩を怒らせてかすかに詰め寄る。その頭部は緑髪のアフロと化していた。

みふゆの方は普段通りのアホ毛スタイルだが、爆発に巻き込まれたように所々が煤で黒くなっている。

「えっ、私のせい……あつ、だめそのビジュアルで近くに來ないでマジ無条件で面白くて笑っちゃう!」

「ヴァアアア!」

「むふっ」

「くふふっ!」

「ふ、くく……っ!」

　　またも爆笑するマグウス及びマミに対し、アリナは気合と共にキューブを投擲。しばし室内に混沌が満ち、杏仁豆腐で気を鎮めた頃になってようやくことの顛末を語り始めるのだった。

――

　　アリナの言う中央区でのビッグな予定とは、部下の尻拭いだった。

　　白羽根の実質的なリーダーである天音月夜、月咲姉妹。この二人は中央区の電波塔に根付く大物のウワサを利用し、敵対的な魔法少女の誘引と排除を企んでいた。しかしおびき出すまでは良かったものの、標的とした三人がチームを引き連れ六人の大所帯となつてやって来たことは完全な誤算で、決戦予定地のセントラルタワーへリポートにて、天音姉妹は慌てふためいていた。

　　こうなることを予見したアリナが、多数の黒羽根白羽根を率いて応援に向かった、というわけだ。

天音姉妹がヘリポートにおびき出したのは六人。七海やちよ率いる新西区のみかづき荘チームで、内訳は七海やちよ、雪野かなえ、安名メル、環いろは、深月フェリシア、由比鶴乃。環いろはは最近チームに加入したばかりの新人だが、マジウスであるねむの行方を追うなど怪しい動きが多いことからマークされていた。今回もウワサを撃破するのに大きな役割を果たした。深月フェリシアはアリナが手塩にかけて育てた魔女をブレイクし、アリナを激高させた。

『作品をブレイクしていいのはアーティストだけだヨネ！ 弁償しろよ、そのボディーを魔女に食わせて弁償しろよお！』

『こ、こいつマジで壊れてんぞ?!』

『壊したのはアナタだクソガキ!』

魔女を壊された時点で、アリナの頭にはフェリシアをすり潰して真っ赤な絵の具に変えることしか考えられなかった。

そのせいで気づけなかったのだろう。

フェリシアを押しつけてゆらりと前に出てきた由比鶴乃。彼女がアリナと同じか、それ以上に高ぶっていたことに。

『どうでもいいよ』

『ハア?!』

鶴乃はフェリシアの前に立ち、どろりと濁りきった目でアリナを睨めつけた。その声は機械のように平坦で、顔は能面のようだった。

『作品とかウワサとか、マギウスとか解放とか……全部どうでもいい。それよりアリナ、だっけ。あんたさ——お姉ちゃんの匂いがする』

鶴乃のただならぬ雰囲気に、アリナはかすかのことを思い出した。名前を変えて妹の元を離れ、マギウスの翼として活動している少女と、それを追う妹。陳腐だが実にエモーショナルで、アリナの興味を惹いた。

だからついみかづき型に口元を歪め、徹底的に煽ろうと考えた。

『ああ……由比瑞乃だっけ？ そりゃ匂いもするヨネ、さつきまで会ってたんだカラ』

『やつぱり、お姉ちゃんはあるあなたたちに……！』

『会いたい？ 会いたいヨネ？ アリナ的には別に問題ないケド……原型留めてなかったらソーリー？』

今は鶴乃の姉ではなく六野かすかであることを、アリナの悪意で包んだ言い回しだった。後ろで黒羽根、白羽根たちと戦っているみかづきチームの面々は顔をしかめ、『そんな言い方、ひどいよ！』と憤慨している。

一方の鶴乃はというと、無言でうつむいていた。

ただ、その場の全員に聞こえるほどの音が、鶴乃のどこかから発せられた。ブチリ、と

太い何か切れる音だ。

それが聞こえるやいなや、鶴乃の体は宙に浮かんでいた。背中から生えた巨大な化物がバルーンのように鶴乃と連結し、滞空している。

怪物の名はドツペル。魔法少女が魔女化する代わりに生み出す感情の写しであり、解放の証でもある。発現者によって千差万別の形を取り、鶴乃のそれは油を撒き散らす巨大豚だった。

光のない目で鶴乃が一对の扇を振るうと、それに応じてドツペルが油を散布する。ヘリポートがぬるぬるした油に満たされ、揮発した油が充満する。

が、油だけでは終わらない。豚の耳をよく見てみると先端部に火打石がついている。さらに鶴乃の表情を見ると、アリナへの純真な殺意以外に何も浮かんではいない。『やめなさい鶴乃！』とどこか遠くで聞きながら、アリナはその視線にゾクゾクした快感を覚え——次の瞬間、ヘリポートは爆発した。

——

『番組の途中ですが、先程入ってきたニュースです。神戸市中央区、セントラルタワーのヘリポートが炎上しています。近隣住民の証言によりますと、爆発するような音がした

との情報もあり、警察は事故と放火の両面で捜査を——』

「おー、すごい。全国ニュースだ」

「カツとなる方も悪いけど、むやみやたらと煽るのもどうかと思う。自業自得だよ、アリナ」

「あつ、見て見て！ ベランダから燃えてるの見えるよ！ ヘリコプターも飛んでる！」  
アリナの話聞きながらテレビをつけるとそれらしいニュースが放送中だった。ベランダから見えるセントラルタワーのてっぺんがオレンジ色に輝いてるのを見つけ、灯花は網戸を開け外へ駆ける。蚊が入ってくるからと苦言を呈するねむと灯花が小競り合いを始めた。ベランダからは夏の緑が香る暑気が忍び込んでくる。

ねむに自業自得と評されたアリナは涼しい顔で杏仁豆腐を味わっていた。すでにアフロは魔力を流して元のストレートに戻してある。魔法少女の体は魔力さえあればいくらでも融通が利くのだ。

「で、何かコメントはないわけ？ かすか」

「アフロ似合ってたのに」

「は？」

「冗談、冗談」

余裕綽々のかすかに、マジウスの面々は目をぱちくりさせている。



「由比鶴乃に手を出せば打首獄門。そんなルール作ってる割には、リアクション薄いヨネ?」

「何その新選組隊規が発酵して爆発したみたいなルール」

「かすかが作つたんじやないのー?」

知らないよと灯花に返し、謎のルールについてスマホの翼連絡網から調べてみる。わずか数秒で複数人から返信があり、黒羽根のリーダーが勝手に制定・流布したことが分かった。

「あの子か。まったく、変な肩書きのことといい……」

かすかの立場を進言したのも彼女だった。一番目から五番目の翼は? と半畳を入れたが結局語呂が決め手となって採用された。今回のルールも同様だろう。あまりの過保護ぶりにかすかは嘆息する。

「ウチの妹はそんなにヤワじやないし、やちよがそばにいる。変なルールはいらないよ。ていうか敵対してる現状、こんなルールあつたらやりにくいでしょ」

「あなたがいいなら別にいいケド。それより、あのクレイジーシスターどうにかしてほしいワケ。あなたのこと探してるみたいだったカラ、スカウトするなり説得するなり、手はあるヨネ?」

「ないヨネ」

きっぱりと言い切った。

「鶴乃はまっすぐな優しい子だから。私が説得に行っても逆に辞めてって言われるよ。魔法少女の真実を知っても」

「……真実を知っても？ それなのにアナタは、妹を解放しようってワケ？」

「エゴだけだね。つってもさ、残り少ない時間で、鶴乃のためにできそうなことっていえば、そのくらいしかない、じゃんね」

そもそも鶴乃に宿命を背負わせたのはかすか自身なので、結局これもマツチポンプだ。かすかの行動、選択はまさしくエゴの塊である。そうと分かっている、やらずにはいられない。残された時間は少なく、選択を迷う余裕はないのだから。

言葉にすることで改めて覚悟を確認すると、マジウス三人組とママがぼかんとしている。みふゆは痛ましげに目を伏せている。臨時ニュースを報道するテレビの音だけが、リビングに空々しく響く。

やがてベランダの窓を閉め、灯花が切り出した。

「残り少ない時間、って。かすか、体が悪いの？」

あ、と声が出た。

取り繕うより早く、ねむが続く。

「前々から気になっていたけど、その左腕と左目。どんな病気であれ、かすかほどの魔力

があれば瞬時に完治するはずだ。現に僕と灯花の病気も、魔法少女になったその日完治したんだからね」

でもそうしないということは。

「……私が全力で繋ぎ止める魔法を使っても、左腕は動かないままだった。もしかして、かすかさん……」

つい先程までかすかの左腕にリボンを巻き付けていたマミが、声を掠れさせる。お通夜のように重い沈黙。

反面、うっかり口を滑らせたかすかはこれまた軽い口調で。

「違う、違う！ ほら、アリチーのアフロだつて直つてるでしょ？ 魔法少女の体は何でもあり。みんなが想像してるのとは違うから。いろいろと事情があるの」

「じゃあ、残り少ない時間つて……?」

「それはその、マジウスの三人がこうして集まれる時間つてこと」

灯花の不安に揺れる瞳がかすかを見上げ、その部分をぎゅつと掴んでいる。かすかはなんてことのないようにさらつと答えてみせた。

マジウスの三人は解放計画に不可欠な存在だ。アリナの結界、灯花の変換、ねむの具現。一つが欠ければシステムは機能しなくなる。しかしそれぞれ天文学、文学、芸術の分野で天才的な活躍を見せる三人なので、こうして計画に集中できる期間は割と貴

重だ。

かすかはその点を指摘したのだ、とあくまでも主張した。

「……じゃあいいワケ。それより今度のバケーションだけど、アリナ的には——」

アリナが強引に話題を変えると、全員が乗っかる。あまりに非現実的で救いのない考えを、その場のメンバーたちはただの憶測として切って捨てた。

まさかかすかの命が、後わずかしか残されていないなどと。

みふゆと当人を除き、誰も現実とは思えなかった。

——

深夜、寝静まったみかづき荘にて。個室が集まる二階の階段からリビングへ、環いろはが下りてくる。柔らかな色彩のボーダー柄のパジャマに見を包み、もこもこしたスリッパ。困ったように眉を下げて、両手は艶やかなロングヘアをいじっていた。

「うう、まだ頭がごわごわする……」

いろははつい数時間前、アフロだった。いろはだけでなく、みかづき荘在住のメンバーは一人を除き全員アフロにされた。

その原因はドツペルだ。メンバーの一人がドツペルを発現し、常人であれば灰さえ残

らず蒸発する火力の炎上攻撃を敢行。リーダーのやちよとベテランのかなえがとつきに防御に回ったおかげで全員アフロで済んだ。魔力をうまいこと頭髮に巡らせることで元の髪質に戻ったけれど、いろははしつこく残るアフロ気分で寝付くことができず、なんとなくリビングへ下りてきた。

リビングが面する立派な庭では、夏の虫たちがリンリンとささやかな輪唱を上げている。窓際に吊るした風鈴を夜風が揺らし、軽やかな音を立てた。

特にやることもないので、マグカップにホットミルクでも入れようかと棚へ足を向ける。

すると、キッチンのカウンターに誰かが腰掛けていた。

いろはと同じくパジャマ姿。暗いリビングの中、キッチンの照明だけにぼんやり照らされている。

「鶴乃ちゃん？」

「……いろはちゃん？ 眠れないの？」

「う、うん」

由比鶴乃。ドッペルが暴走し、敵味方問わずアフロにした張本人だ。

初めてのドッペルで体力を消耗し、ヘリポートを炎上させた後からずっと気絶していた。

「体はもう平気？」

「平気平気。それよりごめんね、カツとなって迷惑かけちゃった」

「……ううん。仕方ないよ。私だつてあんな言い方されたら、すごく嫌だもん」

二人の頭に、アリナの言葉がよぎる。

鶴乃が探す実の姉、由比瑞乃。アリナが言うには原型を留めていないかもしれない大切な人。

鶴乃と同じく妹を探しているはからすれば、もしも妹を引き合いに出してあのようない方をされれば、きつと鶴乃のように激高していたと確信している。だからアフ口にされたことを責める気はまったくくない。

ホットミルクを淹れる。「鶴乃ちゃんも飲む？」と聞くとうなずいたので、二人分淹れて隣り同士で座った。

ふと鶴乃の手元に目をやると、写真立てがある。鶴乃よりも色素の薄い茶髪の少女が、鶴乃の後ろから首元に手を回して、二人共満面の笑みを浮かべている写真。二人の両隣にはそれぞれやちよとみふゆが寄り添って、微笑を浮かべている。四人はとても幸福で満ち足りているように見えた。

「この人が瑞乃さん？」

「……うん」

鶴乃の声が詰まった。

「私の十五の誕生日のときの写真でね。お姉ちゃんと私と、みふゆとやちよの四人でよくつるんでたんだ。知ってる？ このメンバーだとやちよししよーってよくいじられ役になってたんだよ」

「あのやちよさんが!? す、すごいグループだったんだね」

誕生日から始まって、試作品の試食会、やちよとみふゆ、瑞乃の間の修羅場、夏祭り でナンパされた瑞乃がホイホイついていこうとしたエピソード、万々歳の屋台でみかじめ料を請求されるとやちよがガンを付けて追ひ払った話、金魚すくいや射的で無駄な才を発揮し根こそぎ瑞乃の異名がついた話など。鶴乃が語る思い出の一つ一つが、泡沫のごとく宙に浮かんでは消えていく。

どれだけ幸福であっても、過去には戻れない。満ち足りた世界は崩れてしまった。その寂しさが分かるからこそ、いろはは話を一つ聞きたびに胸が締め付けられる気持ちだった。

ひとしきり語った鶴乃は数秒間黙り込んだ後、ぽつりと言った。

「お姉ちゃんは、マジウスの翼にいる。六野かすかとして」  
「えっ」

鶴乃は聡明だ。その頭脳は時として、断片的な情報を最短距離で答えに導いてしま

う。どれだけ残酷な答えであろうとも。

口寄せ神社で現れた六野かすかのこと。マギウスの翼で六番目の翼として働く幹部、六野かすかのこと。みふゆから漂う姉の匂いと、アリナから嗅ぎ取った新鮮な姉の匂いのこと。

何より大きかったのは、直接かすかと対面したことだ。顔を隠そうが声音を使おうが、魔力を変えようが見たことのない武器を使おうが関係ない。たとえ名前を変えたつて分かる。ウソをついたり誤魔化したりすることは致命的に苦手だったから。

由比瑞乃は、六野かすかである。

「お姉ちゃんは勝手だよ……いつもいつも一人で全部抱え込んで、本当に辛いときは誰にも言わずに我慢して、何でもできるから大丈夫って強がりばっかりでさ……なんで、なんで……」

「鶴乃ちゃん……」

幸せな思い出に、ぼたりぼたりとしずくが落ちる。

「私に心配かけたくないとか、気を遣わせたくないとか。そういうのが一番辛いんだよ……相談してよ、頼ってよ……」

いろはに背中をさすられながら、静かなリビングに嗚咽の音を響かせた。やがていろはにすがりついて鼻をすすると、「ありがとう」と体を離す。



「ごめんね。いろはちゃんだって大変なのに」

「気にしないで。私だってお姉ちゃんだもん。鶴乃ちゃんもつと頼っていいんだよ」

鶴乃は再び湧き上がる感情をどうにか押さええて、力なく立ち上がった。

「決めた。お姉ちゃんと直接話す。話したらきつと分かってくれる。みふゆにも戻ってきてもらって——絶対、取り戻すんだから」

——

翌日、みかづき荘のメンバーに鶴乃の推理が共有された。

やちよは半ば察していたようで、沈痛な面持ちで黙り込む。かなえは鋭い目元をさらに細め、鶴乃と決意を同じくする。メルも同じく決意しようとしたところ、瑞乃をよく知らないフェリシアに絡まれアタフタ。新メンバーであるさなにも瑞乃について説明がなされた。

「さなちゃん、何か知ってる?」

「え、えつと……」

二葉さなは、マギウスの翼が管理するウワサに囚われていた。

何か知っているかもと鶴乃が聞いてみると、非常に気まずそうな顔で目を逸らしてい

る。

「いいよ、ゆつくりでいいから。まとまったらいつでも言つて」

「は、はい。その、大変言いにくいんですけど……」

「んだよ、さつきと言えよー」

「コラ、フェリシア！」

じれたフェリシアがやちよに叱られたところで、さなは衝撃の事実を口にする。

「夏休み、です」

「えっ？」

ウワサの結界内で作業をしていた黒羽根たちの会話を、さなは聞いていた。その会話の一部は以下の通り。

「ねえ、夏休みどこいく？」

「北海道とか行つてみたいなあ」

「マギウスの方々も太っ腹だよね。9月頭までちゃんと夏休みくれるなんて」

「こんな暑苦しいローブで炎天下動いてたら、熱中症になっちゃうもん。よかつたー」

「瑞乃様の提案だつて聞いたよ」

「誰それ？」

「私は神浜から出るの怖いなあ」

「と、いうわけですね……しばらくマギウスの翼は、何もしないとあります……」  
朝からうるさいセミの大合唱が庭から響いてくる。窓から差し込む朝日が暑気を運び、じわじわと室温を上げていく。

世間は夏真っ盛り。主に中高生で構成されるマギウスの翼が夏休みをとることは、必然だった。

考えてみれば当たり前だったが、これから決戦と意気込んでいた面々が肩透かしを食らった気分になることもまた必然で、

「ええ〜……?」

不満とも安堵ともとれない気の抜けた合唱が、蝉しぐれに重なったのだった。

## 第20話

青い空、白い雲。遠くに望む海と空の境目は白くかすみ、緩やかな潮騒が砂浜に打ち寄せる。潮の香を乗せた暖かな風が吹き抜け、水着姿の少女たちを出迎えた。

「っ、っ……」

「着いたでございませす、海ー」

「ホット過ぎるんですケド……」

「わあ、きれいなね」

各々感想を述べる少女たちは、神浜市で絶賛活動中の悪の組織、マジウスの翼とその頭目たちだ。組織の善悪はともかく彼女たちは青春まっさかりの中高生、約二名は小学生ということもあり、こうして夏休みを満喫している。

今回の海水浴旅行において、参加者は八名。組織のトップたる里見灯花、柊ねむ、アリナ・グレイ。翼からは梓みふゆ、バمامィ、六野かすか、天音月夜、月咲の姉妹。発案者の灯花としては組織全体から希望者を募り、大人数で出かける予定だったが、参加者八名を除いた全員が神浜市から出ることを固辞した。力のない魔法少女が多い羽根たちからすれば、魔女化の恐れがある外には出たくないようだった。

そういった事情で、普段から絡みの多い八名が連れ立って参加する運びとなつたわけだ。

「じゃ、みんな手をつないでー」

ととてとと波打ち際に駆け寄つた灯花が、他の七名を手招きする。小学生らしい白く華奢な手足が、日差しに負けないきらめきを発しているようだった。

言われたとおり、または暑さで気だるげにしつつ八人は手をつなぐ。

「えっと、この態勢って？」

「分かつた、花いちもんめですね！」

「みっふ、発想が大正生まれ……ぶ」

「ななっ!？」

「さ、行くよ！ セーのっ——」

一列になつた八人は一斉にジャンプ。着地と共に舞い散つた飛沫が少女たちを彩つてきらりと、宝石のように輝く。

マジウスのサマーバケーション、開幕である。

——

所属する組織が組織なせいか、マギウスのメンバーは個性が強い。八人もいれば同じ海岸でやることにも違いが出てくる。

「もつとバナナボートを乗りこなしてみせてよー!」

「む、無理でございます!」

「うちらが遊ぶんじゃないで、うちらで遊ばれちゃってるよー!」

灯花は天音姉妹をバナナボートやらフライボートに乗せて転覆、空に吹き飛ぶ様などを見て楽しんでおり、姉妹は涙目に。ねむは灯花のそばで砂のお城を作りつつヤドカリと戯れ、パラソルの下ではみふゆをデッサンモデルにしようとするアリナとごめんこうむりたいみふゆが攻防を交わしている。幸いここは灯花の父が所有するプライベートビーチなので、どれだけ騒ごうと問題はなかった。

「よーし行こうかトモちゃん!」

「え、ええ」

そんな中、かすかとマミは浮き輪を手に海へ繰り出そうとしている。特に目的はないけれど海があるなら泳がなくては損。入念に準備体操をしてから波打ち際に足を踏み出し――

「待っててください!」

「みつふ?」

呼び止められ、足を止めた。

二人が振り返るとみふゆが日焼け止めクリームを手に駆け寄ってくる。どうやらアリナからの要求は躲せたらしく、アリナはパラソルの下でトロピカルジュースを呑みだくれている。

「海に出るなら日焼け止めを塗らないと、あとで痛い目を見ますよ。さあ、塗ってあげますから二人ともこっちへ」

「えー？ いいじゃん別に。ねえトモちゃん？」

「まあ、今更よね」

パラソルの下へ引つ張って行かれる二人だが、このビーチにいるのは漏れなく魔法少女だ。爆発炎上クラススの熱に煽られてアフロで済む存在が、今更紫外線を気にする必要はあるのだろうか。

そんな思いを表情から見て取ってか、みふゆは眉を吊りあげる。

「魔力があるから無茶できる、なんて考えはいけませんよ。そうやって横着するから大怪我したりするんです」

「ぎくっ」

「たしかに、普段から体を丁寧扱っている方がいいわよね。みふゆさんの言うとおりに」

二対一になっては分が悪い。観念したかすかはため息をつき、ボトルを渡すよう要求する。しかしみふゆから返ってきたのは満面の笑みと、いかがわしい動きで開閉される両手のジエスチャーである。

「右手だけでは、うまく塗れないでしょ？　ワタシがちゃんとして隅々まで塗り込んであげますからね」

「ひえっ、な、なんか不穩……じゃあアリちゃんに頼むから、つてちよつとお!」

かすかは迫られると弱い。強い力でパラソルの陰へ引つ張り込まれ、シートの上に組み敷かてしまう。みふゆはうつぶせになったかすかのお尻にまたがって、日焼け止めクリームをねつとりと塗りつけ始めた。

「ど、どこ触つて……ひっ……と、トモちゃん!　指の隙間からチラチラ見てないで助けて!　このアホ毛やらしい!」

「巴さん、よく見ていてください。これが大人の関係つてやつです」

「中学生に変なこと教える、なっ!」

かすかの体がびくりと跳ねる。弱点を通過したみふゆの手はその反応に呼応し、執拗に同じ箇所を往復しだした。

「あつ、あははっ、わ、分かったみつぶ、大正生まれは言いすぎた!　昭和でいい、ギリ昭和でいいからっ」



「真正銘平成ですっ！」

根に持っていたみふゆは眉を吊り上げ、かすかはお腹が痛くなるまで笑った。

塗り終わった頃にはなぜかみふゆの方が心無しか肌艶がよくなり、逆にかすかはや疲労困憊だった。ごく普通に優しく塗り込まれたマミは顔を赤らめつつも余力を残していて、今度こそかすかと共に海へ繰り出す。

かすかや浮き輪の穴にお尻から突っ込んで、海面を漂流。マミはしばらくそれに付き合っていたものの、飽きたのだろう。いたずらっぽく笑ったかと思うと、手で水鉄砲を作り、かすかへと発射した。

「冷たっ。んもー、何するのさー！」

「ふふっ」

器用にも浮き輪にハマったまま、はみ出た手足をばたつかせてマミへ水をかけるかすか。ひとしきり撃ち合いを楽しんだ後、二人して青い空を見上げた。

潮騒をバックに、遠くから灯花のはしやく甲高い声が聞こえる。穏やかで緩やかな空気の、マミはぽつりと言う。

「私こんな風に誰かと海で遊んだの、初めて」

「ふうん？ 見滝原の友だちとは？」

「あの子達とは、今年会ったばかりだから」

「そつか。じゃ、来年だね。全部終わって、みんな解放された後で、海でも山でも行ったらしいよ」

「ええ、来年必ず。かすかさんも見滝原に遊びにきてほしいわ。みんなに紹介したいの」  
「考えとく」

うまく笑えた自信はなかったけれど、お互い空を見上げていたおかげで、追及されることはなかった。動かない左腕と半分欠けた視界。後一年と宣告されてからすでに半年以上経っている。かすかにとっての来年は定かではない。

感慨にふけっていると海岸から灯花の呼ぶ声が聞こえ、かすかとマミは顔を見合わせ、そちらへ進路を向ける。

そこにはニコニコ笑う灯花と、散々遊ばれてくたびれた天音姉妹がいた。

「なんでもいいからわたくしを楽しませてー」

「はーっ」

灯花はさつそく海の遊びに飽きかけていた。旅程初日の数時間でこれなので、かすかは耳を疑う。

さらに言葉が続けたことには、楽しませてくれたならミナギーシーのペアチケットなどの豪華景品を進呈すること。ミナギーシーとは神浜市栄区に位置する人気テーマパークで、アトラクションはどれもこれも一時間待ちが当たり前な大人気スポットで

ある。

天音姉妹はペアチケットが貰えると分かるとがぜんやる気をみなぎらせ、マミも「かすかさんと、二人きりで……」などとやる気を出している。

かすかは特に乗り気ではなかったが、二人のノリに合わせ軽くジャブを放つことに。ばつと勢いよく手を挙げる。

「はい、かすか！」

「メンバー全員で無人島行つて一週間サバイバル生活！ もちろん魔法の使用は禁止ね！」

「却下！」

「じゃあみんなでもり突き漁競争！ 最下位は今日一日ご飯抜き。漁協にはみとつちのコネで話つけてね！」

「いいーやつ！」

「遊びつてレベルじゃないでございます!？」

「ウチらも普通に嫌だよ！」

「かすかさん、気を確かに」

「怒涛の総ツッコミ！」

がーん、とショックを受けたかすかは肩を落とした。

大体何でもできるかすかは挑戦するにあたって制限がない。面白くなりそうなら修羅レベルの遊びだつて辞さない覚悟である。当然そんな挑戦者気質は誰も求めておらず、総スカンを食らつた。

とりあえずこの場では案が出そうにないので、灯花は双子に「頑張つて」と激励。双子は胸の前でぐつと拳を作り、企画を探しに旅立つた。

残されたのは落ち込むかすかとなぐさめるマミ、手持ち無沙汰な灯花。

ふと、灯花の視線がかすかの胸に行く。はちきれそうなビキニタイプの水着。隣に立つマミも中3にしてはすさまじいサイズだが、かすかは一歩先を行っている実り方で、灯花の見立てによるとマミのそれが重力を発生させているのに対し、かすかのは重力波が出ている。

これ中に何入ってるんだろう？ 落ちるリングゴを見つけたニユートンレベルの科学的疑問が灯花の頭脳を満たす。もちろん人体の構造など知り尽くして欲しいものの、目の前はこれは神浜市最古参の特別な代物なので、もしかすると中に魔力や希望が詰まっているかもしれない。むしろこつちがソウルジェムの本体なのではないか。

一度気になると止まらない。灯花は虫の足を一本ずつむしり取るくらい気持で、その豊かな胸へ手を伸ばした。

「んっ」

下から上へ持ち上げて、次は左右に振つてみて。小さな両手が柔らかなそれに吸い付き、勝手気ままに揉みしだく。マミは両手で口元を覆い目を丸くしている。

時間にして数秒。灯花が手を離すと、かすかは顔を真っ赤にして後ずさった。

「な、なんぼしよつと!?!」

「ちやーんとクーパー鞆帯つながらつてるみたいだねー。重力に負けそうだったから、手伝つてあげようと思つて」

「うちのマジカルクーパーさん舐めんな余計なお世話じゃんねえ!?!」

「くせになる感触だったにやー。もう一回触らせてくれたら何か景品あげちゃうよ?」

「こつ、この……セクハラ上司めっ!」

「あつ、かすかさんどこへ!?!」

踵を返すや否やスプリントで駆けていくかすか。波打ち際で浮き輪を装着して海へ飛び込むと、モーターボートめいたバタ足で沖合へ逃げていきながら、「ちよつと労基署行つてくるー」と返ってきた。

かすかは左腕と左目の機能を喪失している。一人で大海原へ出航させるわけにはいかない。気持ちは分かるけど海に役所はないわよねと冷静に突っ込みつつ、マミがその後を追いかけていった。

「一体何事ですか？」

「灯花、何をやらかしたんだい？」

残された灯花のもとへ、遠目から見えていたみふゆとねむがやってきた。海岸線に沿ってばた足で泳ぎ去っていくかすかとマミを眺めながら、灯花が満足げにいきさつを語ると、ねむは呆れて嘆息。灯花のいたずらもタチが悪いが、そのくらいで取り乱すかすかも大げさな気がした。

「な、なんてことを……」

一方、みふゆは相当頭に来ているらしい。前のめりで握りこぶしを作って憤慨している。

「かすかさんにセクハラできるのはワタシだけの特権なのに！」

うわあ、と。灯花とねむの声が重なった。二人の天才は無意識にみふゆから一步後退する。

「かすかは友人関係を一度見直した方がいいんじゃないかな」

「わたくしもどうかーん。これはさすがにだにゃー」

「うん、さすがにだよ」

二人の瞳の奥で重大な何かが揺れている。

それは信頼である。複数の派閥からなる羽根たちを取りまとめ、マジウスに取り次いで積み上げてきたみふゆの信頼が、攻め過ぎたジェンガのごとく揺らいでいた。

不審者に遭遇したようにささやきあう二人だったが、みふゆには聞こえていたらしい。しかし反論するでもなく、みふゆはきよとんと意表をつかれたみたいに目を丸くして、灯花とねむへまじまじとした視線を送る。

灯花たちが警戒を高めているのに構わず、みふゆは一転、微笑を浮かべた。

「二人とも、かすかさんと仲がいいですよね」

「急に何言いい出すの?」

「暑気と惚気で文脈の概念を溶かしてしまったのかな?」

唐突な話題転換に戸惑う二人。みふゆはにこにこ嬉しげな笑みを崩さない。

「いえ、深い意味はないんです。本当に仲が良くて微笑ましくなっただけなんですよ」

灯花とねむはしばらく怪訝な思いで首をかしげていたが、特に否定する理由はなく、ねむの方から率直に答えた。

「……まあ、かすかのことは好ましく思っているよ」

「ねむは小説の趣味が合うのがきつかけでしたっけ?」

「それもあるけど、大きな理由じゃない」

「じゃあやつぱり料理が美味しいから？」

「胃袋を掴まれたみたいな認識はしないでほしいな」

ねむはむつとして反駁しながら、年上の友人のことを思った。たしかに料理は美味しいし、新しいジャンルの小説を紹介してくれたことも好感の理由ではある。ただ、もっとも大きなのは漠然とした信頼感だった。

言葉にしがたい感覚を物書きの矜持でもって、簡潔な表現へ落とし込む。

「僕はあるのままでいい。そう思えるから、好きなんだろうね」

かすかは変化や成長を正義と思わない。かといつて停滞や足踏みをいいものとも思っていない。相対した人物の現状をありのままに受け入れ、肯定する習性がある。どんな自分であろうと決して拒絶せず受け入れてくれる安心感があるからこそ、傍にいと心地良いのだろう。ねむはそう分析していた。

「抽象的過ぎてよくわかんない。これだから空想に生きてる人は困るよねー」

かちん、とねむの頭に來た音が聞こえるようだった。

いつものように天才同士の舌戦が始まるよりわずかに早く、灯花は直截に告げる。

「わたくしもかすかは好きだよ。からかったら面白いし、お料理美味しいしね」

でも、と口を尖らせて、

「口うるさいのは苦手だにゃー。この前もめちやくちや怒られちゃったし。お説教は嫌



「い

「あの一件のことだね……たしかにあれは肝が冷えた」

「怒られた？ どういうことですか？」

付き合いの古いみふゆをして、かすかが本気で怒るところは見たことがない。一体二人は何をやらかしたのかと思つてみれば、返つてきた答えは想像を絶していた。

ワルプルギスの夜を利用した計画の加速案。天災クラスの魔女により一般人の犠牲と感情エネルギーの促進を図り、イブをすぐに孵化させる天才的な腹案があつた。二人がそのことをかすかに語つたとき、尋常でない怒気を感じたという。

『それ、ラインだからね？』

あるいは殺気だつたのかもしれない。灯花とねむが二人して絶句し、神妙にうなずいたのは離反ドミノを恐れたことだけが原因ではなかつた。

ワルプルギスの夜を呼ぶとなれば、妹が傷つく可能性は飛躍的に高まる。それを危惧したお姉ちゃんによるささやかな威圧だったが、十年以上鉄火場をしのいできた魔法少女の気迫は、当人の思つたよりも高い効果があつた。

さんさんと降り注ぐ陽光の下にも関わらず、灯花とねむは当時を思い出し若干顔色を悪くしている。

「ワルプルギスの夜を……それはまあ……」

しばし思案顔で伏し目になっていたみふゆは、スイツチを入れ替えたようにパツと笑顔を浮かべた。

「なるほど。マギウスの御三方そろってかすかさんと仲が良いようですね。友人として嬉しいことです」

「かすかのことなのに、なんでみふゆが嬉しいの？ 変なの」

「……御三方、って言ったかい？」

耳聴くねむが聞きつけ、ちらりと砂浜の一面を一瞥する。サイケデリックな彩色のパラソルの下で、トロピカルジュース片手にリクライニングでくつろぐアリナの姿があった。ねむが察している通り、みふゆは折を見てアリナにも同じような話題を振ったことがある。好奇心を見せる灯花とねむの視線に対しあえて秘匿する意味はないので、みふゆはアリナの言葉をそのまま口にする。

『グロテスクな死体をビューティフルに仕上げる料理は、生死が題材のアートと呼べるワケ。その点、アーティストとしてリスペクトせざるを得ないヨネ』

「そういうの、胃袋掴まれてるって言うんじゃないかにやー」

「食材を死体扱いするのはどうかと思う……」

二人の視線に気づいたアリナは眉をひそめて見返したものの、興味なさげにサンングラスをかけてふんぞり返った。アーティストはマイペースである。

灯花とねむはアリナを仲間として認識しているが、価値観や性格の違いから一步距離を置いていた。思いがけないところで互いの共通項を見つけたので、珍獣でも見るような目つきになっている。

「君はどう思ってるのかな、みふゆ」

ふいに、ねむはみふゆへ水を向けた。

「僕たちにばかり答えさせて、自分だけ何も言わないのは不公平だよ」

「セクハラのターゲット、とかならかすかもかわいそうだよねー」

みふゆは六野かすかに対し、どういった感情を抱いているのか。おおよそ想像はつくけれど、本人の口から聞いたことはない。

問われたみふゆは目をぱちくりさせた後、ぞつとするほど純真な笑顔でこう言った。  
「もちろん、大好きですよ。世界中の誰よりも、何よりも」

――

## 第21話

あてもなくセクハラ小学生から逃亡を図ったかすかは、岩場の陰で航行を止めた。

マジウスの集まっている場所から見ると、浜辺に黒黒とした雲がかかっているようなむき出しの岩場だ。海側から回り込んで見ると、岩場はトンネル状に挟れ、洞窟のようになっている。不思議なことに、奥の方には陽光とは違う色合いのほのかな光がきらめいている。

「やつと追いついた……かすかさん？」

「トモちゃん見てよこれ、洞窟。なんかワクワクしない？　するよね？　探検だよね？」

「えっ、ここに入るつもり!?　ま、待って！」

いかにも何かありそうなロケーションにかすかのテンションはうなぎのぼり。及び腰のママを尻目に、バタ足を再開して中へ進んだ。ママも数秒迷った末、おずおずと後に続く。

洞窟の内部を明るく照らしていたのは、光るコケだった。弱々しい蛍光テープのような光が幾重にも重なったコケから発され、肉眼でも困らない程度の明るさをもたらしている。

暗がりの奥に陸地が見え、進んでいくと足が砂地に着く。

「ん？ なんだろ」

足の指先に奇妙な硬い感覚があった。探検モードのかすかはサラサラした砂地に手を差し込み、異物をつまみ上げる。

小指の先端ほどの白い何かだった。一見ただの小石のようだが、それにしても軽すぎる。波に相当もまれたのか、表面はなめらかでつるつるしていた。

「かすかさーん？」

洞窟の陸地からママが呼んでいた。薄暗がりでも心細いらしく切実な声音である。白い何かのことは気がかりだったが、ポケットもかばんもないためやむなく手放して、声の方向へ向かった。

どうやら浜辺からの入り口もあるようで、砂浜の上に立つアーチ状の岩場から外の光が差し込んでいる。その光とコケで怪しく照らし出される物体が、かすかとママの目に飛び込んできた。

それは小さな祠だった。潮風や波でひどく傷んでいるものの、鍵が固く閉ざされていることから管理されているものと思われる。

「海にまつわる怖い話だと、こういう祠には御札がバタバタに貼ってあって、私たちがその封印を破って呪われるパターンなんだけども」

「お、恐ろしいこと言わないでよー」

「冗談だつてば。御札とかないでしょ」

左腕をきつく握つてくるマミを連れ、かすかが祠に歩み寄る。御札は一つもなく、封じているものといえど錆びた鍵穴だけだ。

といつても冒険心がうずくシチュエーションであることは変わらず、かすかはワクワクしながら祠に手を伸ばし——脳裏に不可思議な光景が広がった。

万華鏡のようにめくるめく景色。大時化の海、遠くなる海面、虚ろな目をした多数の人間。最後に、祠の前で涙する瓜二つの少女たち。不思議な装束をまとつた彼女たちは双子の魔法少女らしく、ソウルジェムのはめられた装身具を身に着けている。

『このままじゃ犬死するだけ』

『式典を終えれば魔法少女の宿命から解放される』

『魂を浄化して』

『巫女の職責をまっとうできる』

彼女たちは海辺の村に住まう巫女だった。当時、魔法少女は巫女と呼ばれ、村に伝わるある儀式をこなせば宿命から解放されると大人たちに聞かされていた。

けれど魔法少女の契約は取り返しがつかない。八百万の神々へいくら祈りを捧げても意味はない。

『ひどいよ、こんなあんまりだよ……殺されるだけ。たとえ逃げても、いずれ魔女になつてしまう』

『普通の女の子として幸せになる……それだけなのに、決して叶わない……』

少女たちはその真実に気が付き、祠の前で涙を流していた。

慟哭と共に、記憶のかけらが遠くなつていく。

はつとかすがが我に返つたとき、双子の魔法少女は影も形もない。古びた祠がぽつんと立って、仄暗い洞穴に緩やかな波が寄せている。

「どうかしたの？」

「いや、なんでも」

かすがが過去を覗いていたのは、ほんの瞬きほどの間だった。マミから見れば、かすかは祠に触れて急に動きを止めただけだ。首を振って一歩引く。

祠にはかすがでも見逃してしまうほど、微妙な魔力がこびりついていた。魔力というよりもその痕跡、残滓だ。

奇跡など起こしようもないエネルギーの断片。けれどここで息絶えた魔法少女の無念は過去の情報とともに、たしかにかすかへと伝わった。

かすかは静かにヒザをつき、両手を合わせる。名前も知らない過去の魔法少女に黙祷。目を丸くしたマミも何かを察したのか、同じように祈りを捧げた。

かすかは双子ではないがお姉ちゃんだ。ゆえに記憶の中で宿命に屈し、妹と共に息絶えた姉の無念はどこまでも深く伝わった。同じお姉ちゃんだからこそ、奇跡を起こし得ない残留思念だけで共鳴できたのだ。

立ち上がったかすかの顔からは無邪気な冒険心が消え、一日中遊んだ後のようにくたびれている。みしりと小さく軋む音が鳴ると、くたびれ顔が極めて刹那の間、苦痛に歪んだ。

「トモちゃん、ごめん。疲れちゃった。保養所に帰って寝とく。みとつちたちに伝えといてもらえる？」

「そういえば、前日からずいぶんはしゃいでたものね」  
「いやー、はは。遠足前の小学生じゃんねえ」

急な物言いだったものの、かすかの張り切りようを知っているママはくすりと笑って受け入れた。保養所までは徒歩五分程度の距離だったが、一人にするのは不安だったので、念の為部屋までエスコート。冷房の効いた部屋に敷かれた布団にかすかが身を横たえてしばらくすると、ママは後ろ髪ひかれるようにのろのろと灯花たちのもとへ戻っていった。

布団の上のかすかは目を閉じ、先程垣間見た過去に思いをはせる。

妹を失う恐怖。宿命に押しつぶされる実感。深く共感したかすかに、遊ぶ気力は失せ



ていた。

——

とつぷりと日の落ちたプライベートビーチ。照明の少ない田舎の避暑地なので、普段は見えない星や月の明かりが柔らかに水面へ降り注いでいる。

潮騒が夜の闇に染み込んでいく中、少女たちは昼間と変わらない活力をみなぎらせ、大いにはしゃいでいた。

「くふふつ。手持ち花火だし、もっと弱いかと思ったけど。意外とちよūdい強さだねーっ」

「ちよつと灯花……火をこつちに向けなくてくれる？ 危険だし、何より熱い」

「線香花火がこんなに綺麗だなんて知らなかったよ……」

「ばい、神秘的で綺麗でございます」

手持ち花火を両手に駆け回る灯花。飛び散る火花にむつと眉を寄せているねむ。つましやかな線香花火を静かに楽しんでいる双子と、へび花火の地味さに微妙な気分になっているアリナとみふゆ。

「へー、巫女さんが式典を……」

「そうなのよ。なんだかドラマみたいよね」

「ジャンルはミステリー、サスペンス？ 最初の犠牲者は誰かな？」

「んー、大穴で灯花さん」

「あれは黒幕でしょ」

「わたくしがどうかしたの？」

かすかとマミもその輪の中で、手持ち花火片手に話し込んでいる。寄ってきた灯花に何でもないと答えると、首をかしげてまた駆け出した。マミと顔を合わせてくすりと笑い、かすかはたった今聞いた話に思いを馳せる。

マミによると、かすかが寝ている間に保養所近くの村でちよつとした事件があったらしい。

天音姉妹はその村で海の神を招いて歓待する式典が開かれることを聞き、灯花を樂しませるために全員で村へ向かった。しかし肝心の式典が巫女の手によって中止寸前まで追い込まれていたという。巫女は式典に不可欠な装身具を盗み、マジウスたちの推理によつてその犯行が暴かれると、装身具を破壊した。粉々になった装身具は修復中で、式典とは別にお祭りだけでも明日開催される。灯花はそのお祭りが楽しみで、いつもよりはしゃいでいるとか。

「昼間に二人で見つけたあの祠ね、あの中に二つある装身具のうち一つが入っていたの

よ

「巫女さんがそうまでして拒否る式典の装身具ねえ……さすがに」

「さすがに……何？」

さすがに本気でいわくつきの場所だったと考えると、かすかも冷や汗を抑えきれない。一眠りしてからみんなと合流しおいしい海の幸に舌鼓を打っていると白昼夢だったような気がしていたが、巫女がそこまで嫌がるならあの記憶は実話なのだろう。夏のホラーを体験してしまったかすかは悪寒を覚え、身をすくめた。

「……っ」

「かすかさん？」

次いで、燃え上がる怒り。感覚のない左腕の皮膚に右手の指が深く食い込む。前世と今生合わせても長らくご無沙汰だった本気の怒りと苛立ちに、かすかは声が震える。

暗がりでも表情がよく見えないため、マミが怪訝に首をかしげた。

「マミとかすかはどうする？ 保養所で休んでいるかい？」

「えっ？」

すると、唐突にねむの声。見ると、花火はみんなバケツに突っ込まれており、ねむたちは六人連れ立ってマミとかすかを待っている。

ねむはやれやれと首を振った。

「話を聞いてなかったみたいだね。これからみんなで、光るコケのある洞窟を見に行くんだ。君たちはどうする？」

「行く行く。一人で戻っても退屈だし」

「かすかさんが行くなら」

光るコケの洞窟と聞いてすぐに昼間のあの場所を連想。お墓ではないにせよ、同じお姉ちゃん仲間としてもう一度お参りしておくのも悪くない。かすかとママも加わった八人全員で移動すると、案の定昼間の洞窟だった。

「コケが光を反射するって仕組みを分かっても、まあまあ綺麗って思えるよー」

「素直じゃないなあ……」

「何をー!？」

月や星のわずかな光をエメラルド色に反射するコケは幻想的で、灯花やねむは小突き合いながらも楽しんでいる。アリナは何を考えているのか分からないキョトン顔で辺りを見回しており、みふゆはその横で微笑。

天音姉妹はというと、

「ちよ、つつくん？ つかさん？」

祠に手を触れたまま、呆然と立ち尽くしていた。

近づいてみると、目の焦点が合っていない。遠いどこかを見ているようだ。それこ

そ、昼間にかすかが垣間見たはるかな昔を見ているのかもしれない。

「はっ、い、今のは？」

「かすかさん？」

二人が立ち尽くしていたのはほんの十数秒だった。我に返るなり周囲を見回し、そろってかすかと目が合う。

「かすかさんも、祠に触っても何も起きないでございませうか？」

「双子の魔法少女を見たりはするよ。昼間に見た」

「えっ!？」

二人が手を触れた拍子に、祠の扉が開いていた。かすかがその扉を締めると昼間と同じように魔力の残滓が流れ込もうとしてくる。これに対し、すばやく自前の魔力で干渉を遮断した。十年以上も扱っているエネルギーなので、探知も操作もお手の物だ。

近くでその様子を見ていた双子は信じられないものを見たように目を見張り、顔を見合わせる。それから、かすかの袖をちよんと引いて洞窟の隅へ寄った。

「かすかさん。あの双子はきつと、私たちに何か伝えたいことがあるでございませう」

「ねー」

月夜と月暎によると、この祠だけでなく村の近くのもう一つの祠でも同じ現象が起こったという。双子の魔法少女が伝えたいこと、村に伝わる式典の謎、その裏に潜む闇。

天音姉妹は祠が見せる幻影をきっかけに、式典へ深くかかわる決意を固めていた。

「あの双子を見たってことは、かすかさんもウチらと同じで何かつながりがあるんだよ」  
「ですから明日村に行つて、謎を調べのお手伝いを……」

「ごめん無理」

「ええ!?!」

かすかは感度も人一倍強いので、わずかな残滓から双子が伝えたい思いを十全に汲み取つていた。宿命に屈した無念、悔しき、恐怖、そして——村に対する激しい憎悪さえも。

天音姉妹が共感する気持ちは分かるものの、暗く燃え盛る残留思念にこれ以上関わりたくはなかった。なぜなら今はバケーション。生真面目に悲しくなるよりおバカに楽しく過ごしたい。

天音姉妹は心細そうに肩を落としたけれど、二人でぎゅつと手を握り合うと、決然とした瞳で前を向いた。かすかは小さく頑張つてとだけ言い残し、二人の元を離れたのだった。

——

翌日、午前中はひとしきり海で水遊びを楽しんでからマギウスメンバーはそろって村へ。林の合間の広場にはチョコバナナ、水飴、ヨーヨーなどお祭りらしい出店がぎゅう詰めになり、赤いちょうちんの連なりが夏の青空を区切っている。

灯花を筆頭にお祭りへ繰り出す一行だが、おかしい。出店には人気がなく、よく見ると店番すら誰一人していない。

「申し訳ないけど、式典の準備をしなくちゃいけないからね。お祭りは明日だよ」

「楽しくないーい！」

「まあまあ、つつくんたちの勇姿を見物に行こうよ」

「それしかなさそうだね……」

通りがかつた村人に事情を聞いた灯花はかんしゃくを起こす。かすかがなだめつつ、一行は間もなく始まるという式典の祭場まで移動した。天音姉妹は祠の前で起きた現象を追究するため、辞退した本来の巫女の代役を買って出たのだ。

ねむは式典に民俗学的な興味があるらしく、がぜん乗り気で一同の先頭を切つて移動。ぶーたれる灯花、あくびをするアリナが続く。

祭場に着いた頃にはちょうどよく開始予定時刻で、沈みかけた太陽が空を赤く染めている。村人たちが作った人だかりの中には式典で使う装身具を身に着けた天音姉妹の姿。

「な、何をするでございます!？」

「痛つ、離してよー!」

が、ここで異変発生。

村人たちは突如双子に掴みかかり、二人の腕を後ろ手にひねりあげた。村長の老人は無表情で「指輪を取り上げろ」と命じ、二人は力の源である指輪状のソウルジエムを奪われてしまう。

変身しかけたかすかだったが、軋む音が聞こえて動きを止める。すると村人たちは林の中へ双子を連れ込んでいく。

「岬へ連れて行け」

灯花とねむは心配よりも好奇心に満ちた顔つきで、村人たちを追いかける。

行進が止まったのは林を抜けた先にある切り立った崖で、下には打ち寄せる波が崖を絶えずえぐっていた。

村人たちが力づくで双子を崖際へ押し出していく段階で、一行は見ている場合ではないと判断。変身して村人たちを蹴散らしにかかる。

「死んでも知らないカラ」

「汚い手でわたくしに触らないで!」

「邪魔……!」



「ちよつと三人とも！ もつと加減しないと危険よ！」

「大丈夫です、巴さん。一応この子たちも魔法少女なんですから」

一般人に向けるにしては物騒な剣幕だったので、マジウスに文句をつけるママ。みふゆがなだめるものの、一応と付けたせいで余計不安を煽った。

かすかはその様子をじつと見つめ、ぴくりとも動かない。

（あああ腹立つ腹立つ腹立つ痛い痛い痛い！）

むしろ動けない。溢れ出る憤怒と憎悪、それに伴い増幅していく穢れによって魔力が減り、激痛が魂を苛んでいる。

双子の魔法少女を襲った悲劇を知ったときから、かすかはずつと怒りを抑え込んでいた。村人たちに騙され、使い捨てにされる双子の気持ち——とりわけ妹を守れなかった姉の無念、悔しさを思うと、村人たちへの怒りと憎悪が止まらない。かすかはいついかなるときでもお姉ちゃんであり、だからこそ見知らぬお姉ちゃんの思いにどこまでも深く共感できてしまうのだ。

その共感がかつてないほどの憎悪をかすかに与え、実際に天音姉妹が乱暴される現場を前に爆発寸前だ。

しかし爆発すればすなわち即死、何もできないまま迷惑だけかけて死んでしまう。かすかは激痛に耐えながら、必死で鶴乃の笑顔を思った。うつむいて胸に手を当て、何度

も鶴乃の名をつぶやく。

「月夜さん、月咲さん！」

みふゆの悲痛な叫び声。かすかにとつては幸いなことに、一般人相手の鉄火場を前に誰もかすかの異変には気づいていない。

どうにかメンタルを持ち直し、かすかも変身して参戦。

村人をマミのリボンで縛り上げた後、崖下から現れた謎の魔女を全員で瞬殺し、海へ落ちた天音姉妹も助け出すことに成功した。天音姉妹とかすかはギリギリのところで一命をとりとめ、夏の夜の異変は終わりを告げるのだった。

――

「えっ、全部ご存知だったでございますか!?!」

「たった一回見ただけで!?!」

「うん」

翌日の昼下がり、旅程の最終日。村人と観光客でにぎわう出店を回りながら、かすかは何んてことないような口調で村の過去を全部知っていたことを告げた。

口にした後で後悔する。天音姉妹は過去を探るために村の式典へ深く関わり、危険な

目に遭った。もつと早く教えてくれれば巻き込まれずに済んだ、と責められるかもしれない。かすかはイカ焼きを頬張りつつ、気まづげに二人をチラ見すると、

「良かったでございませす……」

「ほっ?」

二人そろつて胸をなでおろし、安堵しきつた笑みを浮かべている。

「ウチら、やるせない気持ちだったんだ。あの双子の子たちの苦しみも、存在さえもウチらしか知らないままなんだって」

「でも、そうではなかったでございませすね。立派なお姉ちゃんのかすかさんがしつかり覚えてる。同じお姉ちゃんとして私は誇らしいでございませす」

「ねー」

「そ、そう」

顔も名前も分からない過去の誰かのことを、ここまで思いやってる。かすかには月夜と月咲があまりにまぶしくて、つい目を逸らしてしまう。その耳が赤くなっていることに気づくと、双子は顔を見合せて笑った。

と、そこへねむと灯花がやってきた。

「興味深い話をしているね」

ねむの瞳には好奇心が輝いている。

「この村の風習や式典、あの結界を持たない魔女にしたって、謎が多すぎる。真実を知っているなら、教えてほしいな」

言われてみれば、と天音姉妹は顔を見合わせた。小さな名探偵の言うとおり、魔女は倒したものの謎が残ったままだ。特に隠すことでもないのだから、かすかは残留思念と過去の情景から推測した真実もどきを語って聞かせた。

――

それは村の暗部の起こりである。大きく3つの段階を経て、この村は陰惨な風習を生むに至った。

まずはじめに、この村は海難事故や記録的不漁にあえいだ時期があった。村人たちはこれを海神の怒りと考え、人身御供によって鎮めようと考えた。この時人柱として海に出された人物の中に、おそらく魔法少女がいたと思われる。それまで人知れず魔女や使い魔から村を守ってきた魔法少女は、この仕打ちに絶望し魔女となった。この魔女は近海に居着き、村を襲う災厄は悪化してしまった。

次に、悪化した災難に見舞われる村に魔法少女の素質を持つ子供が生まれた。その子供にキュウベえが接触し、契約。少女は実際に魔法の力を実演するなどして、キュウベ

えから聞いた魔法少女と魔女のこと、村を襲う災厄との因果関係を村人たちに信じ込ませた。少女の活躍によって災難は一時鎮静し、平穩が訪れた。しかし少女は長じるにつれ力が衰え、やがて魔女となった。

村人たちは困り果てた。災厄の鎮静に魔法少女は不可欠だが、いずれ魔女になってしまふ。そこで考えたのが、魔法少女使い捨てシステムだった。

素質のある少女を神聖な儀式の名目で契約させ、力が衰えるまで戦わせる。魔女化の兆しが少しでも生じれば、式典の中で殺す。少女には、戦いによって生じた穢れを浄化し、清い魂をもって巫女の職責をまっとうすると吹き込み、岬へ呼び出す。浄化と偽ってソウルジエムを取り上げ、岬から突き落とすとして殺害した後ソウルジエムを砕く。天音姉妹が巻き込まれた式典と同じように。

こうして村は少女たちの命と引き換えに、今日まで豊かな生活を享受してきたのである。

「……」

天音姉妹はそろって顔を青くしていた。祠で見た光景はかすかよりも断片的だったため、そこまで血なまぐさい風習があつたとは考えていなかったのだ。

一方、ねむは眠たげな目を瞬いてしきりにうなずいている。

「なるほど……あの文献の記述とも一致する。その説に従うなら、僕たちが倒したあの

魔女は、話の最初に生まれたものかな？」

「たぶんね。戦ったとき魔女の気配がしなかったのは、沖合から村の全域を結界にしていたからだと思う」

「気配が大きすぎて分からなかったんだね」

納得した風なねむとは違い、灯花は首をかしげていた。

「なんか中途半端だにゃー」

魔法少女を道具として使うなら、もつと徹底する。灯花はわたくしならこうすると前置きしてから、得意げにアイデアを披露した。

村の風習として契約を強制するなら、少女の願い事を売り物にするビジネスが成り立つ。たとえば当時の地方政府や権力者の願いを少女に代行させ、その対価として村を優遇させたり、上層部が甘い汁を吸えるよう体制を整える。そうすれば魔法少女を余すところなく利用する合理的なシステムになりうる、と。

「……みとつちってホント、キュウベえの才能あるよね」

「さすがに擁護できないよ、灯花」

「聞きたくなかったでございます……」

「ウチ、ちよつと気分悪い……」

「わたくし、褒められてる？」

きよとんとする灯花の顔に一切の悪意はない。かすかが苦笑して頭を撫でると褒められたと解釈したのか、得意満面の笑顔を咲かせた。ねむはむつと眉を寄せるが、月夜と月咲はこれ以上聞きたくないとばかりその場を去っていった。

いずれにせよもう終わった話だ。岬に落とされたと思われる歴代巫女たちの遺体も、波にさらわれてなくなっているだろう。証拠がない以上、残留思念をつなぎ合わせたかすかの推測の域を出ない。

つまりはうたかたの夏夜かやに揺らめいた、とある無念の幻である。

――

「シイット！ あの人形絶対後ろに支えがあるヨネ。ヘッドシヨットで微動だにしないんだケド」

「ハイハイ、苦戦してるじゃんね。ここは一つ地元のテキ屋に出禁食らった私がお手本を見せてあげるヨネ」

「さらにシット。マウントマンのご登場ってワケ」

「せめてウーマンって呼んで!?!」

かすかが話し過ぎたことを双子に詫び、三人で歩いていると、射的屋で悪態をつくア

リナを発見。無駄に多芸なかすがスナイパーじみた腕前で景品をゲットし、アリナは舌打ち、双子は手を叩いて喜んだ。

「ていろ・ふいなーれ！」

「ふふ、全然似てないでございます」

「あつ」

お調子に乗ったかすかは裏声で物真似しつつ引き金を引くが、

「ビハインジュー」

「ていろっ……」

背後にリボンのような金髪ツインテールがちらついたので、銃を双子に押し付け逃げ出した。待ちなさい、と呼ぶ声は聞かないふりだ。

興ざめたアリナを引き連れ更に歩くと水飴を手に練り歩くねむ、みふゆに合流。最後には買いすぎたたこ焼きと焼きそばとお好み焼きの山を前に慌てふためく灯花とマミに出くわし、少し早い粉物だらけの夕食会が始まった。

ひとしきり出店を楽しんだ一行は、帰りしなの真つ暗な林道で肝試しを実行。何度か足を運んだ丘の祠へお参りをしてから帰ってくるコースを決め、二人一組で出発した。

「幽霊なんて非科学的だよね。心霊現象のほとんどはパレイドリア効果で説明つくもん

！」



かすかはくじの結果灯花とペアになり、余裕綽々で先行する灯花に手を引かれて進んでいたが、

「でもさあ、奇跡も魔法もある世界だよ？　幽霊もワンチャンありそうじゃない？」

「そ、そんなこと、あるわけ……」

「痛い痛いって魔力使うな変身すな——！」

かすかの余計な意見を聞くなり灯花が変身し、思い切り手を握った。反射的に振り払うと、今度は裾にしがみついで離れなくなった。

「お化け怖いとか小学生かっ！　あ、小学生か」

かすかはセルフでツツコミをするほかなかった。今更暗闇が怖くなった灯花が、一言も発さなくなったからである。コアラのように引っ付いて離れない灯花を引きずって進む道中はかなりの重労働だった。

なお、灯花のビビリ方を見て取ったねむがすかさずマウントを取りに行ったのは語るに及ばずである。

保養所での枕投げで決着をつけることにした二人だが、遊び疲れたのか床につくとすぐに寝息を立て始め、かすかたちも程なく眠った。

翌朝、送迎の高級車に乗り込んだ八人は神浜市に舞い戻り、長いようで短いマギウス  
の夏休み旅行は終わりを迎えたのだった。

最愛の妹に会えない寂しさはある。けれどひと夏の思い出はけっして味のないもの  
ではなく、幸せと刺激に満ちていた。魔法少女の宿命を覆した後で、来年はきつと鶴乃  
もやちよも、みかづきチームも一緒に楽しめたらいい。

帰ってきた中央区のマンション、ベランダから快晴の空を見上げながら。かすかは希  
望に満ちた未来を想った。

それはおそらく、あまりにも分不相応な望みだったのだろう。

「つつ……」

ばかり。軋む音とは違う、硬質な何か欠けて砕ける音。それが聞こえるや否や、か  
すかの世界は黒く染まった。

光に照らされる中央区の町並みも、抜けるような青い空も真っ黒に塗りつぶされてい  
る。呆然として幾度瞬きを繰り返そうと、落ちてきた闇は消えない。開いているはずの  
目に、光が差し込むことはない。

「へ、平気平気」

すでに左目が見えなくなっていたのだ。いつかもう片方もと予想はできていた。あ

の夜に溜め込んだソウルジェムの穢れが、おそらく寿命を縮めたのだろう。

かすかは自分を中心に微量な魔力を波のように放出。反射して返ってきた波から、擬似的な視界を作り上げた。魔力操作と探知両方に優れたかすかだからこそできる芸当である。

色はない。鶴乃の顔も見られない。けれど不自由はしないから、まだまだ頑張れる。

少しずつ近づいてくる終わりを考えないように、かすかはさらなる頑張りを誓う。その誓いが精神を追い詰め、もつと寿命を縮めることになるなどと、考える余裕すらなく。

## 第22話

北養区、電波望遠鏡の管理施設。マギウスの翼の本拠地であるその一室に、組織の幹部が勢揃いしている。

メンバーは夏休みを通じて仲を深めたいいつもの八人。当人たちは完全な利害の一致によつてつるんでいるだけといまだ思い込んでいるものの、一般羽根魔法少女たちからは『仲良しすぎて声かけづらい』と言われるほどの親密ぶりを発揮していた。

「み、みつぶ、つくくん、つかきーん！ しっかりして傷は浅いよー！」

「ワタシはここまでのようです……」

そんな八人が夏休み明けに何をしているかというところ、軽い仲間割れである。

会議室の長机にはみふゆ、マミ、天音姉妹の四人が虚ろな目で突つ伏し、死屍累々の有様だ。かすかの必死の呼びかけにも関わらずみふゆが力尽き、下手人たるマギウス三人組は涼し気な顔をしている。

「どうして、どうしてこんなことに……」

「なんか茶番が始まったんですケド」

アリナの茶々入れは置いていて、かすかはこの惨状につながる夏休み明けのイベント

を回想する。

ことの始まりは九月初頭、マジウスの翼が活動を再開した日のことだった。計画の要にあたる半魔女、エンブリオ・イブの状態を確認したところ、アリナの結界を突き破る勢いで成長していたのだ。休み中も稼働を続けていたウワサや魔法の活動と、休み明けで憂鬱な気分になっている多数の感情エネルギーによる急成長。

このままアリナの結界を突き破れば施設が倒壊し、また濃密な穢れが神浜市全域の魔法少女に感知され、拠点の場所が割れてしまう。イブを収容できる新たな拠点の調達は急務だった。

しかしすでに拠点や羽根のローブなどをパパ様におねだりして用意させた灯花は、これ以上のワガママは言い出しづらい。そこで、ねむが具現の固有魔法で拠点を創造する運びとなった。

市内で放し飼いにしているウワサのように、物語の形をとればたいいの事物を創造できる。連作として加筆していけば、城のような拠点だって作れる。

『ただ、情景描写をする上で、物語の骨子を考えなくちゃいけない』

ねむがそう進言すると、少女たちはそれぞれの欲望を骨子にするため、注文を付けだした。

『アトリエが欲しいヨネ』

『宇宙素粒子観測所!』

『現実的に考えてください。みんなで使うならお風呂に決まっています』

『私は、みんなでお茶ができる素敵なりピングがほしいわ』

『中華料理は炎の料理。大火力の厨房がほしい』

私の強い連中の集まりなので、やっぱり話がまとまらない。その場は解散し、ねむはじっくり物語を考えることにした。なお、天音姉妹は注文をつける前に解散されたのでしょんぼりしていた。

それから数日後、ねむが拠点について意見が聞きたいというので、それぞれ都合をつけて集まったのが先程のこと。

『ねむの言う拠点のことですが、名前から考えてみるというのはどうでしょう?』

『名は体を表す、でございますね!』

『いいんじゃないかにゃー』

拠点の名前を考える。みふゆのこの提案が悲劇の始まりだった。

『希望の宿』

まずはみふゆが提案したこれ。年寄りくさいヨネ、とアリナが一蹴。メンタルがやられたみふゆは力尽きた。

その遺志を継いだ姉妹の片割れ、月夜は固い表情で発表したのは、

『愛と希望のマジウスランド』

『ダッツツサ!』

再びアリナが切つて捨てた。

『羽根を休める場所へ愛と希望を添えて』

『工房の大衆相手に大鍋料理作つて行くせに何グルメぶつてるワケ? アナタには羽根のごった煮丼がお似合いだヨネ』

妹の月咲も同様、一撃で粉碎。

おずおずとフリッポボードをオープンしたマミはというと、

『マジ・コーヴオ』

『コーヴオつて巣穴とかねぐらつて意味だヨネ。陰気、根暗っぽい』

技名のためにかじつたイタリア語知識で頑張つてみたが、ノーサンキューを突きつけられやはり撃沈。こうして死屍累々、鬼哭啾啾屍山血河の有様へ至つたのである。

もつとも早く倒れたみふゆはゾンビのごとく上体を起こし、アリナへ恨めしげな視線を向けると、「じゃあアリナはどんな名前がいいと思うんですか」と問う。「そうでございます」「さぞかし素敵な案なんだよ……」「どうせ前衛アートのみたいな名前なんですよね……」と、続いた敗者たちの声は地獄の底からにじみ出る怨念のようだ。

これに対しアリナは、

『アトリエ・リトルホープ』

割と常識的かつすつきりしたネーミングを開示。亡者たちがたじろいだところで、灯花も『希望観測所』の案を発表した。どちらも欲望丸出しではあるが、ねむからは「綺麗にまとまつてる」と高評価だ。

「かすかはどうなのかな?」

「……」

最後に回ってきたのは六野かすか。なぜか普段よりも気持ちテンションが低く、ぼうつとうつむいている時間が多い。

「かすかかってば!」

「えっ、ああ、ごめんごめん」

虚空を見つめるかすかに灯花がしびれを切らし、肩を揺すった。ほっぺたを膨らませる灯花の怒り顔を前に、慌ててペンを取る。それからさっとフリップボードに書きつけ、反転させた。

『中華飯店・瑞鶴庵』

みふゆの顔からするりと感情が抜け落ちる。人形めいた視線でかすかを凝視して、一方予想を外された灯花たちは首をかしげている。

「いがーい。てつきり万々歳二号店とか、マギウスの翼支店とかだと思った」



「それは考えたけど、万々歳は妹と家族でうまくやってるからね。いつそ独立してみよっかなと」

「やれやれ、灯花もアリナも、かすかまで私欲丸出しじゃないか」

創造主たるねむは呆れ顔だ。実際、灯花たちは拠点としての機能などついで程度にかかえていない。かすかに至つては計画が成就した暁には万々歳から妹を引き抜いて、店の名前に合わせた二人だけの人員で経営したい、などと夢見ている。世界が色を失つた反動か、かすかが夢想する世界には色とりどりの希望が溢れ始めていた。

話し合いは佳境に至り、やがてねむ発案の「フエントホープ」という名称に一同が傾く。

かすかな希望。見せかけの希望。希望を作るの意にもなるその名前は、組織の活動内容に合致していて、すぐに採用された。居心地のいいホームであり、戦場でもある線引きのため、空間の骨子はホテルに決定。新拠点・ホテルフエントホープが誕生したのだった。

――

会議を終えたかすか、みふゆ、マミの三人は同居するマンションへの帰路についてい

た。山中に建つ電波望遠鏡から山道を下り、ふもとでマギウスたちと別れる。西からの陽光が三人を照らし、田舎道へ長い影を映しだす。山から吹き下ろす風が残暑を払い除け、ふもとは九月とは思えないほど涼やかだ。耳をつんぎくセミの合唱は鳴りを潜め、ひぐらしのどこか寂しげな独唱が響く。

終わってしまった。過ぎ去ってしまった。

何も見えない闇の中、かすかは空虚な感慨に囚われていた。

涼しさとひぐらしが与える錯覚だと言い聞かせ、場違いに明るい声を出す。

「マギ・コーヴオ。イタリア語なんだっけ。ティロフィナーレもそうだけど、トモちゃん  
はイタリアが好きなの？」

「イタリアが好きというより、昔見た魔法少女のアニメがかっこよくってね。それに寄  
せた名前にしてるのよ」

「へー、なんてアニメ？」

「ピュエラマギ——」

マミと同じく技名を宣言するタイプのかすかは話が合う。見たことのないアニメの  
話題で盛り上がり、お互いのネーミングセンスを褒めあった。

そうして話は最初に戻ってくる。

「瑞鶴庵も素敵な名前だと思うわ。どんな由来なの？」

「ありがとー。私の前の名前と、妹の名前、瑞乃と鶴乃から一文字とって瑞鶴庵。いつか妹と一緒に経営したいの」

「かすかさんならきつとできるわ。あんなに美味しい料理を作れるんだから」

「んふふ、そうかなー。ね、みつふもそう思う？ ……みつふ？」

解散してからずっと口数の少ないみふゆにかすかが話を振る。しかしみふゆはますます思いつめたような表情へ変じ、かすかとマミは困惑するばかりだ。

重くなった空気の中、みふゆはためらいがちに口を開く。

「……みつちゃんは今昔から、隠し事が苦手だったよね」

鶴乃に魔法少女のことを隠していたときも、サプライズの誕生日パーティーを企んでいたときも、壊滅的な演技の才能を発揮していた。かすかとしても自覚はしているが、もしやなんの脈絡もなく欠点でマウントを取りに来るつもりだろうかと身構える。が、そんな心の準備は次の一言で粉碎されることとなった。

「目、どつちも見えてないんでしょ？」

確信のある口ぶりだった。

「夏休み明け以来、一度もワタシたちと目を合わせてない。焦点が合っていないんです。灯花、寂しそうです」

「えっ、かすかさん、そんな……！」

「巴さん」

突然の告発に困惑するママだったが、

「少し黙っていてください」

有無を言わせぬみふゆの一声に冷や汗を流し、続く言葉を飲み込んだ。そうしなければとても不吉な何かが起きると、長年修羅場を切り抜けてきたベテランとしての勘が警告していた。

かすかはしばしの逡巡の末、気まづげに頭へ手をやる。

「やっぱバレちゃうか。気を遣わせたならごめんね。でも見ての通り生活に支障はないから」

「支障はないから心配しないでっていうの？」

高く大きくなったみふゆの声がかぶさる。かすかは口をつぐみ、空気が張り詰めていく。

肌を刺すような緊張の中、みふゆは大きく深呼吸するが、続く声音は噴火寸前の火山のごとく感情がないまぜになって、ひどく震えていた。

「ワタシみっちゃんのこと信じてた。ウソつく以外はなんでもできる人だったから。だから秘策があるって言われて、すごく安心したの。でも……」

一步一步、かすかに詰め寄っていくみふゆ。言いしれない気迫に押されかすかは自然

と後退るものの、周囲は古びた狭苦しい住宅街だ。すぐに壁際へ追い詰められてしま  
う。

「でもね、腕に大穴を空けたり、両目が見えなくなっても平気な顔で笑ってたり、将来の  
こと寂しそうに語ったりするの見てたら……信じられなくなっちゃうの」

「な、なにを……」

ハッピーエンドの秘策のことだった。

かすかは計画実現後に可能となるねむの魔法による救済を拒絶し、独自の秘策がある  
と言った。その秘策はかすかを含め、誰も不幸にしない最高の方法だとみふゆは聞かさ  
れていた。

かすかの言うことならきつと間違いはないのだろうかとうと信じていた。しかしマミの説  
得から入院、それに構わない過労気味の働きぶり、さらには失明さえなんでもないよう  
に扱う態度を間近で見るとつけ、みふゆは一つの大きな疑念に至った。

「正直に答えてください。そのハッピーエンドの中で、みつちゃんは生きています  
か?」

痛いほどの沈黙が場に満ちた。壁際に追い詰められたかすかは視線を泳がせ、口を開  
きかけては閉じる。どんな言葉よりも雄弁な答えを前に、みふゆはくしゃりと表情を歪  
ませる。

「やっぱり、最初から死ぬつもりだったんですね」

かすかは何も言い返せない。

「どうして」

みふゆはワナワナと震えながら顔を伏せたかと思うと、動かないかすかの左手を両手で包み込みながら、ゆっくりと顔を上げた。先程まで能面のように無表情だった顔は、迷子の子供みたいに涙で濡れている。

「どうしてアナタは昔から、そうやって一人で全部抱え込むの……一人で悩んで、傷ついて、苦しんで、挙げ句には全部抱えたまま死んじゃうつもりだったなんて、あんまりじゃない」

「お、落ち着いてよ。単に死ぬってだけじゃ……」

「聞きたくないっ！」

左手にすぎりつき、痲癩を起こした子供のように泣きじやくるみふゆの前に、かすかはオロオロするばかり。まだ動く右腕を使って、やさしくみふゆの背中をさすることしかできなかつた。

ひぐらしの虚しい声が響く中、しばし抱き合う二人。やがて先に口を開いたのは、まだ涙声のみふゆだった。

「……………めんなさい。一番辛いのはみつちゃんなのに」

かすかの左手を握ったまま一旦身体を離れたみふゆの顔は、晴れ晴れとしていた。鬱屈とした感情を吐き出したことで吹っ切れたようにかすかには見えた。

「こつちこそごめん……すごく心配かけてたよね」

「いいの。だってワタシ、そんなアナタが大好きだから」

「……へ？」

動かない左手をぎゅつと握るみふゆ。かすかは目を丸くしながら、ありもしない左手の温かい感覚を錯覚した。

『普通の女の子がすることじゃんね』。そんな風に言ってくれたあの時、ワタシすつごく救われたのよ？ あれからずーっと、大好きだった」

「す、好きって、それ……」

「だから」

唐突にみふゆが距離を詰める。目と鼻の先、息遣いさえ感じ取れる至近距離に迫ったみふゆは、不意打ち気味に変身した。

不穏な気配にかすかも変身を試みるが、すでに遅い。

「み、みつふ!？」

みふゆはいつの間にか、かすかの左手からソウルジェムの指輪をかすめ取っていた。

かすかは不意打ちにとっても強い。よほど無防備な状態でなければ、ほんのわずかな魔

力の動きを嗅ぎつけ脊髄反射で対応できる。しかし魔力の介在しない純粹に肉体的な奇襲には、人並みな反応しかできない。みふゆはそのことをよく知っていた。

変身のできなくなつたかすかの両目を通し、みふゆが固有魔法を發動する。せめて夢の中では自由でありたい願いから生まれた幻覚の魔法である。決して目覚めることのない幸せな夢の幻覚へ、無防備なかすかの意識を引きずりこんでいく。

「だから、もう全部ワタシに任せて。目が覚めた後も、幸せな夢はずっと続いているから」

七年間の経験に裏打ちされた強力な魔法を変身もせず防ぐ方法はなく、かすかの身体から力が抜ける。完全に意識が飛ぶ寸前、

「みふゆ……」

呟かれた名前に、みふゆは顔を歪めた。

――

「な、何をするの!?!」

「あら巴さん」

みふゆが壁に背を付けずると座り込んだかすかを抱きしめていると、泡を食った



よくな声がかかった。巴マミである。

マミから見れば、二人が突如よく分からない問答を始め、いろいろな意味でただならぬ雰囲気になったと思つたら、みふゆが不意打ちでかすかを昏睡させた状況である。

したがって、変身したマミがマスクेट銃をみふゆに向けているのは無理もない判断といえよう。たつた今マミの存在を思い出したようなみふゆも、照準をつけられていることは当たり前として了解している。

みふゆは名残惜しげにかすかの髪を撫でつけると、泰然としてマミへ向かい合う。

「アナタにも選んでもらいましょう」

そうして語つた。かすかのソウルジェムの状態と、余命があとわずかであること、かすかは死を受け入れてしまつていゝこと。

「かすかさんが、余命……!? だからあの時……でもそんな……」

まずマミが心中に抱いたのは納得だった。マミの固有魔法はおろか、かすかの桁外れの魔力でも改善しない左腕の麻痺や、来年の夏を語る際の寂しげな表情など、話を裏打ちする要素はそこそこあつた。

しかしたとえそれが事実だとしても、みふゆの蛮行の理由が分からない。

「簡単ですよ。ワルプルギスの夜を神浜に呼びます」

疑念に先んじてみふゆは答えた。

このままではかすかは無理を重ね、計画実現を前に余命が尽きてしまう。よってマジウスの腹案であるワルプルギスの夜招聘作戦を実行する。イブはワルプルギスの夜を食らうこととすぐに孵化し、その際の相転移エネルギーで魔法少女の解放と、余剰エネルギーでかすかの救済が可能となる。

「かすかさんに釘を刺されたマジウスの説得は、骨が折れるかもしれませんが……まあ、どうとでもなるでしょう」

それよりも、とみふゆはマミを見つめた。暗く淀んだ瞳のうちに猛る炎は、希望よりも熱く絶望よりも深い。それがどれほどの長きに渡つてくすぶっていたものか、マミには想像もつかなかった。

握手でも求めるように、みふゆはマミへ手を差し出す。

「アナタはどうしますか、巴さん。外道へ落ちる覚悟を決めて、目的に殉じますか?」  
「でも、でも……っ」

マミの心は混迷を極めている。

魔法少女の正義を信じ孤独に戦ってきた自分の矜持、それを碎かれた絶望、怒り、八つ当たり。すべてを受け止め共感してくれたかすかの死を受け入れられるはずもない。しかしエンブリオ・イブとワルプルギスの夜の衝突による多数の犠牲者を看過することはできない。個人的感情と正義の堂々巡りが始まっていた。

「顔を上げなさい」

ぐい、と銃を引つ張られる。ハツとして顔を上げると、いつの間にかみふゆが距離を詰めていた。マスケット銃のバレルを強く握りしめ、銃口を自身の首元へ突きつけている。

変身したみふゆのソウルジエムは、首元のチョーカーに宝石としてあしらわれている。そこへマミの銃を押し付けていた。マミが指先をほんの少し動かすだけで、みふゆは魂を砕かれ死に至る。

「そして、選びなさい」

「な、にを……」

引き金から指を外すことさえ出来なかった。身じろぎ一つで意図せず暴発してしまふ気がした。

「ワタシは悪に堕ちます。何千何万の一般人を犠牲にして、みっちゃんを救う。それの間違いだつて言うなら、どうぞ撃つてください」

そうすればかすかに掛けた魔法はすぐに解ける。逆に言えばみふゆが死なない限り決して解けないほど強力な魔法だが、かすかが自由に動ける状態になれば、ワルプルギスの夜の招聘は絶対に阻止される。マミはみふゆの命一つを犠牲にして、幾万もの人命を救うことになる。

「それとも、共に堕ちますか。多数の犠牲を捧げ、かすかさん一人を救いたいというなら、変身を解きなさい」

「……………」

選べなかった。

かすかだけでなくみふゆにも、マジウスの面々にも恩や義理を感じている。しかしそれを理由に自身の正義をなげうつ決断をすることはできない。そもそも、仮にみふゆの企みの通りかすかを救済したとして、そこに救いはあるのだろうか。

何も分からなかった。悪に堕ちるか正義を徹すか。変身を解くか引き金を引くか、幾度となく繰り返し返してきた単純な動作すらうまくできない。脳裏には魔法少女になつてから経験してきた情景が走馬灯のように巡っていた。かわいい弟子と決別したこと、大切な後輩たちができたこと、真実を知りかすかと出会ったこと――

「……………分かりました」

不意に、みふゆの姿が霞む。銃身から手を離すと、霧のような魔力がみふゆを包んでいく。

「即決で協力してくれると見ていましたが……アナタの正義、見くびっていましたね」

「待……………」

とつさにリボンを伸ばしてももう遅い。みふゆは優しく微笑んだかと思うと、夢現の

幻のごとく消え去った。当然、壁際に寄りかかっていたかすかも消えている。マミの動揺につけこみ知らずのうちに幻覚の魔法をかけていたのだろう。どこからどこまでが現実だったのか、見当もつかない。

今のマミに分かることと言えば、決断を下せなかつた後悔だけである。

――

一方、姿を晦ましたみふゆはフェントホープへ取つて返し、灯花たちマジウスに連絡をとっていた。

「ええ、すみません。大至急話したいことがあるんです。いえ、できれば今日中に。何の話かといえば、計画の加速のこととそれから――」

電話越しに難色を示すマジウスに対し、簡潔な要件を告げる。

「かすかさんの余命について、ですね」

――

## 第23話

参京区、裏路地。賑やかな商店街から一本通りを外れた細い道を、バママミはフラフラとあてもなく進んでいく。途中、街角に微弱な魔力を感じたものの魔法少女だらけの神戸市では珍しくない。興味を失って、所在なく足を進めた。

進む先には何も無い。帰るあてすらない。見滝原に戻れば顔を合わせたくない後輩たちと鉢合わせるかもしれないし、かといって神戸で頼れるツテは先程失ったばかりだ。

梓みふゆ。ママがこの夏を同じ屋根の下で過ごした魔法少女の先輩は、親友を救うためにワルプルギスの夜を利用する。ママはこれに賛成も反対もできず、しまいにはみふゆだけでなく所属する組織からも追放されてしまった。

みふゆと別れてからは小一時間その場に立ち尽くし、やがて覚束ない足取りで組織、マジウスの翼の拠点へと取って返した。みふゆやマジウスたちを説得し、伝説の魔法女の招聘を阻止するためだ。かすかを助けるにしても犠牲を出すことだけは受け入れがたかった。

しかし大量の黒羽根と白羽根に入り口を塞がれ、中へ入ることすらできなかった。

『悪いね、巴さん。ここを通すわけにはいかない』

黒羽根のリーダーはそう言った。顔と名前を隠したその少女は、かつて由比瑞乃に救われた最初の人物だった。

『巴さん、裏切ったというのは本当だったでございませぬ』

『せつかくウチら、仲良くなれたと思つたのに……』

白羽根のリーダーは、断片的な情報のみ与えられているようだった。自分たちが何をしているのか分かつているの、とマミが睨みを利かせると羽根たちは一歩後ずさる。しかし黒羽根のリーダーだけは身じろぎもせず、逆に一歩踏み出してきた。

『知ってる。かすかさん……いや、瑞乃さんの命のことも。ワルプルギスの夜のことも』  
『えっ、な、なんのことでございま——むぐっ!?!』

話の腰を折る前に白羽根たちは黒羽根に退場させられ、入り口は黒一色に染まった。知っているならなぜ、とマミが迫る。リーダーたち黒羽根の初期メンバーは、かすかへの恩に報いるため組織に所属していたはずだ。

『そうだね。望まないことをしてまで助けるなんて、恩を仇で返すことになる』  
『だつたら。とマミが反駁するのにリーダーの声がかぶさつた。』

『巴さん。本当に折れるつてどういうことか、分かる?』

唐突な物言いにマミは眉をひそめ、黒羽根たちもロープの下から怪訝な視線を投げか

ける。構わずリーダーは語った。

『一度折れたら取り返しがつかない。呼吸してるのが申し訳なくて、何食べても罪悪感の味がして、生まれてきた後悔に夜な夜な魘され続ける。一生このままだと思つた……ただどあの人だけは』

上ずつた声と共にリーダーが強く踏み込む。言いしれぬ気迫に今度はママが一步引いた。

『同じ傷抱えたあの人だけは分かってくれた。変われない苦しみを、折れてしまった失望を。それでも生きる希望があるって、私たちに教えてくれた！ 恩人なんてもんじゃない。あの人は私たちにとつて——生きるための、よすがなんだ』

内面の発露に慣れていないのか、大声を出すのが苦手なのか、その両方か。リーダーの叫びは大きくなるにつれ声が震えて途切れがちになり、ロープの下にのぞく白い頬に涙が伝っていた。グループの頭としては情けない醜態である。

しかし、むき出しの心を全力で投げつけるような気概があつたのだろう。ママは更に後ずさり、黒羽根たちはぎゅつと唇を引き結んでいた。彼女らの瞳に猛る光はグリーンフシードよりもはるかに暗く淀んでいるが、同時に光っているようにも見えた。

リーダーが目元を拭うと、彼女たちは一斉に武器を構える。それは統一された羽根の武器である鎖ではなく、各々が願ひ事得た本当の得物だった。



『帰つてよ、巴さん。刺し違える覚悟くらい、この場の全員あるよ』

希望を振りまく魔法少女は、希望の源たる覚悟が定まったとき無類の強さを発揮する。縋る希望も覚悟も不確かだったマミは黒羽根たちの気迫にたじろぎ、ただ無言でその場を後にした。

そうしてあてもなく神浜をさまよひ、足を止めたのは大きな橋の半ばだった。参京区と新西区をつなぐ大橋で、欄干に寄りかかると川のせせらぎが目に入る。初秋の風が水面を波立たせ、柔らかな陽光がきらきら散っている。

「はあ……」

欄干に肘をつきたため息をつくマミの背中は、小さな迷子のようだった。

見滝原にも帰れない、マギウスの翼とも敵対した。かといって、かすかの命を救うことが間違いだとは断じて思わない。目的はともかく手段に賛同できないから、マミは宙ぶらりんな立場に陥ってしまったのだ。

物憂げに何度ため息をつきながら頭を抱える。かすかの命を助けない。けれどその方法は許容しがたい。自身の願望と正義に板挟みになったマミの心中は、千々に乱れた思いばかりで收拾がつかない。

だから、隣の彼女に気づけなかった。

「なーにシケた面してんだよ」

力なく顔を上げたマミは、懐かしい横顔に目を見張る。長いポニーを風になびかせ、お菓子を啜えて欄干にヒジをつく彼女は、かつて袂を分かつた仲間。

「佐倉さん？」

佐倉杏子である。

――

バマミはマジウスの翼に所属している。この情報を佐倉杏子が掴んだのは、ミザリーウオーターのウワサに巻き込まれた少し後のことだった。見滝原の魔法少女たちからそう聞かされた当初は、昔の師がどこかのチームに所属したとしか思わなかったが、マジウスの翼を少しずつ知るにつれ杏子の胸中は曇っていった。

魔女や使い魔のみならず、ウワサと呼ばれる怪異を飼いならし災いを振りまくマジウスの翼。あの正義を貫くバマミがそんな組織に所属するはずがない。何かの間違いである杏子は断定した。

したがって、杏子がミザリーウオーターの件を切り抜けた後も足繁く神浜市に通うこととなったのは、マミの情報とは関係なかった。マミが正義を曲げるはずはない。杏子はあくまでも、地元では枯渇しているグリーンフィードを得るために神浜市へ通い続けた

のであって、決してマミの行方と真相が気がかりだったわけではない。

こうして橋の上で苦悩しているマミを発見したのも、目とソウルジェムを皿みたいにしてマミの魔力を追っていた苦労が実ったわけでは断じてないのだ。決別した師がどこへ行こうが何で悩もうが知ったことではない。ただまあ知った顔を偶然見かけたから一応声をかけておこうと思ったに過ぎないのである。

誰にともなく杏子は面目を保ちつつ、隣のマミを盗み見た。

ひどく弱りきって生気がない。心中のモヤモヤが勢いを増すのを感じた。

「らしくないじゃないか。いつも先輩ヅラして余裕ぶってるくせにさ」

「……悪いけど、一人にしてもらえる？」

「……なんなんだよ」

眼中にないとも言いたげなマミの態度に、杏子は顔をしかめた。風見野を縄張りとする杏子がなぜここにいるのかと聞く余裕すらないようだ。モヤモヤした気分が悪化し、テコでも動かない意地を固めた。

川面の揺らぎを眺める二人の後ろで、一台、二台と車が走り去っていく。一人にしてくれる気はない、とマミは悟った。杏子はマミがきつかけで契約を結んだわけではないため、気兼ねもさほど感じない。罪を告白するように、マミは口を開いた。

「私はこの町で真実を知った。それから、恩人ができたの」

辛い現実を知って打ちのめされ、全力で当たり散らしたこと。それを受け止めてくれた恩人と共にマギウスの翼で活動していたこと。そして、恩人の命と多数の犠牲の二者択一のことを語った。

「アンタが全力で当たってそいつ生きてんの？ バケモンだよ」  
「茶化さないでよ……」

杏子は鼻を鳴らし、口元のポツキーを揺らす。

「そんでアンタは、恩人を助けるのと関係ないやつを犠牲にするのとで悩んでるワケか」  
「ええ」

「分かってきつてんじゃねーか」

何気ない一言に、マミは目を丸くして顔を上げた。

「何かを犠牲にして誰かを救う。違うだろ。誰かのために戦って皆まとめて救う。それがアンタ——バママだろうが」

マミの話では魔法少女の真実もワルプルギスの夜のこともぼかさされており、ひどく抽象的で杏子には全容がつかめない。それでもマミが決まりきった答えに悩んでいることだけは分かった。

一人のために多数を犠牲にするのではなく、その一人も多数もまとめて全部救済する。都合の良い夢物語のために全力を尽くす。それこそかつて杏子が師事したバママ

である。

「大体さ、考えてもみなよ。アンタがそんだけ高く買つてる人だろ？ 犠牲だらけの方  
法で命が助かつて、ソイツは救われたって言えるのか？」

「そ、それは……」

「分かつてるんだろ。アンタは正義を捨てられない」

「じゃなきゃアタシの立つ瀬ないだろーが、と。続けるはずだった言葉を苦虫みたく嘔  
み潰す。しかしその思いは拗ねた横顔から明白で、マミはハッと息を呑んだ。」

かつて師弟関係にあったマミと杏子が離別したのはなぜだったか。杏子が見出した  
生き方と、マミの決して譲れない正義が対立したからこそ、今の関係になつてしまった。

その事実はずんなりとマミの胸中に沁み入り、收拾のつかない心の淀みをすべて吹き  
飛ばした。同時に明瞭となつた思考が、選択を迫られたあの時の光景を思い返す。

『アナタの正義、見くびってましたね』

引き金を引くことも変身を解くこともできなかつたあの時、マミはどちらも選べな  
かつたわけではない。ただ、あえてどちらを選ぶこともせず、第三の選択肢である自分  
の意志を貫いていたのだ。みふゆを殺さない、かすかも死なせない、神浜市を壊すこと  
も許さない。すべてを守り通す自身の正義を選び取つた。

「ありがとう、佐倉さん」

背中を押した杏子は、ぶつきらぼうにそっぽを向く。苦笑するマミの意思は固まっていた。

ワルプルギスの夜を討伐する。

そうすればみふゆが過激化する手段は失われ、組織は本来の穏便な解放作戦へと戻る。かすかの命を救う方法はその後で考えればいい。奇跡も魔法もあるこの世界に、一人の命を救う方法の一つくらいあつて然るべきだ。きつとどうにかなる。

そのためには力が必要だった。マミは欄干から体を離し、ソウルジェムに意識を向ける。三分の一程度が穢れているもののまだ戦える。ワルプルギスの夜との決戦に向け、グリーンシードを調達するのには問題ない力が残っていた。

危険な戦いに杏子を巻き込むつもりはない。たった一人で伝説と戦う覚悟。マギウスの翼を完全に敵にまわしてしまふ決意。

一変して闘志を漲らせるマミに杏子は笑みを浮かべ、あさつての方向へ声をかけた。「で、お前らはどうすんだ？」

橋から町へと踵を返そうとしたマミは、杏子の呼びかけた面々と鉢合わせる。びしりと石のように動きを止め、お互いにぼかんと口を開けて目をパチパチさせた。

見慣れた見滝原の制服に身を包む三人の少女。リボンのツイントールに活発なショートカット、ボリユームたつぷりの三つ編みおさげの三人組。

「あ、あなたたち……」

「ほんとにいた……」

それぞれ鹿目まどか、美樹さやか、暁美ほむらである。マミが見滝原に残してきた大切な後輩たちだ。かすかを通して『心配しないで』と伝言を伝えてもらったので、まさか神浜にいるとは考えもしなかった。思考停止に追い込まれたマミは二の句が継げない。ほむらの左腕にちらついた奇妙な赤い糸さえ見逃してしまった。

そのスキに三人はマミへ詰めより、逃さないように両腕を取る。

「ま、マミさん、マミさんだ……!」

「もう、今まで何やってたんですか。探したんすよー?」

三人の後輩が口々に喜び、後ろで杏子がお菓子をむさぼっている。

そこで、ようやく思考停止していたマミの頭脳が動き出す。

最初に出てきたのは自虐と諦念である。

「鹿目さん、美樹さん、暁美さん……私を責めにきたのね」

「えっ?」

「分かっているわ。私はあなた達に宿命を背負わせてしまった。取り返しのつかないことをしてしまった! でも大丈夫、私がワルプルギスの夜を倒して、マジウスの翼も説得して、かすかさんだって助けて、絶対になんとか——」

「ちよちよつ、マミさん落ち着いて!」

「宿命って戦うこと、だよね……?」

「ワルプルギスの夜?」

さやか、まどか、ほむらの順に首をかしげる。

「うちら、マミさんが心配で探しに来ただけなんですよ。ていうか何ですかあの伝言! 心配しないでとか言って、するに決まってるじゃないですか!」

かすかを介した伝言は確かにほむらから三人へと共有された。そうして所用で見滝原を離れていたさやかが合流するとすぐに、神浜へ通う日々が始まったのだ。

電波塔の件で顔見知りとなったみかづき荘を頼り、夏休みは新西区を中心に搜索の毎日。バケーション及び中央区北養区で活動していたマミとはニアミスを繰り返した末、ようやく今日が来た。とある占い娘の失せ人探しの占いによると、すぐそばに居ると出たので、半信半疑で探索したところ今に至る。

マミを見つけたことでようやく安堵し、泣き笑いを浮かべるさやかとまどか。その優しい態度を前に、マミはさらに自虐をこじらせた。

「魔法少女の宿命は、戦うことだけじゃないの……」

いつか真実を知ったとき、後輩は自分を責めるだろう。それなら今自分の口から言った方が、彼女たちにとっても都合がいい。すぐそこに咎を受けるべき先輩がいるのだから



ら。

マミは懺悔するように、魔法少女の真実を語った。ソウルジェムのこと、魔女化のこと。キュウベえに騙されていたこと。一言重ねるたびに三人の表情が曇り、すべて語ったころには失意のうちに立ち尽くすのみだった。

「そんなの、そんなのってないよ……」

「冗談、なわけないよね。たはは、参ったな……マギウスの翼が言つてた解放つてそういうことかあ」

「……」

声を落とすさやかに、泣き崩れ、ほむらに支えられるまどか。三人の少女たちは真実に打ちのめされている。杏子は先程ぼかして伝えた話の辻褄が合い、衝撃を覚えつつ得心しているようだ。マミはじっと目を閉じ、苦痛の元凶としてなじられる覚悟を決めていた。今にも罵詈雑言が飛んでくるだろうと。

しかし程なくその予想は裏切られることとなる。

「だけど」

最初に立ち直ったのは、まどかだった。半べそをかきながらマミへ一步近づく。

「なんで、私たちがマミさんを責めるの?」

「だ、だって、私があなたたちに魔法少女のことを教えたのよ? 私がいなければ鹿目さ

んは——」

「私はママさんに助けられたんだもん！　ママさんがいなかったらもう死んでますっ！」

涙まじりの怒声にママの氣勢が削がれる。

続いて、気まずげに頭へ手をやりながら、さやかがぼつぼつ切り出す。

「魔女になるとかどうとか、まだ全然整理ついてないけどさ。ママさんを責めることだけは、絶対ないよ」

「ど、どうして？　私のせいでは——」

「奇跡も魔法もあるって教えてくれた。そのおかげで救われたヤツだっている。それに、私は自分の意志で契約したんだから。ママさんが責任感じることはないですよ。ていうか」

さやかは一度うつむくと、勢いよく顔をあげ一気に距離を詰める。瞬く間にママの手がさやかの両手に包まれる。

「それよりむしろ夏休み潰れたことを悔やんでほしいんですけど！　この夏、あたしらただただかけずり回ったと思ってんですかっ！」

「そうですよ！　今までどこで何してたんですか、ママさん！」

「マジウスでバケーション……」

「は？」

思わず正直になってしまふほど、さやかとまどかは優しかった。あれだけ悩んで自責の念を募らせていたことをそれよりと流されたことに、ママは言葉もなかった。

罪に向き合うのが怖いなら逃げていい。戦わなくてもいい、とかすかは言っていた。それも一つの優しさで、ママはたしかに救われていた。けれどこうして向き合ってみると、世界はママが思っていたよりも優しくできていた。

後輩たちの顔がにじみ、鼻先がツンと痛む。前かがみになると優しいぬくもりが肩を包み、もっと視界がにじんできた。

「ごめん、ごめんなさい……ちよつと海に行つて、お祭り楽しんで、海の幸に舌鼓を打っていたの」

「何をエンジョイしちゃつてんのこの人!？」

「ケンカ売つてんのかママミテメー!」

「じよ、冗談だよね……?」

実は冗談ではないことなど露知らず、後輩たちは頼れる先輩の肩を抱き、手を握り、帰還を歓迎した。

長い間溜め込んでいた不安をいつべんに吐き出したからか、涙を流してありがとうと言いつづけた十数分のことをママは数時間のように感じられた。ようやく後輩たちから

「マミが体を離すと、ほむらが「あのう」とおずおず声をあげる。

「さつき、ワルプルギスの夜って言ってましたよね……」

「……ええ。もうすぐ神浜にワルプルギスの夜がやってくる」

「何それ？」

顔を青くするほむらや目を細める杏子とは対照的に、きよとんとしていているまどかとかやか。天変地異と同等の最強の魔女だと説明すると、二人そろって目を丸くした。

「そ、そんなヤバイやつがなんでここに!?!」

「マジウスが人為的に呼び寄せようとしているの。解放の計画を加速させるためにね」

「……たくさん犠牲を出すってそういうことかよ。無茶苦茶だな」

冷静な杏子は納得しつつ騙りの線ブラフを検討するが、神浜市にはウワサの怪物やドツペルなど、すでに荒唐無稽な現象がはびこっている。伝説を呼ぶ手段があるとしても不自然ではないだろう。

「そんな……たくさんの人を犠牲にしてまで解放されようなんて、間違ってる!」

まどかは断言した。魔法少女の真実を知ったことでマジウスの翼の目的は理解できたものの、やはりその手段は到底受け入れられるものではない。

「……ダメ元で言うわよ。神浜は戦場になる。急いで避難して」

「(ズ)冗談!」

「いろはちゃんたち——神浜の人たちには夏休みお世話になったもん。放っておけるわけないよ。ねっ、ほむらちゃん！」

「えっ、あ、そ、そうだね！」

勇ましく答えた後輩たちにママは苦笑を漏らす。たった数分のやりとりで、ママは三人のことを以前よりも深く理解していた。

「ま、あたしも縄張りを融通された義理があるからな。その分は手を貸してやるよ」

獰猛に笑う杏子。さやかが「なんで上から目線なのよー！」と食ってかかり、杏子が軽くあしらう。さらなる売り言葉買い言葉へ発展するのに先んじて、ママが制止をかけた。

「分かった。それならもう少し聞いてほしいことがあるんだけど……場所を変えましょうか」

気づけば橋のど真ん中で五人は長く話し込んでいた。通行人も普通にいることを思い出したまどかたちは気まぎれに赤面し、新西区の方面へ橋を抜ける。ちようどまどかたちが夏から世話になったというみかづき荘が近くにあるというので、そこへの道中でママは語ることを決めた。自分がどうしてマギウスの翼に入ったのか。今まで何をしていたのか。そして——なぜマギウスが計画を加速させたのか。

たった一人の命を救うために、多数を犠牲に捧げる決断がくだされたこと。戦いの前

に、その意志をくじく覚悟を決めてもらう必要がある。善良なまどかたちが話を聞いても一緒に戦う意志を保っていられる保証はない。

辛い選択を迫ることに心を痛めながら、マミは羽根として知り得たすべての情報を――

「えっ?」

共有するかに思われた、その時。

二本の錆びた刃がひらめいた。気の抜けた声を出したのはマミか、それともまどかたちだろうか。

錆びた刃は、マミの首を左右から挟んでいた。見覚えのあるその形状と、すぐ背後に息づく人の気配、魔力反応。

「悪いね、バクさん」

黒羽根のリーダーの声がした。ハサミの刃が首筋に食い込んでいる。

状況を理解すると同時、

「ヤッポウなら」

じよきん、とハサミが閉じられた。

――

悲鳴が上がる。青ざめた顔で目に涙を浮かべるのはまどか、その隣でさやかとほむらは呆然と目を見開いていた。

もつとも早く反応したのは杏子だ。マミがうつろな目で膝をつくと共に変身し、駆け寄る。

「マミっ!」

すばやく杏子の間合いから飛び退る下手人には目もくれず、マミの身体を抱き止めた。ほどなく異変に気がつく。

マミの首はつながっている。間違いなく二本の刃が首の中心まで食い込むのを目撃したが、首どころか意識さえ落ちていない。マミは死人のように真っ青な顔で、首元をさすっている。

「おい、しっかりしろ!」

「さ、佐倉、さん……!」

「マミさんっ!」

杏子がマミの肩を揺すっていると、まどかたちが弾かれたように後へ続く。ほむらもまどかの後ろから続くが、一足先に変身して下手人へ警戒の目を向けている。

マミと杏子は何度も切られたはずの首元をさすり、かすり傷ほどの損傷もないことを

確認してやつと立ち上がる。そうしてほむらと同じ方向へ向き直る。

「いやあ、都合が良かった。橋の上だとさすがに通報モンだからね」

特徴的な黒いローブに身を包んだ彼女は、黒羽根のリーダーである。巨大なハサミにヒジを掛けて寄りかかりながら、人差し指と中指でハサミを作り、よく見えるように開閉させる。

「私の固有魔法は離縁。家族だの友達だの、クソみたいな縁を弱めることができる。素質がゴミ過ぎて絶縁はできないんですけど」

「ああ？ 何余裕ぶってんだよ。この人数相手にどうにかなると思ってるの？」

「はい、どうにかまりました。ねえ、巴さん？」

杏子をはじめ変身したまどかたちが武器を構えるものの、リーダーは飄々とした態度を崩さない。

「ママはリーダーを強く睨みつけながら思考を巡らせ、ハツと息を呑んだ。」

「おいママ、どうした？」

「やられた……！ マギウスの翼との縁を、切ったのね」

「はい、ちよきんと」

つい先程まで保有していたはずの記憶、情報がママの頭から抜け落ちていた。数カ月間マギウスの翼で何をしていたのか、夏休みをどう過ごしたのか、具体的な部分にモヤ



がかかっている。目前の黒羽根がリーダーであることさえ曖昧だった。確かなことは、敵の固有魔法に不意打ちされ有用な情報を失ったこと。

状況を理解した杏子は舌打ちと共に納得する。考えてみれば、مامミほどの実力者が組織の情報を持ったまま脱退するなどありえない。実際مامミがフェントホープの所在地や各種ウワサの詳細などを明かせば、ワルプルギスの夜が呼ばれる前に先んじて拠点を攻めることも可能だった。مامミ一人ならまだしも、見滝原チームやみかづき荘チームが合流すれば攻め落とすこともできただろう。

その対策に派遣されたのがリーダーである。

ハサミの持ち手から伸びる紅い糸をいじりながら、リーダーは言った。

「改めて、黒羽根のリーダーです。あのう、もうこっちの用件は済んだので帰りたいんですが、いいですか？」

「バカかテメーは。目の前に敵の情報源がいて、逃がすわけねーだろ」  
「ですよねー」

額に青筋を立てる杏子。人を食ったような態度をやめないリーダーに、沸々とした感情が強まっていく。مامミの首が落ちたかに見えた先程の光景を思い返すたび、槍を構える手に力が込められていく。

よっこいしょ、とリーダーが寄りかかっていたハサミから身を起こしたその時、世界

から音が消えた。

「あ、対策してるので無駄ですよ」

「えっ!？」

ほむらによる時間停止である。ほむらと直接、間接的に接触していなければ、どんな存在であろうと動きを止め無防備を晒してしまう強力な魔法だ。

しかしリーダーは当然のように口を開き、ほむらの小盾を指差した。そこには赤い糸がリボン結びにされている。

「黒羽根の諜報部からあなたのことは聞いてます。念の為、縁結んどいて正解でした」  
「と、とれない……!」

単純な結び目のはずだが、それもリーダーの固有魔法に含まれるのだろう。いくら引つ張つても拳銃の台尻で叩いてもびくともしない。ほむらはたまたまらず魔法を解除し、時間停止が効かないことを告げた。

「ママは一段と表情を険しくして、油断なく銃を構えている。」

「みんな気を付けて。この子……スキがない」

一段と空気が張り詰めた。立ち振る舞いから察してはいたが、経験も実力も段違いのママからしてリーダーの実力は高いらしい。

リーダーは悠然とハサミを頭上へ持ち上げ、持ち手を左右へ強く引く。止め金が火花

と共に弾け、一組の双剣として両の手に収まる。

その間隙へすかさずマミが撃ち込んだ。二つのマズルフラッシュと同時に、リーダーの両手へ弾体が迫る。

剣閃がまたたいてスパークが弾ける。弾丸を切つて捨てたのだ。

ただ手を動かすだけで回避は可能だった。あえて切り捨てたのは威嚇の意が大きい。その目論見通り、まどか、さやか、ほむらの三人は一歩たじろいでいる。

リーダーはローブの袖に指を入れ、何かを探るような仕草を見せる。マミが新たなマスケット銃を手を目を細めるが、リーダーは動じない。

「まあ、待つてください。やり合うにしてもここじゃ人目につく。場所を変えましょう」  
六人は、みかづき荘へ通じる細い路地で相對していた。橋の上よりも人通りは少ない  
とはいえ完全な無人ではない。

マミたちが逡巡する間にリーダーは袖口から緑色のキューブを取り出した。もしも  
マミが離縁によつて記憶を薄れさせていなければ、全力でリーダーの行動を阻止しただ  
ろう。

リーダーがキューブに魔力を込めたとたん、視界が穢れと絶望に満たされていく。

「魔女の結界!」

キューブの正体はアリナの結界であり、中身は強力な魔女である。キューブから解放

された魔女は自前の結界をすぐさま展開して、六人を巻き込んだ。

『十中八九、君は負けるだろう。殺されることもありうる』

イキガミの魔女の傍らに佇むリーダーの脳裏に、マギウスの言葉が蘇る。

『けれど、万が一巴マミが立ち直り、見滝原の魔法少女たちと共に僕たちへ牙を剥いた場合、かすかが死ぬ』

浮ついた心が冷たく、平坦に均される。獣のように身を低くして、下半身へ力をためた。

『君のかすかへの忠心。それから、隠れた古参としての実力を見込んで命令するよ。巴マミを追跡し、必要とあらば——死ぬ気で時間を稼いで』

ハナから勝てるとは思っていない。死んでもおかしくない。だから命の限り時間を稼ぐ。ワルプルギスの夜を呼び、ただちにイブを孵化させ、かすかの命を救うための時間を。

地面を蹴る。弾かれたように加速し、魔女へ注意を向ける見滝原組へ突っ込んでいく。マギウスの言葉の後で、今度は懐かしい声が響いた。

『戦わなくてもいい。辛くなったら、いっただって逃げていいんだ。だからもうちよっと、生きてみよう?』

「どの口がっ」

どこにも居場所がなかった。生きている実感がなかった。誰も彼も綺麗事を抜かすばかりで、少女の肩を持つ者は誰もいなかった。

だけどあの人だけは違ったから。

「あなただって、生きるんですよおっ！」

血を吐くように絶叫しながら、リーダーは捨て身の時間稼ぎへ身を投じるのだった。

## 第24話

そこには由比瑞乃と六野かすかが同時に存在していた。

どこかのお店で働いていて、鶴乃が手伝つてくれている。一般の客だけでなく、やちよやみふゆをはじめ、多くの友人知人がやつてくる。おいしい料理に笑顔を浮かべ、他愛ない話題に盛り上がり、時に怒ったり拗ねたりして、けれど最後にはみんな曇りなく笑っている。

すべてが希望に満ち、みんなが幸せだった。

そんな夢はもう終わった。ブツリと断線したみたいに音を立て、消えた。過ぎ去った幸せの後には、ただ真つ暗な闇が残った。

――

意識を取り戻したかすかが目を開くと、何も見えなかった。そういえば目が見えなくなつたんだとぼんやりした頭で思い出し、魔力の波を放射。返ってきた波から擬似的な視界を作り出して、状況を把握した。

広いホテルの一室に横たえられている。品のいい調度品や家具、上質なベッドは高級ホテルと比べても遜色ないが、そこら中に散りばめられたねむの魔力から、ウワサの一部——ホテルフェントホープの一室であると当たりをつける。

さらに意識を失う前の記憶を思い出したところで、かすかはバネじかけのように跳ね起きた。

「ああもう、みふゆ……！」

強力な幻覚魔法を至近距離で受け、昏倒した。みふゆの魔法の力をよく知っているかすかだからこそ、焦燥感と危機感で頭が占められる。どれほどの期間眠らされていたのか、思いつめたみふゆがどんな暴走をしたのか。マジウスは、マジウスの翼は——

「……？」

ふとした疑念が湧く。そもそもなぜ目覚めることができたのか。

かすかは変身もしていない状況で一方的に本気の魔法をかけられた。みふゆが意識的に魔法を解除しない限りは目覚めるはずがない。その保証があればこそ、かすかの左手にソウルジェムが返されているのだろう。

にも関わらずなぜ、都合良くも意識を取り戻したのか。

頭を働かせるものの、情報があまりに不足していた。ひとまず疑念は捨て置いて、部屋出口へ向かう。

その時、かすかの優れた魔力探知能力が警鐘を鳴らす。反射的に窓へ駆けよつて空を見上げた。濁つたかすかの両目の先には分厚い暗雲が垂れ込め、どこからともなく遠雷のような高笑いが響いている。雲の向こうへ意識を集中すると、かつてない極めて濃密な穢れが、神浜市へ接近しているのが分かった。

「ワルプルギスの夜……」

天変地異に等しい最悪の魔女。伝説が襲来している、と直感した。

呆然とつぶやいた次の瞬間には、さらなる新情報がかすかの探知網へ舞い込む。ホテルの地下で管理しているはずのエンブリオ・イブの魔力が、外へ出ている。ゆつくりと山中から町へと進行しており、その周囲を無数の魔法少女たちの魔力が動き回っている。町中には小さなイブの魔力とワルプルギスの夜のものがいくつも散らばっていて、これは双方の使い魔と思われた。

「鶴乃はいない、よかつたあ……」

応戦中の魔法少女たちの中に鶴乃の魔力はない。ほつと胸をなでおろすかすかだが、安心してる場合か、とセルフでツツコミを入れる。

かすかとしては悪い夢だと思いたい現状は、端的にまとめるとこうなる。

ワルプルギスの夜とイブによる夢の共演。舞台は神浜市、観客は魔法少女たちと巻き添えの一般人が強制される。一年近く穢れを溜め込んだイブと伝説の魔女が衝突した



後、残るのはガレキと死体の山だろう。安心できる要素がない。「なんでこうなっちゃうのかな……」

後悔と自責に呼応してソウルジエムがにわかに穢れ、その分の激痛が体を蝕む。今までのような全身の神経を直接引っかき回されるような感覚と違い、体内の臓腑を丁寧になます切りされているような痛みだった。

頑張れ。ここで弱音を吐くようではお姉ちゃん失格だ。ただの無能なカスに逆戻りだ。

必死でそう言い聞かせていると痛みが和らぎ、震える膝でどうにか立ち上がった。苦悶しているうちに六番ロープの留金を握りつぶしていたが、気にしている場合ではない。

変身し、身体に魔力を巡らせる。袖の下と懐の仕込みを確認する。まだ頑張れる、とかすかは判断した。

「失礼しまーす……って、あれ？」

「かすかさん、お目覚めだったでございます!？」

「つつくん、つかさん、いいところだ!」

今にもホテルを飛び出そうとしたところで、扉が開かれる。顔を見せたのは天音姉妹、月夜と月咲の二人だ。

当然のように起きているかすかを見て目を丸くするが、すぐに表情を引き締める。すでに二人も変身しており、いつでも戦える状態だ。

「かすかさん、これ以上の無茶はダメでございます！」

「ウチら、みふゆさんに頼まれたんです。かすかさんを見張って——」  
「シヤラーッブ！」

日和つたことを言い出す双子をかすかが一喝。びくりと肩を震わせた二人に詰め寄り、焦点の合わない目で睨めつける。

「こんな異常事態を放っておけるわけじゃないでしょーが！ とりあえずイブを鎮めに行くから、道中で事情の説明よろしくっ！」

「ま、待つでございます、かすかさんお体は——」

反論は受け付けず、かすかは窓から外へ飛び出した。ホテルが有する広大な芝生の庭を一直線に駆け、イブのもとへ向かう。意図的にペースを緩めていると、後ろから大慌ての双子が追いかけてきた。

見張るといっても、かすかが目覚めてしまった以上双子に止める手立てはない。説明しないなら置いていくと急かされたのを機に、この異常事態に至るまでの道筋をかいつまんで語り出すのだった。

かすかが魔法をかけられた翌日、みふゆの呼びかけにより天音姉妹を含むマジウスの翼総員がフェントホープに集合した。

『計画はすでに最終段階にあります。もうひと頑張りで魔法少女の解放は成るでしょう。今から説明する任務が、みなさんに課せられる最後のお仕事になります』

不自然にニコニコしたみふゆが説明したのは、神浜市の主要な電波局や電波塔を占拠する制圧作戦だった。羽根たちの中には訝しげにする者もいたけれど、ほとんど祝勝ムードの周囲に流され、あっさり最後の仕事を果たしに散開した。

それから黒羽根の初期メンバーと、白羽根の代表である天音姉妹が集められ、真実を告げられたという。

かすかの余命があとわずかで、その命を救うために計画を急ぐ必要があること。計画の加速案は一度はマジウスがボツにしたワルプルギス招聘作戦を使うことで、羽根たちに与えた仕事はその一環であることなど。

『かすかさんの命を救うためならば是非ありません』

『あなたたちならそう言ってくれと信じていました』

黒羽根の初期メンバーは固い表情のまま、そろって同意した。

『リーダーさん、少しこっちに来て』

内密な話だろうか、黒羽根のリーダーだけがマジウスの三人に呼ばれる。短く言葉を交わしたかと思うと、アリナから魔女を飼育しているキューブを一つ受け取り、決然とした足取りで部屋を出ていった。後から聞いた話によると、リーダーは離反したバマミを命懸けで処分しに行つたらしい。

その後のマジウスの三人のうちアリナとねむはいつもと変わらない様子だったが、灯花は見るからに機嫌が悪かったという。

『もうっ、なんでかすかはそんな大事なことを秘密にしたの!? プンスコプンだよっ!』  
『矜持、だろうね。もつとも、僕たちは今からそれを踏みにじるのだけれど』

『アリナ的には、計画の前倒しに反対する理由はないヨネ』  
彼女たちはひとしきり計画の加速への思いを述べた後、何も言わない天音姉妹へ水を向けた。

二人は何も言えなかった。かすかの命は惜しいと思う。魔法少女の解放は宿願だ。しかしワルプルギスの夜とイブが神浜で争えば、どれほど大きな犠牲が出ることになるか、分からない二人ではない。結局その場は賛成とも反対とも言えないまま、あいまいにならずに解散した。

その一週間後、みふゆは黒羽根と天音姉妹を伴い記憶ミュージアムへ赴いた。そこに

は新西区の代表格であるみかづきチームが勢揃いしており、かつて月夜の匂いを嗅ぎ回ったにつつき由比鶴乃の姿もあった。

目的はみかづき荘チームの説得だ。ワルプルギスの夜を呼ぶにあたり予想される迎撃戦から、西の最大勢力を排除する。

『こんなところに私たちを呼び出して、何のつもり？』

『真実を、知ってもらいたいです。私たちが何をしようとしているのか。かすかさん——みつちゃんとして私が起こったのか』

記憶ミュージアムは人の記憶を実体験として再現できる。みふゆがベルを鳴らしてミュージアムのウワサを起動すると、言葉よりも雄弁な記憶の世界へみかづきチームは旅立った。その記憶はかつてかすかがママを説得するのに使った記憶と、みふゆが聞ききた記憶の混ぜものだったという。

しばらくした後、記憶の旅から目覚めたみかづきチームは呆然としていた。魔法少女の真実とマジウスの思惑、かすかの余命など、多大な情報量を処理しきれないようだった。

『落ち着いて。今すぐ魔女になるわけじゃない』

『その通りだ。事実、みかづき荘のメンバーからは長年一人の犠牲も出ていない』

年長者たる雪野かなえ、東のトップの和泉十七夜の二人が率先してメンバーをなだめ

ていった。そのおかげだろうか、一同は落ち込みはしても錯乱することはなく、沈痛な面持ちで黙り込んだ。

そんな中、異常があつたのは鶴乃だった。

『あは、あははっ……』

突如笑い出したかと思うと、虚空を見つめたまま棒立ちになり、はらはらと涙を流していた。肩を揺さぶるかなえの手を荒々しく振り払い、幽鬼のような足取りでその場を後にした。戦意喪失したように、双子には見えたといい。

完全に想定外だったのだろう、みふゆは無表情のまま目を大きく見開いて、鶴乃の背中を見送った。鶴乃は必ず姉の命を救うためにマジウスの翼へ下ると踏んでいたが、結果は戦線離脱である。月夜と月咲もみふゆと同様、まったく意味が分からなかった。

とはいえ、鶴乃よりも重要なのは七海やちよだ。西の顔でありみかづき荘チームのトップであるやちよは、由比瑞乃と親しい。彼女が親友の命のためにこちら側へ着けば、計画は成就したも同然である。

うつむきがちなやちよの表情は長い黒髪に覆われ、よく見えない。天音姉妹はその様子にただならぬ悪寒を感じたものの、みふゆは構わず呼びかけた。

『やっちゃん。わかつたでしよう？ ワタシはただ、あの人を救いたいだけ。魔法少女の解放には正直あまり興味がありません。あの人が生きてさえいれば——』

『死んだほうがまし』

みふゆの説得をぶつたぎる言葉だった。声音にはふつふつとした感情が滾り、それに伴い空気が肌を刺すような緊張と圧力を帯び始める。やちよからにじみ出る気迫と魔力で空間が歪んでいる。彼女はゆらりと顔を上げ、

『そんな汚い手で延命するくらいなら、死んだほうがまし』

抉るような目つきでそう言つてのけた。あまりの眼光とドスを前に天音姉妹は小さく悲鳴を上げ、みかづき荘のメンバーですら一歩後退つていた。

『……どうして、その言葉を。記憶からは省いていたはずです』

『さあ。でも、アイツならそう言うだろうなって思ったのよ。どうやら凶星だったみたいだね』

天音姉妹には何を言っているのか理解できなかった。しかし何か重要な意味があったらしく、みふゆはうつむいてワナワナ肩を震わせ、やちよは鬼のような形相と化している。

『色ボケしてんじゃないわよ。あなたたちのやり方で救われたとしても、アイツは私たちから離れていく。ずっと自分を許せないまま、ひとりぼっちになってしまう。そのくらい分かつてるでしょう』

『づるるる』

『恨まれても構わない、とでも思ってる？ あいにくアイツが恨めるのはアイツ自身だけなのよ。無理やり昏睡させられたとしても、ごめん一つで済ませるでしょうね』

『うるさい……』

『あなたがやろうとしていることは独善ですらない。ただの——』

『うるさいうるさいうるさいっ！』

気づけば変身したみふゆとやちよがそれぞれの武器で切り結んでいた。天音姉妹には開戦の瞬間すら見えなかつたという。

『知ったようなこと言わないで！ あの人に頼ってばかりですつと苦しめてたくせにっ！』

『そんなこと分かってる！ だからこそ、これ以上苦しめたくないって言ってるのよ！』

チャクラムと槍が激しくぶつかりあい、ほんの瞬きの間に魔力の火花が星星のごとく散っていく。二人が撒き散らす戦意は穢れすら及ばぬほどドロドロと熱く滾っており、年少の黒羽根のうち数人が貧血を起こし、みかづき荘チームの幾人かも顔を青くしていた。修羅場でございます、と誰かが震える声でつぶやいた。

天音姉妹を含む少女たちはしばし二人に気圧されていたが、十七夜をはじめ動けるメンバーが加勢の動きを見せたので、羽根側も参戦。ミュージアム内で魔法少女大乱闘が勃発した。



黒羽根たちは姉妹が思っていたよりもずっと強力で、十七夜や環いろは、深月フェリシア、二葉さななど動けるまでに回復した複数人を相手に一步も引かない戦いを見せた。

といつてもやはり一番ヒートアップしていたのはやちよとみふゆだった。

記憶ミュージアムの建物にダメージが入っていき、テリトリーを荒らされた記憶キュレーターのウワサが出現。プリンターの化け物じみたウワサはもつとも暴れ方がひどいやちよとみふゆに狙いをつけたが、

『引っ込んでなさい!』

『邪魔っ!』

息ピッタリの同時攻撃により即撃破されていた。二人とも明らかに判断力を喪失していたが、その代わり平生をはるかに超える力を発揮していた。

恐れをなした両陣営は二人から距離を取り、巻き込まれないよう防御の構えを取る。その行動が奏功した。

『アブソリュートレイン!』

『アサルトパラノイアっ!』

はた迷惑な意地のぶつかりあいの幕が、極めて暴力的に下ろされる。

お互いにすさまじい魔力を込めた一撃をぶつけ合い、衝撃がミュージアム内に駆け回

る。するとどこからかビシビシと軋む音が聞こえ、次の瞬間にはガレキの雨が降り、やがて倒壊の轟音で世界が塗りつぶされた。

天音姉妹は、みふゆの形相に逃げ腰になっていた白羽根たちに救助され、気づいた時にはガレキの山の上だったという。みかづきチームは大盾を巨大化させたさなが盾を傘代わりにしたことで、どうにか全員無事だった。

『まだ、まだ……っ！』

ガレキの山のてっぺんで、やちよとみふゆが相対していた。槍はへし折れチャクラムはひしやげ、お互い泥と血に塗れてフラフラ。それでも二人は正面から距離を詰めて、腕を振り上げた。

二人は拳を使うことに慣れていないようだった。遠投でもするみたいに大きく振るかぶつて——天音姉妹は反射的にぎゅつと目を閉じた。交通事故のような二つの破碎音が聞こえ、次に目を開いたとき、こめかみから血を流す二人が大の字で倒れていたという。

『ええ、そうですよ』

ボロボロの姿で倒れるみふゆは、力なくそうつぶやいた。

『ワタシのやり方じゃ、結局みっちゃんを助けられない。分かっているでも我慢できなかった。独善じゃなくて、ただのワガママです。でも——』

頬に一筋のしずくが流れ、みふゆは片手で目元を覆った。

『でも……見殺しになんてできない。できないよ、やっちゃん……』

その隣で仰向けのやちよは血で黒く染まった前髪をかきあげ、「そうね」と嘆息。

『誰も犠牲にならなくて、アイツも笑顔でいられる。そんな方法を探しましょう』

『そんな都合のいい方法——』

『きつとある。奇跡も魔法も、ご都合主義もある世界よ。私たちならきつと見つけれらる』

力強く断言されたみふゆは諦めたように笑う。やちよが先に立ち上がり、みふゆに手を差し伸べた。躊躇いがちにそれを握って起き上がるみふゆ。

天音姉妹はそこで異常に気がついた。

まだ日没には遠い時間にもかかわらず、空が異様に暗い。風が打ち付けるように吹きすさび、神浜全域に暗雲が立ち込めている。

みふゆとやちよははつと空を見上げてから、驚愕に目を見開いた。

『この魔力、もしかして』

『ウソ、早すぎる……！』

その反応から天音姉妹も顔を見合わせ、空に意識を集中。通常の魔女とは比較にならない濃密かつ巨大な穢れの塊が、雲の向こうに感じられた。

みふゆたちはみかづき荘チームの切り崩しと陽動を兼ねており、マギウス率いる電波制圧部隊が並行してワルプルギスの夜招聘作戦を進める手はずだった。同部隊はつづがなく目的を遂げ、みふゆたちが戦っているあいだにすぐそこまで伝説がやってきていた。

『やちよさん、あれ……!』

さらに事態は悪化の一途をたどる。

いろはが指さした先の空には、白い塊があった。宝石に彩られた巨大な蛾のようなそれは、重力に引かれて自然落下していく。放物線をえがいて落ちる先は、北養区の山中だった。

ずん、と着地すると山肌の一部が崩れ、木々が弾け飛び、雷鳴のような轟音が遅れてみふゆたちの耳にも届く。

『イブ!?!』

その源は、解放されたエンブリオ・イブだった。

みふゆも天音姉妹も想定外のことだ。もともとはワルプルギスの夜に暴れさせ犠牲者たちの感情エネルギーを発生させてから、イブを解放する計画だった。まだワルプルギスの夜が到着していない段階で解放するのは早すぎる。

『ちよーつと早いけど、問題ないよね』

『イブが自ら拘束を破壊するなんて、計算外だったよ』

『ああ、アリナたちで作り上げた至上のアート……ゾクゾクしちゃうヨネ』

そこへ悠然とやってきたのは、マジウスの三人。羽根たちの熱心な働きにより電波の制圧とワルプルギスの夜の召喚が早く済んだ上、イブは勝手に拘束を破ってフェントホープを飛び出していった。ワルプルギスの夜の存在を感知したという。

特にやることもなくなったヒマなマジウス三人は、陽動部隊の様子を見に来たようだ。

『灯花ちゃん、ねむちゃん！』

『あれ？ わたくしたちのこと知ってるの？』

『僕は初対面のはずだけれど』

いろはが灯花たちに呼びかけている間にも、イブは巨体を震わせて少しずつ町へ接近している。もちろんワルプルギスの夜も少しずつ高度を下げており、ほどなく雲間から姿を見せるだろう。

みふゆは決然とイブをにらみ、やちよはその肩へ手を置く。

『ケジメを付けに行くなら、付き合うわ』

『……かないませんね。月夜さん、月咲さん！』

『は、はい！』

諦念混じりの苦笑を浮かべたかと思うと、みふゆは天音姉妹を呼びつける。

『マギウスが来たということは、みっちやんは拠点で一人になっています。念のため、お二人にはあの人の見張りをお願いしたいんです』

賢明ね、とやちよも同意した。二人の経験上、瑞乃もといかすかを一人にするとなんことが起きない。たとえ大人しく眠っているにしても、誰もついていないのは危険らしい。

天音姉妹が頷くのを見て取ると、やちよとみふゆはイブの元へ一直線に駆けていく。そうして月夜と月咲は頼まれた通り、とりあえずかすかの眠るフェントホープへ向かうのだった。

――

「よく分かった、ありがとー!」

山中を駆け足で下りながらの説明だったので相当ハイスピードな説明になったものの、かすかは状況を把握した。つまりはみふゆに心配をかけすぎて暴走させてしまったということだ。みふゆからかすかの余命を知らされたマギウスたちは、ワルプルギスの夜に関する腹案を実行し、かすかの定めたラインを超えた。そうして神浜市は伝説の魔

女と未曾有の穢れを溜め込んだイブにダブルパンチを受ける寸前に追い込まれている。

であれば、かすかが始末をつけないわけにはいかない。

「ほんと、よく分かった……!」

話によるとかすかが眠っていたのはおよそ一週間。初秋にあたる今日の日付に思い当たったところで、かすかの疑念が氷解した。なぜみふゆの幻覚魔法を無効化し今日目覚めることができたのか、夏休みの前から気になっていたド忘れとは何だったのか。すべてが理解できた。

「待つでございますっ!」

「んもう、何?!」

さらにペースを早めようとしたかすかの眼前に、月夜が躍り出る。遅れて月咲も横に並び、通せんぼされたかすかが急ブレーキをかけた。

「かすかさん、何するつもり!?!」

「決まってる。イブをはつ倒してフェントホープに連れ帰る。ついでにワルプルギスの夜もひっぱたいてお帰り願う」

「めちやくちやでございます、そんな体で!」

「そうだよ! 大体、そんなことしたらかすかさんが助けられなくなっちゃうんだよ!」  
みふゆとマジウスはかすかの残り少ない余命をつなぐために計画を加速させた。こ

れを阻止することはかすかの命を捨てることと同義だ。

「分かっている」

しかしかすかには百も承知のことだった。

「私だって生きたいか死にたいかでいえば、生きたいよ。だけど自分だけ助かるために、関係ない人たちをたくさん死なせるのは……なんか、なんか違うと思う」

詭弁である。かすかは自分の目的のため、魔女やウワサを街にばらまき、関係のない人々を巻き込んできた。今更正義を気取っても遅い。

ただ、天音姉妹は何も言えなくなつた。体や五感の一部を喪失しながら明確に死へ近づいていくかすか当人が、きつぱりと救いを拒絶した。救いのために動いてきた二人だからこそ、かすかの言動は深く刺さつた。

その間にかすかは上空へ意識を割く。暗雲のたちこめる空には、イブから分裂したツバメのような使い魔たちが無数に飛び交っている。市内に散開した魔法少女たちはこれに応戦しながら、雲の向こうから近づいてくる伝説を警戒していた。

神浜市の魔法少女たちは数多く、質も高い。ひとまず使い魔たちは任せておくことにして、イブの方向へ魔力の波を飛ばしてみると――

「そんな……っ！」

北養区から水名区を縦断したイブの巨体は参京区へ入ろうとしている。その進路上



にあるものを認識したとたんかすかは顔色を変え、頭上まで高く足を振り上げた。

鋭い震脚が地を踏みしめ、雷紋の円陣が展開。幾重にも重なるその中心からぬつと大型トラックが顔を出し、ほどなく赤い車体が砲弾のように宙へ発進する。

「セキトバくん！」

出てきた勢いはそのままのセキトバくんのキャビンへかすかは飛び乗り、あつという間に空の彼方へ運ばれていった。着付けを気にする余裕もなかったのだろう、六番印のロープが木の葉のように中空を舞っている。

後に残された天音姉妹はしばし呆然と立ち尽くした後、顔を見合わせる。遠景に見える山のようなイブの威容と蹂躪される町並み、それから空の向こうから接近する伝説をやっと現実として受け入れた。

そうして二人もまた、全速力で山を下りるのだった。

## 第25話

胡桃まなかは参京区の町並みを一直線に駆ける。神戸市の上空に散開するおびただしい使い魔たちや、ちよつとドン引きするほど強力な穢れが近づいてくるのは見ないふりをして、一心不乱に目的地へ。

やがて足を止めたのは、赤いのれんの小さなお店。実家の洋食屋ウオールナッツと関係の深い、中華飯店万々歳の店先だった。息を整えて勝手口の方へ回ろうとしたところで店内から話し声が聞こえ、正面の引き戸を開ける。

「アイヤー！ 鶴乃、早く逃げるアル！ スーパーセルがそこまで来てるアルよ、このままじゃ一家もろとも万々歳が吹っ飛ぶネ！」

「……」

「せめて何か言うネ！」

そこにはカウンターに腰掛けてうなだれる鶴乃と、その周囲で大騒ぎする店主の姿があった。店主は大時代な風呂敷を抱えており、しきりにどこかへ逃げるよう促している。入り口に立つまなかに程なく気がついた。

「まなかちゃん、どうしたネこの非常事態に!？」

「い、いえちよつと」

言葉を濁す。もうすぐ蛾みたいな怪獣が参京区を縦断するので、念のため避難してくださいとは言えなかった。

まなかは避難を促すためにやってきた。先程まで北養区の実家にいたところ、一つ隣の通りを巨大な魔力が通過したので様子を見に行くと、怪獣めいたサイズの魔女が町を蹂躪していた。その進行先に万々歳があることに思い至り、取るものもとりあえず走り出して今に至る。

「それより非常事態って、どうしたんですか？」

「季節外れのスーパースェルネ！ 参京も北養も避難指示が出てるアルヨー！」

「避難指示!? それはちようど良かった……おほん」

空の向こうにいるとても大きな穢れが関係しているのかもと推測したものの、避難するならそれでよし。口を滑らせる前に咳払いして、まなかは鶴乃へ目を向ける。

「で、鶴乃さんはどうしたんです？ 魂が抜けたようになってますが」

「さつき帰ってきたと思っただけです。早く逃げないとここも危ないのに

……」

「……じゃん」

「アイヤ？」

ぼそぼそと鶴乃の口元が動く。店主が聞き返すと、鶴乃はテーブルを突いて立ち上がり、叩きつけるように言い直した。

「逃げたいなら逃げればいいじゃんっ！ 一人でどこへでも行けば!! ひいじいちゃんとおじいちゃんがつ作って、お姉ちゃんがすっごくすっごく頑張つて守ってくれたここを捨ててさ、大陸でも南極でも行けばいいじゃない！」

まなかは身がすくんで動けなかった。ここまで氣を立てている鶴乃は見たことがなかった。店主も初めてのことなのか、おろおろとして後ずさりながら口ごもっている。

「み、店は大事アル。しかしアルよ鶴乃、この世で一番取り返しのつかないモノは命ネ。生きてさえいればどうとでもなるアル。たとえ店が吹っ飛んだとしても——」

「うるさいうるさいっ！ 出てけコテコテチャイナかぶれっ！」

「あ、アイヤァ……」

力づくで店の外へ押し出されていく店主。まなかは涙目の店主と視線を交わし、「任せてください」とアイコンタクト。店主は外へ追い出される直前、苦虫を噛み潰したような顔で目礼を返し、締め出された。

薄暗い店内には荒い息をつく鶴乃と、まなかの二人が残される。強風が万々歳の戸を揺らし、ガラス越しの雨音が遠く響いている。

「たしか、みかづき莊チームでウワサを攻めに行く予定でしたよね。一体何があつたん

ですか？」

「まなか……」

鶴乃と同様、まなかも実家の経営のために魔法少女になっていた。神浜にはびこるウワサの異変やマジウスの翼などについては、鶴乃を通して把握している。

おそらくその方面で何かがあったのだろうと推測してみれば、案の定だったらしい。鶴乃はまたカウンターにうなだれて、ぽつぽつと事情を語った。

記憶ミュージアムで魔法少女の真実を知ったこと。魔法少女が魂を抜き出され、いずれ魔女になる宿命を負う。だから姉は鶴乃が魔法少女になることに反対していた。しかし結局鶴乃は真実を知らないまま魔法少女になり、姉の思いやりを無駄にしてしまった。

『なんで、なんでうまくいかないの……』

姉はそれでも鶴乃を救う力があつた。その力を失ったことに絶望し、鶴乃を救うためにだけに失踪した。残り少ない命を燃やしながら。

「お姉ちゃんね、昔から私のためにすつごく頑張ってくれてたの。だから私もその力になりました。魔法少女になって一緒に戦えるようになれば、きつと役に立てると思つた。だけど……魔法少女になったせいで、お姉ちゃんを追い詰めちゃったんだ」

思いを踏みにじり、気遣いに気づくこともなく。姉を苦しめていたのは他ならない自

分である。姉の記憶からそれを読み取った鶴乃には、もう戦う意志などなかった。ただ、何をしても姉を苦しめてしまう自分への怒り、それさえも姉を追い詰めるかもしれない恐怖感の板挟みとなって、鶴乃の心はぼつきりと折れていた。

もう合わせる顔がない。かろうじて鶴乃にできたことは、姉が残してくれた万々歳でひたすらに落ち込むのみである。

懺悔を終えた鶴乃は嗚咽を漏らし、カウンターに突っ伏す。普段の元気はウソのように消え去り、そこには重い真実に押し潰される力のない少女の姿がある。

さて、一通り事情を聞かされたまなかはというと。

「……」

「ま、まなか？」

無言で厨房に押し入り、魔法少女の装束へ変身。魔女退治どころか料理だってできる一挙両得な姿で、厨房へ火を入れた。

中華鍋を大火力コンロに設置すると業務用冷蔵庫を押し開け、在庫を確認。ありあわせで完成するレシピを瞬時に脳内で組み上げ、調理を始めた。古びた野菜や肉を刻み、鍋に入れて、冷ご飯に油、溶き卵なんかをぶっこんで鍋を振るう。換気扇がうなりを上げて、鍋は火を噴いた。

「チャーハン上がりました！」

「なんでっ!？」

鶴乃の前にほかほかチャーハンを提供したところで、やっとまなかに正気が戻る。すー、はーと深呼吸すれば平生の思考能力が帰ってきた。

なぜ突如料理を始めたのか。端的に言えば錯乱である。

魔法少女の真実に加え、まなか自身も親しくしていた鶴乃の姉が抱える余命、運命など。中学二年の女の子であるまなかがいつぺんに受け止めるにはあまりにも重すぎた。パンク寸前の頭はルーチンに従いひとまず料理を選び、その通りに体を動かして平常を取り戻したのだ。

鶴乃はほかほかチャーハンを前に目を白黒させている。それを見ると、冷静なまなかの心中にじれったい思いが湧いた。

「傷つけるとか踏みにじるとか、ほんつとにめんどくさい姉妹ですね」

「め、めんどくさい?」

「鶴乃さんは瑞乃さんの助けになりたいんでしょう。生きていてほしいんでしょう。じゃあそうすればいいじゃないですか。あの人がどう思っただろうが、あなたの思うままにしたらいんです」

「それができたら……っ!」

「大体」

まなかがかウンターに身を乗り出す。

「魔法少女の宿命を受け入れるかどうか。それは鶴乃さん自身が決めることであつて、瑞乃さんが決めることじゃありません。あなたは後悔してますか？ 魔法少女になんてならなきやよかつたつて思いますか？」

鶴乃の脳裏に弱つた姉の泣き顔や、細い手足、小さな背丈が巡る。一人にしておけない、力になつて支えたい。たとえば事前に真実を知つていたとしても、契約をためらうことはなかつただろう。

「……思わないよ。お姉ちゃんを助きたい気持ちは、本物だから」

「だつたら——」

「でもっ！」

鶴乃は息を詰まらせる。つぶらな瞳に涙がたまり、まもなくはらはらと流れ出す。

「その気持ちがお姉ちゃんを追い詰めちゃった！ お姉ちゃんはお姉ちゃんなりに私の幸せのこと考えてたのに、私が余計なことしたせいで……そうだよ、昔から私はお姉ちゃんに迷惑かけてばかり……もうやだ……」

「こゝこの姉妹はほんとにもうっつ！」

わんわん泣き出す鶴乃を前にまなかは頭を抱えて天を仰ぐ。やがて大きいため息をつくど、小さな身体を半ばかウンターに乗つけるようにして鶴乃の方へ詰め寄つた。



「じゃあ聞きますが、鶴乃さんは今幸せですか！ 瑞乃さんとすれ違ってばかりで自由に会えない今幸せなんですかっ!？」

「ひぐつ、不幸のどん底だよ……お姉ちゃんに会いたいよう……」

「それを言うんですよあの人に直接う！」

目と鼻の先ですさまじい剣幕のまなかに圧され、鶴乃は鼻をすすりながら身体をのけぞらせる。その反応でまなかも幾分落ち着き、こほんと咳払いを一つ。

「いいですか。結局はすれ違いなんです」

指を一本立て、噛んで含めるようにゆっくりと切り出す。

「瑞乃さんが鶴乃さんを想うのと同じくらい、鶴乃さんも瑞乃さんを想ってる。お互いにそのことを知らないせいで、いえむしろ知り過ぎていたからこそ、こうなっちゃったんです」

「……そう、かも……」

鶴乃はぐつと唇を噛んで、四年前のことを思い出す。高校進学を断念する姉の覚悟の前に、鶴乃は言葉を飲み込んだ。万々歳は大好きで大切な場所だけけど、それ以上にお姉ちゃんも大切なんだよと、気持ち伝えられなかった。それまで身を粉にして店を切り盛りしてきた瑞乃の努力を思いやるあまり、水を差すようなことを言う勇気がなかった。あの日すれ違った思いが巡りに巡り、今につながってしまったのだろう。

ならば今こそ想いを伝え合えばいい。すれ違ったそれらを撚り合わせ、幸せな未来へつないでいけばいい。イブもワルプルギスも姉の余命もみんなどうにかなる。どうにかしてみせる。

「はい、どうにかしてください」

ごしごしと涙をぬぐった後の顔つきを見るに、気持ちは伝わったのだろう。ならばもはや料理人に語ることはない、と判断するまなか。

鶴乃はお行儀よく手を合わせてからスプーンを引つ掴み、チャーハンをかきこんだ。程よくバラける粒の一つ一つに味がしみこみ、ごま油の風味が香ばしい。がつんと来る濃い味付けはまさに旨味の暴力で、しかし後を引かずいくらかでも食べられる。

懐かしい味を平らげた鶴乃は跳ねるように席を立ち、外へ向かった。

「ごちそうさま！　ありがとね、まなかっ！」

「お粗末さまでした」

気力を取り戻した鶴乃は敢然と引き戸に手をかける。まずは記憶ミュージアムに戻ってやちよたちと合流し、迫り来る脅威から神浜を守らねばならない。覚悟を決めて外へ飛び出したところ――

「えっ」

ふわり、と体が浮いた。一拍遅れで轟音と衝撃がやってくる。

万々歳のわずか百メートルほど先の路面が陥没し、もうもうと塵埃を上げている。ツバメのような使い魔たちが死体に集う鳥のごとく飛び回り、その中央に白い巨体が見えた。

でつぷりと膨らんだ腹部は豊かな体毛に覆われ、無数の宝石に彩られている。蛾と巨人を混合したようなとんでもない巨体が、ゆつくりと動き出す。万々歳の方向へまっすぐと。

エンブリオ・イブである。穢れを貯め込む性質を持つイブにとって、上空のワルプルギスの夜は格好のエサだ。道中の有象無象は気にもせず、ただ最短距離を徒歩と大ジャンプで突き進むのみ。

しかし着地しただけで地を震わせ鶴乃を宙に浮かせたように、進路上にあるものは無事では済まない。すでに数人の魔法少女が迎撃しているのが見えるけれど、意にも介していない。

「い、一体何が……っ！」

慌てて外へ出てきたまなかは、接近するイブの威容に絶句。

その横で鶴乃は静かに、けれど決然と鬪志を胸に変身し。

燃え盛る一対の扇を手に、イブへ正面から突っ込んでいくのだった。

栄区、記憶ミュージアム跡。ガレキの山と化したウワサの中心で、いろはとマジウスが対峙している。ミュージアムに見せられた真実の記憶で精神を疲弊した他のメンバーは、十七夜とかなえに手を引かれて撤退しており、四人の他に居るものといえばいろはの肩に乗る小さなキュウベえだけだった。

「この魔力の動き、ベテランさんたちずいぶん苦戦してるみたいだねー」

「イブの使い魔だけでなく、ワルプルギスの夜の使い魔も相当な数が動いているようだからね。いくらあの二人でも無理はない」

「ていうか、みふゆはなんで寝返ったワケ？ アリナ的にベリーバッドなんですケド」  
目を閉じ神浜市内の魔力を感じるマジウスたちは、いろはのことを忘れていたようだった。

いろははそんな態度にもめげず、意を決して呼びかける。

「灯花ちゃん、ねむちゃん！ もうやめようよ、こんなこと！」

「あ、環いろは。まだいたんだ」

「モギユウ……」

まるで無関心な様子に小さなキュウベえが唸り声を上げる。

灯花とねむは、いろはが探す妹と共に入院していた二人だった。妹の行方について聞くために探してはいたが、まさかこんな形での再会になるとは想像もできず、しかもやはりいろはのことを覚えていないようだ。

「ワルプルギスの夜を呼ぶなんておかしいよ。神浜市が壊れたら、ういとの約束はどうなるの!？」

「言ってる意味がわかりませーん。初対面なのに馴れ馴れしくしないでよね!」  
「同感だね。支離滅裂で文脈が見当たらない」

取り付く島もない塩対応だった。アリナに至っては見向きすらしていない。

灯花とねむ、ういにいろはの四人はある約束をしていた。退院したら北養区にある大きな桜の木の下で再会し、神浜市の噂を共に見て回ろうと。再会の場所である桜には万年桜という専用の噂まで考えていた。

そのこともまったく覚えていないのだろう。いろはも妹を起点とする様々な記憶を失っていたので、灯花とねむの状態には理解がある。二人にとっては初対面のいろはが何を言ったところで通じないだろう。ワルプルギスの夜を呼ぶに至った事情を考えればなおさらのことだ。

しかしいろはは諦めない。いろははお姉ちゃんであり、しかも妹のためだけでなく同じ姉のためにも何だってできる手合いだからだ。

「……かすかさんのことは知ってる。あの人を助けるために、こんなことしたんだよね」  
灯花とねむは初めていろはへ振り向いた。モルモットを観察するような冷たい二人の視線を、いろはは真つ向から受け止める。

「鶴乃ちゃんやちよさんからあの人のはたくさん聞いたの。だから分かるよ。きつとこんな方法で助かってても、悲しむだけだって。ううん、それだけじゃすまないかも」  
「分かりきつたことを言うね」

被せ気味にねむが答えた。

「僕たちはかすかのために計画を加速させたんじゃない。感謝されるとも思っていない」  
「じゃあどうして——」

「ワガママだよ。ただ、かすかに死んでほしくない。彼女にどう思われようとね」

ねむたちマジウスはかすかの不興を買うことを割り切っていた。そのリスクに鑑みても、組織の目的である魔法少女の解放を成し遂げるだけでなく友人の命まで確保できるリターンは大きい。それにみふゆが余命の情報を開示した時点で、組織内の最大派閥であるかすか派が加速案に傾くことは確定しており、解放を求める他派閥も同様だった。マジウスは合理的判断を下したに過ぎないのだ。

ねむはいろはに背を向け、灯花もぷいとそっぽを向く。アリナはやはり一片の興味すら示していない。

呼びかけは失敗に終わったが、妹の親友である二人がこれ以上罪を重ねるのを見ていられない。みんなが傷つくだけの結末に突き進むのを見過ごすことはできない。

そこでいろはは強硬手段を決断した。

「……お願い」

「モッキュ」

小声でつぶやくと共に、小さなキュウベえがするりと肩から下りる。ガレキの陰をココソと動いて、少しずつ灯花とねむへ接近していく。

いろはの記憶は小さなキュウベえとの遭遇、接触を経て少しずつ復元されていった。であれば二人の記憶も同じ方法で元に戻る可能性がある。妹との約束を思い出したなら、これ以上罪を犯すことはなくなるかもしれない。

キュウベえが確実に距離を詰めていくものの、マジウスたちは変わらずいろはを眼中に入れず、遠景のイブと魔力の動きを火花でも見るように楽しんでる。密かに動き回るキュウベえに気づく様子はない。

「……かすかは、怒るかにゃー」

ほつり、と灯花がつぶやいた。イブの方向へ向けられる視線は、それよりも遠くのどこかを見つめている。

こだまのように、ねむが続いた。

「怒るに決まっているよ。あれだけ厳しく釘を刺されたのに、無視したんだから」

ラインを踏み越えたマギウスは、壊れた神浜市で口うるさくお説教を受ける未来を思い、悄然と肩を落とす。かと思うと、灯花は不満げに口を尖らせた。

「でもかすかだつて悪いよ。苦しいのも辛いのも全部一人で抱えてさよならなんて……」

「その点には同意する。この計画が成就したら、一緒に怒られよう。それから僕たちもかすかを怒るんだ。みふゆも、みかづき荘の人たちも怒つてくれるだろうね」

マギウスの明瞭な頭脳には、魔法少女が解放された世界でみんなが手を取り、笑い合う姿が見えていた。

油断ではない。イブが解放されワルプルギスの夜が呼ばれた段階でもう計画を止める手段はなくなっている。唯一の方法になりうる最高戦力は、みふゆが手加減なしの魔法で無力化済みだ。その魔法を破りこの土壇場に都合よく駆けつける奇跡など起きるはずもない。

すでに計画をやりとげたような気分で、ねむはふとアリナを見やる。

「アリナ。君の考えはどうなんだい」

アリナ・グレイ。生と死のテーマに取り憑かれた若き天才芸術家である。さしものねむと灯花であっても、計画の加速についてアリナの意見だけは予想がつかなかった。と



いっても今更翻意することはないだろう。慢心と好奇心に満ちた問である。

アリナは両手の人差し指と親指を組み、かたどった四角のフレームにイブを収めている。視線は外さず、みかづき型に口を歪めながら、なにげなく答えた。

「命はどんなアーティストにも一つ限り、モストプレシヤスな画材なワケ。あれだけ上質なのが浪費されるのは、アリナの的にナンセンスってだけだヨネ」

「相変わらず、脳の血管に絵の具が通つてる感じだよねー」

「結局最後まで理解できそうにないよ……」

アーティスト特有の価値観に対し、ねむと灯花は苦笑した。

と、そこでキュウベえが灯花の足元にたどり着く。

強風により三人の会話がいろはに聞こえることはなかった。ばたばたとはためくフードとケープを抑えるいろはに、キュウベえが振り返る。お願い、と意図を込めて首を返した。

するとキュウベえは後ろ足で立ち上がり、前足二本で灯花とねむの足に触つて——  
「な、何!？」

効果は劇的だった。

マギウスを中心に、山吹色の閃光が吹き荒れる。ほとぼしる魔力の波に身構えるいろはの目には、ラーメンどんぶりの模様のような何かのマギウスを取り囲んでいる様が見

えた。

紋様は太陽のような輝きを発しており、灯花とねむ、さらにはアリナまで呆然自失と  
なっている。

「僕の中の針が逆に回る、時が刻み直されていって、網膜の景色が焼き直される……」

「やだ、これ、何が見えてるの……落ちる……わたくしの脳髓の中に、トロンって落ちて  
いく……」

「……」

物忘れとは無縁な三人の天才の脳裏に、過去の情景が閃いては流れ行く。かつて覚え  
ておく必要のない些事だと断じたはずの記憶が、歪んだ因果と共に修正されていった。

## 第26話

ガレキの山と化した水徳商店街。市全域に発された避難指示が奏功し、すでに人の気配はない。暗雲立ち込めるそこで、エンブリオ・イブの巨体が黄色いリボンと紅い鎖に拘束されている。

「みんな、今よっ！」

「ぶちかませ！」

見滝原の魔法少女、バマミと佐倉杏子のリボンと鎖だった。幾重ものリボンと鎖がイブをその場に縫い付けて一時的に動きを止め、そのスキを逃さず二人の魔法少女が躍りかかる。

「えーい！」

「怪獣映画かってーの！」

同じく見滝原の魔法少女、鹿目まどかと美樹さやかである。桃色の矢雨と双剣の鋭い剣戟がイブの巨体に直撃し、さらにどこからともなく湧いて出た爆弾によりイブの頭部が爆破される。時を止めた眺美ほむらが急所になりうる場所に爆弾を設置していたのだ。続いてほむらが再び時間を止め、無数のマスケット銃と多節槍による連撃が瞬きの

うちにイブへ見舞われる。

拘束により進行を遅らせた上での、現時点での最高火力だ。しかしその爆炎が晴れると、無傷のイブが姿を見せる。

「さすがに計画の要、伊達じゃないわね……!」

マミが苦々しくつぶやくと、隣に杏子が降り立った。槍を肩に担ぎ、火とガレキに塗れたイブの進行後を見やり、小さく舌打ちする。

「つたく、こうも後手に回るとはな。アイツの思うツボじゃねーか」

二人が同時に思い浮かべるは7日前、黒羽根のリーダーとの戦いだ。

『一週間です』

魔女の結界が消滅した暗い路地裏で、血と土ぼこりに塗れたリーダーはぼつりとそうつぶやいた。

『私がズタズタにした縁が復縁するまでの時間ですよ。それまでは大人しくしといてくださいね』

リーダーの捨て身の攻勢は実を結び、戦闘中にマミだけでなくまどか、さやか、ほむらの三人の縁も離縁させることに成功していた。経験の長い杏子さえ魔女とドツペルの連携によりかろうじて刃が届き、離縁が成立。情報漏えいの回避のみならず、不穏分子の隔離まで成し遂げてみせた。

その代償にリーダーは満身創痕、壁に寄りかかって指一本動かせない状態だった。

『お前の身体に聞くつて手もあるんだぞ。……なんだよ、マミ』

杏子は血に塗れたリーダーの胸ぐらを掴み上げるが、やんわりとマミに制止された。しばし強い視線を交わしあつたのち、むつつり口を尖らせてリーダーを解放する。

最初の不意打ちの時点でリーダーはマミの首を落とすことができた。錆びたハサミであつてもマミの弾を切り裂く程度の切れ味はあるのだ。わざわざ縁だけに狙いを絞らず、なんならソウルジエムを直接切ることもできただろう。その事実を分かつていて強硬な手に出るのはフェアではない。

見滝原の五人はマグウスの翼への手がかりを完全に失い、ただ何かを阻止すべき心地悪い焦燥感だけが心にくすぶつていた。

『私は、変わりました』

出し抜けにリーダーが言った。

『絶望さえできなかつた。生きたまま死んでいた。背中押されても、優しく支えられても、お尻叩かれても……一生立ち直れない、戦えないと思つてた。本当に折れてしまつたから……』

言葉の途中で咳き込むと、たまらずまどかが駆け寄つた。さやかもまた同じくして、癒やしの固有魔法を発動しようとするが、かがみこむ彼女たちの手をリーダーが振り払

う。

『あなたも、きつと……』

『リーダーっ！』

直後、黒いローブが路地裏にひらめく。リーダーと同じ格好の少女たちが壁を作り、マミたちと相對した。

『つたく、持ち場はどうしたのよ……』

リーダーがかすれ声で苦笑する一方、マミは倍以上の頭数とメンバーの消耗を見てと、速やかに撤退を指示。この日以降リーダーの思惑通り、マミたちはマギウスの翼との縁が復活するまで雌伏を強いられるのだった。

そうして復縁したのが本日の朝方であり、いざ全員で神浜市に来てみれば、イブとワルプルギスによる大惨事が始まっていたのである。

このままイブが進行を続ければワルプルギスの夜と接触し、大惨事に拍車がかかってしまう。囚われたあの人が望まない未来が実現してしまう。

マミが再びマスキット銃を生成し、指揮の声を張り上げようとしたその時――

「炎扇斬舞っ！」

「刺激的な味付けをどうぞで！」

イブの巨体が炎に包まれた。

— —

イブとはすでに五人の魔法少女たちが交戦中だった。そのうち四人はみかづき荘經由でよく知った顔だったが、指揮をとっているともしきツインテールの魔法少女とは鶴乃もまなかも面識がない。

が、通りすがりでもなんでも関係なかった。大切なものを守るため力を貸してくれるなら、誰だってありがたい。

鶴乃が一对の扇をひとふりすると炎の弾雨が降り注ぐ。火の海で焼かれるイブに詰め寄ったかと思うと、舞うような連撃で巨体を焼き尽くくさんとする。その後にはまなかのフライパンから発射された火球が直撃し、爆炎でイブの姿が隠される。

「ちっ、全然手応えがねーぞー！」

しかし爆炎が晴れたそこには、やはり無傷のイブがたたずんでいる。

マミが表情を険しくすると、イブが体をゆすり始める。ぶちぶちと嫌な音がしたかと思うと、見る間に拘束が引き千切られイブが進行を再開した。

進む先には伝説の魔女のものと思われる大きな穢れ。そして進路上には、絶対に鶴乃が譲れない大切な場所——中華飯店、万々歳が位置している。

穢れを貯め込む性質上、イブはただ極上の穢れに向かっているだけなのだろう。しかしただ動くだけで次々に町が破壊され、鶴乃の大切なものまで壊そうとしている。

「まだまだ！　ちゃーらーっ！」

なりふり構わずもう一度正面から突っ込む鶴乃。炎上する周囲と鶴乃の連撃を煩わしく思つてか、イブは体をひねる。蛾を思わせる長大な羽が一辺をなぎ払った。範囲内から逃げられなかつた鶴乃は、交差させた扇でどうにか受け止める。

「つく、まだ、まだっ！」

真横へ砲弾のように吹っ飛びながら態勢を立て直し、建物の壁面に足から接地。骨が軋み、壁面に幾筋もの亀裂が走る。

歯を食いしばつて気炎を上げ、壁面を思い切り蹴った。吹っ飛んだのをそのまま巻き戻したかのように、再びイブへ突っ込んでいく。中空で扇を振り、火の海と連撃を再び繰り出すものの、やはり効果はなかつた。

「そのあなた！　無茶しすぎよ、下がりなさい！」

「うるさい！　来て、もう一人の私っ！」

親切に手伝つてくれている通りすがりの魔法少女、マミにきつく言い返し、鶴乃は強い感情に身を任せた。全力攻撃の繰り返しによってソウルジェムは穢れきり、もう一人の鶴乃たるドッセルが姿を現す。



背中から生えたそれは傍目にはゴージャスな豚のバルーンのようにだ。鶴乃を吊り上げ宙へ浮かんだところで、鶴乃の扇が振るわれる。ドツペルの鼻先から粘性の液体が振りまかれ、耳の先に着いた火打石が火花を散らすと、爆発的な熱風が吹き荒れた。大火力、広範囲の火炎放射だ。

爆炎の晴れたそこはガレキの山から焦土へと姿を変えていた。しかしその中央にいるイブは煙を上げているもののまだ健在で、鶴乃はまたも正面から突っ込む。

「鶴乃さん、待つてくださいい！」

一切消耗を気にしない鶴乃の猛攻にまなが悲鳴のような制止をかけるが、鶴乃は聞いている。というより、聞こえない。

万々歳は鶴乃にとって大好きな場所だった。曾祖父が作り、祖父が大きくしたそこはかけがえのない宝物だった。そして、その宝物を全身全霊で守ってくれた姉の、努力の結晶でもある。

病的に白い部屋の中、力なく横たわる姉の姿を思う。暗い部屋で一人涙を流す姉の記憶が脳裏によぎる。

あんなに頑張つて、あんなに苦しんでまで守ってくれた万々歳を壊すなんて——  
「ゼーったい、許さないんだからっ！」

灼熱の怒りと闘志がソウルジェムを黒く染めていく。軋む体の悲鳴を無視してがむ

しやらに扇を振り回せば、ほどなくドツペルが現れた。中空からまたも爆発的な火炎放射を発射。見滝原の魔法少女たちは巻き込まれることを恐れ、一時的に退避していた。

二度目のドツペルによってイブはようやく鶴乃の存在を認めたらしく、足を止めて向き直った。山のような巨体がゆっくりと迫る中、鶴乃は三度目のドツペルを出そうと一歩踏み出し――

「あれ?」

気の抜けた声が出た。世界が九十度傾いて、体に力が入らない。

「鶴乃さんっ!」

まなかの悲鳴が遠くで聞こえたとき、鶴乃はやつと倒れたのだと自覚した。イブの巨体がすぐそこまで迫っているというのに、身じろぎもできない。

ドツペルを発動すれば穢れが浄化され、魔力が全回復する。魔力は魔法少女の命の源であり、ドツペルさえ発動すればいくらでも戦えると鶴乃は考えていた。

しかし魔力と体力は別物である。かつて無尽蔵の魔力を持つ瑞乃が過労で倒れたように、体力が尽きれば魔法少女は動けない。ドツペルは穢れのエネルギーと体力を激しく消耗するのである。

蛾のような腹部から伸びた二本の足がすぐそこまで迫っていた。まなかと通りすがりの魔法少女たちは距離をとっていたので、間に入ってかばうのは間に合わない。

(これでいいんだ)

鶴乃の思考は冷静だった。イブは鶴乃を敵としてみなしている。倒せはせずとも時間は稼いだ。きつとやちよたち頼れるみかづき荘チームが駆けつける時間稼ぎにはなっただろう。

イブの足が鶴乃のはるか頭上に掲げられている。ハンマーのように鶴乃の体を踏み潰し、ソウルジエムごと粉々にするつもりだ。それでも鶴乃の頭に恐怖はなく、すがすがしい気持ちだけがあった。譲れないもののために力を尽くしたことを、後悔はしない。

けれど一つだけ心残りがあるとすれば。

「お姉ちゃん——」

「なーに？」

姉ともう一度会いたかった——

「えっ」

ほとんど悔いなく目を閉じた鶴乃だったが、当たり前のように返されて間の抜けた声がある。

見上げる視界には、小さいけれど誰よりも大きく、頼れる背中。ラーメンどんぶりのような雷紋が輝き、色素の薄い茶髪が風になびいている。

連なる雷紋の鎖がイブの足を絡め取り、拘束していた。

その鎖を手繰る彼女は首をひねって鶴乃を振り返る。

「大きくなつたね、鶴乃」

まぶしいものを見るように目を細め——由比瑞乃は、笑った。

——

瑞乃が右腕を振るうと、雷紋の鎖が生きているように蠢いてイブの足を引く。仰向けに転倒したところで、瑞乃と鶴乃の元へマミたちが駆けつけた。

「かすかさん、どうしてここに!?!」

「瑞乃さん、今までどこに行つてたんですかっ!」

マミとまなが同時に呼びかけ顔を見合わせたので、瑞乃は気まずげに頭へ手をやって苦笑い。どっちでも呼びやすい方で、ということで落ち着く。まどか、さやか、ほむらに杏子の四人はちらちらと瑞乃たちを見やりつつ、倒れたイブを警戒していた。

「どうしてと聞かれると、ご都合主義つて答えるしかないかなあ。一年の間で今日だけは、寝てる訳にはいかないの」

「今日だけは?」

首を傾げるマミ。一方、まなかは「あつ」と声をあげる。

「もしかして……鶴乃さんの誕生日ですか？」

「そうそう」

なぜみふゆの幻術がなんの理由もなく今日解けたのか。なぜ鶴乃の前に現れたのか。すべては今日、鶴乃の誕生日のためである。

「ぶっちゃけ色々といっぱいいっぱいで、忘れかけてたけど……当日思い出したからセーフってことで」

いたずらっぽく笑う瑞乃にまなかは呆れた。半年以上失踪していたくせに、妹の誕生日だけを理由に帰ってくる思考回路にだ。マミもまた同じく、それだけのためにみふゆの強力な幻術を無効化したのに驚愕と呆れ半々である。

『天地開闢の記念日を忘れても、鶴乃の誕生日を忘れるわけじゃないじゃんね』

瑞乃はいついかなるときでもお姉ちゃんだ。妹のためならどんな理屈や魔法も都合主義で捻じ曲げてみせる。かつて鶴乃が魔女の結界に巻き込まれた折、感知できるはずもない鶴乃の存在を知った時のように、無理を通して道理へ変える。

「お姉ちゃん」

だから鶴乃もまた、姉と同じように無理を通す。

大技とドツペルの乱用で意識が暗く沈んでいく中、何が何でも言わなければならぬ

気持ちに絞り出す。

「私、後悔してない。お姉ちゃんの隣にいたいから、支えたいから……お姉ちゃんと一緒にいられない方が、魔女になるよりずっとずっと辛いよ……お願いだから……大好きだから……そばにいて……」

伸ばされた鶴乃の手がぱたりと落ちる。疲労困憊で眠りに落ちたのだろう、深い呼吸音が瑞乃の耳に届く。ただ、妹の表情だけは、魔力の波では分からなかった。

「ふ……」

鶴乃の気持ちは正しく伝わった。真実を知っても折れるどころか悔みもせず、受け入れている。そんなことより姉を支えたいと言ってくれたことが、瑞乃はただただうれしい。

同時に、虚無感を覚える。妹の幸せを決めつけ独りよがりに行った。妹のためと言い張る姉の行動はすべて、自分勝手な空回りに過ぎなかった。分かっていたはずの事実を直接指摘された瑞乃は、姉として甚だ情けない。

そんな自分をお姉ちゃんと呼んでくれた妹が愛しくて、恋しくて。思わず伸ばした手を引っ込めて、眼前の脅威に向き直った。

「ごめんまなてい、気を付けてね」

「み、瑞乃さん……?」

気絶した鶴乃をまなかに託し、ゆらりと立ち上がる。それとともに装束の雷紋が帯電を始めた。バチバチと迸るスパークに照らされながら、瑞乃はただ手をかざす。

「ちよつと、ガチる」

力強い宣言。空気が張り詰め、一段重くなった。

「……い、鹿目さんたち、離れてっ！」

イブの周囲で構えていたまどかたちに、マミが鋭い声をかける。それと同時に周囲が白く染まった。

『神様の手違い』

太陽の一部がそのまま落ちてきたような山吹色の光条が、イブの巨体を打ち据える。雷鳴というより爆発音に近い轟きが市内を駆け巡り、遠方のビルの壁面ガラスが残らず砕け散った。

破滅的な落雷に打たれたイブは眩く帯電しながら、体を硬直させている。羽はボロ切れのように破れて萎れ、二本足でヒザを突いていた。

動き出す前にまたも雷光が閃く。瑞乃が腕を振るうと鎖がぐんと伸び、イブの体をがんにがらめにした。落雷のダメージもあるイブは完全に動きを止められる。

瑞乃は鎖から手を離し、半身になって右手を構える。現実離れた落雷で呆然としていたまなかは「ビームだ」と直感的に悟ったものの、

「お願い、キリンさん」

「ええ……」

右手から発射されたのは大型貨物トラックだった。藍色を基調とした車体に山吹色の雷紋のペイントがなされ、カーゴの側面には『中華飯店瑞鶴庵・フエントホープ支店』の文字が踊る。セキトバくんよりも二回りは大きいそれはもはや人の使用を想定していない。

イブの体高と同等の車体が太陽の輝きを放ち、彗星のごとく宙を直進していく。動かないイブに正面衝突すると、数十メートル押し返してから拮抗状態に。すると一際強い輝きを発し、やがて爆発的な光が市内を照らし出した。自爆である。

光の柱が天を衝き、暗雲の一部を払う。巻き込まれたイブの使い魔たちは塵すら残さず消滅。光の収まった跡には、全身が焼け焦げ満身創痍のイブの姿があった。

切り札を受けまだ倒れていないのは瑞乃にも慮外のことだったが、ダメージは大きい。妹を気絶するまで追い込んだイブにかける情けはない。このまま消滅まで押し切る。

最後のとどめを刺すために接近していくと――

「待ってー！」

「っつと」



瑞乃の足元を桃色の矢が穿つ。

反射的に飛び退いて飛んできた方を見ると、どこかで見覚えのある魔法少女の姿が。ガレキの山を越えてよほど急いでやってきたのだろう、ぜえはあとヒザに手をついている。

さらにその後ろからもう三人、灯花、ねむ、アリナがやってくる。アリナは無表情で、灯花とねむは冷や汗を流していた。

灯花とねむは瑞乃と目が合うやいなや、ずんずん詰め寄ってきて文句をたれた。

「かすか、自分が何してるのか分かってる!？」

「魔力を使えば死期が早まる。それに、イブを倒してしまえば君を救う手立てがなくなるんだよ」

「あー、うん。知ってる。それはもういいのよ」

「よくないっ!」

「いいって。それより、そっちの子は? なんで一緒にいるの?」

先程矢を放ってきた少女に目を向けると、少女は息も整わないまま、イブの足元に立った。まるでイブをかばうような位置取りで、瑞乃は眉をひそめる。

「はあ、はあ……イブの中には、ういが……私の妹がいるんですっ! ひどいことしないでください!」

「分かった、もうしない！ ごめんね！」

「え、ええっ!？」

物分りが良すぎる瑞乃に少女は目を丸くし、灯花たちも正気を疑うような目を向ける。

しかし瑞乃はお姉ちゃんだ。妹の身を案じる同じお姉ちゃんの思いを見誤ることはありえない。少女の妹がどういった経緯でエンブリオ・イブの中に囚われ、それを少女がどうやって知るに至ったのか、疑う必要はない。同じお姉ちゃんが困っているなら、助ける。イブを倒すのはそれからいい。

「で、どうやって助けるの、みとつち!？」

「えっ、あ、コアになつてる宝石に囚われてると思うから、そこに穴を開ければいいけど……」

「よしてきた」

「待ってよ!？」

さっそくイブの胸元に輝く大きな宝石に狙いをつける瑞乃だが、灯花はその腕を強くつかむ。ねむも同じように、すその部分をつかんでいる。

「コアになつてるういを助けたら、イブが崩壊する。かすかの助かる方法がなくなっちゃうんだよ!？」

「……ほんと、優しい世界じゃんねえ」

中腰で視線を合わせ、灯花とねむの頭を順番に撫でつける瑞乃。二人の顔に困惑の色が広がる。

構わず、瑞乃は言った。何の後悔もない晴れた笑顔で。

「私は生まれたときに死んでる。なのに妹と会えた。親友にも会えた。みとつちやねむりんみたいなの、年の離れた友達もできた」

現実とは思えない都合の良いすぎる奇跡が連続し、たくさんの幸せを掴むことができず。生まれるはずのなかった由比瑞乃は多くの奇跡に恵まれており、これ以上は望むべくもない。なぜなら彼女はすでに疑いようもなく――

「――救われたから」

突如、瑞乃の足元が裂ける。

裂け目へ落ちるかに思われた瑞乃は機敏に飛び退き、アリナへ苦笑いを向けた。

不意打ちで結界への幽閉を試みたらしい。視線が集まる中、アリナは舌打ちを漏らし腕をひとふり。結界の裂け目が閉じ、アリナはそっぽを向く。

「……生きたマネキンにでもしてやろうかと思ったケド。結局ソレは、アナタの画材だから」

好きに描けばいいヨネ、と。拗ねたようにそう吐き捨てると、今度はアリナの足元が

裂け、結界の中へ姿を消す。

灯花、ねむ、それからまなかとママは、黙り込む瑞乃に何かを呼びかけようとした。しかし雲間から降りてくる濃密な穢れの気配に、そろって口を噤んでしまう。

空を見上げてみると、逆三角形のシルエツトが見えた。少しずつ高度を下げてくるそれは、歯車とドレス姿の女性を組み合わせような異形で、シルエツトの正体はふわりとしたスカートと歯車だった。

実物を見るのは初めてでもその場の全員が理解できた。この威容こそ伝説の魔女、ワルプルギスの夜であると。

ワルプルギスの夜は逆さになった女体部分から不気味な高笑いを発しつつ、イブの方へ近づいてくる。並行して口腔に途方もなく濃密な穢れの光が凝縮し――

「セキトバくんっー!」

穢れの奔流がイブに向かう。

同時にどこからともなく飛来する赤い貨物トラック。サイズにそぐわぬ俊馬めいた動きで射線に割り込み、穢れの波動を荷台で受ける。

目の眩む輝きと共に荷台が大きく凹むが、見事に攻撃を相殺してみせた。

「な……!?!」

信じられないというように暁美ほむらは口元を手で覆う。

瑞乃は表情を険しくして、鋭く言い放つ。

「足止めしとく！ みとつちたちは妹さんを助けてあげて！」

「で、でも……！」

「やちよー！」

なおも食い下がる灯花を無視し、瑞乃はあらぬ方向を向いた。

ガレキの山の麓から、やちよとみふゆが駆けてくる。二人共擦り傷やほこりに塗れ、少なからず消耗している。

それでも瑞乃は心配の言葉をぐつとこらえて、まなかに寄り添われぐつたりしている。鶴乃を視線で指し示す。

「鶴乃のこと、頼んだ！」

「……まったく、ようやく会えたと思ったら」

やちよは憤懣やる方ないというように大きくため息をついた。意識のない鶴乃と、間に迫った伝説に、ダメージから復活しつつある蛾のような怪物。まともに問答のできる状況ではない。

もしも。

もしも二人があとほんの少しだけ早く合流していれば。灯花たちとのやり取りが風に散らされることなく、二人の耳に届いていたなら。状況なんて関係なく、掴みかかっ

でも瑞乃を止めていたかもしれない。

けれど、そんなもしもは叶わない。

やちよはただ信じることを選んだ。昔から誰よりも強く、頼りがいがあった、手の届く範囲全てを守り通してきた最強の魔法少女を。

「この戦いが終わったら覚悟してなさいよ！」

「……ふふつ、上等！」

ごく自然に、くしゃつと笑ってみせる瑞乃。

その笑顔に既視感を覚えたのはみふゆだった。思えばあの時から、得体のしれない何かが始まっていたのかもしれない。虚しくて救いようのない何か。

「みっちゃん——」

たまらず口を挟むが、瑞乃にむつつりと睨まれたとたん、叱られた子供のように口を噤んでしまう。

悠長にしている時間はなく、瑞乃に引き下がるつもりはない。みふゆはその意志を見て取ったことと、無理やり魔法で昏睡させた負い目もあつたのだろう。泣きそうな顔で口を開いては閉じを繰り返す、かける言葉が出てこない。

その間に瑞乃は言いたいことだけを伝えた。

「みふゆは他の魔法少女たちを南風に集めて。海浜公園のどこ。分かった？」

「分かり……ました……」

そうして瑞乃は鎖を伸ばす。

右腕から射出された鎖はビルの屋上に達し、壁面に食い込むと、装束の表面にスルスルと巻き取られ瑞乃の体を引き上げていく。屋上のあたりでタイミングよく鎖の連結を解除すると瑞乃の体は宙に投げ出され、ワルプルギスの夜へと真正面から飛び込んでいくのだった。

――

ワルプルギスの夜本体から分離した使い魔の群れが四方八方から迫る。瑞乃はそのうちの一体を足場にして空を駆け、ときに鎖を引っ掛けて勢いをつけ、三次元機動で群れをくぐり抜けていく。

鎖を全力で振るえば弾幕に等しい制圧力を発揮できるため、能力的には使い魔を相手することもできた。しかし瑞乃には残された時間も魔力も足りない。ことがすべて済んだ後の予定を考えれば、ある程度節約せねばならない。

『伝説は伊達じゃない。君といえど、勝てる見込みは六割を切るだろうね』

キュウベエの声が頭に過る。かつてワルプルギスの夜について講義を受けていたと

きのことだ。どういった流れかは瑞乃の記憶にはないが、そこそこどうにかかなりそんな数字だったので、

『えっ、意外と勝てるくない？』

と、拍子抜けしたことだけは覚えている。

しかしこのやり取りは全盛期の頃の話だ。すべての感覚器官が十全に機能し、利き腕が自在に動き、膨大な魔力を好きにだけ使えた瑞乃でやつと六割弱勝てる。調整屋の恩恵があるとはいえ、満身創痍の現状では討伐はおろかひっぱたいてお帰り願うなどもつてのほかだろう。

とはいえ、由比瑞乃はお姉ちゃんである。お姉ちゃんとは妹と妹の大切なものを守るため、どんな無理だつて通す生き物だ。

使い魔の群れをくぐり抜けて本体の真上へ飛び出し、歯車の部分に着地。ワルプルギスの夜から威嚇するような高笑いが聞こえた。

「あははっ」

それにつられたのだろうか。虚しく乾いた笑いが漏れ出る。

「もう笑うしかないや」

なおも追隨してくる使い魔たちに追われ、瑞乃は歯車の縁から身を投げ出す。本体の凹凸に鎖を引っ掛け、羽虫みたいにぐるぐると飛び回りながら、伝説の魔女に心中で謝



罪した。突然得体のしれない手段で招待されたと思つたら、町の魔法少女たち総出の攻撃で歓迎されるのだから、魔女の立場から考えると気の毒極まる。

といつても呼んでしまったものは仕方がないので、瑞乃は作業を淡々と進める。

使い魔たちは壁のような密度で迫るが、瑞乃はその包囲のことごとくを紙一重ですり抜け、ワルプルギスの夜へ鎖を巻き付けていく。魔力の波による擬似的な視界は、こと魔力や穢れの動きを感知するのうつつけの鋭敏感覚だった。受け取った情報は瞬時に体へフィードバックされ、二十年近く積み上げてきた経験値が動きを補助し、意のままの機動を実現する。

ものの一分とたたず、ワルプルギスの夜のあらゆる箇所が山吹色の鎖で覆われていた。

歯車の上に舞い戻ってきた瑞乃は、装束から鎖を切り離して、接地と共に急制動をかけ数メートル滑りゆく。減速が完了すると、後を追ってきた使い魔の大群に向き直つた。

もちろんワルプルギスの夜本体も黙っておらず、穢れの炎を放出し鎖を弾き飛ばそうとする。本体と使い魔の群れの双方が瑞乃に迫る。

「そお——」

瑞乃は高く足を振り上げて、

「れっ」

絡みつく雷紋を踏み抜いた。

それを合図に山吹色の雷光がワルプルギスの夜を包み込む。雷紋の一つ一つが放電し、ワルプルギスの夜を殺戮的な希望で灼いていく。迫りくる使い魔のみならず周囲に跳梁していた相当数も巻き込まれ、消滅していった。

鎖の魔力が切れた頃になっても本体は健在だった。しかし高笑いの声はどこか勢いにかけて、動きも乏しい。一時的に動きを止める瑞乃の目論見は成功したようだ。

瑞乃は鎖の一端を軽く蹴りつける。すると枝分かれした雷紋がすさまじい速度で伸長していき、先端部分は海浜公園のあたりへ狙い通り突き刺さって、するすると縮み始めた。一時的に力の弱まったワルプルギスの夜が、海へ向かって引きずられていく。

瑞乃の鋭敏感覚には、海浜公園に多数集まった魔法少女たちの魔力を捉えていた。みふゆが戦力を集めてきたのだろう。海浜公園の近くには巻き添えになる建造物も少なく、決戦に向いている。後は数の暴力と、魔法少女特有の理不尽な固有魔法でどうにか

「……っ！」

そこが、限界だった。

胸の奥が張り裂けるように痛む。たまらずその場に膝を突くと熱いものがこみ上げ、

鉄臭い味が口腔を満たした。心臓が脈打ったたび血の塊を吐き出し、呼吸さえまならない。

瑞乃は伝説と半魔女の二体を相手に、魔力の節約や感情の制御を度外視した本気の魔法を使い、瀕死の身で立ち回った。その代償に残り僅かな余命が充てられることは必然である。

「がつ、は……ははっ、げ、現実厳しいじゃん、ね……」

ご都合主義で誤魔化していた現実を、ソウルジェムが思い出した。すでに魂が死んでいる事実がリンクした肉体に反映され、動脈や肺など生存に必要な重要臓器の壊死が始まっているのだ。絶えず耳朶を打つ軋み砕ける音は、身体と魂のどちらから発せられているのか、当人にすら判別がつかない。

血反吐に咽せ返る瑞乃はワルプルギスの夜から身を投げ、高層ビルの谷間に落ちていく。適当な高度で雷紋の鎖を閉かせ、もっとも高い場所へ向かう。

すでに戦う力はない。生きる力さえない。けれどお姉ちゃんには後一つだけ、やるべきことが残っていた。

ハッピーエンドの秘策である。

晴れ渡る空。散り散りになった暗雲は、幕が引くように神浜の空から遠ざかり、どこまでも抜けるような青空が広がっている。

そんな空の下、海浜公園の一部に集まった少女たち。場違いに赤い大型トラックが駐車している横で、中高生ほどの彼女たちは全身に生傷を作って、けれど晴れ晴れした笑顔で空を望んでいる。

「終わりましたね……」

「ええ……」

その中の二人、環いろはと七海やちよは夢見心地でつぶやいた。いろはのそばには顔立ちの似通った少女が寄り添い、ぎゅつというはの手を握っている。環うい、イブの内に囚われていた魔法少女であり、いろはが長らく探していた行方不明の妹だ。ういのすぐ横には灯花とねむが立ち、暗い表情でうつむいていた。

イブは穢れを浄化するシステムとして神浜市に散らばり、ワルプルギスの夜は倒された。しかしこの結末に達するためにマジウスが犯した罪は消えない。事故に近い経緯があったとしても。

うい、灯花、ねむは同じ病院に入院していた親友同士だった。三人はいろはを宿命から解放するため魔法少女となり、その過程でトラブルが発生。魔女になりかけたういは

ねむの機転によつて半魔女、エンブリオ・イブに変じることだ。命をつないだ。

しかしその代償にういの存在自体が世界に忘れられ、また灯花とねむの目的もういの存在と同じく因果を歪められて、マギウスの翼が発足するに至つた。

その歪んだ因果が修正されたのが、記憶ミュージアムでのことだつた。

マギウスのそばに居たある人物の固有魔法は、あらゆる事象の因果に絶えず干渉する。この力により鶴乃の記憶は守られ、マギウスの因果は半年以上の時間をかけて修正された。魔力不足で復旧は遅れたが、ういの魂が保存された小さなキュウベエの接触が最後のひと押しとなつた。灯花とねむは本来の目的と、姉と呼び慕つていたいろはのことを思い出し、イブの元へ向かい、力を合わせて囚われたういを助け出し、ワルプルギスの夜も討伐して――

「お姉ちゃんっ!」

大団円、ではない。

焦燥と恐怖に満ちた叫び。海浜公園の入り口に、魔法少女たちがいつせいに目を向ける。肩で息をしながらきよるきよる周囲を見回しているのは由比鶴乃だ。やちよとまなかによつて調整屋に運び込まれ、治療を受けていた。

いろはたちはハツと我に返る。

一瞬でも気を抜けば死人が出る伝説の魔女との死闘。ようやく土壇場から解放され

夢見心地だった少女たちがいつせいに現実感を取り戻す。

「やっちゃん、これは……!」

それに伴い、異変が起きる。公園の片隅に停まっていた赤いトラックが、霧の晴れるように薄くなっていくのだ。

瑞乃が時間稼ぎに飛び出してからというもの、どこからか駆けつけたその車両は宙を自在に駆け回り、主にワルプルギスの夜の使い魔を跳ね飛ばし、ときにその身を挺して神浜の魔法少女たちを守った。

事情を知らない魔法少女たちは謎のトラックに目を点にしていたが、やちよたちは知っている。

それが瑞乃の力の象徴であることを。同時に、その消失が意味するところも。

「そん、な……!」

求める姿は公園にない。あつたのは消えていく魔力だけだった。

「……!」

鶴乃は声にならない悲鳴と共に踵を返した。

「つ、鶴乃ちゃん!」

いろはも慌ててその後を追いかける。やちよ、みふゆ、マミ、灯花とねむ。無数の黒羽根たち。鶴乃の姉、瑞乃と関わりのある多くの魔法少女たちが弾かれるように走り出

し、海浜公園を飛び出した。

事情を知っている魔法少女たちは、感覚が麻痺していた。どんな魔女よりも頑強かつ凶悪なエンブリオ・イブだけでなく、伝説の魔女にさえ一人で相対し時間を稼いだ瑞乃の戦いぶりに、現実感を失っていたのである。余命なんて本当は間違いではないか。時間稼ぎと言いながら、倒してしまうのでは。誰もがそう考えていた。

が、瑞乃は誰も気づかないうちに姿を消している。その現実を受け止めることに時間がかかってしまった。

いろはも含め、言葉を交わすものはいなかった。ただ名前を呼んでいた。お姉ちゃん、瑞乃、由比さん、六野さん、かすか、むのかす。それぞれが知っている名前を叫びながら、魔力の残滓をたどって走り回った。

沸き起こる悪寒を、振り払うように。

――

使い終わった四つのグリーンフシードをそつと手元に置く。装束の袖と懐に仕込んでおいた、非常時の備えだ。半分以上が欠損したいびつなソウルジェムは淡く輝いて、秘策の実行に足るだけの魔力を取り戻した。

神浜市中央区、セントラルタワーのヘリポート。鶴乃が爆発炎上させたそこはすでに再建され、瑞乃は中央にペタリと座り込んでいる。

「晴れ渡る神浜市の空は吸い込まれるような青に染まり、嵐の過ぎ去った空気は澄み渡って一片の穢れもない。戦いを見守るような余裕はかすかにはなかったが、おそらく万事解決したのだろう。ただ、鶴乃の安否を直接確認に行けなかったことだけは心残りだった。」

「鶴乃は……」

あの時、どんな顔をしていたのだろう。久しぶりに瑞乃として姿を現した先ほど、鶴乃は笑っていたのだろうか、驚いていたのだろうか。

できれば笑っていてほしかった。妹には笑顔で幸せになつてほしかった。だからお姉ちゃんは、たった一つのハッピーエンドを実現させる。誰も悲しまず、不幸にならない最高の方法を実行する。

ソウルジェムを目前に掲げる。魂にまとわりつく因果がほつれ、光輪となつて周囲を漂う。概念を人の認識の範疇へ引きずり下ろした代償に、回復した魔力がごっそりと減る。ソウルジェムがさらに欠け、激痛と共にふらりと身体が傾いた。

背中と後頭部を打ち付け、鈍い痛みが目が回る。しかしそれはほんの瞬きほどの間のことで、次の瞬間には何も感じなかった。



何もだ。接地する背中の感覚、吹き付ける風の感覚、なびく髪が肌を撫でる感覚。雨が上がった直後の湿った匂いも、初秋の物寂しい空気も、何も感じない。耳も、舌も死んでいる。ただ一つ分かることは、きつと魂の碎ける音が鳴っていることのみ。

次に、装束に絡みつく雷紋が帯電を始める。手違いを発動するための予備動作である。

『お前さえいなければ』

魂まで刻まれた前世の傷痕が、頭の中に反響している。

「私は、いなくてもよかった」

六野かすかは由比瑞乃として生まれ変わった。しかし死んで生まれ変わったも、変わらないままだった。

『今まで何かうまくいった試しなんて一つもない。何をしても、何を言っても空回り。周りに迷惑かけてばかりでしまいいはこの始末……』

大切な妹ができた。かけがえのない親友ができた。みんなを傷つけたくないから、瑞乃は一生懸命になることができた。しかし結局妹は傷つき、親友の心は追い詰められ、お互い傷つけ合ってこの始末である。

どんなに恵まれた才能があっても、力があっても変わらない。良かれと思った行動はみんな裏目になり、散々な結果を呼び寄せる。少女が抱える宿業は、奇跡や魔法さえ凌

駕している。

だからこそ、ハッピーエンドの秘策だけは失敗するわけにはいかない。

妹の笑顔を守り通す。不幸や苦難はすべてご都合主義で乗り越えて、みんな笑顔の大団円。そのための秘策——転生した事実を、なかったことにする。

かろうじて動く右腕でソウルジェムを拾い上げる。装束の帯電が完了し、手を天へ向けた。後は意志の引き金一つで手違いの落雷が降り注ぎ、物質化した因果を跡形もなく吹き飛ばすだろう。由比瑞乃は最初から存在しなかったことになる。

瑞乃はこの腹案の実行についてずっと決めかねていた。自身の消失がどれほどの因果に影響を及ぼすか分からないからだ。たとえば仮に魔法少女の解放を遂げたとしても、解放の事実と瑞乃の間に強い因果関係があれば、マギウスの計画ごと水泡に帰す恐れがあった。秘策ではなく、乱暴でリスクの高い愚策かもしれない。

が、一つだけ絶対的な利点がある。

誰も傷付かないことだ。瑞乃の空回りに巻き込まれ、みふゆのように思い詰めたり傷付け合ったりすることはなくなる。大切な誰かが救いようのない命に気を病むこともない。大好きな妹を傷つけるばかりの最低な女が一人消えるだけで、すべて丸く収まる。

つまり、鶴乃の笑顔は曇らない。

これこそ愚策を最善たらしめる由縁であり、瑞乃なりに考え抜いた幸せな結末。お姉ちゃんの、ラスト・マギア最期の奇跡である。

「ああ……」

声が漏れる。

感覚はないものの、魂が少しづつ削れていくのがなんとなく分かる。

間もなく命が尽きる。ここで尽きずとも、遠からず果てることは決まっている。今すぐ始末をつけなければ、妹の笑顔が曇ってしまう。姉としてやるべきことは一秒でも早く意志を決めることだと分かっていた。

分かっている、分かっているはずなのに。何も見えない真つ暗な視界に、幸せな思い出が万華鏡のように煌めく。思い出たちは瑞乃とかすかの名前を呼び、満ち足りた笑顔を見せる。

瑞乃は開きかけた口をぐつと噤んで、一言。

「ありがとう」

山吹色の閃光が、セントラルタワーを飲み込んだ。

――

お姉ちゃんは何でもできた。

妹の笑顔を守るためなら、幸せな思い出も、大切な友達も、すべて諦めることができた。

名前のない彼女が必死に生き抜いたキセキを、空回りと失敗に満ちた虚しい喜劇に変えることもできてしまった。

主演を気取ることさえ、もう叶わないけれど。

## エピローグ

かすかなるよすが

中華飯店万々歳。大衆料理の味を徹底的に極めた極上の料理を、お値打ち価格で提供することで有名な飲食店で、参京区に知らない者はいない。お昼時にはしばしば行列ができ、テレビの取材も来たことがある。

そんな万々歳と水徳商店街を挟んだ正反対の位置に、その店はあった。

中華飯店『瑞鶴庵』。元は万々歳の厨房で働いていたスタッフが独立し、地元のツテを頼りに個人で始めた小さな店だ。細い路地にひっそりとたたずむそこは隠れた名店として日々経営している。広報を一切しない方針から売上はほそぼそとしているが、それでも十分な黒字を確保していた。

『いらつしやいませー！ 1名様お好きな席へどうぞ！ 五目ラーメンセットお待ちどうでーつす！』

鶴乃はその店で笑顔を振りまいている。おしぼりとお冷を出して、上がった料理をテーブルに届けて、食べ終えたお客を笑顔で送り出す。不思議なことに、厨房の中には墨で塗りつぶしたような暗黒が広がっている。

外はどしやぶりの大雨だった。傘を差しても効果が見込めないどしや降りだが、客足は途絶えない。次から次へ客が入ってきて鶴乃は考えるヒマもなかった。不思議なことに誰も雨具を持っておらず、なのになんかたくく身体を濡らしていない。

『なんでもいいからおいしいのちようだい!』

『例の小説が完成したよ。ぜひ読んでほしい』

店主は経験の長い魔法少女なので、お客にも魔法少女が多い。今やってきた灯花とねむも店主の知り合いだ。

真つ暗な厨房の中からお子様ランチが二皿ぬつと出てきて、二人の前へ。灯花とねむは店主のチョイスに少しむくれたような顔をしたものの、一口食べてすぐと笑顔を咲かせた。

『アリナにも同じの、プリーズ』

灯花たちとは一つ席を空けてカウンターに腰掛けたのは、アリナ・グレイだった。少し前の事件で暴走し最後には行方不明になった天才芸術家だ。

続いてたくさんのお客がやってきた。鶴乃もよく知るみかづき荘チームの面々や、市内の魔法少女たち、見たことのない子たちもやってきて、店主と声を交わしていた。

その間にも雨はどんどん激しさを増している。昼間にも関わらず、分厚い雲のせいで外は夜のように。その暗がりを見ると胸のあたりがざわつき、鶴乃は慌てて目をそらし

た。

接客対応をしているとあつという間に時間が過ぎ、ラストオーダーのお客が帰っていった。

鶴乃は真つ黒な厨房に足を踏み入れる。

異様な光景を不思議に思うこともなく、無邪気な笑みを浮かべて店主の背中へ飛びつくど、幻みたいにほんのかすかな温かみが感じられた。瑞々しい果実のような香りはどこか懐かしい。

中華鍋を手入れしていた店主は手を止め、たぶん困り笑いを浮かべて振り返る。短めのサイドポニーと、山吹色の髪紐がなびく。鶴乃はひとしきり甘えてから、店主の顔を見上げた。

そこには乱雑な黒の線が、ほつれた糸くずのように蠢いているだけだった。店主の声は聞こえない。店主の名前すら知らない。

またこの夢だ、と。鶴乃はやつと思ひ出した。

毎日繰り返し見る奇妙な夢。どこにもない変な店で鶴乃は店主と仲良く暮らしている。そこでは誰も雨に濡れず、不幸にもならない。どうか永遠に続きますようにと強く思う。

けれどこの夢もまた、終わりに近づいている。

店主は鶴乃に向き直って強く抱きしめる。鶴乃も同じく抱き返す。それから唐突に、店主は鶴乃を突き飛ばした。

どうして、と聞く暇もない。鶴乃の目前で店主の左腕が血飛沫と共に吹き飛ぶ。続けて顔の、たぶん両目のあたりで鮮血が弾ける。

鶴乃が手を伸ばしても、声を張っても届かない。眼前なのに遠いどこかで、店主はどんどん傷ついて——最後は大きな雷鳴と共に、灰の山になってしまふ。真つ白なその灰すらも吹き散らされ、跡には何一つ残らない。

鶴乃は暗黒にただひとり、ぼつねんと残されるのだ。

——

「鶴乃ちゃん？ 鶴乃ちゃん、大丈夫!？」

「……ほっ？」

遠い声に目を開けると、雲一つないカラリとした大空。続いて友人の心配げな顔と、よく似た面差し少女が横からひよっこり顔を出す。

環いろはと、環うい。鶴乃の友人であり、つい最近ようやく再会を果たした仲良し姉妹だった。



鶴乃はあくびを一つして、今が学校のお昼休みであることを思い出す。ヒザの上にはお手製の中華弁当がある。

学年の違ういろはとういと、屋上でお昼ごはんの待ち合わせをしていて、先に着いた鶴乃はベンチで二人を待っていた。いつの間にか眠っていたらしい。

「ふああ……ごめんごめん、居眠りしてた」

「それはいいけど……うなされてたよ」

「怖い夢でも見たんですか？」

「んー、まあそんなとこ」

不気味で救いようがないのにいつまでも見ていた変な夢。奇妙な感覚に首をかしながらしていると、いろはは困り顔で言った。

「鶴乃ちゃん、最近ちゃんと寝てる？ お店の手伝いばかりで無理してるんじゃない？」  
「余裕余裕！ 最強の魔法少女に不可能は——ううん、ほんととちよつと頑張り過ぎかも」

「やっぱり！ お店が大事なのは分かるけど、一人で背負い込んじゃダメ。いざとなったら私たちも手伝うから、ね？」

「うん、ありがと」

鶴乃の実家、中華飯店万々歳は鶴乃と父親の二人だけで回っている。祖母と母親は放

蕩癖がひどく、手伝うそぶりもみせない。鶴乃は持ち前の体力で人一倍頑張っているが、無理がたたって眠くなったのかもしれない。

三人はそれぞれお弁当箱を開け、手を合わせていただきます。仲良くお弁当をついでいるうち、鶴乃はおかずを一つつまみあげる。

「ういちゃん、万々歳特製のシウマイ食べる?」

「えっ、いいんですか?」

目を輝かせるういにシウマイを差し出すと、満面の笑みでぱくりと一口。ゆつくりと幸せそうに噛み締めた。万々歳の料理はかつて入院生活を送っていたういの元にも噂が届くほどの名声があるのだ。甘やかされる妹を前に、いろはは困り笑顔を浮かべている。

緩やかで安穩とした時間が流れる。学校の授業、みかづき荘の様子など、他愛もない雑談に花が咲く。そんな中、ふといろはが言った。

「もう一ヶ月なんだね……」

何から、とは言わない。鶴乃とういだけでなく、神戸市在住の魔法少女たちなら誰でも分かることだった。マジウスの翼事件から、である。

マジウスの翼と呼ばれる組織は魔法少女の解放を謳って暴走し、神戸市をあわや廃墟へと変える寸前だった。その騒ぎを通して鶴乃は洗脳されウワサと合体させられたり、

いろはは怪獣のようなサイズの魔女からういを救い出したりした。事件が連続する濃密な毎日から開放されてもう一ヶ月だ。

「あ、そうだ。今度マガリアユニオンで集まりがあるんだけど、連絡網の子たちから一人代表が来てほしいの。鶴乃ちゃんから伝えてくれない？」

「了解っ！ でもあんまり期待はしないでね？ たぶんリア充の集まりになんて誰が行きますか、って言われると思う」

「あはは……」

「リア充、って何？」

きよとんとする妹に、いろはは言葉を詰まらせている。その横で、鶴乃は私たちのことだよ、と即答した。

事件には多くの魔法少女が巻き込まれ、それをきっかけに出来たつながりからマガリアユニオンと呼ばれる組織が発足した。各地区の代表が集まって、魔法の情報共有やグリーンシードの融通などを図る互助組織だ。

鶴乃はこれとは別の組織、よわよわ魔法少女連絡網とコネを持っていた。連絡網はかつて鶴乃がグリーンシードを恵んだ魔法少女たちが作り上げた組織であり、排他的だが鶴乃にだけは従順で――

「えっ？」

「な、なに、どうしたの?」

鶴乃は思わず立ち上がっていた。

何かがおかしい。

連絡網と、鶴乃自身はいつ接触したのか。そもそもグリーンフィードを恵んだことなんてあったのだろうか。言いようのない違和感が鶴乃の心中を満たした。

『私の固有魔法は、魔法少女の希望を受け継ぐ力』

脳裏で響くのは一ヶ月前、ワルプルギスの夜との決戦で力を振るった仲間、七海やちよの声だった。

市内の魔法少女たちから二度の総攻撃を受けてなお健在なワルプルギスの夜に、最後のとどめを刺すにあたって、やちよは固有魔法を使い中核的な役割を果たした。

神戸市の魔法少女たちの魔力が光り輝く球体へと圧縮され、やちよへと受け渡される。ワルプルギスの夜の穢れさえ凌駕するエネルギーの塊を、やちよ一人で扱うことはできないはずだった。

『受け継いだ希望を使えば、一度きりだけ実力以上の力が出せる。今まで私はこの力に支えられてきたけど、今が使いどきね』

しかしやちよの受け継がれた希望が不可能を可能とする。黄昏時のような山吹色にきらめく魔力がやちよを守り、希望の集合体を巨大な一矢へと収束。これをいろはが射

出することで、ワルプルギスの夜撃破に至った。

『お願い、みんなの力で神浜を、たくさんの思い出を守って!』

鶴乃自身もこのとき、貫く一矢へと魔力を捧げた。夢中だったからか、今までまったく疑問に思わなかった。

やちよは一体、誰の希望を受け継いでいたのか。

あの山吹色の魔力は、誰のものだったか。

「……あれ? 私、なんで……」

白昼夢を見ていたようだった。何か疑問があつたはずなのに、もう思い出せない。まるで最初からなかったかのように。

乾いた音が鳴る。空っぽになった弁当箱がヒザから転げ落ちていた。慌てて拾い上げ、不思議そうにしているいろはたちへ苦笑いを向ける。

「ごめん、気のせいだったみたい!」

「な、ならいいんだけど」

その瞬間、またも疑念が湧く。

山火事のように燃え広がった違和感は、いろはとういを視界に入れると爆発的に燃え上がる。幸せそうに肩を寄せ合い、笑い合う仲良し姉妹。お姉ちゃんと、妹。

「なんで……」

心中に燃える炎は、嫉妬だった。

そのことを悟った鶴乃は愕然として、逃げるようにまた立ち上がる。お弁当をそそくさとまとめ、ふらふらとその場を後にしようとする。

「鶴乃ちゃんっ？ どうしちゃったの？」

「分かんない、分かんない……！」

呼び止められても、分かんない。なぜ突然黒い感情が湧いて出たのか。ソウルジエムを見なくとも、穢れで真っ黒になっているのが感じられた。

いろはどういはいは、ただ姉妹で仲良くしているだけだ。生まれてからずっと一人っ子だった鶴乃には何の関係もない。どうしてこれほど二人を妬ましく思うのか分からず、ただ自分が汚い人間になったように感じられた。

おろおろする二人を置いて鶴乃はあてもなく走り出し――

「あ……」

ぶちり、と嫌な音が響く。

手首からだった。鶴乃がずっと身につけている、お気に入り紐の紐。アクセサリーにしては太く厚い手首の紐が、千切れて地面に落ちた。

またも違和感が鶴乃の心を焼く。自分はいっこの紐を買ったのだろう。ミサンガでもシユシユでもないこの紐を、なぜずっと身につけているのだろう。

渦巻く疑念と違和感で動けないでいると、いろはその紐を拾い上げ、そつと鶴乃に差し出した。

「はい。大事なものなんでしょ?」

震える手で受け取る。お風呂でも、寝る時も、魔女退治の時だって、外したことはなかった。経年により本来の山吹色は白くくすみ、あちこちがほつれている。今にもバラバラに千切れてしまうかに見えた。

「これ、どこで——」

その時、不思議な感覚が沸き起こる。違和感ではなく既視感。鶴乃はこの紐を、自分ではない誰かが使っていたのを見た気がする。

幸か不幸か、鶴乃の頭脳は既視感の元にすぐと思い当たった。

黒く塗りつぶされた店主の顔。あの人はサイドポニーをこの髪紐で結っていた。

「う、うう……っ!」

すとな、とヒザをつく。紐を強く握りしめて胸に押し当て、その場にうずくまった。

「鶴乃ちゃん!?!」

「分かんない、思い出せない……っ!」

すぐに肩を抱いてくれたいろはに、鶴乃はすがりつく。

「すごくすごく大事なことはずなのに……みんなぐちゃぐちゃになって、すり抜けて、

瞬いて、消えていく……なんでこんな気持ちになるのか、全然分かんない……っ！」  
血を吐くような鶴乃の慟哭に、絶句するいろは。それから痛ましげに目を伏せ、鶴乃をぎゅつと抱きしめた。ういも隣にかがんで優しく頭を撫でている。

それでも鶴乃の心は癒えない。思い出せないあの人を想えば想うほど、空虚な絶望に気が狂いそうになるのだ。

何一つ分からないまま、鶴乃の目から感情が溢れ出した。

その勢いは夢で見た雨のようにとめどなく、ざあざあと降りしきる。雨足は強まるばかりで、曇った空はますます黒く、暗くなっていく。

陰った空はもう晴れない。暗く冷たい雨が止むことは、いつまでもないだろう。

いつまでも、いつまでも。

――

とある少女がいつも手首に巻く、色褪せた紐。

幾度も千切れてボロボロで、気を抜けば失くしてしまいそう。いつどこで手に入れたかも分からない、奇妙な品。

けれど少女は、けっしてこれを手放さない。



かすかなるあの人へつながら、たった一つのよすがだから。